

段のよういある女のさまをいとむかしく見せんとて也。△思ひけりく塗本にしたがふ。けらしはけりくをうつしあやまれる也。かなのかたちよく似たり。

しのぶ山 あづま くだり

○むかし男、みちの國にて、なでふこと

なき人のむすめに、かよひけるに、あや

しうさやうにてあるべきむすめには

あらず見えければ、

信夫山 しのびてかよふ道もがな

ひとの心のくおくもく見つべく

女かぎりなくめでたしと思へど

るさがなきえびす心を見えてはいか

せむ

○むかし陸奥國にてなでふことなき人の女にかよひけるに。【舊註】(愚)無何條事也。なにほどの事もなきといふ事也。あしからずよからぬ人はいふ。この詞は源氏あづまの巻にもあり。(直)ひとをななどつていへる詞也。させる人にもあらざるを云。源氏物語にもさせる人にもあらずとみゆ。【新註】(勢)なでふことなきはなんでふことなきにてなにはかりの人にてあらずといふ心なり。これは夫を云なり。清少納言ににくき物の中に云なでふことなき人のこゝろにみちにてものいたうひたる云云。(古)なでふことなきは何事無にてとりていふばかりもなき人をいへば上に直人といへるに同じ、枕ざうしににくき物の條になんでふ事なき人のすゑりに物いひたるとあるも是也(何といふをなでふことなきへり。又このなでふことなきは源氏にみゆるは源氏何條とかはわろし)。(新)なでふことなき人は俗言になんでもなき人と云やうの事にて親のよしあるにはあらぬに思ひの外にその娘のすぐれたるをいはんとてなり。△むすめ塗本にしたがふ。人のめとある本はむすめをとおとせるなり。

○あやしきやうにて有るべき女にはあらず見えければ。【舊註】(愚)しやうかよはすべき女とおほえぬをあやしく思てその心をしらまほしくおもひてうたをよみてやれる也。(調)更になびくべき人とも見えざる也。御説にはいづくを取捨んやうもなき女也。源氏東屋の巻になでふことなき人のすさまじき顔したると少將をほめたる言葉なり。【新註】(勢)あやしうとはこの女はよしありてさやうのなでふことなき人のために有るべき人とみえればあやしうおもひて歌をよみておくるなり。又あやしのしづなどいふあやしはいやしなれば今もいやしうといへる也。(古)上の條の女とはいと異にしてこれは用意ある女なれば彼なんでふ事なき人の妻に

てあるべうもおほえす。されば女の本意をうたがはるゝ故にあやしうといへり。頭註。今本に女ともあらず見えければとあるもあしかられど言少なるが此文の例なれば古本を用ふ。(新)あやしうとはいかなるゆゑにかあらんとあやしみ思ふをいへり。さやうに男をかよはしてあるべき女にはあらず見ゆとは女のうちとけずよきほどにてとちめてんとするやうなるをいへり。さるはもの、あはれしりて男のれぎ言にしたがひてあひてはあれども末っひにわがるべき中なればあかてこそおもはん中ははなれなめとふる歌にいへるやうの心づかひにやありけんいとふかきやういある女にてその心のおくのしりがたければこゝろ見んとて歌よみておくれる也。女には、塗本にしたがふ。他本みなわろし。

歌も心せるさまならん。頭註。和名抄東山郡部に陸奥國信夫郡(夫國分爲伊達郡)と見ゆ、然ば安達郡の郷名に伊達はあるを後にわかつて伊達郡とせし時信夫は伊達郡に合せたる也よりて同抄郷名の所に信夫はなき也。(新)信夫山はみちのおくの山の名にて、しのびてといはんためにいへり。さてかよふみちおくなど、山の縁語にてしたてたる歌也。一首の意は人の心へのしのびてかよふ道もあれかし、さならばわけ入て心のおくを見るべくといへる也、ふかきやういある人は心のおくのげにしりがたきものにぞありける。(按)陸奥國信夫郡(倭名抄流布本これを脱す)、信夫は國遣時代における信夫國遣の居所、後郡家在り。千載集信夫山あり、弘長元年百首信夫の瀑布あり、信夫の里、信夫の河原、信夫の渡見(ゆ。歌林其材云本郡古雲錦を出す、世稱して信夫文字指(シノブモジリ)といふ。今福島縣岩代國信夫郡福島地方にあたる。されどこの段の歌は必ずしも「信夫」にありて「信夫山」を見ての詠にはあらで、しのびてかよふといふことをいはむ料に信夫山をおけりとも見えつべし。いはゆる歌枕によりてつくりうべけむ。

也。えびす心、えびすとはたはむかたなくつよき所有り。左様のふんたる心をもつておしたる義有てはいかゞはせんと思へる也。せんはのはの字やすめ言葉なり。(闕)えびす心、えびすはたはむかたなく直につよき様の心也。さるさかなき悪字不祥也、恐と云字をも讀。此歌をあはれと女のおもへどおしたる義ありてさりかたうけたまはるはえびす心よとおもへる也。いかゞはせん、はの字休め言葉也。「新註」(勢)まことに思ふかおはぬかをしらまほしきも人をながくおもふゆゑなれば人の心のおくもみるべくといへるをこれよりこびて我を思ひけるよとめづるなり。さかなきは日本紀には悪の字をよみ、萬葉には恐の字をよめり、すこしよしあるやうなれば心のおくも見ばやとはよみたれどもまことにさるおそろしきえびす心のおくを見たるはいかゞはせんと用意するなり。せんはのはは助語なり。(古)此女は彼京人をいと愛たしとおもひぬるからは心の奥をあらはさまほしけれど猶我東夷のさがな心を見えあらはしてはいかゞはせんいはてやみてんもの也とみやこ人をやさしみていよ、用意の深き也。右になてふことなきが妻にてはあらじとほめたること、の用意と始終したる文也。上の條の愚たる女は用意もなくひなびたる歌をもおほくよみてわらへる事をも悦べるに此條にいかゞはせんとする女をいひて歌の和へもわざとつゝしみてせざるをもて二條を對にしたる文のさまえいはすおもしろし。今本に見てはいかゞはせんはと有りて夷心とはぬしある女に云ふはえびす心よと女の思ふことに云説はいと強たり、さる事は好こととそいはめ、はた都人は放縱也ともいかにてえびす心といはん、此所はことに字のみだれたるかも糺さ

す、すべての文意をも得意ぬ故のみ。古本に見、而如何説とあれば見えていかゞはせんとよみて女つよいせらるさまをいふ事明らかなるをや。△さかなきは神代紀に神性の字をさかるとよみて其外なき世のさが春のさがなど歌によめるをも合せ見るにくせてふ事也。さてならひくせをもいへり。さかなきとは不祥又悪の字をもよみて悪はあしきくせ不祥はあしき氣ざしの事となれり。これらは轉せる也。然ればさかなきえびす心よとはあしきひなびくせをいふ也。(新)みやこの人にていやしからず、歌もおもしろく何事もうちあひすぐれたればかぎりなく結構なる事とはおもへど、さるさかなきえびす心よにていかゞはせんふかきおもひのそはぬ、ちにかくつとちめてんとすと云意をこめていひのこしたる文也。さていかゞはせんと云ゆゑは都のよき人のえびす心所に住つくべきにあらずさる所に生たちし身のともは都にのぼらんははづかしくてせんかたなく思ふ也けり、歌のかへしせぬもぬななかびたる手つき口つきをほちてえさし出ぬなるべし。さて又みちのおくをえびす心と云よしは日本書紀の齊明天皇の卷に蝦夷の事をいへる所に國有東北とて類有三種、遠者名都加留、次者鹿野夷近者名熱蝦夷と見えたり、いにしへは三種の夷とも都加留よりこなたにみありしかば陸奥は夷のすみかなりけり。又元慶五年五月三日授陸奥蝦夷外従八位下物部新波連永野外従五位下といふ事三代實録に見えたり。これは此物語の時代にかき頃なるに、通事の官人のありつるは其頃も陸奥は夷おほければ也。△えびす心にて塗本にしたがふ。他本にえびす心とあるはところをこゝろにうつしあやまれる也。かなよく似たり。

おきの井、都島

あづまくだり

塗本ニ依ル定本岸川行幸ノ段ノ次ニ入レルハ非ナリ

昔、陸奥國に男女住みけり。男京へ

いなむとするに、女いとかなしうて、馬のはなむけをだにせむとて、おきのるみやこじまといふところにて、酒のませてよめる、

おきのゐて身をやくよりもかなしきは都島べの別なりけり。

とよめりけるにめでとまりにけり。

○昔陸奥國に男女住みけり、男みやこへいなむとするに、女いとかなしうて、うまのはなむけをだにせむとて馬の井、都島といふところにて酒のませてよめる。「舊註」(愚)おきの井みやこまといふ所にて、此名所は陸奥國にあり。(直)男女すみけり、夫婦

おきの井都島

なりし事なり。與の井都島名所也。「新註」(勢)下の歌によりてみれば女は小町也作物語なるべし。古今物名鑑歌にはおきののみやこ、嶋小野小町とあり。小町集にはぬでの嶋といふ題をとりて、なしきはをわびしきはとせり。おきはおき火なり。和名集云嶋唐韻云和名嶋唐猛火也古今に都良香おきひを物名によめる歌ありぬてとは身にすゑおくなり。昔集唐人をおもふ心のおきは身をそやくけぶり立とは見えぬ物から。うつは物語に、おきのうへにぬる心らしうていやすすゝにおぼさるゝ云々。(古)此一條古本になし落たるなるべし。(新)都の男のちのおくに行てその女ともるともにすみけるが男みやこへいぬるをりの事也。

○おきのゐて身を焼よりもかなしきはみやこじまべのわかれなりけり。「舊註」(愚)此歌は古今集京極中納言の本に以墨滅歌の中に物名の部にのせたり、小野小町のうたと見えたり、歌の心はおきのぬては炭火のおきの我身につきたる心なり、さて都島の一句物の名ともきこえず、今案に都と島邊との別いづれもかなしきといふ心にとりなして物の名をかくしたるといふべきにや、たとへば都へのぼる人と、島邊にとまる人の離別は、おなじ悲しきといふ心なるべし。小野小町と中將と奥州へくだりて別べき事はおぼつかなし、是はた々物の名に讀たり、歌を奥州にてよめるやうに此物語にききなせるにぞ有べき。(直)古今には物名部に墨けしの歌に小野小町が歌也、業平に別れ申は火を身にすゑて焼くよりもかなしき事也。(闕)古今には物の名の部に墨けしの歌に小野小町の歌也、作物語のさま也、おきの井都島奥州の名所也、天福本にはおきのゐて都島と有業平に別れ申せば火を身にすゑて焼くよりもかなしきとなり與のぬて居の字たるべきや、火をすゆるは居の字

を云ふ也。(古)こは古今集の物の名に沖の井都島をかくして小野
小町がよめる歌なるをかくはし書を作りて一條とせし也。さて古
今集にての意はおきの井は熾の居て身をやくと隠したるに宮
島はかくれすと云人もあれど今憶ふに加役流人に別るも意にて
身役島へ行別れが悲しきといふをそへたるが役とやこと音をまよ
はし且上の身を焼とみやこと語のひびきをさされたるを曲とせり
且物の名は島方なるをべをえのごとく唱ふるも又ことを異ならし
むるは隠れざるにあらず。さて此文には都へ歸る夫の別れをかな
しむ事と探かへて宮、島方を都へと聞するなるべし。詞の中に他
し言の交りても凡の語の韻にて聞しむるは古歌の常なり。此歌古
今集に載たるを或家にては隠してけしたり。其謂は伊勢物語は朝
臣の實事也と思ふ人此歌古今集に小町のとて有時は業平とまたく
夫婦のごとく也。然ども此二人夫婦てふ事は物にもみえず必きは
有べからぬ事とて此歌をけちて取ぬなるべし。常に云が如く古今
集よりいと後に作れる此文をよくも意得ずしてみだりに古書をけ
ちなどせるよ悪むべきに堪たり。(新熾を身にすゑてやくはあつ
くたへがたきものなるがそれより身にしみてたへがたきは君が
都へいぬるとおのれが島べにのこるとの別なりけりといふ意也。
熾は和名抄に和名於岐比猛火也とあり。かなしは身にしみてたへ
がたき意也。此詞のこゝろはすでに四の巻の六十四段にはしく
いひつ。島べとはみちのおくをいへり。さておきののみやこじま
といふ所の名をよみいれたるをこの歌のたぐみとせり。(按)興の
井につきては奥羽觀蹟聞老志卷六宮城郡の條に云「興井據小町
歌一則當作熾井字。未詳其地。相傳同郡八幡農家中有一小池。池
中奇石磊々佳狀可愛州人古來稱曰興石。奇絶如盆池。池中乾

隔有水脈而出。是乃興井也。俗子以爲二條院讀破沖石珠則指此
石者也。不知以潮水瀉海石難乾而比之。戀人淚袖之露也。
興井郷。八雲御抄有興井郷。未詳其地。蓋指此村落乎。又文字
或作起居那。其義則取戀人不眠之意。然夫木集以起居之歌。而
混爲興井里之作。註其下。曰興井里乃陸奥也。文字亦相通。和訓亦
相通。不知同所而異其字。同其訓者乎。唯編松葉集。者分爲
別所。未詳其是非。以同訓而姑舉之興井里下。但於呼其名。也與
井則上下之間加之字。起居則去之字。其相別也如此不可
不辨焉。都島につきては同書云。未詳其地。或曰桃生郡宮戸島
是也。島上景致絶勝比之京師之華靡。且宮戸都音相近。故誤其稱
呼。戸音許。俗人合訓音。而呼宮戸。直爲皇都。後人不察。誤所
以訓。美也登。者也。或曰其說非也。其島呼別有稱皇都。者。郷人
誇言往古此佳島奉勅蒙美名。者也。仍有皇都島名。是亦不足取
焉。以小町歌考之。則熾井都島元一所而豈異其地哉。熾井以
八幡地爲是。則此島奚隔數十程。耶且夫熾井則宮城也。都島則桃
生而間海岸。不合古歌事實。豈夫然耶。然則八幡各蹟池爲熾井。
石爲都島。而似無障礙。識者辨之。と以て參考すべし。さて前々
段中々に戀に死なすはの段よりこの段に至る陸奥物語をうちわ
たし見るに。かゝる所の歌萬葉の改作よりはじめて古今。新勅撰
の歌どもいづれも歌枕によりての作とおほしくて。まさしくこゝ
に来れる人の作としも見えず。され夫等の内新勅撰に入れる。信
夫山しのびて云々の歌は同集詞書に。みちの國にまかりて女に遣
しける」とありて寧ろこの物語よりとれるかと思へ古今集物名に
入れる。おきのぬて身をやく云々の歌は。その詞書。たゞ。おき
のぬ。みやこじまとのみあり。古今集によりてこの物語記者の端

書をつくり出せりとも見えざれば、これらはまだ歌集に入らざる
前の傳によりて此物語はつくりたりけむ、臆斷古意にいへる如く
必ずしも古今集等歌集のうたにつきてこの記者のつくりかまへし
とも見がたし。されど只疑ふべきはこの段なき本あり、この段あ
る本にても定家本は卷末百十五段にかゝり塗籠本にてはこゝにか
ゝげとりんに紛れたるをおもふにこの段のみは後人の加巧なら
むも知りたくなむ。

紀有常

○むかし、紀有常といふ人ありけり仁明、文德、清和
よのみかどに、つかうまつりて、時にあ三
ひけれど、後には世かはり、時遷りにけ
れば世のつねの人のごとイホ本に依せずもあらず。
人からは、心うつくしう、あてはかなる
をこのみてくこと人にも似ず、よのわ
たらひ心もなくまづしくても、猶むか

しくよかりし時の心ながら世のつねの
事もしらす。年ころあひなれたるめ
やうく床はなれて、つゐに尼にな
りて、あねのさきだちて尼になりける
が許へゆくを男此ノノ作傳下見ナレバまことにむつまじ
き事こそなかりけれ。今はとてゆく
を、いとあはれと思ひけれと、まづし
ければするわざもなかりけり。思ひ
わびて、ねんごろにあひかたらひける
友だちのもとにかうく。今はとて
まかるを何事も、いさかななる事もえ
せでつかはす事とがきて奥に、

手を折りてへにける年を數ふれば
十といひつゝ四は經にけり

かの友だち、これを見て、いとあはれとお

もひてよるの物までおくりてよめる、

年だにも十とて四は經にけるを幾

たび君をたのみきぬらむ

かくいひやりければ

これやこのあまの羽衣くうべし

こそ君がみけしとくたてまつり

けれ

よるこびにたへで、また

秋やくる露やまがふと思ふま

であるは涙のふるにぞありける。

や。實錄にあらざる事史傳に合せて知るべし。世かはり時うつりにければ陳鴻長恨歌傳云時移事去樂盡悲來。(古)三代の朝は仁明、文德、清和、の天皇を稱す也。史に依にまだ十九可より仁明天皇に仕まつりてきて妹の腹に文德の一の皇子惟喬うまれたまへば時にあひけるるべし(此等文德のまだ春宮)然るを文德くらぬにつかせ給てその年の冬四のみ(清和天皇とも云)を太子に立てたまひて後にはさせる榮えも聞えずして清和天皇の貞觀十五年となりて官位昇れり。仍ておもふに右の貞觀の中間より前嘉祥の末のあひだ時にあはぬやうにてありしをいと哀へたるやうに物がたりにはつくりなせし也。或説に清和の御時にはすべておとろへて仕へだにせぬ事と此文に泥みておもふより淳和、仁明、文德の三代を云ふといへるはあやまれり。頭註。三代の帝は此人の始終をいひ時にあひけるは其三代の中に初めをさし代かはり云々とははた同じ三代の中に云を三代はまたく時にあひて其後に時を失へると思ひあやまれる説あり實錄にて事をさだめて後に思はぬ故にあやまれるぞかし。仁明天皇は嘉祥三年三月崩御同年四月文德即位同年十一月維仁立太子貞觀元年皇太子即位。有常傳。三代實錄云元慶元年正月廿三日從四位下周防權守紀有常卒、左京人正四位名虎之子也性濟警有儀望少年奉侍仁明天皇云々。(新)三代の帝とは仁明文德清和の御三代を言へり。世かはり時うつるとは拾遺斷などに長恨歌傳の時移事去樂盡悲來といふをひきてとけるよろし。かの傳は中昔の頃もはやせるものなればけにそれによりてぞさきつらん。さてつらまつりてと句をきりて時にあひけれどのは云々とつゞけてよむべし。しかまされば拾遺抄の如く三代時にあひたるやうにさきまがふべし。時にあへるは

○むかし紀有常といふ人ありけり三代の帝につかまつりて時にあひけれど後には世かはり時うつりにければ。【舊註】愚紀有常は正四位下名虎が男也、淳和、仁明、文德の三代につかまつれる也。惟高親王の母は名虎が女なり。御子御位につき給はば有常は榮花をさすべきが思のほかに御弟の清和の御門の御位につかせ給ひしかば世かはり時うつりにければとけり。(直)みよのみかど、淳和仁明文德天皇也。此の三代の御門につかまつる。文德天皇第一の皇子惟高親王をまうけ奉るは、紀名虎が女也。此み子御くらぬにつき給はば有常はさかへなんを第二の皇子清和の御位につかせ給ひしかば名虎がたのものはおとろへぬる也。大鏡には藤うちがたかぶるほどに、紀うちがかれんとてかなしめり。又紀有常は名虎が子也。業平しうとながら朋友也。【新註】勢)三代の帝とは仁明、文德、清和なり。或説に淳和、仁明、文德の三朝につかへ奉りて清和天皇の朝に至りておとろへたるよし見えたれど、これは國史をよく考へずして強て此段にかなへていへるなり三代實錄第三十云元慶元年正月廿二日乙未從四位下周防權守紀朝臣有常卒有常左京人正四位下名虎之子也性濟警有儀望少年奉侍仁明天皇一承和中擢拜左兵衛大尉數年右近衛將監兼近江權少掾云々貞觀九年爲下野權守秩滿爲信濃權守五年授正五位下十七年爲雅樂頭十八年卒役四位爲周防權守卒時年六十三以上。始終を擧て文德天皇の御世の昇進を略せり。元慶元年より逆にさかふれば承和元年是有常十九歳なれば少年侍奉仁明天皇といへるにかなひて淳和天皇にはつかへ奉られざる事明らかし。又貞觀の末にいたるまで官位の昇進をとこほること見えればこの物語はおのづから家の貧しかりけるをさういひなせるに

三代のうちにてはじめのほど也。(按)この段「昔紀有常といふ人有りけり」と書き出したるは、是までの「昔男ありけり」の體にたがひて異例とす。おもふにもとは尙、昔ありけり」とありけむをその男といへるは紀有常なればとて後人注加しおきけるが本文にとり混へられしか、たゞし、竹取物語にも「今はむかし竹取の翁といふものありけり」とあり、(この文)心うつくしう、あてはかなるをこのみて」とあるに對して、竹取物語「心ばへなどあてやかにうつくしかりつる事を見習ひて」とあり、この段の如き書さま、ふるき物語の一體としてこれありしはさらにならなむべくもあらぬなり。たゞに圖の新古よりいはず、昔男ありけり。○よのつねの人のこともあらず。人がらはこゝろうつくしう、あてはかなるをこのみて、こと人にもにず。よのわたらひ心もななくまづしくてもなほむかしよかりし時の心ながらよの常の事もしらす。【舊註】(愚)よのつねの人のこともなくまづしくなれる也。心うつくしうは人の心のまがらすありのまゝなる體なり。あてはかはあてかひはかなき事をこのむなり。此人まづしくなりとしへてもなほ昔時にあひまかりし時の心をうしなはてよのつねの人のやうにもなきなり。よのつねの人はよきにはよきにしたがひまづしきにはまづしきやうにあれど此人はそのけじめをならぬ也。あてはかなる事を好むといへるはかなる事かひへる也。(直)有常は心ばへすむれたかき也。あてはかなることをこのみて、風流なる事をこのむ也。世上の儀などにもかけしるふ事なきを云ふ。愚見抄にあらはかひあてかひはかなきことあそばせり。餘に訓釋したるやうなり。つねには食しては飽ひ、富て驕るものなるがさもあらざる也。【新註】(勢)よのつねの人のこともあらずはことば

とくなり。さる人なれどもおとろへたるさまは平人のごとくにな
 きなり。あてはかはたゞあてにては、はそへたることばなり。
 やこはかなどのごとし。こと人にもにすとほけだかき心なみく
 の人に似ぬなり。まづしくへても猶昔よりし時の心ながらとは
 大方の人はまづしければへつらふ心などの有るを此人は貧而無
 といへること昔時にあひて世のよかりし時のまゝにて心ざしを
 くださぬなり。心ながらのながらはそれながら、さながらの如く日
 本紀に隨在天神をかみながらとよめるながらもこれなり。よのつ
 れのこともしらすとは世務をしらぬなり。論語曰子曰吾少也賤故
 多能鄙事君子多乎哉不多也莊子曰聖人不從事於務。これまでは有
 常をほむるなり。性清賢有儀望といふにあたり。以上此段の
 中にての序なり。(古)右にいへるがごとくして世のつれの如もあ
 らずとは前によりけるにつけていとおとろへたるさまに書なせ
 る大かた時を得ぬ人よりも殊にみゆることわり也。實錄に此人を
 ほめて清賢にして儀望ありてふなかく書ひるめたるもの也。わ
 たらひ心なくは他人は權門にへつらひ昇進をもとむるをまづし
 れどしかせぬは清賢なり。世のつれの事をもしらすとはまづし
 につけてはわろびたる心をめぐらしなどして妻子をも養ふなるを
 さるわざをもえしらしぬ也。心あてやかにしてよろしき人の時うし
 なへるが猶本性のまゝにてのみある今もさる屬あるべし。孔子曰
 吾少也賤故多能鄙事君子多乎哉不多也。頭註。さきにより
 してても承和中に左兵衛大尉數年にして右近衛將監兼近江權少掾
 にていと甚しき事とは見えぬごののみ子太子に立給はま末た
 のもしからんにあらずなりけるよりいと、哀へたる様に物が
 たりに云ひてあやなすのみ、○こと人にも似すと云ひまづしく

てもといふ二句はすべて上下の詞にかゝれる語にて一つの文の體
 也上よりいひくだして又語を分てつゞくるなどの文とはこと也○
 わたらひ心の語古本にありこは賤民のうへにのみ云事と思ふ人今
 本に此語を去しにや此外にも落字衍文多し○よかりし時の心な
 らのながらは其昔の心のまゝにて有るをいふ、國史萬葉等に多き
 ことば也。(新)世のつれの云云は世の常の人よりおとろへたるを
 いふ。心うつくしうとは心のきたなからぬをいふ。あてはかなる事
 は上品めきたる事也。こと人にも似ずは他の貧しき人に似ず也。
 世のわたらひ心なしとは世をわたるためにものえんとするやうの
 意のなきなり。日本書紀仁德天皇の卷に活の字をわたらひとよみ
 たり。三代實錄に此人の事を性清賢有儀望といへるをうつし
 ける也。心ながらには心のまゝにと云に同じ。よの常の事とは朝
 夕のくだしき家のうちの事也。貧しくなりてはしりてとや
 くとすべき事なるをむかしのみ、にしらである也。さる人につ
 きそひをりては行末いかにあらん家出すべしと妻のおもひとれる
 也。△よのわたらひ心もなく塗本によりてくはふ。まづしくても
 塗真二本にしたがふ。
 ○年ごろあひなれたるめ、やうく床はなれてつるに尼になりて
 あぬのさきだちて尼になりけるがもとへゆくを。(舊註)愚お
 のが妻もやうくおなじ床にいれずわろ、を床はなるとい
 へり。つひには尼になりてあぬのぬたる所へたづねゆきたる也。
 (直)あひなれたる女、有常數年つれたる女也。とはなれて、床
 にあらず、夫婦のつれをはなる也。惣じて夫婦は身の一期もそ
 ふべきにわがる、はつれをはなる儀也。姉のさきだちて尼にな
 りたる所へ行く。ありつれがつまのあれ也。(關)とはなれ、夫

婦の中をはなる心也。常の字又床也。同床也。御説には常をは
 なるなり。夫婦は身の一期をふつきに別る、は常を離る義也。
 【新註】(勢)やうくは漸々なり。とはなれては床離れとなり。
 これ離れんとてのもよほしなり。あはれは女のおれなり。(古)ま
 づしうても人やしなふばかりをせぬをよろしからぬ妻はうとみ
 ておのづから同じ床にも寝ずなりてされば尼にならんとてゆく
 也。夫の心といと異なれば實にむつまじき事なかるべき也。(新)
 やうくは次第に也。とはなれば床離れてぬるをいふが言
 のもとにてすべて夫妻の中のとくなる事をむかしとははなる
 とぞいひならひけん。やうくはうとくなりてつめに尼になりたる
 也。此あひだにはさまの事でありつらんはぶき、かける文
 也。道心すみてにはあらねども五十にあまる女なればこと人に
 もあひがたく姉の尼になりてあるをたよりにかしらおろしてそ
 へいくなり。△あまになりけるがもとへゆく。塗本にしにがふ。
 ○男まことむつまじき事とそなかりけれ、今はとてゆくをいと
 あはれと思ひけれど、まづしければするわざもなかりけり。【舊
 註】(愚)あまになるといとまこひていぬれども物などもえとら
 せぬ也。(直)此ほどてもむつまじき事なりし也。今とゆくを
 今をがきりと別れ行也。(關)有常が妻の性おもしろからず時節を
 堪忍せずして離るゝなもつてしりぬべし。有常が心にも平生むつ
 まじくもおもはぬ也。され共今はとて別るゝ時は哀なるべし。【新
 註】(勢)かゝる時を堪忍せずしてはなるゝ心なればもとより有常
 は心に眞實にむつまじと思はざりしとなり。今はゆくをあはれ
 と思ふとはこれ人の心なり。△有常、有る時はありのすきびに
 かつたらはでなくてぞ人は戀しかりけるゝとよめるも此心より也。まづしけ

ればするわざもなしとは尼の裝束でうじてやることもえせぬな
 り。あはれなるさまなり。(古)今はとて別るゝには人のこゝろさ
 る物也。六帖に「ある時はありのすきびにかつたらはて戀しきものと
 別れてぞしる」土佐日記に「かうやうに物もてくる人になほしも
 あらでいさしげのわざせさすものなし」頭註。源氏のはさき々に
 いへる尼のさま詞たがひたれど思ひ合する所あり。(新)女のかつ
 より心へだつれば實にむつまじからねど今はがきりとて出ゆくに
 あひなれし年月の事もおもひ出られていとあはれと思ふぞよき
 人の心也ける。さて妻とわがるゝにもおくるは昔はさだまれる
 わざと見えたり。さるからにそれをするわざもといへり。おくる
 べきものといはず心をつくべし。土佐日記に「かうやうのものも
 てくる人になほしもえあはていさしげわざせさすものなしと
 いへるも物もてくる人にはろくとするが昔はさだまれるわざゆ
 ゑにわざせさすものといへるにてことおなじ△今はとて塗真
 二本にしたがふ。あはれとは塗本にしたがふ。
 ○思ひあひてぬごろにあひかたらひける友だちのことは、か
 ら今とはとてまかるを、何事も、いさしかなる事もえせて、つか
 はす事とかきて、奥に。(舊註)愚へだつる心なき友をいふ。
 すなはち中將の事也。ありつれがゝる事を中將にうれへたる也。
 【新註】(勢)思ひあひてとは業平へは思ひあまりていひやる也。す
 ゑにあるあま雲のよそにもといふ歌古今の詞書には業平の朝臣き
 の有常のむすめにすみけるをとかけり。業平の子息に棟梁は嫡子
 有常がむすめの腹返春は二男築殿内侍腹にて大和物語に此内侍の
 もとへきぬあらひにやられたる事あれば有常がむすめには猶と
 りかれて妻の尼になる頃はむこにもあらねば友だちとはかけるに

や。いさゝかなる事はすこしの事なり。日本紀に小の字をいさゝかといふ。【古】此思わびて云云てふを奥の歌にかけて見るべき也。さて友だちは彼むかしの男なるべけれど是を業平朝臣と定め云説はいかにぞや。古今集に有常がむすめにすむといへば友だちとは云べからず。はたはなれたりせばかくむつまじく又かのおくれる物を有常のよるこびめて、かくまでの歌も有まじくはたさらば姑のたぐひなるべきをおほよそ人のおくり物の如くも書じ。是をしが書なせしをおもひて後業平ならぬ業平とすべし。頭註。古今集大和物語等によりて或人の説は棟梁は有常の女の腹二男滋春は染殿の内侍の腹也といへり是等によればいよゝ此女の尼にならんを業平のよそ人がましくはあるべからず。【新】思ひわびてはおもひつゝもせんかたなくてと云意也。かうゝは俗語にかやうゝと云意也。さてかうゝよりつゝはす事といふまで友だちのもとにおくる文の詞也。此文のはじめには尼になりたるゆみどもかきてあるべきをその詞をかきつられてはさきにいへるとおなじやうの事かきなりてうるさければ記者の心してはぶきてかうゝと云詞にかへたる也。さればかうゝは文の詞なれどももとよりのにはあらず、まがるをとは出てゆくをかしこまりて云文の詞なり。つゝはすは姉のもとへ妻をつかはすをいふ、事と云には例の嘆息の意こもれり。

○手を折てへにける年をかぞふれば十といひつゝ四つはへにけり【舊註】(愚)此歌は中將のつたへよみてつゝかはしたり。此女にそひて十四年を送りしとよめり。又四十年といふ説もあるべし。手を折るは指を折て數ふる事也。(直)四十年あひそつたる物つれをはなるゝ處の名残をいかにと推量有れといふ心也。(剛)十といひつゝ

四は經にけりを十四年といふ説あれ共唯四十年あひそつたる物がとこはなるゝ處の名残をいかにと推量有れと云心也。又年ごろなれし中も眞實にむつまじき心をたぬ女にて、かゝる時節とこはなるゝ心中を業平に御推量あれと女を恨みたる心籠れり。源氏は「き木」手をりてあひみしことをかぞふればこれひとつやは君がうきふし。【新註】(勢)手折てはゆびをかきめてなり。萬葉第八指折と書て手をりしとよめり。環はゆびまきなり。又はたまきともいふは手籠の心なり。しかればゆびをとりてをりてをりといへり。とをといひつゝよつはへにけりとは四十年あひそみたるなり。これに女の本性もみえ有常がおもひわびたる心もあらはれたり。幕木にこれをとりて、手をりてあひみしことをかぞふればこれひとつやは君がうきふし。(色)たゞ相馴し年月の久しきを云にて今はと別るゝ時のさすがにあはれなる事はしらる。昔の歌は皆しか也△十と云つゝ四とは或は十四年或は四十年の意などいふ中に四十年と意得たる説多し。とは記者のよめる歌と見えたればさのみことわりも正しがたけれど、いで妻といはんには十四年ばかりは久しくもあらず、はじめよりし時の妻の時うしなひなどしけるにつけて床ばなれていぬほどをおもふに四十年とするかたよろしき也。△手を折てとはいへど指を屈りての意也。萬葉に「秋ののにさきたる花を手をりてかきかぞふれば七ぐさの花」といへる如し。源氏のは、木々に「手を折てあひみし事をかぞふればこれひとつやは君がうきふし」こは事をかへたれどすべては今に本づけの條也。頭註。既にいへる如く有常承和の初左兵衛大尉に補せられしは二十歳ばかりならんその頃の女にてありけんおほよその

さまかなへり。(よ)手をりてあひみし事をかぞふれば。或人この歌古本に十々五四葉と書たるは、とをいひつゝよつはとよむべし。さては四十年の事とは云さだめがたしといへり。古本の書さまこゝのみならずうたてたはれ過てよみうまじき事有り。かつ假字の法などはすべて用ひずぞある。さるからことゝ今本にまさりたるにあらず。まじへてよきにしたがひて翁はとかれたり。【新】此歌はゆびを折て夫妻の中の經にける年をかぞふれば四十年になれりと云也。さてかく年經し事なれば今はといてゆくにいささかなるものもえ得させぬがいとゝいひなきをあはれとおぼせといふ意詞の外に見えたり。△經にける年。塗本にしたがふ。他本にあひ見し事とあるは帯木巻に手を折てあひみし事をかぞふればこれひとつやは君がうきふし」とある歌の上句と似たるゆゑにうつす人のふとこの歌の上の句をかける也。かれはあひ見しをりゝにうきふしのありける事をかぞふる意にてさいへり。此歌をあひ見し事としては四十度あひ見しなりて返歌とあはず。○かの友だちこれを見て、いとあはれと思ひて、よるの物までおくりてよめる。【舊註】(直)業平有常が文をみて哀と思ひて、しなゝの送り物をやる中將あはれがりて宿衣などまで調じておくれり。よるの物までと云までこの字にてこと物をもやるとみえたり。【新註】(勢)よるのものまでといへるにて種々を贈るとしられたり。(古)夜の物とは被など也。尼の晝の装束は専ら調し足ひてやりつる事よるの物までといふ詞にてしらせつ。(新)いとあはれとおもふはなさけふかき人の心にぞありける。よるのものはふすまうはむしろなど也。さてよるのものまでと云は衣をおくりてことたれるにまづしき人のうへを思ひやりてとりそへてよるのものま

でおくれるなり。までと云は思ひやりのこまやかいたれるほどをしらせたる文也。古意に尼の晝の装束は専らうじたらひてやりつる事をしらせたる文也とやうにいへられたるはたがへり。おくれるは装束にあらず常にきる衣也。そのよしは君がみけしにと云歌の所にいふべし。△この友だち塗本にしたがふ。

○年だにも十とて四つはへにけるを幾度君を頼みきぬらむ。【舊註】(愚)年だにも十四年をへたれば其あひだ月の數日の數はいくそばくの事ぞや。さていくたび君をたのみきぬらんとよめり。君とは有常の女房をいふ。一夜のなきけだにもわりなかるべきに、十四年あひなれて、たちまちに、わかれ侍れば心のうちさぞとおしはかりて、思はるゝよし、ことばのほかにその心あまりてきこゆる也。(直)女のうへをたすけて云り。馴たる年さへ四十年にならば今こそ何事もえせずとも四十年のうちにはいくたびか君をたのみて其かげにては有つらん。わかるゝ心さこそといへり。【新註】(勢)續千載戀四在原業平朝臣「年さへ四十年の契りなればいかにそのほどに君をたのみけんに今立わかるゝ心さぞかなしからん」と女をたすけてよめる心なり。(古)あまた年なるゝには一人立がたき女の身の行末たのめし事も數々有けん今おもほえぬ別れすらんよと也。此歌を忘れずしていもせの中左も右もあらん時にとなへなばおもひ和むべきもの也。頭註。此うたことわりはよろしけれどたゞ記者のよめる口つき也業平朝臣の歌として後の集に入られしはいかにぞや。(新)十とては十といひて也、といひてを つゞめてとていへる事歌文におほし。たのみきぬらんはたのみにしきぬらんの意也。さて一首の意は年だにも十といひて四つは經にけるをましてそのあひだの月日はかぎりもなく多き事也。そ

のおほき月日のうちにはさまの事ありてつまの君のいくたびか君をたのみにしきぬらんといへるなり。さて又それをおもへばものおくらまほしげにのたまひおこせたるもことわりにあはれにうけたまはれば此ものどもまぬらすと云意詞の外に見えたり。古意に行末たのめし事も数々ありけんやうにいはいはれたるはいいたがへり。たのみにすることはあるそのなりなればいいたがへりといへるなり。臆断も此歌の心をさらにときえず。拾遺抄ぞあるが中にはすぐれてよろしけれどこれもときいたらぬくまおほし。

○かくいひやりたりければ。これぞこの天の羽衣なりしとそ君がみけしと奪りけり。【舊註】(愚)是は又有常が歌也。さきのよるの物をかのあまのもとへやりたるよしをよめり。あまのはごるもは中将のおくれる衣裳也。中将は殿上人なればあまの羽衣といへりさるから又尼のかたへやればあまのは衣よりきたれり。あまの羽衣なればかの人のためよろしきことにこそて是をわかはしたるよしよめる也。たてまつるなどいふ詞はかしづきたるやうにきたえたれどうたはさのみある事也。女をばきみといへばそれにしたがひて、たてまつるなどいふ事さら難あるまじき也。(直)有常悦て又よみてやる也。業平のよるの物までおくれれば此世の衣裳とはおほえず。是や眞實天のは衣なるらんといひてげにも業平の衣裳なれば天羽衣とおもふもとわり也と云り。むべしは理也。みけしは天子の御衣也。(業平の衣裳なれば)【新註】(勢)着物を贈られけると見ゆればそれをさしてこれや此開ゆる天の羽衣といふ物ならん、此世のものとは見えすといふ心なり、あまのは衣といへるは尼の爲の衣なればそへていへり。むべしこそはしばやすめ

る詞にてむべこそなり、諸の字をむべとよめり、げにこそといはんがごとし。君がみけしとは君よりたまはる衣裳なり、日本紀には衣裳をみけしとよみ萬葉には御衣とかけり。たてまつるはきるをいふ車にのる事をもたてまつるといへり、天の羽衣なればげにこそ君の贈れる御衣を臣下の差て拜舞する如くにきてよるこびけの心なり。(古)是や此開傳ふる天の羽衣にぞ有らんとまづ誓て諸なる哉こは君が御料とてまぬらせたる衣なればと也かくそのおくり物をはむるに得たる喜びはこもれる也。いつも云が如く昔のとりなし也。△みけしは萬葉に七夕歌。足玉も手玉もゆらに織機を君がみけしにぬひあへんかともよみたり。△たてまつりければ君が御着しの料にとて調じて奉りし物をいふ、それを略しては着たまふをも御衣奉り御車奉りなどいふ也、本「語」と散「文」をこゝろる時はまどはず。萬葉に君がけると有るは着る事なればみけしは御着し也天皇のとらしまたす弓をみとらしといひたし見ませるを見したまふといふ類也御着したまふと云ふ意にてみけしとはいへり、さしせ同音なれば一言に約めて云ふ。(一)君がみけし、みけしは御着衣也古事記日本紀等に衣裳をみけしとよめり然るを御とらしの弓の例にて助辭なりとみかれしはわろし衣をそといひしといふ御衣衣手御着衣直衣などいへりそとよみかよひてとなへかふるは常の事なり。(新)たちかへりおくりものよるこびいひやるに歌をやるも云意也。△よるこびにそへて塗本によりてくはへつ。眞本にいひてとあるによりて古意に歌にかくいひてさうぞくをやりたれば必てもじあるべき語なりといはれしはわろし。さては詞いやくしくなる也。上の文によるものまでおくりてとあればこゝは歌の事のみにてよし。一首の心これやかのきへ傳ふる

天の羽衣ならんうつくしき世のものとも見えす、かくよき衣なればうべこそ世にすぐれたまへる君が御衣に奉りければわれらにたまふは過分なりといふ心也。君がみけしにと云ゆふはとみの事にて友だちの我料にありあひたる衣をおくりたればなり。さるを古意に尼のさうぞくをおくりたるならんといはれたるはたがへり。さてみけしのみは御けしは衣の事也。奉りければといふは衣などもよき人には下よりてうじて奉るものなれば也。ついでにいはん、むかしは男女の常にきる衣はかよはしてもきたりき。さるからに友だちの衣を有常の妻にもおくるなり。此歌の解古意は大かたよし。臆断の説はいみじき事也。まづ天の羽衣を尼のための衣なればそへていへりといへるは例の歌になき事をつけそへていふ此人のわろき世也。又奉るとは有常のみづからきてよるこぶ事也といへる事どもいたくたがへり。むかしの文にみそ奉り御車に奉りなどいへるはきせ奉りのせ奉る意にて貴人のうへにいふ詞也。みづから衣をきるを奉るといふ事やはあるべき。△みけしに塗本にしたがふ。(按)「これやこの天の羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ」の歌、天羽衣につきては、竹取物語かぐや姫の帝に奉る歌「今はとて天の羽衣きるをりぞ君をあはれと思ひ出でぬる」とあり。竹取物語抄云「西陽雜俎。天人衣無經緯。また比紅兒詩に天人の衣は重さ六銖。また搜神記「豫章新喻縣男子見田中有六七女。皆衣毛衣。不知是島人。旬旬往得一女。所其解毛衣取藏之。即往就諸鳥。各飛去。一鳥獨不得去。男子取以爲婦。生三女。其母後使女問父知衣在。積稻下得之。衣而飛去。後復以迎三女。女亦飛去」。又「たてまつりけれ」の意。たてまつるといふ詞に二義あり。貴人へ物を進献するを奉るといふは普通なれど、又衣服を着用す

る事を奉るといふ。こゝは後の意味なりと知るべし。○よろこびにたへて又。【舊註】(愚)有常よろこびのあまりに又よめる歌なり。(直)一首にても心たらぬほどに又一首をへたり。【新註】(勢)よろこぶ心のあまりにたへずして又よむなり。土佐日記云からくしてあやしき歌ひれり出せり、その歌云々ひとつ歌にことのあかねばいまひとつ云々此歌は都ちかくなりぬるよろこびにたへずしていへるなるべし今も此こゝるなり。(新)又とはまたよみてやる也△たへかぬて塗本にしたがふ。○秋やくる露やまがふと思ふまであるは泪のふるにぞ有ける。【舊註】(愚)歌の心はよろこばしきもかなしさもとりあつめて涙とふるとなり涙につきて秋やくる露やまがふといへり。(直)秋は物がなしく人のうれへをもよほす時也。然ば秋の來て袖をしぼるか露のおきて袖をぬらすかと思へば今わがよるこびにたへずしておつる泪にて有ける也。【新註】(勢)新古今雜上紀有常人をかなしふる秋の來て袖をしぼるか露のおきまがふかと思ふばかりわが袖のぬるはよるこびにたへずしておつる涙にてありけりとなり、秋やくるといへる此時夏なりけるにや。(古)喜びに堪やらずて涙の多くおつるをよめり。秋の來て露のふかくおくかと思へば我よるこびに堪ずして落る涙にぞ有けると也。一二句をかくいふは語を延てつゞくるのみ。(新)これは臆断に心をかなしふる秋のきて袖をしぼるか露のおきまがふかと思ふばかりわが袖のぬるはよるこびにたへずしておつる涙にてありけりといふ意也ととけるにてきこえたり。高尚此段をよみてつら／＼思へるやうをこゝにいはんすとす、夫のまづしくていふかひなきをいとひて家にならじとする妻をも今はとて出てゆくにはいとあはれとおもひてあひなれし年

月のしるしにもえさせんとてかくするはいと／＼なまきけふか
くよき人なりかし。かゝるをかりには妻のもてるてうどやうのもの
をさへことにつけつゝ家にとりとめんとするさかものに見せま
ほし又まづしくするわざなくばさてやむべきを友だちのものもとへ
かうくと文してひやりたるを思ふに昔は友のまじはりいとむ
つまじくへだてなくしてまけをしみといふ事つゆばかりもなくさ
らに／＼うはべをつくるひかざらぬならひにぞありける。さてま
た友だちもいとあはれとおもひてこれをだにまぬらせ給へとて我
料にてうじたる衣をおくりそのうへにまづしき人のよるさむから
ん事をさへおもひやりてふすままでとりそへていくたび君をたの
みきぬらんとあはれをふかめていひやりたるはかなき事にもまめ
なる事にも思ひやりおほかる人になん。今やうの心淺き人まねび
てもおよぶべしやは。かうやうにおもひつゝよますは物話ふみよ
むかひあらじ。(按)この段は業平の自記ともいふべし。或はその
子滋春をこの物語記者と見て滋春にもあてうべけむもなほ業平と
して然るべし。秋やくる云々の歌後には新古今に入れり詞書「業
平朝臣の装束遣りて侍りけるに紀有常朝臣」とあり。

あだなりと名にこそたてれ

○むかし、年ごろ音づれざりける人の

櫻の盛りに見に来りければ、あるじ

いづれの本にも年ごろとあれども、これは月ごろのかきあやまり
なるべし、年頃にては歌に年にまれなるといへるにかなはず△む
かし塗本によりてくはへつ。

○あだなりと名にこそたてれ櫻花年を隔なる人も待けり。(舊註)
(直)古今集には春の部に入て戀の歌にあらず。花をばあだなる物
と名に立よりか様に年にまれなる人も待たる、物にてあるよと
いへり。もと業平の女にあひたりし時此女をあだなる人といひし
事あるかそれを今思ひ出しわればあだにはあらずと云心をよめ
り。【新註】(勢)古今集春上よみ人しらす櫻はちりやすくあだな
りといふ名にこそたて、かくばかり年にまれなる人をまちつれば
人よりはあだならずと久しくとはぬをうらむる心なり、年にまれ
なるといへるは古今の詞書によくかなへり。いま年頃おとづれぬ
といへるはふたとせみとせのやうにもきこゆればすこしかなはぬ
にや。問ていはく戀の心にあらずばあだなりと名にこそたてれと
いふ事いかゞあるべき。答ていはくすでに古今集にては戀の心
にあらずとゆるさばこの難有べからず貫之集に「あだなれと櫻のみ
こそ古郷のむかしながらのものにはありけれ。」紅葉のながる
る時はしら涙の立にし名こそかはるべらなれ。此あだなれとの五
もじ立にし名こそ七文字に今もなすらふべし。一首の心は貫之
のはつせにまうてて久しくやどらでやどられける家のあるじかく
さだかになんやどりはあるといへる心なり。(古)櫻花をあだにう
つるふ物とはいへどもしかもあらずかくばかりほどへて問ふ人を
すら待つくるはといひて女のみづからのさまをたとへたり。古今
集には春の部に入れば實の戀の意にはあらでむつまじきをとこ
女の戯れいひかはせる也けんを此文には戀にとりなしたり。(新)

あだなりと名にこそたてれ櫻花
年にまれなる人もまぢけり。
かへし

○昔年ごろおとづれざりける人の櫻のさかりに見にきたりければ
あるじ。(舊註)(闕)此段にむかしと云字なし書おとしたるか。又
年頃にてむかしを持たるか。作者の心はかり難し。昔とのすべ
き所也。古來不審也。仍愚見には此段を前とつゞけて御覽せられ
たる也。御説是を不用。あるじ誰ともなし。【新註】(勢)此段む
かしとなきはおちたるなるべし、古今には春上に櫻の花のさかり
に久しくとはざりける人のきたりける時によみけるよみ人しらす
とあり。かれをもてこれを思ふにあるじといへるは女にはあらず
女ならば女と云べし。下にも女あるじとはいひたれどたゞあるじ
といへる事なし。又有常が事よりつゞき又年ごろ音づれぬ女のし
とにさくらをのみ見に来るべきにあらればたゞたゞ或人のし
となるべし。(古)昔女今なきは語の落たる也古本に因べし。又今
は櫻のさかりに見に来りければあるじとあり、かくてもよし(新)

一首の意櫻の花はあだなるうつりやすきものと名にこそたてれあ
だにはあらずして一とせのうちにまれに来る人をもまちてちらで
ありといへる也。さてかく今はまれにくる人こそかへりてあだな
れとらみたる心ばへ詞の外に見えたり。
○かへし。けふこそすばあすは雪とぞ降なまし消すはありとも花と
みましや。(舊註)(直)けふわが來たればこそ花ともみれ、あすき
たらば只木の本の雪とはみるとも花とは見べからず。今日女のう
つらほの時來ばこそ其人とはみれあすうつるひて後來らば其人と
も見ず。【新註】(勢)同上在原業平朝臣此返しも古今にいれり。け
ふきたればこそ有しながらの櫻ともみれ、あすは木のもとの雪と
ふりてきえずしてはありとも花とはいひかみんとなり。けふきつ
るゆゑにこそ人も待けりとはのたまへさらではあすは心のかはり
て其人とも見じとなり。後鳥羽院。けふだにも庭をさかりとうつ
る花消すは有とも雪とも見よ。定家卿。庭の面に消すは有とも
花とみろ雪は春までつきてふらなん。花さそふ庭の春風跡もな
しとはばぞ人の雪とだにみん。色けふ我ちらぬ間に來たればこ
そあれ木はあだ物にしろからはもし明日しもとひなば雪の如く
散りつゝ花とは見えんやはいひて眞じにあらそふ贈答の常也こ
は業平朝臣の歌にて上手のかへしといにしへり感來れり。頭註
次の條に引く貫之の贈答又清少納言の行成卿にたはれてよみかは
せし如く心しりのかたみにたはぶれしものと古今集にてはみゆ。
(新)一首の意けふ來たればこそ花とは見れあすは雪と降べし、そ
の雪消すはありとも花と見ましや花と見えはせじといへる也。さ
てそれがしを花よりもあだなりといはるれど、そこそけふこそす
ばあすは心かはるべければその人とも見えじと云意をそへたり。

(按)この段の贈答古今集春上に見えたり。いはく「櫻の花のさかりに久しくとはざりける人の来たりける時によみける。あだなりと名にこそたてれ櫻花年に稀なる人も待ちけり。返し。今日こそば明日は雪とぞふりなまし消えずはありとも花と見ましや」とまさにこの段のごとし。されば或は古今集によつてその春の歌を戀にたくみなしつ、この段はつくりけむかとも疑ふべけれど、はしの詞の如き古今集より新らしからず、むしろこの物語の方、古今集よりもふるめきて見ゆるが上に、詞がら歌のおもむきにもあへりといふべけれ。

紅にほふがうへの白雪

○むかし、なまこ心ある女ありけり。男
ちかういひけり。女歌よむ人なりけれ
ば、こころみむとて梅の花のうつろへ
るを折りて、男のもとへやる。

紅にほふがうへの白雪

枝もとをよにふるかとも見ゆ

歌よむべき人なりと聞てこれが歌よむまいかてこころみんと思ふといはんと心なりければふかくいほぬにけれもこころみむとや思ひけんはぎの葉もみぢたるにつけておこせたり、あはせて十首女。秋萩の下葉につけてめにかくよそなる人のこころをぞみる。かへし「世の中の人に心をせめしかば草花の露も見べしとぞ思ふ。」をんな云々此二首は拾遺集に入れり、今とあひ似る事なり。(古)こは貫之集にちかどなりなる所に方たがへにある女のわたれるときして有るほどに事につれて見きくに歌よむべき人なりと聞てこれがよむまいかてこころみんと思へどもいとも心にあられば深くも思はずみてもいはぬほどに彼もこころみんと思ひければ萩の葉のみぢたるにつけて歌よみてなんおこせたる「秋萩のした葉につけて目に近くよそなる人の心をぞ見し」貫之「世の中の人に心をせめしかば草葉に色も見えじとぞ思ふ」これを思ひて此一條は作れるならん。(かどなり云々同也)△なまこ心あるとばかり歌よみがちになまざかしき女をいふ、ふかき心ある上衆めかしき人かいらんやは。(新)なまこ心あるとはこころある人めきてよくとのはぬをいふ。心見んとては男の心をみんとて也。知本(細細抄の本を云)にはすなはち男のとあれどもなきぞ此物語の文のふりなる。さて女のかたよりさし出て歌よみておくりて男の心見るはげになまこ心ある女のしわざ也。△塗本にはきくの花云々を梅を折てやるとあれどそはわろし。

紅にほふがうへの白雪

をとこくしらすよみによみける、

紅にほふがうへの白雪

をりける人の袖かとぞみる。

○むかしなまこ心ある女ありけり、男ちかういひけり、女歌よむ人なりけり。こころみむとて梅の花のうつろへるを折りて男のもとへやる。(舊註)「愚」心あるにてもなく、又心なきにてもあらぬをなまこといふなまこまじきよし也。女のはしちかなるをいふ、男におそれぬ心也。(直)業平その女となり有也。此女歌に心えたる人也。中將の心をみんとてきくの花に歌をそへてやれるなり。物ずきなる女也。小町といふ一義あれども惣じて段々の女は誰かれはそれといはん事たとひたしかにしろともおぼつかなし、殊に時代をへたる事をいふんとして體に知るべきにや習所撰集のよみ人しらすと同じ、よみてあれ共其まよみ人しらすにておく也。(關)愚見抄に、女のはし近に居て、男にも恐れぬを云と有り御説にはた業平その女の隣に有る也。【新註】「勢」なまこ心は物のまだよくも熱せずしてはしたなる心なり、下になまこみやづかへと書り、源氏になまこの上達部ともいへり、なまこにといふ詞もかよひてきこゆ。此なまこといふ詞今俗におほく申ことなり。男ちかういひけり此女はとなりすむ女なり。歌よむ人なりければこころみんとて、業平は好色の人にて歌も上手ときこゆればこれ心みんとするなり。貫之集に「ちかどなりなる所にわたしがへにある女のわたれると聞て有るほどに事につれて見きくに

しぬべき秋萩の枝もたわいにおける白雪」とをいとかける本もある也。此歌の心は紅にうつろへる花としら雪のやうにたわいにさける枝とはいづれぞとよめるなり。(直)いさかうつろはる處は紅にみゆれ共大かた枝に雪の降かゝるかと見ゆる也。白きは色の本體にてうつろふ事なき正色也。白雪を業平の心の色の見えぬに譬たり。更に業平の心はこなたへうつらぬと云心也。(關)白は色のもとにてうつらふ事なく正色也、さればかくいふ也。その心は業平を好色といふは空こと也。うつらふ色なく、ただそのまゝ雪のやうなる花にてこなたへ心のうつらぬとあたりて云心なり。【新註】(勢)白菊は後紅に白ふものと聞しをいづらやその紅はたゞ雪の枝もたはいにふりかゝりたるとなり、下の心好色の人と聞ゆるはいづらやその人色有ても見えぬをばなにが好色の人とはいふぞとなり、色とは紅紫などの花にも衣にもよせていふ、白きは色のもとにて目にたれば色とせぬ心にてかくはよめるなりとをいははいににおなじ。(古)一枝の菊のや、紅にうつろふも有がはた猶しるき花も数々有るをもて紅に映ふとも又雪の如くも見ゆるをばいづれに定めて心得べきやと問ふを表にて下には男のさまを見きくに色このめるあだ人ともはたまめ心ありともさだめがたきをふくめてこたへを待なり。(新)うつろへる白菊はあかき色のまじるものなればそれにそへておもふ心ないへる也。一首の意は白菊の花もうつろひて紅にほふといふ事なるがそれはいづれぞたゞ白雪の枝もたわむほどにふるここと見えて紅のほへる色は見えぬといへる也。さて色このむ心ときくにその色ある心はいづれぞきりけし見えすと云意をそへたる也。すこしうつろひたる菊にてぞありけんかくいひやるはかへしにいかにいふとてその心を見ん

をすしわざ也。にほふは色のうつくしく見ゆるをいふ。萬葉集の歌につもじ花にほへる君とあるにおなじ。いづらはいづくぞと云意也。古意にいづれにさだめんと問意にとかれたるはたがへり土佐日記の歌に「あるものとわすれつゝなほなき人をいづらとふぞかなしかりける」とよめるもいづくぞとふ意にておなじ。なほは古事記に折竹登道や登道や見えたるもたわむ意、又萬葉集には白杜枝枝母等々爾と云歌の所に或云枝毛多和多和とあるにていよしくしるし、枝もとなへは枝もたわむと云意也。

○をとしちよみによみける。「舊註」(愚)女のわれを心みるとは知らず口にまかせて返したる也。(直)此歌は我心を勘辨してよむとしれ共しらぬよしにてよめり。ちとも動ぜぬ返事せん爲也。

【新註】(勢)こゝろみるとはしりながらしらぬよしによむなり、卑下の心にあらず。(古)女の下の情をしらぬがほして返しせし也。(新)しらすよみとはまことにしらぬにはあらておくれる歌の意をしらぬよしによむをいふ。

○紅に匂ふがうへのしら雪(白菊)は折ける人の袖かとぞある。「舊註」(愚)歌の心は紅にうつるへるがうへに又しるくみゆるは手折ける人の袖の色をのこせるかとよめる也。古今歌「花見つゝ人まつ時は白妙の袖かとのみぞあやまたれける」いづれも白衣の客を思ひよせてよめるなるべし。(直)紅に匂ふ白菊は折ける人の容もかぞ有らんと想像をいさゝかも動ぜぬやうによみて遣也。菊に白衣佳人と云事在之。(簡)好色の事に取りあはずして白菊の紅にほふは、をりたる人の袖の香にこそあれと也。【新註】(勢)紅に匂ふも猶白菊と見ゆるは紅よりにほへる人のたをれる白たへの袖にまがひておほゆるとこなたの好色によするにはとりあはずしてす

なたをほめてありのまよによみてかへすなり、袖かともといへるは雪のふれるかとみゆといへるをふくめる也。此かはうたがふ詞なるを或抄に白菊の紅に匂ふはをりたる人の香にこそあれとなりとあるは袖香と意得られけるなるべし。古今集に「花みつゝ人まつ時は白たへの袖かとのみぞあやまたれける」(古)本には問に答へる意をいひ末にはその花を折りつる人のさまを思ひやりてほめたなり、かの下にそへし心をしらぬふりしてかくのみかへしせしは一興なり。かつ紅の下に白きを着たる袖のさまを紅に上のうつるへる菊におもひよせたりけん。終の旬今は袖かとも見ゆと有るは上の歌に見ゆと有るをもて書あやまれるなるべし。古本は上を所見と有て、かへしは袖かとも見ると書たり、こは上をうけてこたへたるなれば此返しは見るとこそよけれ。【新註】にほひとはいにしへは専ら色の餘光をいひはた是は白きが上にかつゝ紅にうつるへるを云、俗は香をのみにほふと云ふと思ひあやまれる也。又ある人は菊のうつるへるは先下のかされより色づけばいふがといへど過たる説なるべし、一枝にあまたの花あるがまづ咲たるはうつるふに専ら白きもまじれしはしよめると見んはやすかるべき。(新)おくれる歌のこゝろををしらすよみによめるなればさらに返しにの歌のやうにはなき也。一首の意はうつるへるしらぎくにて紅にほへる色のあるが上に白雪もふりたるやうなれば折ける君がきぬのかされの袖口かとぞ見るといへるなり。此歌の解古意臆断ともいわれるし。うへといふは拾遺抄に宗祇の説とてそのうへにといふ意なりといへるぞよき。△白雪は塗本にしたがふ。白きくとある本はわろし。袖かとも見ゆる塗本二本にしたがふ。(按)この段は前段に「けふ、すば明日は雪とぞ降りなまし云々」と櫻を

雪にたぐへしによめて梅に雪をよせて作りなせりと見ゆ。かつや端の詞に「女歌よむ人なりければこゝろみむとて云々」の趣向は臆断古意にひき出でたる貫之集を思ひてやかきたりけむ。しかのみならず此の段の歌塗本にては梅、定家本その他菊によせつ、かにかくに亂りがはしきは古き本文とも見えなむ。

天雲のよそ

○むかし、男^{アリケリ、シカガハキ}宮づかへしける女のかたにく^{高ヤ}ごたちなりける人を、あひしりたりけるに^定ほどもなくかれにけり、おなじ所^{ニ家トヘスルヲチ}なれば、さすがに^定女^{ナメ}のめには見ゆる物から、男は^定あるものかとも思ひたらず^{アリケレバ、女}女^{ナメ}

天雲のよそにも人の^{ツレナク}なりゆくか^ツ さすがに^定めには^定見ゆるものから

天雲のよそ

とよめりければ、男、かへし、

ゆきかへり空にのみしてふるこ

とはく我^ニある^ニ山の^ニ風早^ニみ^ニなり。

○むかし男宮づかへしける女のかたに、ごたちなりける人をあひしりたりけるにほどもなくかたにけり、おなじ所なれば、さすがに女^{ナメ}のめには見ゆるものから、男は^定あるものかともおもひたらず女。【舊註】(愚)宮づかへしける女とは女御更衣などの事也。ごたちは後達とかく、女房の徳名也。源氏物語にもある事なり、此ごたちは紀有常が女なり。古今第十五の巻にみえたり。ほどもなくかれにけり。男のかたよりかれんくなる也。此男と女とつれにおなじ所にて、参會する也。女^{ナメ}のめには見れども男のかたより女^{ナメ}があるものかともおもはぬけしきありければ此歌をよめるなり。(直)染殿後の御事也。業平は攝政太政大臣藤原忠仁公へ家禮申さる。染殿後は當代清和天皇の母后にておはしませり。ごたちなりける人とは染殿に召つかはるゝ女房たち也。ごたちは後達と書也。やがて離別する也、然共只かれんくなるもみたる儀よし。業平、女は有物かとも目にかけざる也。【新註】(勢)宮づかへしける女のかたにといふを或説に男のみやづかへしける女のかたにと

つゞけて染殿後の御事なり、とあれどしからば女とはいふべからず、たいしするべき宮づかへする女のかたの後達なるべし。これにけりは萬葉集に離の字をけり。おなじ所とはこれによりて上の宮づかへしける女はなとこの女に後達ともにつかへたるやうにきこゆれど、さらでも同じ所とはいふべし。女のめには見ゆる物からとは女はこの男を猶心に付けておもふゆゑにめにかゝるなり、なとこはある物とも思ひたらずとは諺にもいふ事なり。新古今集に長能「あだごとの業におく露の消にしろある物とてや人のとふらん。男は女をあるものかともおもはねば目にも見かけぬなり。思ひたらずはおもひてあらずなどといふべきを互阿切多なればつゞめてかくはいふなり。(古)此宮仕へする女は女御更衣などを指べく、御達はそれに仕ふる女房を云、さて御とはいにしへはすべて女御御息所などの如き貴き女をいへるを其後は貴家に仕ふる女をなれていふ事とは成ぬ、此後の物語に云は皆しかり、この意は同じ宮中に仕ふる男かの御だちにあひつるがほどなく離たれど女はえ思ひはなれば常に目につくを男は忘れにたればふつになにとも思はてありぬと云也。△此條古今集になりひらの朝臣紀の有常がむすめに住けるをうらむる事ありてしほしのあひだ晝は来て夕ざりは歸りのみしければよみてつかはしけるてふ例の書かへて一條の物がたりとせし也。こちてふ事本朝文粹に依るに古へは貴女を御と稱せし也。然ばたは君等友等などのたるに同じく、ともがらなへば等の字あたれり。さるを或説に後撰書註を引て禮記註曰后之言後在夫之後故以女謂後達今考るにこの故以女謂後達てふ六字は後達と云と意得たる人のそへたる字にて禮記漢書等の註にはあらぬをかく書そへて人をま

どはせる也。みづから古言をあやまるのみかは他の爲にもあしきぞかし。頭註。或説に此女を染殿后とし御達を高子とし男を業平といへるは例のひがごと也后を仕ふる女と云ふ事やはある、此頃高子を御達と云ふべきかは且つ高子ならば業平のおもひかれたるいかゞ。なり平を忠仁公の家禮也と云ふも時世をしらぬ説也延喜の頃までは天下皆王法也朱雀の頃より王威おとるへて公の家禮に移りさるは業平の頃まで王孫の人臣下の家禮を用うる事なし後世を以て古書をとくは皆たがへり又此男も君に仕ふるものから女のかたゆるされたればかの御たちなども常に見る也其女に仕ふる男と心得しはわろし、女に仕ふるをといひて宮中にまゐらんや。本朝文粹卷一尉井男女云々徒跳彈琴者聞者稱三辯御一俗謂貴女爲御蓋取貴人女御之義一是本は貴女をいへるかこの物がたりの頃にはや、轉じて貴女に仕ふる女房を云ふ事とはなりぬ世の事はすべてかくいやしきにくだりゆくなり。是も延喜の頃より前ならぬ一の證也。(新)これ貴人の北の方附のみやづかへを男のしたる也。それゆゑにおなじ所なればといへり。古意感斷の説ともなるし。こだちはそのにてよろしき女房達をいへる也、常木の巻につかふ人ふるこだちなどあるもつかふ人の中にすこしよろしき女房をこたちといへるよし也。さて女は心にかゝるゆゑにめにつきて見ゆるをいふ。△あひしりて、知本にしたがふ。あるものにおもひたられれば。塗本にしたがふ。

とよめり。(直)天雲のよそとつゞくるは空の高きものなればよそとはいはれため也。女の目には業平をいつもみれども業平は女近とこにあるものとおもはれざるをいふ也。【新註】(勢)古今の詞書には業平の朝臣紀の有常のむすめに住けるをうらむる事ありてしほしの間ひるはきてゆふざりはかへりのみしければよみてつかはしけるとあり、これを正説とすべし、あま雲は天雲にてよその枕言なり。萬葉、天雲のよそにさへみしわざもこに心もみさへよりにしものな。天雲のよそに鷹金聞しよりはだれ霜ふり寒し此夜は「かくしのみあひ思はざらば天雲のよそにぞ君は有るべかりける」これらにてしるべし、枕言業を下まで受てよめるは萬葉に「大船のかとりの海にいかりおるしいかななる人か物おもはざらん。古今集に「梓弓はるたちしより年月のいるが如くもおもほゆる哉。此歌とも枕言ながら末まで心なうけたる事今と同じ、なりゆくかはなりゆくかなの心なり。さすがにみゆるも雲によせたり。(古)我目路に有る雲の見るくよそに移りゆくにたとへて眼にはまかく見る人の心うく成たるをいへり。さて古今集にては晝は来て夜はかへるなればたとへるとりやう少異なり。且萬葉に「かくしのみあひ思はざらば天雲のよそにぞ君は有るべかりける。此外にも「天雲のよそにさへ見し吾妹子に心も身さへよりにしものを」などよめるは天ゆく雲は遠くてのみ見ゆるもの故によそてふ冠辭におきたるを古今集にも此文にもやがて下へかよはせてたとへたり。頭註。なりゆくかのかはかなの略也といへり、一首の始終をおもへばうたがひのこともいふべけれど猶かなと心得るぞたしかに解る也。さすがはしかながらの略なる事已にいへり。物からは物ながら也。天雲の如よそに云々といひてさてめにはみゆる

てふまで雲の事を云ふ、かく冠ことをはたらかしていへる體は萬業にはならぬ朝にいたりて一二首ばかりあり其後はかなしかり。(勢)あま雲は遠くよそに見ゆるものなればよそといふ枕詞なるを下までたとへにいひつゞけたるなり。一首の心は天雲のやうによそ外にも人のなりゆくことかなさらばかくれて見えぬやうにもなるべきをさすがにめには見ゆるものなからといへる也。

○とよめりければ男返し。ゆきかへりそらにのみしてゐることは我る山の風早みなり。【舊註】(愚)古今集には初五文字ゆきかへり雲にとあり。それも雲の事をいへり。歌の心は山に風はやきゆゑに雲のしづかにぬぬやうに女のもとに男の又かへばうるさくて、よそく成行とよめる也。下の詞に又男ある人となんいひけるとかけり、(直)わがよそに有てちかづかぬはそなたに風のはげしき故也。風ははやきほどに雲のおりけんやうもなきといふはそなたにはぬし有るほどにわがちかづかんやうなきと云心也。古今集には、行かへりよそにのみしてゐることはとあり。(關)古今第十五業平朝臣、紀有常が娘に住けるを恨る事ありてしほしの間晝はきて夕ざれば歸りのみしければ讀てつかはしける。あま雲のよそにも人の成行かさすがに目には見ゆる物から「返し業平朝臣「ゆき歸り雲にのみしてゐることは我る山の風はやき也」かくはあれども有常が娘の事貞女の名を顯して書たり。然はいづれの女をも名をあらはさて書る類にして此物語にては見るべきをやそ愚意の了簡也。【新註】(勢)古今在原業平朝臣。古今には「行かへり空にのみして」とあり「ふる」とは月日をふるを雲の中天にあるほどによせたり、此ふるといふことによりてあま雲を雨雲とおもへる人あり、さらにしからぬ事なり。わがふる山はわれを

雲となして女を山にたとふるなり雲は山におりぬるものなれどか
ぜはげしければ空にのみたゞよふこととそこにこと人のかよふて
わが爲につらければえよりつゆぬそといふ心なり。古今にはつら
き所をのみ風はやみなりとはそへたり、後撰集に「しら雲の行べ
き山もまだまらず思ふかたにもかぜはよせなん。これは今の歌を
とれるにや。拾遺集に「しら雲のこゝるそらごとする人をやまの
ふもとによせてける哉」とよめりけるはまたなとこある人となん
いひける、是は我ぬる山の風はやみなりといへる心をあらはさん
爲の註也。(古)こは我身をば雲に女をば雲の下居るべき山にたと
へたり。さて其山の風はげしければ元よりぬがたくてよそにのみ
雲の過わたるといへり。△あま雲を雨雲と意得るは聖し、前の歌
は天雲てふ冠言を下までかよはせて詞をなしたるをこれには其雲
を詞としてあげつるひよみたる也。又古今には行かへりとのみい
ひてあま雲のおかぬは贈れる歌をうけて略せり。すべていにし
へはこゝろをのみ専らよむ故にしおくれる歌の詞にゆづりても
又端の詞などにゆづりてそれがうへをよむ也。頭註。古今にては我
ぬる山てふ詞よくかへり、此文にてははしの詞をかへたれば少
とほくなりぬかゝるほどの事此文には多しつくりかへたる物しる
からずや。○風はやみやま古本に風痛と書たるは此はやきは疾風の
義なればいちはやきてふはやきに同じ。後撰に之をとりて「白雲の
行べき山も定まらず思ふ方にも風はよせなん、拾遺にも似たる歌
あり。(新)女の歌に男を雲にたとへたればすなはち雲になりて行
かへり空にのみしてありふることわがぬるべき山の風はげし
き故也といふ意也、ふるは経る也。風とはこと男をいふたとへ言
なり。はやみははやさになり、下旬のしたの心はわがものなる女

のもとなればたちよらんと思へどえらぬは又かよふ人のあまた
あるゆゑ也と云意也。△ゆきかへり、そらに、塗本にしたがふ。
こは古今集なるおくりこたへの歌をさながら出してはしの詞を
かへたるなり、此物語に例あり、他本にて雲のよそとあるはうつ
す人のふと見まがへてさきの歌のはじめの所を又かける也。そ
れ、此物語に古歌の詞をすこしかへて出せるは意をかふるため
しわざにていづれもおもしろきに此歌は天雲のよそとしておな
じ意にてたゞ歌のわろくなるばかりなり、さやうのつたなき事は
すべしや。

○とよめるはあまた男ある女になん有りける。【新註】(古)古本
此詞なし落たるなるべし。古今集にては恨むる事有てとのみ侍れ
ばいかなるうらみともしらぬを此文にはかく云ひそへて少し事な
かへたる也、是をもて古今を誣べからず。(新)記者の詞也。塗本
にかくあるにしたがふ。(按)この段の贈答古今集巻五に見えたり。
いはく「業平朝臣有常が女にすみけるを恨むる事ありてしばし
の間晝はきて夕ざれば歸りのみしければよみて遣しける。天雲の
よそにも人の成ゆくかすがにめには見ゆる物から。かへし。ゆ
き返り空にのみしてふることは我ぬる山の風早かなり。今この古
今集の詞書とこの物語の文とをくらべ見るにこの文のたか歌にも
うちあへるが上に詞づかひも新らしからず。△古今集の詞書より
見れば返歌初句「ゆきかへり」といふ方ふさはしからむも此物語の
文より見れば、「天雲のよそ」といひて贈歌をうちかへしたる方
うちあへり。△とよめるはあまた男ある女になん有りける。我ぬ
る山の風はやみかといへる返歌の心をあらはせる後の人の註文なる
べし、眞名本になきぞよろしき。

かへての紅葉

○昔、男、やまとにある女をよばひてくあ
ひにけり。 さてくほどへてく宮づかへす
る人なりければかへりくる道にくやよ
ひばかりくにかへでの紅葉の、いとおも
しろきを折りてく女のもとに、みちより
いひやりける。

君がためく手折れるく枝はく春なが
らかくこそ秋のく紅葉しにけれ
とてくやりたりければ、かへり事はく京
につきてなむくもてきたりける。

いづのまにく移ろふ色のくつきぬ
かへての紅葉

らむく君が里には春なかるらし

○昔、男やまとにある女をよばひてあひにけり。 さてほどへて宮
づかへする人なりければ、かへりくる道に、やよひばかりにかへ
ての紅葉のいともしろきを折りて、女のもとに、道よりいひや
りける。【舊註】(愚)男の宮づかへする也。禮記にも宮學と書き
みやづかへし物まなぶとよめり。(直)奈良の京にある女にや。
宮づかへする業平の事也。奈良の京より今の都へかへる也。楓の
若葉の色こき也。(圓)宮づかへするは業平也。奈良故郷なれば行
て又今の京に歸りて宮づかへせんとなるべし。三月わたりの紅葉
はわくらばたるべし。病葉と書り。わくらはは、選通也。宵隔に紅
葉は若葉の色こきを云り。此義面白し。【新註】(夢)古註にかへて
のもみちは若葉の赤きなりといへり、此説可用。(古)萬葉に他の
國によびに行ててふ如く山城に京官なる人大和の妹がり行てあ
ひたるが仕ふる人なれば京にかへると也。されど昔は私に他國
へ行て日を経るべからず法令の道はいとまを乞て大和の本居に行
て女に逢つらん、ほどへてといへど三十日には過ぐべからぬも
のなり。物語はいかに作りなす事ながらさりとして大様の事をば
だがへざる也。△やよひ頃のかへてのもみちは若葉の紅なるを云
べし、後拾遺雜部に太政大臣かれんくになりて四月ばかりにまゆ
みのもみちを見てよみ侍りける、藤原兼平朝臣の母、住人のかれ
ゆく宿は時わす草木も秋の色にぞありける。是も四月なれば若
葉の紅なるを云なるべし。貫之集に六月に木葉のもみちたるを
りてあるは病葉か。(新)やまととは奈良の京わたりをさしていへ
るなり。此物語は今の京のはじめのほどにありつる事をかきける

よしなればその心ばへに見るべし。今の京のはじめの人は久しく住なれし奈良ゆゑにやからうからさらでもしたしき人ありてかしくへはなりくに行かふ事たえざるべく、さるからにかやうの事もある也。ほどへてはかへりくるといふ詞へつゞく意也。そのあひだの詞はかへりくるゆゑをことわれるにてひとつの文法也。かへての木的事和名抄に難冠木(加倍天)難歌樹(加比野)とあれども此ふたつはおなじ木にて葉のかたちかへるの手に似たるゆゑの名にてかへてはかへる手をはぶきていへる也。蝦蛙のたぐひはかへるともかへるともいふなり。さて春の頃もみちとはめのくれなぬなるをいへり。いとおもしろきといふはかへての木は種々ありてめの色もすくこさいいろくあればその中にすぐれたるをいふ也。

○君がため手折れる枝は春ながらかくこそ秋の紅葉しにけれ。【舊註】(愚)きみがためにもたをれる枝なればもみぢすまじき頃なれどかく色づけるといへり。わりなき心の色を紅葉につけていへる歌也。(直)君がためにと思ひて手折えだの春ながらかくもみぢするはそなたの心の移らふ故にやとの心也。【新註】(勢)玉葉戀四葉平、君がために手折枝のおもひがけぬころかくもみぢするは君の心のはやうつらふかとよめり。出くる道なればかならずしも女の心をうたがひたるにはあらでたゞひきみるなるべし。後拾遺雜二云、太政大臣かれんになりて四月ばかりにまゆみのみぢちを見てよみ侍りける、藤原兼平朝臣の母、住人のかれ行宿は時わかず草木も秋の色にぞ有ける。(古)君が心に我をあきてふ事あれば御爲にとて折たる枝すらもうつらふ色の侍るよとよめる也、頭註此うたいがて兼平のならん後の集に其歌と入しはいに。(新)師

説に此歌の意は君にわが心ざしの深きにかなひて春ながらも秋のごとく色ふかく染りたりといふ意なるべし。註どもに秋といふ言になづみて女の心のうつらふ事に心えたるはいかひ、さてはかへしの歌めづらしげなし。又女の心をうたがふべきよし上の詞に見えずといはれき。この説いとよし。(按)この歌玉葉戀四に見えたり。詞書に「彌生ばかりに楓のみぢたるを折りて女の許に遣しける、兼平朝臣」とあり、この物語よりとり入れたるけむ。

○とてやりたりければ返事は京にきつてなんもてきたりける。【舊註】(愚)男京に來着て後、女の返事をやまとよりもてきたる也。(直)返事は京に來つて。返事今やくと遊すが待たる心有り。【新註】(勢)道すがら返事をまつ心あり。(新)道よりいひやりたるがやまとに近き所ならば使のものは足ばやなれば返事も道なかにてもてきたるべく、さやうにてはかへしに君が里にはとはいひがたし。返事は京につきてもてきたるはやまとを遠くはなれてやりたる使なるよしをしらせたる文也。されば京遠き所のかへてのみぢゆゑに大やうに君が里にはといへる也。拾遺抄藤原などに道すがら返事をまつ意の文なりととけるはたがへり。

○いつのまに移るふ色のつきぬらん君が里には春ながららし。【舊註】(愚)是は男のうたにこたへてよめる也。我ためにたをればよて時ならぬえだの紅葉しぬべき理もなし。されどもかやうに色づけるは君がさとには春こそなかるらめとよめる也。うつらふ色は男の心のかはるかたによそへていへるなるべし。【新註】(勢)わかれてはどもなきにいつのまにうつらふ心のつきたるぞ君が里には春はなくなりて心の秋になりけるかと立かへりてをこをうたがふなり。春は木の葉のしげくなればおもふ心のふかきにとへて

にかきつけくよる、

出ていなば心がるしといひやせ

むよの有様を人はしらずて

とよみおきて出ていにけり。この男

かく書おきたるを見てけしう心おくべ

き事もおぼえぬを、何によりてならむ

と、いといたうなきていづかたに求め

行かむと、門にいであとみかうみ、見け

れど、いづこをはかともおぼえざりけ

ればかへり入りてく

思ふかひくなき世なりけり年月

をあだに契りてわれやく住ひしく

春ながららしといふなをべし。萬葉第十に。毎年梅者朋友空蟬之世人君羊蹄春無有來。これは年ごとに梅はちりて又咲を人のさかりはかへらぬなり、春なかりけりといひて春はおなじくて心はかはれり。(古)かたみに云つのは贈答の常なり春ながららしに君が方こそ秋はあるならめとせたり。(新)此歌は男の心ざしのふかきをかへての若葉の色つきによそへていひおこせたるをさきしらぬ顔してかくこそとのたまひおこせたるは御心のうつらひかはれるよしにやあらん。こゝもにてはさやうの心とは見えざりき。いつのまにうつらふ色のつきぬらんあやしきよ君が里には春といふ事なく秋なるゆゑにこそといへる也藤原に春は木の葉のしげくなれば思ふ心のふかきにとへて云々といへるは例の歌の意に見えぬつけそへ言也。△京につきて眞木にしたがふ。

おのがよ

○むかし、男女、いとかしこく思ひかは

して、ことごとろなかりけり。さるを、

いかゞありけむ、いさゝかなることにつ

けて、よの中をうしと思ひてくいでい

なむとて、かゝる歌をなむよみてくもの

といひてくながめをり

人はいさ思ひやすらむ玉かつら

面影にのみいと見えつ

この女、いと久しくありて、ねんじわ
びてにやありけむいひおこせける、

今はとて忘るゝくさのたねをだ

に人の心にまかせずもがな

かへし、

忘草植うとだにきく物ならば思

ひけりとは知りもしなまし

又々、ありしよりけにひかはして、

男、

忘るらむと思ふ心のうたがひ

にありしよりけに物ぞ悲しき

かへし、

中空にたちあくる雲の跡もなく

身のはかなくもなりぬべき哉、

とはいひけれどおのがよになり

ければ、疎くなりけり。

○昔男女いとかしこくおもひかはしてこと心なかりけり。「舊註」
(調)よくおもひあひたる中也。末に變する事をいはん爲也。「新
註」(勢)かしくはかたくといふ心か、かしの木をこの調に擬と
かけり、又人の名に賢の字をかたよめるは賢聖と通じてかしく
くとかたしと和語も通ぜるか、又賢は善なりとあればいとよくも
といへるか、こと心は異心なり、後に變することはいはんとてま
づかいはひ出せり。(古)是は共にかたくおもひかはして他し心
なしと也。まづかひて下の文を興せり。さてかしくこと云に
本末の用ぬやう有り、下の條に女心かしくやあらざりけん、人
は言につきて他國へ行云々、てふは心の不賢にて語の本也、又

親王女をおぼしていとかしこく恋みつゝかよひ給てふは其女を愛
たき物におほしめむ也。こはそれに同じく互にめてたしと相
思ふ意にて語の末にて云也。頭註。凡かしくきてふ語の初めは恐
きより出て心の賢き人はたふとみ恐るゝよりかしくき人といひ其
賢きはよろしくめでたきことなれば心によろしくめでたきとおも
ふにも轉じいへり。(新)かしくはよくと云意也。古意にめでた
しと相思ふ意也とされたはかなはず。こと心なしと思ひか
はす心の外にこゝろのなきをいふ。

○さるをいかにありけん、いさゝかなることにつけて、世の中を
りしとおもひて、いでいなんとして、かゝる歌をなんよみて、も
のかかきつけし。「新註」(勢)これはむかへて妻とせし女の出で
いにたるやうにかきたれど此段のをはりにおのがよになりけり
ればうとくなりけりといへるを思ふにまことに夫婦と定まりた
るにはあらでかよひける所を出でいしなるべし。萬葉に、世中
をうしと思ひて家出せし我やなにかかへりてならん。(古)今本
にはうしと思ひて出でいなんと思ひてとあれど下の歌と調とをむ
かへみれば古本に此調なきをよしとす文のさまもありてはわる
し。△いかなる事はしらねど大かたの機は少のたがひめなるを
えねんじ過ぎと云なるべし。さて此條は萬葉に「世の中をうし
と思ひて家出する我やなにかかへりてならん。此歌をかく云延
て作れるにや此文萬葉をとれる事多ければ也。(新)さるをいかに
ありけんはいかなるゆゑありけんと記者のうたがひいへる詞
也。すべて男女の中にあしくなるはこと心あるよりおこるものな
れば也。世の中とは男女の中をいへり。ものにかきつくととは女
のをる所のかよひやうのものにかきおけるなるべし。出でい

にしあとにて夫のみまかすとするわざ也。さるは恨みないひのこ
したる歌なれば也。亭子院の帝いまはおりのたまひなんとする頃
こきてんのかべに伊勢の御のわかれどあひもをしまぬもしき
を。といふ歌をかきつけける事やまと物語に見えたり。おもひわ
たすべし△いかにありけん知本にしたがふ。いかなる事かありけ
んとある本はわるし。出でいなんとおもひつゝ知本にしたがふ。
○出でいねは心がろしといひやせん世のありさまを人はいしらず
「舊註」(愚)女の歌也。世の中をうしと思とりて、いぬるをばし
て我をかるゝしく人のいひなさんとよめる也。(調)夫婦の間の
恨有て堪忍し難き事のあるをば世の人はいしらすで我心かるきもの
いひやなさんといへる様也。聊の事に付ては女の堪忍のなく心か
ろきといはん首尾也。「新註」(勢)六帖にはいかにおもへるにかか
なしの歌として人はしらねばを人はしらすと有。ふたりの間
にうらみ有るをばしらすこの家をうかれ行をば心がろしとぞ世の
人のいはんすらんとなり。日本紀に消息をも又狀の字をもありさ
まとよめり。いさゝかなる事につけてとあれば真心ならぬなり。
源氏繪本に、えんにもものはちしてうらみいふべき事をば見しらぬ
さまにしのびてうへはつれなくみさほづくり心ひとつにおもひあ
まる時はいはんかたなくすこきことのはあはれなる歌をよみおき
しのはるべきかたみをとめてふかき山里世はなれたる海づらな
どにはひかくれぬかし。これに此段の心相似たり。(古)よそより
見聞にはいかにぞやおほゆる事もうち人しれぬうさも有は世
の中實にしか也。さてこは紀友則の歌なるをとりて此女のしれ
ぬ愛さに從て家出するほどの心のうちあはれにとりなしたり。さ
て心がるしてふ詞をもて次下の事を作りたる巧みを見るべし。此

せまほしといへる也。それをわすれ草にてしたて、種まくなどいひたるにいていにおかしき也。だには俗語になりとも云意也。此歌はいづれの註もみなむげにあしくはあられど、だにの意をときえずしておろそかなり。

○返し。草種うと先は聞く物ならば思ひけりと知りもしなまし。【舊註】(愚)男の返歌也。わすれ草をそなたにうゝるときくならばさては我をわすれがたきにするぞとおもふべしと也。わすれ草に二種あり、萱草を忘憂草といへばそれをわすれ草といへり。萬葉にも此二字をわすれ草とよませたり。すみよしの岸に生たるは萱草なりといふ説あり。又しのお草の一名也。軒のつまなどによめるはしのお草一定也。(直)上のうたをはたらかすすしてよめり。おもひ有うへにこそ忘草をばうゝるならめ、わが思ふと云なば知べしと云り。又そなたにも忘草をうゝるならば、こなたをわすれぬとしるべしと也。【新註】(勢)續後撰戀五在原業平わすれんとするはわすれず思ふ心有る故なり。さればわが忘草をうゝるときかばおもひけりとしれと也。(古)贈れる歌の意を其まゝにてそれにづきて我心をあらはせり。物思ひにあまりて忘草を植れば也。(補)はいにしへの習字も然らば云にはうゝ。(新)一首の意。そなたにはそれがしが心にわすれ草の種をまかせずともなといはるれどそれはたがへり、わすれ草をうゝるはあしき事ならず、それがしはあはれずともせめてそなたの心にわすれ草をうゝといふ事なりともさかまほし、さやうにきくものならばそなたにもそれがしを思ひけりとしりもしなましと云意也。しがいふ故は萱草忘憂(文選)と云事のありてそれを心にうゝるは古歌に我下ひもにつけたれど、いひけんやうにおもひをわすれんとてするわざなれ

は也。かやうに見ればだにといふてに、をばもときえられ又きくものならばといふはさかまほしく思ひて、いふ詞なるにもよくかなへり。さるを古註もときひがめたるにならひて古意臆断にも我わすれ草をうゝとそなたにきかばおもひけりとしれといふ意にとけるは自他のたがひにていみじき言也。しれといふ意をしりもしなましといふべきは、さてだにはとくべきやうなければとかずておかれたるなどもしり人たちのしわざともおぼえずといみだりなる説にぞありける。

○又々ありしよりけはいひかばしてをとど。【舊註】(愚)もとよりもなほれんごるに、いひかばして夫婦となる也。(直)ありしよりすぐれてなり。もとよりも猶相語けり。(勢)けにはまさるなり萬葉に勝の字をけにとよめり。(古)さきには同じ所に住めば更にいひかばせる事も侍らぬを今は離れ居て深くいひかばせばし云也。頭註。又々云々は此頃の歌の事にいへる詞にて侍り次々の歌どもを見て知るべし且上には思ひかばしといひこゝには外に在る故にいひかばしとさき分けたるにて知るべし。△勝をけとよむ事萬葉に多しある人女のたかへりてするもやうにいへるはわるし、こゝは此あひだに歸らんや否やままの謂有て終にかへるまじきことわりにて成て此歌は贈れるなるべし。(新)けにはまさりての意也。けの字すみてよむべし。古歌に露よりけなるあさがほの花といへるも露よりまさりてはかなきをいへり。さてありしよりけにいひかばすと女はあやまりありしゆゑに男の心かとり男もいさかなる事につけても出ていし女なれば又さやうの事やあらんと女の心をとるからにありしにまさりてかたみにうはべをつくらひて言よくいひかばすよしなり。思ひかばすとこ

にして心のへだていてくるわざ也。つきなる歌にかけてあぢはひあり、こゝはまた男の家に女のかへらざるうち的事也。

○忘るらんと思ふ心のうたがひに有りしよりけはものぞ難しき。【舊註】(愚)もとも忘れしゆゑに又もさやうにやあらむとうたがひ心にありしよりまさりて心ぐるしきと云ふ也。けには勝字也。まさりたる心なり。(直)今又かたらへども又や我をすていなんとな人の心の疑はしきに有しよりすぐれて猶物かなしき也。けには勝と云心也。【新註】(勢)古今戀四題しらすみ人しらすの中に。「わすれなんと思ふ心のつくからに有しよりけにまづぞかなしき」と有り同じ歌也。わすれぬ我を君が心にわするらんとうたがひてわすれ草のたれをまかせずもなときこえつるにまことには我を思ふほどのしられつればありつるさきより物がなくあはれになんおぼゆるとよめるなり。或註に又やわれをすていなんとな人の心のうたがはしきにと有るは右に忘れやせんと女のうたがへるをふみてよめる心にかなはず。(古)在しより異に云通はし侍るといへど男も女も今は離るべき故有るべし。(次)の歌に「さるからに今はいかにわすれてしがなてふ心の付からにへりて物悲しさのまされりと也。(右)のこたへ歌の意を備云ひおくれやうにも聞(ゆれどよく此詞の始をみるればさるはあらず)古今集にわすれなんとおもふ心のつくからにありしよりけに先ぞかなしきてふ歌をかつかつ、語をかへて用ひたり且三の句は古今のまゝに付故にと古本に書るを用うべし。頭註。今本に初句をわするらんとし三の句をうたがひにと有てそれに付て説どもあれど皆ことわりよるしからず古本そよき也恐らくは其説を助けんとして歌の句を後になほしたるなるべし。此條ことに古歌を用ひたる多し其かへしは記者のよみて物がたりとせし也さるを後の集にとせられしはいか

に、(新)一首の意。いさかなる事につけても出ていし人なれば又やわするらんと思ふ心のうたがひに行末たのみがたければわかれてありし時よりまさりてものがなしといへる也。さるはあひみては思ひのますゆゑ也。さて拾遺抄に此歌とけるやうは大かたよるしきにあらずといへる臆断の説かへりていとわろし。

○返し。中空に立るる雲の跡もなき身のはかなくもなりぬべきかな。【舊註】(愚)女よめる歌也。男の心に疑はれぬれば、あるもあるやうなる心ちもす、空にたちぬる雲のあともなきやうにはかなき我身にてありとよめる也。(直)女のわが心を観じてよめる也。わが心かろきことをしてさしもなきだいにしからば其儘にてもなく、こゝへかれて立歸りたるは雲の根もなく半空にたゞよふがごとく也といへり。【新註】(勢)中將のたをさるふしもなくてうかれ出て、さらばそのまゝにもなくて立かへり、したひなどして、さらに定めなき我身のありさまをなぞらるる雲によそへてくゆるなり。(古)中空に立ぬる雲とは彼家出せしより後又いひかよはせしまでの事をいひてきて終にかへり住まじきに雲のたちきて跡なきにたとへたり。然れば我身のより所なく成にたるを雲のあともなきてふ詞によせて身の計もなくなり畢ぬとなげきたるなり、かくとく事は右の贈れるうたと此かへし之意と甚だ事どほく侍り。仍ておもふに前にもいへる如く一たび家出はすともかくばかりありしより勝に云かよはすほどならば男もなぞかむかへざらん女もいかにかへらざる、さるを猶かくのみあるは此贈答のあひだにさまんの事を物しつれど今はえたちかへりがてなる故のありて終にわかれはつべう定まれる上にて男もいかに今忘れんとする歌を贈り女もかへる返しせしならん此あひだの事見る人に

おもひはからせたるひとつの作りさま也。頭註。ある説につひに立かへりたるといへるはおろそかにこゝを見たる物也此中空にてふ歌は記者のよめる故にいとむつかしき心をこめて作れる例の事なるをや。(新)一首の意。夫のうたがひていへるをうけてこなたには君をのみたのみまぬらせてよるべと思ふにさやうにうたがひてへだて心し給ひては君が家にもかへられず、たとへば山にかゝらず中ぞらにたちつめつしてたゞよふ雲のあとなく消るやうにわれもよりかゝるかたなくて命消ぬべしといへる也。身のはかなくなるは死ぬる事也、中空とはよりかゝるかたなきをいふ意なるを古註ども中といふに思ひなづみてときあやまれり、古意臆断とも此歌の意詞をときえず。△なりぬべきかな。塗本にしたがふ、なりけるかなとある本はわろし。

○とはいひけれどおのがよはなりければちとくなりけれり。
 【舊註】(愚)女も男も各離別したるをいふなり。(直)離別して別々の世々になるを云ふ。うとくなりけり。妹背のちきりもなきを云ふ。(調)おのが世々離別して、おのが世々に成を云ふ。うとくなりければ、いもせの契もなく成をいふなり。私曰、はゞ木の巻、品定の所に、えんにもはちして恨いふべき事をもみしらぬさまに忍びて、うへはつれなくみさほつくりて、心ひとつにおもひあまる時は、いはん方なくすこきことのは、哀なる歌をよみおきしのはるべきかたみをとめて、ふかき山里世はなれる海づらなどにはひかくれぬかしとあり、此末に此心のみしらぬやうに、にげかくれて人をまどはし心をもんとする程に、ながき世の物おもひになる、いとあぢきなき事なり、心ふかしやなどほめたてられて、あはれすゝみぬればやがてあまに成ぬかし。おもひたつ程

はいと心すめるやうにて、世にかへりみすべくもおもへらず、いであなかなし、かくはたおぼしなりにけるよなどやうにあひしれる人きとぶらひ、ひたすらにうしともおもひ離れぬ男きつつけて涙おとせばつかふ人、ふるごたちなど君の御心は哀なりけるものをあたら御身をなといふ、身づからひたひかみをかきさぐりて、あへなし、心ほそけはうちひそみぬかし。忍ぶれどなみだこぼれぬれば折々ことえれんじえずくやしきこともおほかめる。佛もなか／＼心きたなしと見給ひつべしなど書たり。是も前後女の堪忍性のなき故也。猶おくにあまにもなきでたづね取たらんもやがてあひ添てとあらんかりも、らんきさみを見すぐし、たらん中こそ契ふかく哀ならめ、我も人もうしるめたく心おかれしやはとある。此段の初中後よく似かよひたり。又同所に女房などの物がたりよみしを聞て、いと哀になしく心ふかき事かなと涙をさへなどし侍しなどあれば此物語の事などにもあるべきか、いさゝかかはる所なし。【新註】(勢)とはいひけれどは、たがひにかくはいひけれどなり。今の歌一首にはかきらす。おのがよはに成るとはこと女の夫にさだまりこと男の妻にさだまるなり。後撰集に「笛竹のものとふるねはかはるともおのがよはに成らずもあらなん。」(古)つひに離れても猶いひおもひつるをさてのみも有るべかられば互にこと妻こと夫に住て疎くなれる也。△おのがよはとはかたみに夫妻の定まれるをいふ、後撰に「笛竹のものとふるねはかはるともおのが世々にはならずもあらなん」とよめるが如し△源氏のはゞ木々にえんに物はちしてうらみいふべき事を見しらぬさまに忍びて上はつれなくみさをつくりて心ひとつにおもひあまる時はいはんかたなくすこき言の葉あはれる歌をよみおき

しつばるべきかたみをとめて深き山ざと世はなれたる海づらなどにひかくれぬかし云云。又人の心を見しらぬやうに遊かくれて人をまどはし心を見んとするほどにながき世の物おもひとなるいとあぢきなき事也、心深しやなどほめたてられてあはれすゝみぬればやがて尼になりぬ、かくおもひたつほどはいと心すめるやうにて世にかへり見すべくもおもへらずいであなかなしかくはたおぼしなりにけるよなどやうにあひしれる人來とむらひひたすらにうしとも思ひはなれぬ男聞つけて涙おとせばつかふ人古ごだちなど君の御こゝろはあはれなりけるものをあたら御身をなといふにはみづからひたひ髪をかきさぐりてあへなく心ほそければ打ひそみぬかし、しのぶれど涙こぼれぬればなり／＼ごとにえれんじえずくやしき事もおほかめる、佛もなか／＼心きたなしと見給ひつべし云々。是此文のさまを委しく書ひらめたるもの也(新)とはいひけれど云々とはかく夫にうたがはるゝはかなしきよしにはいひけれど、さびなき心をえあらためずして、もとのごとく夫婦となりては又さふにはらたつくせのいで、中のうとくなれるよし也、おのが世とははじめのごとく家にかへりて妻となれるをいへり。△おのが世に成にければ。塗本にしたがふ、おのが世々とある本はわろし。(按)或人説「此段の末、忘るらむと思ふ心の疑ひにありしよりけに物ぞ戀しき。かへし。中空にたちぬる雲の跡もなく身のはかなくも成りぬべきかな」の贈答は男女を疑がひ女男に疑れてたよりなきをよめるにて、男女たがひにおもひ合へるさまにあらざれば結句「とはいひけれど、おのが世々に成にければ疎く成りけり」といふにうち合はず。よりて思ふにこの初めの忘るらむと思ふ心の歌はその前にある「忘草植うとだに

の歌「忘草」といへるによりて、何人か古今集の歌をかき入れ、返しに「中空にたちぬるの歌をも入れたりけむ、必ず後人の挿入にして」と忘草植うとだに云々の歌より結句「とはいひけれど云々に續ける者と見ゆれば」又々ありしよりけに以下中空にたちぬる云々の歌までをかこむべきかと云へれど俄に從ひ難し。

秋の夜の千夜を一夜

○むかしはかななくてたえにける中
 なほやわすれざりけむ、女のもとより
 うきながら人をばえしも忘れ
 ねばかつく恨みつゝ猶ぞ戀しき
 といへりければ、さればよくと思ひて、

男

逢ひは見で心ひとつをくかはく鳥
 の水のながれくたえじとぞ思

ふ
とくはいひひきけれどくその夜いきてねに
けり。いにしへゆくさきさきの事どもなどい
ひてく

秋の夜の千夜を一夜に准へてく

八千夜し、寐ばやくあく時のあら

む

かへしく

秋の夜の千夜を一夜になせりと

も詞残りて鳥やなきなむ

いにしへよりも、あはれにきてなむ通
ひける。

○むかしはかなくて、たえにける中、猫やあせざりけん女のも

とより。【舊註】(勢)はかしくあふ事もなく絶たる中なり。

(古)こは又一條也(むかし女と有るべきを次に女)。はかなき事に付て
絶たるが女の許より二たび云おこせたるさまなど似たればならべ
あけし物にて且前なるは終に達す。とは又あへるなれば別條也。

頭註。前と同條と思ひつる人此條をわけてとく故に事のたがひ多
かりき。(新)はかなくと云詞は俗語にたしかならずとせぬと云
意と見て大かたはたがはず、人のしめるをはかなくなるといふも
いきてをるはたしかにきとしたるものにてそのうらなれば也。桐
壺巻にみやす所はかなき心にわづらひてといへるも何といふき
としたる病氣にもあらず、わすらひ給ふ事なり、こも何といふ
きとしたるゆゑはなけれどかたみにうらみのつもりて中の絶たる
をはかなくてたえにけるとはいふ也。臆断にはかしくあふ事
もなかつたたる也と説き。古意にははかなき事につきて絶たる也
ととかれたるなどにはかなくてたえにけるとつゞきたる詞の
意にかなはず。

○うきながら人をばえしも忘れぬばかつ恨みつゝ猫ぞ戀しき。(舊
註)(直)一度別れて後うき物には思ひはてたれども猫えも忘され
ば、かつ恨つゝ猫ぞ戀しきと云り。かつはかろんゝにあらず、か
くゝと云心也。古今に『かつこえてわかれもゆくかあふ坂は人
だのめなる名にこそ有けれ』とよめるもかく越てといふ儀也。さ
ればよといひて、業平のこなたも左様には有と同しんしたる也。

【新註】(勢)新古今戀五よみ入しらすなり。うきながらえわすれ
ばかつはうらめしとおもへども戀しくわりなき心といふなり。
(古)愛人しもぞ戀しがるらんとよめる如くうき人のしかもえみす
てられぬ故にたへにはうらみなながら片心にはまだゝ戀しき

す人のとがに思ひなして女はうきながらと云歌よみかけ、男は女
のかたよりまけて戀しといひおこせたるを、さればよ女のひがこ
ゝろえなればまけてしたかひたる也と思也。臆断に男もおなじ心
にて我もしかおふと云意なりととけるはさらにはかなはず。△さ
ればよと思ひて。塗本にしたがふ。いひてとある本はわろし。

○あひはみて心ひとつを河島の水のながれてたえじと思ふ。(舊
註)(愚)歌の心はあふ時はたがひに心をかはしぬ、いまゆくすゑ
も水のながれたえぬごとくあらむとよめり。河島は川の中の島也
(直)心ひとつを河島と云は又よそへもやらす心をかはす儀也。水
はながれが絶ぬものなれば其ごとくたえまじきと也。河島川の中
にある島也。河島は行めぐりて逢物也。別て又あふと云儀有共次
なる説也。【新註】(勢)續後撰戀四題しらす業平朝臣。あひみそめ
て後ほふたつなき心をたがひにかはすといふ心につゞけたり。か
はすは萬葉に交の字を書り川島の水はこなたかたにわかるれど
末にまたながれあへば後をわけて絶じと思ふとよめり。ある註に
わけてまたあはむといふ義をば用す。川島をふたゝび用になつる
はあしきゆゑなりとあれどさやうにもよむは歌の常のならひな
り。上はことばをつゞけて下は心を用ひん事何のはかり有べ
き水の流れてとつゞくる斗は川にておほければ島は用なき物に
や。千載戀四。從三位秀行「君にのみ下の思ひは川島の水の心は
あさからなくに。新撰古今戀二權大僧都發孝「忘るなよさすち
ぎり用川島のへだつるなかなみはたゆとも。(古)今又逢見てよ
りはかたみに同じ心におもひて此末絶る事あらじと云り。心かは
すを川島と云かけてより下を水の詞もて云くだせり且中島ある河
水はわかれて又末あふなることとくたへたり。例の記者の

也。上下同意ながら詞をへて上の事を下にていひとくやうによ
める一の體也。△かつは物二つを一度になす時に其間におく語に
て今の文に事の急、速なる時且奏且行といふが如し、此語の本は
少しくしばらくなる意にて少きをかつゝといふ意なり、さて其
左する間に右するてふ所に用ゐたる時はかつゝの意を略せるに
て或は又てふ意にも轉ぜり。古今集の別の部にかつこえて別れも
行か逢坂は人だのめなる名にこそ有けれとよめるもその逢てふ坂
の上にてたれば即別るゝ故におけり。頭註。かつ越てをかくこえ
てと云説は何の書にもかなはぬあやまり也歌一首を守りて説を下
すゆゑにさるあやまりも侍り此語出る所ことに解たがへる故に委
しくいへり。(新)一首の意。つれなくて中絶たまふはうきながら
君の事をこなたにはえわすればうらみつゝやはり戀しくもあり
といへる也。しもはやすめ詞、かつはものゝふたつまじはる所に
いふ詞にてこもはうらめしきと戀しきとのふたつにわたれり。古
意にもさる意にはとかれたれどかつゝとおなじことにははれた
るはたがへり、かつゝはものゝはしをまづすこしいひをせめもし
せめもするやうの事にていたくたがへり。

○といへりければさればよと思ひて。男。(舊註)(愚)女のかたよ
りかくいひおこせたらば男のさればよ我もさおもふといひて返歌
したるなり。【新註】(勢)さればよといひては男も同心にて我もし
か思ふといふなり、文の詞なるべし。拾遺集に片崗の松のうきれ
と思ひしはさればよ終に顯にけり。(古)男の心はことならぬを女
はかり初なるふしをおもひなだめわけて絶たれば今しかいひおこ
せるを見てさればよと云へり。(新)何と云ゆゑなくかたみにう
ちみのつもりて絶たる中なれば男も女もみづからのつみとおもは

歌にてうるさきまで事をふくみたり。△古本に「はしまを通間と書るは借字也、^ハはすは萬葉には交の字を用ぬたり。△今は心ひとつをとあれど少しこゝろ得がたき所あり古本に一心と書たればひとつこゝろをとむべし。古今集にひとつこゝろぞほこらしきともよみたれば例あり。或説に「はすは川島に於て心得るはわろし一事を二度用になつるをきらふなどいふはいかなる事にや凡古歌は一意なるがその少後にはまれにはいとさまんゝの心を一首にこめていへりことにいひかけなどにはかゝるたぐひかぞふべからずそれよしとはあらねどさる歌をとく時はその意にしたがひてとくべき事もとよりなるをさる歌にむかひても云かけなどをしひて除きてとんとするは皆私事也。」いひかけの詞又いくへも心こむる事はわろきながらいかゞはせんしかるによりて古歌をも又私してときあやまるぞかしことに此記者の歌多くはかくさまにいひて興にそなふるのみなるをやこれをしも業平のと思ふにや。
 (新)さればよとおもひてしばしこりさせんの心にてかへしにかか
 る歌をばよみてやりたる也。一首の意ははじめの如くあひ見ては
 又よしなき事にうらみられて申たえぬべしこたびはあひは見すし
 てたがひにおもふ心ばかりをかはしてありなんしかすればうらみ
 ちらるゝ事なきてたとへば申島ある河水の如く一たびはわかれしか
 どもかく心のひとつにあひていひかはす事行末ながく絶じとぞ思
 ふ、うらみられしにこりぬればあひ見る事はいなといひやりたる
 也。かくつなひくさまにいひやるは戀のならひにぞありける。△
 あひは見て塗本にしたがふ。あひみてはとある本はわろし、さて
 は心ひとつと云にかなはず。
 ○とはいひけれどその夜いきてぬにけり。いにしへゆくさきの事

どもなどいひて。【舊註】(愚)男のやうによみたれども女はその夜はかへいにたる也。古行くさきの事ともいひて、此よりは又一
 段也。上の段にはかゝるまじき也。(直)歌には行末を懸て契れ共
 えも念せずして、やがて其夜いきけり。いにけりはいきける也。
 古行くさきのこといひて、後成思寺一條禪閣は是より一段に
 きり給へり。定家卿の自筆の本にもこゝをあけてけり。されど
 もこゝはよみつけてみるべきにや。かはりによりて愚見抄より
 も一段すくなし。【新註】(勢)水のながれて絶じとぞ思ふとは末を
 かけたる詞なれば末をかけたはいひやれどやがて其夜いきけり。
 (古)男のさる歌を見て女その夜いきて共寝を且こしつたの事を
 いひ此行すゑの契りをもする也。さて古本には右の如く有てこと
 わり明らかし、今本は此所いと文字のそこなひたれば何の事とも
 聞えぬをそれにつきて解るは云にも足す古書は本文を數の本の古
 きにより理りに從ひて定むべきにこそ。頭註。今本にとはいひけ
 れどいきてぬにけりと有るは字のあやまれる物也又いにしへ行
 きと有もわろしいにしへとは今といひこしかたといひては行
 きといふを定まれる詞なること古本に古來の二字を書しを後人の
 よみあやまれるなるべし。(新)こりさせんとてあひ見ることはい
 など一たびはいひけれどふかくうらむるゆゑありてたえたる中に
 あらねば男もあひまほしくおもふにたへかれてあひだもおさず
 その夜いきてぬにける也。はじめにはかなくて絶にける中といへ
 るを此わたりまでへもすべてかけて見るべし。いにしへゆくさき
 の事とはかたみに思ひたがへのうらみに申たえし事のくやしさを
 いひ此のちはしつせじといふやうの事どもなるべし。めづらしく
 あふ夜にかくいふべき事どもおほければ。げに千夜をひと夜にと

も言葉のこりてとも思ふべきこと也かし。さて古意にいひければ
 とある本によりて女のいきてれたる也といはれたるはいみじきひ
 かこと也。△いきてぬにけり。眞本にしたがふ。
 ○秋の夜の千夜を一夜に准らへて八千夜しぬばやあく時のあらん
 【舊註】(愚)すぎにしかた又行さきの事をちぎりて、男のよめる歌
 也。秋の夜の千夜を一よにふしそれを又八千夜になしてふたり
 ばやその時やあく事のあらんしらすとよめり。千よは千世の心
 にはあらず。(直)秋の夜の千夜を一夜になしてそれを八千夜にた
 ともあくべからずと深切にいはんため也。【新註】(勢)六帖にははての
 しひ柴の葉がへはすとも君は忘れじ。【新註】(勢)六帖にははての
 旬戀はさめなんとあり。やちよしねばやあく時のあらんは八千夜
 ねたらばやなり。しは助語なり。なすらへてとは秋の夜の千夜の
 長きを一夜の長きになすらへてなり。ねばやはねがふ心にあ
 らずをらばやをらん顔なり、只人にあくことあるまじきよしを
 きはめてよめるなり。あく時のあらんは落着はあく時あるまじき
 なり。飽にあくるをかねたり。古今集忠峯「くるゝかとみれば明
 めみ夏の夜をあかずとや鳴山ほととぎす。これもあかねにあげぬ
 をかねたり。伊勢集批把左大臣歌「逢事のあけぬながら明ぬれ
 ば我こそかへれ心やはゆく。萬葉集「此よらの早く明ればすべを
 なみ秋の百夜をねがひつるかも。六帖に「秋の夜の千夜を一よに
 なすらへて八千夜しぬばや戀はさめなん。(古)こは古歌の有りし
 をとりて少かへて用ぬたるものなり。(此歌古今六帖に入て終の)さて
 女のよめる心也、右の詞によるに女のゆきて寝たるなれば其明な
 るにて知べし、さるを右の詞の誤れるを強てときなす人は男の
 歌といへるはわろし、且此歌もとは萬葉に此夜らの早く明なばす

べをなみ秋の百夜をねがひつるかもてふより出しならん△なすら
 へは准比等の字の意にてたぐへよする也。諷の字の意にあらず、
 八千夜しのしは助辭也。秋の夜の千夜をたゞ一夜になして其一夜
 を八千夜しぬるともあかじと也。(新)なすらへてはかりになして
 と云意なり。まことには千夜を一よになさるゝものにはあらざれ
 ば也、かりになしてと云意なるゆゑに返歌に千夜を一よになせり
 ともといへり。さてその長き一夜を八千夜ればあく時のあらんか
 と云意也。しはやすめ詞。ねばやのやはかにかへてあらんの下に
 おきて見るべし。やのてにをはのひとつの格也。臆断にはあく時
 のあらんは落着はあく時あるまじき也。飽に明るをかねたりとい
 ひ古意にはたゞあかじと云意也として女のうたなりといはれたる
 などみなわろし。(按)この歌は六帖に伊勢の歌とて終の句「あく
 時の有らむ」を「戀はさめなむ」に作れり。さればもと伊勢が歌集
 にありしによりて後に作りなせるか。この歌を本として伊勢がそ
 の歌集につくり入れしものと見えす。
 ○返し。秋の夜の千夜を一夜になせりともとは寝りて鳥や啼き
 なん。【舊註】(愚)女の返事にたとひ千夜を一夜になせりとも猶む
 つこととはつきせずして明なんすといへるなり。【新註】(按)この
 歌讀古今戀三讀人しらす。詞書に「業平朝臣八千夜し寝ばやとい
 ひける返事に」とあり。この詞書によりて見るにその集なるはこ
 の物語よりとれるものなるべし。
 ○いにしへよりもあはれはてなゝ過ひける。【新註】(勢)日本紀萬
 葉集等に何れをおもしろしとあはれともかなしとも讀めり、言
 葉殘りてなどいへるをめでけるなるべし。(古)此詞古本にはなき
 が落たるなるべし△あはれとは日本紀萬葉等に。拾をあはれとも

うましともよみたり、いにしへ此語は嗚呼となげく聲よりいへば
喜ぶにも悲しむにも云こゝは共にうつくしむ言也。(新)一たび中
たえたるに女のこりて心うつくしうすればなるべし、こゝのあは
れは男の女をめぐる意なり。(按)此段の構成、歌を本として巧み
成せる跡しるく、此書の歌物語たるべき本色を見つべき一例なり。
而も其歌どもいづれも繁平以後のもの見えれば、この段の如
き、(古意の説の如く)此書を村上の御時頃の作物と見るにふさは
しかり。

つゝゐづゝ

○むかしゐるなかわたらひしける人の子
ども井のほとと井のもとにいいで遊びけるをおお
となになりおにければ、男も女もたがひに
はぢかはしてありけれど、男はこの女を
こそえめと思ひ、女もこの男をこそとお
もひつゝ、親のあはあはするをも、さかでな



むありける。さてこの隣の男のもと
より、かくなむ

筒井筒の筒にかけくしまろがたけ

おひにけらしなあひ見さるまに

女かへし、

くらべこしく振りわけ髪も肩過

ぎぬく君ならずして誰かあぐべき

なごいひくいて、つひにほいのごとく

あひにけり。さて年頃ふるほどに女の親

なくなりてたよりなくなるまゝに、も

ろともにいふかひなくてあらむやは

とて、かうちの國高安の郡に、いきか

よふ所出来にけり。さり

けれど、このもとの女あ

しと思へるけしきもなく

くるれば出したてや

りければ、男こと心あり

て、かゝるにやあらむと、

思ひうたがひてせむざ

いの中にかくれるて、かの

河内へいぬるがほにて

見れば、この女、いとよう

けさうして、うちながめ

風吹けば沖つしら浪たつた山くよは

にや君がひとりこゆらむ

とよみけるをきよて、限りなく悲しと

思ひて、河内へも、をさく、かよはず

なりにけり。さて、まれく、かの高安

の郡にいきて見れば、はじめこそ、

心にくくもつくりけれ。今はうちと

けて、髪をかしらにまきあげて、面なが

やかなる女の、手づからいひがひをと

りて、けこのうつは物にもりけるを見

て、心うがりて、いかずなりにけり。さ

りければかの女、大和のかたを見やり

君があたり見つゝををらむく伊駒

山く雲なくかくしそ、雨はふるとも

といひて見出すに、からうじて、や

まと人、來むといへり。よるこびて待

つに、たびく過ぎぬれば

君こむといひし夜毎に過ぎぬれば

頼まぬ物の戀つゝぞふる。

といひくけれど男くすまざるにけり。

○昔るなかわたらひしける人の子ども。【舊註】直常には田舎に居すして時々田舎へ下るを云、奈良京などにや、人の子ども、業平幼少の時也、紀有常が女若年なりし頃也。【新註】此段作物語也、業平は阿保親王男なかわたらひしける人の子と書くべきやうなし。殊にさて年頃ふる程にといふより下いよ、業平の事にあらずと見えたり、そこにいふべし。なかわたらひは田舎に往來して産業をなす也、日本紀に活の字をわたらひとよめり。大和物

即ち年頃わたらひなどもいとわろくなりて云々。源氏夕顔にことしこそなりはひもたのむ所なく田舎がよひもおもひかけぬはいと心ばそけれ云云。朝恒玉くしげふたみの浦に住あまのわたらひ草はみるめなりけり。【古】こは京の片邊りに住もの、田舎へ物もてゆきつゝ世活するがその子等の我門邊なる筒井のもとにあそべり所のさまも思ひやるべし。△ぬなかわたらひてふ事は日本紀に活をわたらひとよみ此古本もしかり、朝恒集に「玉くしげふたみの浦にすむ螢のわたらひ草はみるめなりけり大和物語にことしこそわたらひなどもいとわろくて」源氏夕顔に「ことしこそなりはひにもたのむ所少くぬ中のよひもおもひかければいと心ばそけれど五條わたりのいやしげなるものさまなどおもひやるべし、今はかくまでいやしげなるものとはあられど事のさまは似たり。【頭註】或説に此男を業平女を有常のむすめ也と云はいかぞや官位ある人の任又は京外の別荘へ行くをかくかけるなど云も文をよそにせし説也、わたらひとは世をふる生活の事なるをさる官人のぬ中わたらひと云事やはある、こはさまくの事を書きつらねていひまがらしたる物がたりのみ。○ぬなかと田居之所てふ言也田居とは稻を刈干してしばし收めなどする所に田夫のかりに住む所を云よりぬなかと云也。○此文の男女さまで賃しきさまならぬぬなかわたらひてふ事は他にわたらぬをおもふべし。【新】ぬなかわたらひは臆断に田舎に往來して産業をなす也日本紀に活の字をわたらひとよめりといへるがごとくぬなかにかよひてものなどうりかひするを家業にしたる也。夕顔巻にことしこそなりはひにもたのむ所なくぬなかのかよひも思ひかければいと心ばそけれといへるを考へあはすべし。ぬなかにかよふはものうり

かひする事とぞきこゆる。さて親のぬなかわたらひする事をこもにかけるは女のおやなくなりてと云所にかけてゆある事也、その所にいふなまちて見るべし、子どもとは童男童女ふたりをいふなり。【よ】ぬなかわたらひしける人の子ども註にこは京の片邊りに住もの、物もてぬ中へかよひつゝ世わたらひすといへりこは、大和人の河内へかよふ物がたりならず又此おなじ物がたりをば大和物語には昔大和の國かづら木の郡にすむかと云女ありけりとも見えたりざるを京のかたほとりに住とはぬなかわたらひてふ詞にふといざなはれしものとおほゆ大和も其頃はお申なれど又そこより他國へゆくをこには云なるべしさてぬなかと田居之所てふ其田を上略していへるなりといへり。此語は萬葉集に「なにはの宮を造あらためられし時」昔こそ難波ぬなかといはれけり」と見えたり古言なる事しるし又田居は同集に「久仁の都をことよける歌」大君は神にしませば赤駒のはらばふ田居も都となしぬ」おもふにぬなかは田居之所の義ならば田は晴きがたきをそれをばぶきて居なかとはいはん事古言とおぼえず。田舎と書は義字にてぬなかと云義は他にあるべし學者よく考べし。○井のもとにいで、あそひけるをおとねになりければ、男も女もたがひにはぢかはして有けれど、男はこの女をこそ見めとおもひ、女もこの男をこそ思ひつゝ、おやのあはするをも思かてぬありける。【新註】勢井のもとに出るとは男も女もわらはべのほどははづることもなければもるとも門にある井のもとに出てもあそふなり、やう／＼おとなしくなりぬればなともはづる心出來女はいよ／＼はぢてふかくこもりて有ければわらべの時なにとなくともなひあそびし時ふりむつまじくおもひてともにあひす

まんとおもふ心有ておやのこと人にあはせんとすれども男も女も
うけひかぬ也。たがひに夫婦とならんと思ふ故にはぢかはず也。
見おとせられしと心をつかふなり、よくこゝろをつげざればあ
りければといひて男は此女をこそえめとおもふといふあはひのつ
ゞき心得がたきなり。有ければ、在の字の心をかければなり。日
本紀第二云門前有二井、井上有二湯津杜樹、古今集に「我門の板
井の清水里とほみ人しくまればみくさ生にけり。」(古)こは父は
ぬなかへ常にゆけば母の事なども云べけれどさのみはあらず惣
てかゝる事は母のとりはかる物なれば也。後の人は古書に母と書
たるもおやとよめるはわるし、おやとよむべき所は親また父母と
書たり此父母のなすべき所には必ず母とこそ書たれ、さらば母と
よむべし。(新)もろともになさなければ門にある井のもとに出
あそぶ也。井のもとしもしもふは日本紀神代卷には井のあたり
に湯津杜樹ありといふ事見え尤恭天皇の巻には食干櫛井上と
いひ續日本紀の童話に櫻井爾白壁の豆久也といへる櫻井を催馬樂
には櫻の葉井といひ、から歌にも昨夜風開露井桃又金井梧桐秋
葉黄といへるなどをあはせ思ふに井のほとりにはぢならず木陰あ
ればそのかげにたちよりにてあそぶたりのよければなるべし、あ
そびけるをを俗語にがといふ意也、はぢかはしてありけれど
とおとなになりてはいてあそぶ事をたがひにはぢてあひみぬ
やうになりけれどと云意也。臆断の説はひびごと也。男は此女を
云云はあひ見れどもをさなき時にあそびなれて思ひかはしたる心
のかはらぬをいへり。親のあはすることとは男にあはせんと
いふ事にて女のうへ也。臆断に男も女もうけひかぬ也といへるは
たがへり。△ありけれど。塗真二本にしたがふ。えめと思ひ女も

此男をこそ。眞本にしたがふ。あはすること。塗本による(按)
「男も女も」の下「たがひに」知頭抄に據れり。
○さてこの隣の男のもとより、かくなん。つゝいゝ井戸はかけ
しまろがたけ生にけらしなあひみざるまに。【舊註】(愚)此男を人
なの隣をならべてすみたる也。詞に井のもとにてあそぶとあれば
男のたけがおとなになりて、井げたのたかさにすぎたり、とよめ
り。つゝ井づゝはつゝ井の井づゝなり、それをかきわけていへり、
又つゝ井づゝの井づゝとかけ一本もあり。まるは昔は我身を稱し
て、丸といへり、やがて名のりにもなるなどこのもじを用た
り。いまの世までも童などの名のりにはいふにや。妹はたゞ女を
いふなり。かならずしも妻にかざるべからず。又此歌にとりては
かさなき時よりいひなづけのやうにあればやがて妻の心にもと
いへるにや、兩儀共に相違なし。(直)業平也有常が家ぬ近し。
御吉野のよしの山などいふが如し只つゝ井の井づゝとはいはむ
ため也。まるがたけとはたがひの身のたけいかにほになりたらむ時
ちぎりをかはすべしなどいへるなるべし年はいくつにもなり妹み
ざるまは有常が女也、つゝ井づゝ井づゝのつらとけぬまにはや
くもつる冬の日の影。(關)此歌惟清抄には、遣通院殿御講尺文
字讀ばかりにて義を付られすと有り、御説には幹井づゝ石などを
もつまぬ井也、古説さまざまあれ共唯井筒也。つゝ井づゝと云は
重詞也、つゝ井づゝのつゝ休め字也。定家つゝ井づゝの井づゝのたるひ
解ぬまに早くもくるも冬の空かな土御門内府つゝ井づゝの井づゝ
の上に水越てむすぶも浅し五月雨の頃「愚見抄には前の詞に井の
本にあそぶとあれば男のたけがおとなに成て井げたの高さにすぎ
たるとよめり。まるは今の世まで童などの名乘に何丸など書、此文

字を用たり。妹はたゞ世の事を云也。男女たがひにおもひかはし
て有ければ我物のやうに領して妹みざるまにとよめり。【新註】
(勢)つゝいゝのは筒井のにて下のつゝはやすめ字也。筒井は井欄な
どもうるはしくせずまるにて筒のこととなるをいふか、兼盛集、我
戀は筒井の濱と成ならん心をくみて人はしるべく。此筒井の濱は
いづくはしらす名所ながら名は今の筒井なり、三井寺にも筒井と
いふ所あり、淨妙といへる法師のすめる所なり筒井の井づゝはみ
よしのよしの山といふこととくされことばにてそのぬづゝに
かけてくらべしわがたけといふか、過にけらしなみみざるまに
とは恥かして有けるほどに井筒よりや、高く成ぬらんと今は井
のもとにも出れば推量していふなり。あひかたらふべき時に成ぬ
といふ心にてよみておくるなり。妹とは領したる心にいへり。土
御門大臣「つゝ井づゝの井筒のたるひとけぬまにはやくも暮る冬の
空かな。(古)童なりし時共に其井筒の高に懸くらべし我身のたけ
も今は生なりてよきほどの男に成にけらしな久しく妹を見ずて有
つる間といひて妹に井も兼たるなるべし。(井と妹とは假名異な
ひも傳ははは)此歌は男のなれば身の長だちをいひ、かへしは女
なれば髪をもて云ふもおのゝ老すけたるほどの情也。△つゝ井
は一つの井の形也。井筒はそれが上に物を落入せじの料に即其井
の形にかまふる故に井筒と云されば筒井の井筒を略して筒井筒と
はいへり。さてこの句の井筒は二たび云おとす詞也。然るを後
世に筒井つゝいゝと唱ふるは誤也。此下のつゝを助辭とおもへる
にや。いにしへ物の數に五百箇之御統など云つゝの下には之ともあ
れど體の語にて天津國津津津など云類は津よりたゞに次の語に云

つゝいゝ侍り。況や此筒井筒は井津之といひては語のをさまる所な
きをや。是は古本に筒井津々と書たるを之にあやまりたる本を
見て其語のことわりも正さてつゝ井づゝのと書しものとみゆ。△か
けしは彼と是と物二つをはかりくらぶる語也或人の髪とことたへに
いへばこゝも髪と有しを今は字のあやまれる也といひしはかけて
ふ語にはしたしきやうなれど童とても男に髪は長きみじかきとい
へる物なし、男の情は長だちこそあれ。今本に過にけらしなと
有り古本のおひにけらしなをとり。頭註。まるとは古人のみづか
から卑下せる言也、才人をかど有る人と云にむかへて才なくおろ
かなる稱也。△けらしなとたがひたるは自は見しらし物なれば
さもいふべきが中に是は井づゝの水がみも見ざる間のよしをい
ふと見えたり仍て假字たがひたれど妹と井をかねつらんかとい
へり此文たゞ興にそなへんとかまへたればさるたがひもかつん
は侍る也其うへすてに天曆の末よりは古學の漸おとろへて假字も
かつんたがひの出こし也。和名抄にはたがひなきを拾遺集には
たがひあればそのあひだを思ふべし△井に名多し筒井は筒の如く
に丸にほりたるを云板井は板もて四方にかまへたるをいへり今俗
の井づゝと云は是が上の形也石井は岩間よりわきいづる水にて即
山の井也其外さまざま侍り。△舟津、川津、難波津等の津はさる所
の名也こもりつはこもりたる水の上略也かきまんに分てるを
心をやりて事のことわりを定めていふべし。(新)つゝいゝ筒井づゝ
にとはことさらに同じ事をくりかへしいへるものにて月夜よしよ
いし、忘るなよなよ、あづまのまやと同例なり、月夜よし月よ
いし、わするなよわするなよ、あづま屋のあづま屋のといふべき
をかへしたるたびのはすじめをはげり。こゝもつゝいゝつゝいゝ

男はおほきみなりけるといへるこれは近く似よれるが。(新)家の
わざによりては親のなくなりてもいたくおとろへぬもある事なれ
ど此女の親はぬかのかよひをわたらひとしてありしかばなくな
りてはむすめのかかにもすべきやうなくいとたよりなきよ
し也。△女の親なくなりて塗本にしたがふ。

○もろともは、いふかひなくてあらんやとはとて、かちちの國高安
の羽根いさかよふ所いきはけり。【舊註】(直)互にいふかひなき
體にてあらんよりもるともよきかたにゆかん也、やまとも
のがたりには「あしからじよからんとてこそわかれければなにか難波
の浦はすみき」とよめるこゝるなり。(關)たがひにいふかひな
き體にてあらんよりもるともよきかたにゆかん也。大和物
語「あしからじよからんとてぞ別れ何ぞ難波の浦はすみきな
どよめるも同心也。零落の故に、別のところへゆくも心得てはあ
しき段になる也。有常が所を業平の憐愍の心なべるし。【新註】
(勢)男も女もかやうにたづきなくてあらんや、おの／＼しがるべ
き方につきなんと男のかたよりいひ出て高安郡のある富家のむす
めにかよふなり。古今集には「むかし大和なりける人のむすめに
ある人住たりけるに此女おやはなく家もわろくなり行くあひだ
此男かちちの國に人をあひしりてかよひつゝかれやうにのみなり
ゆきけり。此古今の註此男のまことの心なり。もるともにいふか
ひなくてあらんやといふはことばをつくりてつき／＼しくいひ
なすなり、いづれにても業平の心にはあらす。(古)いにしへのな
らひにて女の家に男は聖すかひけるに女の父母のなくなりてまづ
しくなりぬればかくてのみあらんはたが爲も人わろきぞとて男は
高安の女にもすまんとてかよふなるべし。源氏の筆木にいへるこ

とく心はこゝろとして事たらずなりぬれば何事につけてもいふが
ひなき也。△大和物語にやまとの國かづらきの都にすむ男女あり
けり。この女かほかちいとよら也。年頃思ひかはして住むに
この女いとわろくなりければ思ひわづらひて限りなく思ひなが
ら女をまうけてけり此いまの女は富たる女になん有ける云々。是
今にまたく同じ此いとわろくなりけるは賢しくなりしを云な
り。頭註、父はぬなかわたらひして物を得母の家の内とりあつ
かふて子どもをやしなふなるを父母ともになくなりてたづきなき也
其父母のなきを知らせんとてこゝに古本に親の字を書つ。(新)も
るともといへるを思ふに男の親はなきになくなりてわかれれば
ぬなかわたらひもせず女の家に住ておたりしに又女のおやなく
なりてたよりなくなるまゝに女はせんかたもなし、男ももるとも
にいふかひなくならぬにわざもせずしてあらんやは、おやのせしやう
にぬなかわたらひせんとて河内國にもいきけるにつけてその國の
高安の郡の女を見そめていきかよふやうになれるよし也。言すく
なに心をこめてかけるいにしへの文の妙なる所なり、はじめにぬ
なかわたらひしける人の子どもと童男童女にわたりていひおける
はこゝへてらし合てみてかく心えよとける文なるをむかしより
見しれる人なくて古註どもはさらにもいはず、臆断、古意などに
もあらぬさまにとかれたり。まづもるともに云々といへるは賢し
きかといひておの／＼しがるべき方につきなんと云意也といづれ
の註にもとけるいみじきかごと也。その意ならばもるともに人
わろくあらんやはとくべき文也。いふかひなくと云詞はなすべ
き家のわざもえせざるにこそかひなひたれ。又舊説のおもむきにて
は男のこと女にかよふを女のもとよりあしとおもふべきすぢにあ

らず、さるけしきなしとて何かうたがはんめのこと心ありとて
しかせよといひたる事ならはせんさいの中にかくれて見つけて何
にかすらん、みなことわりきこえぬ事になるや。猶いはまづ
しきかといひてこと女にかよはんとならは近きわたりにありなん
をかふちの國高安の郡としもいへるはさにはあらで上にいへる如
くぬなかわたらひにつきてふと出きたる事なるよしをしらせたる
文也。さて京の人ならぬなかわたらひといへる事を師もうたが
ひおかれたれどやまとは世々久しく都ありし所なれば今の京とな
りてもなほ都になすらへて他國をぬかといへるなり。續日本
紀に班給難波京宅地とあるは天平六年の事にて奈良に都をうつ
されて二十五年の後なれば難波京といへるとおなじ心はへ
也。

れどもつらげなるけしきも見えてかふちへいくごとをこの心
のごとくにしていだしやりければあやしとおもひてもしなきま
にこと心もや有とうたがひて月のおもしろかりける夜かふちへい
くまねにてせんさいの中にかくれてみければ夜ふくるまでこと
かきならしつゝ打歌きて此歌かよみてねにければこれを聞てそれ
よりまた外へもまからず成にけりとなんいひ傳へたり。(古)本の
めれたみげもなく装束など調て暮ごに男をいだしたて、や
る也。されど心のうち物あはれなれば長目してをれり。(今本に出しや
み有は少い)あまりに心うるはしく物すれば中々に男のうたがへり
假相は女のかたちつくるをいふ。萬葉に君なくば何身がさらん
柳葉なる黄楊の小ぐしもとらんと思はじ。(新)さりければ、さ
ありければ也。あしと思へたけしきもなくてとは言にいでてう
らみいはぬはもとよりにてと云意をものてにはにこめたり。出
したつるは、よき衣をさせかへなどしていだしやる也。男云云は
心うつくし女なればふんじてまが／＼しくいはぬはさもあるべ
き事なれどもあしと思へるけしきも見えざるはあやしめてもしこ
と男にわくる心のありてことさらにうつくしうして出しやらんと
するにやとうたがへるなり。△いだしたて、塗本にしたがふ。
いぬるはゆく事なり。けきうは假粧にてかほつくりする事也。夫
の見ぬ所にもうちとけかたうちうるはしくたゞしくしてをるは
いとよき女にぞ有ける。さてうちながむるは物おもふさまな
り。△かの塗本真本によりてくはふ。(按)せんさい、伊呂波字類
抄「前」前「下」下「集」上「禁」秘「御」抄「上」一草木、前「前」、清涼殿
東庭並同西庭下「前」前「前」等也、延喜元年、左右衛門「前」、延喜「前」
菊於東庭并仁壽殿東庭、長興宿禰記「文明八年九月十一日、今日准

府○足利御参内、南庭更傍被_レ作_レ前裁、准后御参内、庭被_レ被_レ御
付、杉原伊賀守賢盛、隅山備中守貞隆祇候奉行、「小右記」寛弘九
年○長和九月六日辛未、今日雲上人々、向_レ嵯峨野、堀_レ前裁可
元、○皇太后宮之由○下「枕草子七」九月はかり、夜一ふりあか
したる雨のけさはやみて、あさ日の花やかにさしたるに、せんざ
いの菊の露、こぼるばかりぬれかりたるもいとおかし。
○風ふけば沖つしら渡たつた山よはにや君がひとりこゆらん（舊
注）此歌は萬葉集第一長田王を伊勢の齋宮へつかはす時山邊
の御井がよめる也。又古今集第十八卷にもあり、大和物語にも此
事みえたり。但此物語と詞の増減ある也。しら渡とはぬす人をい
へば盗人のたつたる山を夜半にこえ行かむとせしむる也。今
し、顯昭などは申侍り。定家卿はたつた山といはんとて風ふけは
おきつ白浪といひつたり。たとへばしきしまのやまにはあら
らぬからとりなどいふ體の歌也。ぬす人を白浪といふ義にはあら
ずと申侍り。（直）白浪盗人の事也と云り。たつ田山に盗人の有を
云り。顯注密勸に注するに、龍田山といはんとておきつ白浪とつ
け波たつといはんと奥津白浪とつけ風吹けばとおける也と云
也。萬葉集に伊勢が山の御井にて「わだつみのおきつ白浪
龍田山いつかこえなん君があたりみん」と讀侍るも序うたなれば
盗人にあらじと定家卿かけり。此今案可_レ信仰と也。惣じて盗人
と云事莊子より起れり。後漢王莽がみだれより盜賊は赤眉といふ
もの、一門白浪と云所にて、山賊をなし綠林といふ所にて海賊を
なす也。是よりしていひならはせる事也。只此歌をば盗人の事と
みすして枕詞と見たるが面白し。返々定家卿左様にみるを感ぜら
れたり。歌の心は風浪はげしき時に龍田山をこえて艱難をへて君

がひとり行く事といふ心也。業平をかなしむ歌也。（嗣）古今に
此歌のことは書々歌の心に風浪はげしき時に立田山を越えて艱
難をへて君が一人行ふといふ心也。夜わと讀ます夜はと讀む可
しと也。常に夜はといふはたゞ夜の事也。爰は夜はと牛の字也。
毛詩に風起夜半寢汝勿貽庶生。此時は夜半也。つとに起き夜いぬ
るは禮のせいなりとある同事也。此歌清輔典義抄云貫之は歌の本
といふと云り。（新註）古今雜下よみ人しらす。六帖第一帖雜
風に出作者を云かや山のはなのこ第二帖山歌耳出亦云かや山のは
なの子、顯昭古今註に萬葉第一の歌を引て云わだの底おきつ白
波立田山いつかこえなん君があたりみん。此歌伊勢國山邊御井に
てよめる歌なり。おきつしら渡は立田山といはんとめなり。今
歌のつゞけやうもこれにおなじと大意これなり、これ顯昭の今案
なり、定家卿これを感ぜらる。ただ上二句は序にて下の句はけは
しき高山をこえて夜半にや君がひとりこゆらんと我身をおもは
つらかるべき人の上をへりて思ひやれるほど真潔なる心など共
に比類なし。さればこれ貫之も歌の本といはれけり。今此歌を
よむに歌のすがたはそのすがたにて歌の心はその心とぞ見ゆる。
此一首にて男の心をあらためけん名譽の事なり。龍田山のけわし
き事は日本記第三神武紀云皇師勅兵歩趣龍田、而其路狹嶮人不
得並行乃還更欲東歸龍田山而入中洲。是にて難所なる事を
知るべし。さてむかしより此歌を風ふけばとは沖つ白波立田山と
つゞけん爲にて白波はぬす人なり、ぬす人の立田山といふ心にて
けはしくてぬす人さへある山をよはにやひとりこゆらんとよめり
と心得きたれり。拾遺集藤原公の家かみ系にたひ人のぬす人に
あひたるかたかける所藤原頼朝ぬす人の立田の山に入にけりお

なじかさしの名にやけがれん。新勅撰釋教不倫盜戒、法眼宗圓、
「こえしたと同じかさしの名もつらし立田の山の夜半の白波」定家
卿顯昭の今案をば感ぜられけれども此歌常の說によりて新勅撰に
載られたり。ぬす人を白浪といふゆゑは後書漢書云。靈帝中平元
年張角反皇甫嵩討之角餘賊在西河白波谷爲盜時俗號白波賊
萬葉ふたりゆけど行過がたき秋山をいかにてか君がひとりこゆら
ん。「玉かつましまくま山の夕暮にひとりか君が山路こゆらん」
（古）こは萬葉に海底おきつ白波立田山いつか越なん妹があたり見
ん又二人ゆけど行過がたき秋山をいかにてか君がひとりこゆらん、
又玉がつましまくま山の夕ぐれにひとりか君が山路こゆるらん、之
らをもて古今集には風吹ば云々と少しかへて讀たるを又此文にと
りて編書を作りて一つの物語とせし也。さて萬葉などにては本の
一二句は只序にて末もかくれたる事なし、此文にとりては白波に
遊人の事もふくめてさる深く嵯峨しき山のぬす人さへあらん所の
夜るのかよひ路を女心に悲しめるよしにせざるべし。いかに
藤原爲頼白波のたつ田の山に入にけりおなじかさしの名にやけが
れんとよみたれば此山にはぬす人のなると云につきて彼白波をも
さる意也と云説もはやくより有しと見えたり。かくさまんに事
を含むるが此記者の常に侍り。立田山は神武紀に皇師勅兵歩
赴龍田而其道狹嶮人不得並行乃還更欲東歸龍田山而入中洲云云、
また萬葉に白雲の立田の山の瀧の上のをぐらの嶺と
云云此外大和より河内へこゆる所の山路なる事萬葉にたたく見
えて今の俗のくさかり峠といふは即むかし龍田山也。さる所を
夜るしもこえかん草おもひやるべし（後世の俗は法眼宗の邊を立田山と
おぼえていしへの地理を考し）

せざる故にあやまれる多）△夜はのはは夜間を音便にいふ畫問てふに
し類こまかに萬葉にみるす。（此はとわの如くとふるは中洲の語なるに）は
むかふ語なるにて知べし。（よりに思ふに本は夜半と通りしなるべし）は
の瀧とよの清とかよふ也。後世の俗は夜半と書て夜のなげの事
とおもへり。半をばにもちうるは字音にて假字のみ古言に字音は
なし。顯註。此歌古今六帖にてはかや山の花の子が歌とて二所にあ
げたり、歌傳にはしこひしなるべし。○古今集にはかく古歌を少
なほしとなへたる歌をとられしが多しこは一時萬葉の歌を犯した
る人多かりけん業平顯昭などは古歌を犯せるわざは侍らす然るに
此風ふけばの歌を歌の本也と貫之の教へたるよし清輔のしるした
るといふはいかにぞや此女の心はいともよろしけれどさる詞書は
此記者の書たるにて古今集にては女の物れたみせぬとも何ともな
し其上の萬葉を犯せし歌にても侍るをいかにて貫之の頃にさる事
いふべきかは此事は此文によりて好事の云しなるべし。後漢書靈
帝中平元年張角反皇甫嵩討之角餘賊在西河白波谷爲盜時俗號
白波谷云々中頃の人はによりてぬす人を白波ともよめりさて白
波のたつ田山てふは萬葉古今にてはたゞいひかけのみ也さるにこ
の物がたりにては盗人をそへたりと云説はよし又一説はさる事は
定家のもちぬられすてふはこれ古今集にての事也此物語にては
さもなかりけん事は新勅撰集に倫盜戒をこえしたゞおなじかさ
しの名もつらし立田山の夜はのしら波てふ歌をとられしにて思ふべ
し。あづま丸云拾遺集今本にぬす人の立田の山と有は本は白波の
たつたと書てしらなみのとよみて即ぬす人の事とせしをたゞにぬ
す人とよみしが又盗人とかきてもしらなみとよむべきをたゞにし
かよみし類この二つのあひだならんといへり。（一）龍田山萬葉に
白雲の龍田の山の瀧の上のをぐらの嶺とよめるは、今のくさかり

嶺と云ぞいにしへの立田山の小倉の嶺なると云考へは前に高津のあざりのあやまれしなあづま人のふとしたがはれしはさる事なり、くらがり嶺といふは河内國の河内郡に屬り龍田は大和の平群郡に在て今は龍野越とも又龜瀨越ともいへる坂路なり。こえての西は河内の大縣郡なり。山脈はつゞきたれど其あひだに高安郡は在て使黄(井のへ山なり)十三嶋川など云山路隔たれり。たつた山東へこゆれば龍野の里にて山は大和川の北の岸にたてり。小倉の峯は此山の一名なり。大和志に云小倉峯有二、一在立野村西、一在小倉村上方、この立野村の西と云ぞいにしへの龍田山のをがらの峯なるべし。こゝを瀧の上といふは山の南に滑りて流るゝるを今はやまと川とよぶが即いにしへの龍田川也。大和志に龍田川自廣瀨郡流經野野至立野村西龜瀨入于河州とせるせり。この龜瀨といふあたり岩むらにむせぶ瀧つ瀬なればこゝを瀧のうへのをがらの峯とはよめり。龍田の社の風祭の祝詞に我宮は朝日のりむかふ所夕日の日ぐる所の立田のたつ野に我宮はさだめて見えたり。山の東のふもとに天津社國津社龍田彦たつた姫の社あり。今の龍田の里なるはいにしへの行の社なりと並河の翁もしるされたり。さて高安の郡にかよはんは龍田山をこえて北のかた程いらず後の歌に高やすの里などもよめり。生駒山は其わたりより少し北なれどこの竝たてる中にては秀て高き山なれば大和の方を望まんまづ打ながめらるゝなり。かつ歌は萬葉のを摘とりて作れはばいさゝかゆきあはぬ所有も物かたりのさま也。

(新)一二の句はたつといはんための序にて一首の意は龍田山のやまこえの道はさかしくてひるゆくだにくるしときくに山のこなたにて目くれてよはにや君がひとりこゆらんさぞくるしくもおそろ

しくも思ひ給はんがいとほしきといへる也。女の情のあはれにすぐれたることどもいふもさら也。龍田山の道をさがしといふは神武紀に總龍田而其路狭峻人不得並行と見えれば也。(按)この歌は昔大和なりける人の女にある人すみ渡りける。この女親もなくなりて、家もわろくなりゆくあひだ此男河内の國に入を相しりて通ひつゝかれやうにのみなりゆきけり。さりけれどもつらげなるけしきも見えて河内へいく毎に男の心の如くにしつゝ出しやりければあやしと思ひてもしなきまにこと心もやあるとうたがひて月の面白かりける夜河内へいくまに前裁の中にかくれて見れば夜ふくるまで琴をかきならしつゝ打歌きてこの歌をよみて寝にければこれを聞きてそれより又ほかへいままからずなりけりとなむいひ傳へたるとあり(古今六帖にはかこ山の花の子が歌と)おもふにいと古き物語なりけむをばやくこの物語にはとり入れしなるべく、古今集の詞書はことばのさまこの物語よりもおくれで見ゆれば同じ傳へながら各個にとり入れしと見えたり。

○とよみけるをきいて限りなく悲しと思ひて河内へもをさく運はずなりけり。(舊註)(直)心にききまににつくろひしなり。(勢)その夜いかすなるなり。(古)實情あればかくつひになれるぞかしいにしへは歌を聲たてうたひし故に聞つけたりけん△をさく、の語古本にあるをよしとす、次の詞にまれくゆくとあれば也。さて此語は萬葉に因に本は長この意にて其事を専らにするを云をこゝにをさくゆかすといふ時は専らとはゆかぬ事となる也。轉じもちうる所にしたがつひていさゝか意はかはるを意得ずてあやまれる説も侍り。源氏物語の註にも此をさくを説きあやまれる也。

(新)歌よむをせんざいの中にてきけるは昔は歌をよみては聲あげてうたふ事もありけるゆゑ也。日本書紀にくちつうたといふ事をりて見えたるにもおもふべし。かぎりなく悲しと思ふは男もものあはれしれる也。をさくゆかすは俗語にあまりかよはずと云意也。△をさくゆかすは塗本にしたがふ。

○まれくかの高安の郡にいきてみれば、始こそ心にくもつくりけれ。(舊註)(愚)飯がひはひをもる也。けこは家子也。家中にめしつゝかふつは物にてづからりけるにや。さまでの事はあままじけりとも、たゞいやしきわざをするといへるにや。ただし昔は事をかざらすなほなる道をさきとすればさる事もしたりけん。(直)手づから取こと有べからず、ほどらひをばからふないふなどいへどもそれは優ならず、たゞそのまゝに見るべし。物語の講讀のやうなれどもさぞありつらん也。けこしもべ家來などにや。(新註)(勢)心にききやうに作りなしてみするなり。(古)心にくは内におもふ意のおぼつかなくつゝまれてみゆるをいふ故に古本に羹の字を用う。(新)心にくは俗語におくゆかしくと云意也。枕草子に、夏すのこに火ともしたるうちこそ心にくけれといへるをおもふべし、こゝはうはべをつくりて心のおくにながよき事のあるやうに見せたりし事也。△さて、塗本によりてくはへつ。

○今はちちとけて、髪をかしらにまきあげて、面ながやかなる女の手づからいひがをとりて、けこのちつは物にもりけるをみて、心うがりて、いかずなりにけり。(舊註)(直)伊駒山はたがき山也。能因が歌にも『わたのへの大江のきしにやどりして雲井に分ゆるいこま山かな』とよめり。君があたりの歌は萬葉の歌也。古歌を

わが心にあへば誅するつれの事也。あはれふかきさまにや。(剛)心は明也。伊駒は高山也。大和河内の境の山也。能因歌に『わたのへの大江の岸に宿りして雲井に見ゆる生駒山かな』(新註)(勢)和名集云説文云し所取飯也和名賀比。大和物語云さてかいまめばわれにはよくてみえしかどいとあやしきさまなるきぬをきておほぐしをつらかくしにさしかけてをりてづからいひもりたりけり。頭註。敬義云けこ或説家子(ケコ)にて従者(スサ)也又説笛子(ケコ)飯も器なり笛子にしたがふべし。(古)女の髪いにしへは寶髻などしてあげゆふ事もあれどこゝはそれとはいと異にてたたまき上つるは今もするいやしびたるさま也。△けこは或説に家の子にて家人奴婢の事といへるも理りなきにあらねど古本に飯子と書萬葉にも、家にあれば飯に盛る飯をとめれば飯籠の器てふ意也けり。子は櫛わりご椀子などの子に同じく小さきほどのうつはにそへいふ也。此男をもなり平と思ふ心のはなれかねて其かよふほどの女のかくいやしげにはあらじみづから飯と取とは併かい也などいふはいとわろき説也物語てふ物に宮びたる事のみかばさては何の興かあらん大和物語には此同じ事を我にはよくて見えしかどいとあやしきさまなるきぬを著て大ぐしをつらぐしにさしかけてをり手づからいひもりたりけり云々これをむかへて思ふべし。

(新)今はちちとけて髪をかしらにまきあげておもながやかなる女の。しむかしの女の髪のかまは日本書紀の天武天皇の巻に婦女垂髮于背。猶故と見えたるすべしとありにてぞありける。續日本紀に令天下婦女自非神部齊宮宮人及老嫗皆髻髮とあれどもすべしと有りする人もまじれる御さだめなればまきれもしてその世のならひのまゝにあらたまらざりけんかし、申昔の

物語ぶみに見えたるやうみなすべしとゞりにて髪あげするはたゞ大宮にてことあるをりのわざなりき、いにしへの髪あげはうるはしくあげゆひてぬやうしきさまこゝのかしらにまきあぐるはいやしむらいなるさまなり。似たる事のやうにていたくたがへり。さてすべしとゞりは今の世にいふすべからし也、たゞし昔のはひたひ髪とて左右に耳より前にたれたるもありけり。さていやしき女などはたちぬひまなくいそがはしきにたよりあしければ昔にたれたるをも類髪をもひとつにかしらにまきあげてかりにゆふことありき。こゝなるもさやうなり。顔にかゝれるひたひ髪をあぐれば顔のながく見ゆるものなればおもながやかなる女といへり。おちくば物語におちくばの君につかはるゝあこぎといふ女の御まへにまぬらんとてかしらかくいだしなどしてゐたりといひてさてまぬらうしるて髪だけに三尺ばかりあまりとあるを見れば人につかはるゝいやしき女にてもかみをかしらにまきあげてはしうの前へは出ざりしよしなり。△かみをかしらに云云塗本によりてくはへつ。和名抄に説文云、七所^レ以取飯也和名賀比とあればかひをとりにといふべきをその世にいひかひといひならへるまゝにかける也。けこは筒子にて飯もる器なり。

○さりければ、かの女大和のかたを見やりて「君があたり見つゝをらんいこま山雲なかくしそ雨はふるとも。」【新註】勢此歌は萬葉第十二にあり、見つゝもをらんとあり。定家卿これをとりに「いこま山いさむる峯にゆる雲のうきて思ひのはるゝよもなし。」雲なかくしそとなしたる意を得ていさむるとはいへり。(古)こは萬葉に君があたり見つゝも將居(下は今)てふ歌をもて心はいと切にしなし。さて右の二首は萬葉のと古今のとをとり用ひて作り且

其外は記者のよめる事明らかなるを萬葉平の實の事と思ふ人こそいふかしけれ。頭註。こゝには見つゝをを只一言をかへたり此中は助辭にて彼ぬれてをゆかんとてふに同じ。されど助ことばの中に舟はたせをなどいふにて見つゝよぬれてよなど云に近し。○雨はふるとも雲なかくしそといへるはいと切なる時の心にくをさなき哀れ也。(新)見つゝををはやすめ詞也。古今集の歌にぬれてをゆかんといへるにおなじ。一首の意はあきらかなり。(按)萬葉卷十二「君之當見年母將居伊弉山雲葉雨者難寄寄物陳思歌の中にあり、讀人をかゝげされば誰の作とも知りかたけれど、業平以前はやく人口に膾炙したりしものなるべく、またこゝの物語とても後につくりなせしものとも見えす、歌とともにやくいひつたへられしものにやあらむ。

○といひて見出すに、からちじて、やまと人、こんといへり。よろこびてまつは、たびくすきぬれば「君こんといひし夜ごとに過ぬればたのまぬものゝ戀つゝぞふる。」【舊註】(古)からちじて辛勞してと云へる心也。やまと人業平也。やまとにぬたる故也。歌の心明也。戀つゝぞふるとも有り。此儀よし。つゝといへるよりふるとおればすてられてこのかた程へたる心有り。(新)古今には戀つゝぞふると有り。是は有のまゝの歌也。君こんと度々過し侍ればたのまは有ながら又さすかに待ちて戀つゝぞぬると也。【新註】勢業平のゆかんといひやちるゝなり。歌はやさしき歌なりたのまぬものゝとへるものもじおもしろし。古今にも此もじ見えたり。空蟬の世の人ことのしげれば忘れぬものゝかれぬべらなり。(古)來んと聞えつるにこの夜の多く過ぬれば今はさるおとづれのあれと思ひたのまれぬものから猶も戀したひつゝ月日の經ゆ

くと也。ものゝてふは物ながらを約めたる言也。古今集に「うつせみの世の人ことのしげればわすれぬものゝかれぬべらなり」といふに同じ。戀つゝぞふるを今本はぬると有るはあやまれり。(新)からちじては俗語にやうくとして云意也。やまと人はかの男をいふ。たのまぬものゝはたのみにはならじと思ひながらも心にかゝりてこひつゝぞふるといふ意なり。△なる塗本にしたがふ。ふるとおるはおだやかならず、ぬるとあるはかたよれり。○といひければとすますなりけり。【舊註】愚つひに離別せる事をすますなると云り。(直)業平かよはぬ儀也。此段をば有常がむすめの事と云は真女の處をあらはさん爲也。【新註】(新)此段女の心ばへのすぐれたるとさもあらぬとのけぢめをよくかきわけたり。すべて此物語は男も女もこゝろばへのあはれにすぐれていやしきふるまひなさをよしとしてかきたるものにて歌よみならふ人のをしへにはなるべき書なりかし。

あらたまの年の三とせ

○昔、男女、かたゐなかに住みけり。男、宮づかへしにとて、別を惜しみてゆきにけるまゝに、みとせく來ざりければ、

あらたまの年の三とせ

まぢわびたりけるに、いとねむごろにいひける人、今宵逢はむと契りたりけるに、かの男、きたりけり。この戸あけ給へと、たよきけれど、あけで、歌をなむよみて出したりける。

新玉の年のみとせ、をまぢわびて、たよよひこそくにひ枕すれ

といひ出したりければ、男、梓ゆみ眞弓つき弓年をへて、わがせしがごとくうるはしみせよといひて、いなむとしければ、女、あづさ弓くひけどひかねどむかしよ

り心は君によりにしものを

といひけれど、男かへりにけり。女

とかなしくて、くしりにたちておいゆ

けど、えおひつかで清水のある所に

臥しにけり。そこなりける岩に、およ

びの血して、かきつけよる、

相思はでかれぬる人をとぐめか

ねく我身は今ぞ消えはてぬめる

とかきて、そこに、いたづらになりけ

り。

○むかし男女かたるなかに性みけり。男宮づかへしとて、別を
をしめてゆきけるまは、三年ござりければ、まぢわびたりける
はいとぬんごろにひける人は、こよひあはんと契りたりけるは
【書註】「愚」もとの男をまてども、三年までござりけるあひだにい
とれたころにいひける人ありければ今夜その人にあはむする所に

もとの男のたづね来る也。(直)かたぬなかにすみけり、なりひら
のすみし也、ぬな、いづくともなし。三とせござりければ、今
に夫が外蕃にありてきたらざるに子あれば五年、子なければ三年
にして、嫁をあらたむる事をゆるせり、左様の心には。【新註】
【勢】かたぬなは片山里の類なり。業平の三とせござりける故に
こと男のぬんごろにいふにあはんとちぎるなり。令第三云其夫没
落外蕃有子五年(男が同也)無子三年而改嫁今此ころなるべ
し。(古)かたぬなとは偏士の意にて京より男のおとづれのたや
すからぬをおもはせて書たり。今歸るとだに兼て告こさぬに三年
つひに音づれざりけるを知るべし。さて令の御法を考るに夫他國
にとらはれ落はぶれなどしてえかへらぬに子も無きは三年の後
異夫せんを教すは夫の世に在やなしやも知がたき故也。今は宮づ
かへにていかにせんも夫の心なるべきをかく言づれせざりしは故
なくて三年便なきぬは難る、事を教すてふ御令の上且たゞに逸失
て出こぬに子なきは三年を待べきなどを交へもて、こは二とせば
り待べきさだめとやせん、さるを三とせまで待たるは女の方の責
なりけり。頭註。戸令云凡結婚已定無故三月不成(女家欲難
者聽)之これは最初に親族のゆるしたる時也。雖已成其夫没落
外蕃有子五年。義解云夫婦在(同里)而不(相往來)即此無故三
月不成之類也。無子三年不歸及逃亡有子三年無子二年不出者
並聽改嫁。(新)日本書紀の孝徳天皇の巻に有妻妾(妻)為夫被放
之日經年之後(他)恒(理)而此(前)夫三四年後(食)求(後)夫財物
為(已)利(者)甚(衆)しと見えて前夫の食をあしとのたまへるなり。
女はひとり世にありへがたきものなれば三年の後こと男にあふ
はかくいにしへよりとがめなかりき。又令云雖已成其夫没落

外蕃有子五年(謂子當男女同也若夫在(同里)而不(相往來)即此無故三月不成也)無子三年不歸及
逃亡有子三年無子二年不出者並聽改嫁(これは令の二の巻戸
令第八に見えたり。拾遺抄藤原などに令第三にありとて此事をい
へるはたがへり。さてこゝなるはみやづかへしにとてゆきたるに
て令のとは異なれどもかゝるみさだめもある事なれば三とせの
後とは女のおもへるよしになんありける。續日本紀に文武天皇
の大寶の頃遣明法博士於六道(海)講新令とありて令はいに
し(國々の人にもとききせられしかばぬなかの女などもそのお
もむきをほのかにきつたへてぞありけん。(私に格序に律以(三)無(三)爲(三)人(三)によみか
せられぬべき類なりかし)されどかくきはやかにことわ
りだてするはなまきおくれたるしわざなれば女のいたうくやめる
よしにかけり。古意に女をほめて男をわろしといはれたるはいみ
じきひがごとなり。三とせござりけるも身を心にまかせみやづ
かへなればなり。別ををしみて行けるといへるは男のわかれがた
くしたるにてその淺からぬ心をおもはは三とせすともさるやう
こそあらめとて猶まつべきにこと人にあはんとちぎりけるは女の
あやまりなりけり。没落外蕃又逃亡などのおなじたぐひにはあ
らず。△むかし男女、眞知二本にしたがふ。三とせまで、眞本に
よる。また知本によりてくばふ。

またであら玉の伏らん里に新枕する。(關)業平を恨みてかくす所
もなくよめる也。眞實新枕と見可也。定家(忘)るな三年の後の
新枕さだむ斗の月日なりとも。【新註】(勢)この男とは業平なり。
戸はあけずして歌をよんで出すなり。(古)た、きければ、今本け
れどもあり、古本に者とあるぞよきいしへの助辭にかゝる者の
言多し。(新)戸をあけて歌をよみて出せるは三とせござりけるを
うらみ又この男をいれてはこよひあはんとちぎりける人の來らん
に何とこいはんと思ひさだめかかれてまづ歌をよみて出したる也。
△かの男知本にしたがふ。ぬんごろにいひける人の事を中にへだ
てたればかといふべき所也。

○あら玉の年の三年を待わびてたゞこよひこそにひ枕すれ。(舊
註)「愚」たゞ今夜ばかりにひ枕すれとはこと人にはじめてあはん
とするといふなり。或説、弓を三かされていふは三張の弓也。
三はるは三春則三年を三春といふといへり。是などの説餘な事
也。更に信用にたらず。たゞ弓はひくものなれば君に心のひくと
いはんとて弓とはいへる也。君に心の引て年を経といふ心にあづ
き弓まゆみつきゆみ年をへてとよめり。女の返歌に此の心をうけ
てあづき弓ひけどひかねどもよめり。など世の中のだまですきな
るとよめる歌もかくといはずして玉だすきといへばかくる事にな
るやうにひくといはれども弓といへば引事になる也。かごと、い
ふ事あまたの心あり。いさゝかなる事をかごとといふ。源氏に露
のかごとといへる類也。又かこつけことをかごとといふ。源氏に
かごとときこえつべきなど云る類也。又ちかふ事をか事ともい
ふ。この歌の事はちかふ事ときこえたり。うるはしみせよはうる
はしくおもへと也。歌の心は君に心のひきて年月をかされし

とをばうるはしくおもはて又こと人に見えんとするよめり也。
 かごとばならずしも神佛を付けてちかふ事にがららず夫婦の中
 のながくかはらじとたがひに契る事なもみなかごとといふべき也
 (直)此弓を三つつけたるは三年の心などいふはしからず。只重詞
 なり。神樂歌に「弓といへばしなき物をあづさ弓まゆみつき弓
 しなこそ有けれ」とよめり。ひくといはんとて弓を三ついへり。君
 に心ひいてしをへるほどにわがせしちかひをうるはしくせよと
 也。かごととはちかひ也。【新註】(勢)續古今戀四、後のなとこはま
 だこれですてにこよひあはんと契れば新枕しつると讀るなり。う
 らむ心もあるべし。萬葉「荒雄らはめこのわざをばおもはぬに年
 のはとせをまでどきまます」。わが草のにひ手枕をまきそめて夜
 をや隔てんにくはなくに。頭註。敬儀云。拾遺十四に入道權政
 まかりたりけるに門をおそく明ければ立わづらひぬといひ入て待
 りければよみて出しける。右大將道綱母。なげきつゝひとりぬる
 よのあくるまはいかにかに久しきものとかはしる。にたること也。
 (古)たゞとは右の詞どもをうけていへり。意は明らかし。語の例
 は萬葉に(真紫女)荒雄らは妻子のわざをばおもはぬか年の入とせ
 をまでと來まきぬ。又わが草の新手枕をまきそめて夜をや隔てん
 にくからなくに。(新)あら玉は年の枕詞、まらわびてとはまつに
 せんかたつきて女の身のよるべなきにこよひはこと人にとひま
 らするよしをいへる也。にひまくらは新枕にて男女はじめてあふ
 をいふ也。さてかくこよひのさまをさだめと云いてたるはには
 かなる事にておもひめぐらすまもなく心おそきぬかの女のいか
 にとも言よきまにはえいばざりし也。
 ○といひ出したりければ。梓弓まゆみつき弓年をへてわがせしが

ごとうるはしめせよ。【新註】(勢)上二句は重詞の類なり。拾遺
 神樂歌にも「弓といへばしなき物を梓弓まゆみつき弓しなこそ
 有らし」。これに同じ、わがせしがごとばわがうるはしめせしがご
 とくなり。日本紀に善の字をうるはしとよめり。なつかしくする
 心なり。歌の意は三とせもする故に待わびて新枕しつるとよみ
 出したれば女のことわりを服してしひてもいはず、此返歌は後の
 なとこにいへるなり。弓は男の手にとるものなれば古歌に女をた
 とへてよめる事多し。されば今もたとへて此弓はむかし我年をへ
 てうるはしくせし弓なれば我うるはしめせしがごとく君もうるは
 しめせよとあつらふるなり。これまことある心なり。ごとはごと
 くなり。古註にかごとにてちかごとなりと意得たれど上の弓とい
 へるに始終の心かなはず。萬葉「玉はこの道の神たちまひはせん
 わが思ふ君をなつかしめせよ。頭註。あづさまゆみつき皆弓につ
 くれる木の名也。(古)こは弓を鳴し神をむかへまつりて誓ひをな
 す事故に上に弓をいひてきてわが爲し神言のうるはしきのしるし
 をみせたまへと今さらに神にいのる也。此むとく男が女を捨たる
 如くにして今俄に來て腹だちて盟言いふはあしき也。然れども誓
 なたがひたれば女は終に死たる也。かく作れるを兼平朝臣の實事
 とおもふ人さてはむくつければいひかへたすけなどせる説々あ
 れど皆わろし。△己はわがともながともまるとも中にこは上
 よりの意を云下せばたゞ男の我せし誓ひを今しるしを見せたまへ
 と云也けり。ながとよみて女のちかひしを云も理り有やうなれど
 一首の意しからず、さて其誓ひは男女相ちかへるなればわが一か
 たを歌にはいへど女のちかひもこもれり。忠の字を日本紀にはま
 めとよみ善の字をこそうるはしとはよみたれ、かくよむ歌にては

意相かへり。頭註。仲哀紀に皇后御みづから神主となりたまひ
 武内宿禰に弓を鳴させて神言を述べたまふを見れば上古より神言に
 弓を用ゆる事知べし。今も巫女が弓引鳴し神言いふ即是也然ばこ
 へには三つの弓を云下すのみ且三つあげたるはたゞ語をかきぬる
 のかともいづれも弓にもちうる物なるが中に年へて度々契しと思
 はせしなるべし。記者の歌にはさるかすかに事多くふくみたる多
 ければ也。此もとの男の歌は新枕する男にいひかけたりと云は文
 の意をもよく見ぬ人の説也。(古)梓弓まゆみつき弓。註にこは弓を
 鳴して神をむかへまつりて誓ひをなす故に上に弓を云出てきて我
 爲し神言の忠の字を見せたまへと今更に神に訴ふるなりといひ
 れしを我愚さにやえこる得ずかごとと云語は大かたの例は託
 言を約めていへる事文にも歌にも多かり神言をかごととよみし例
 有やいまだ見しらず神功紀に時得神言の詞あり是を古事記に
 見れば請神之命と書り合せて共に神のみこととよむべしさらば
 ここの證には引がたし因て憶ふに古本に神言と書しは義もてちか
 ひとよみて歌は年月に己がちかひせし言のしるしはいづら見せよ
 とよめるにはあらぬ歎きて上に梓弓眞弓つき弓とかぞへしは詞の
 事とはいひえたらす女のうたにこそ梓弓ひけどひかねどと云しに
 かいらざる事とも聞ゆれ又うるはしと云に忠の字はいかにめがら
 せても迂遠也こは誤字などにはあらぬか翁云此ふみ故は假字書
 なりしをしばらくの後に眞字には書改めしならんと其改めし人の
 心よりとめたがへたはれ過つゝ又の後の人のよみかわづらへるま
 へにもこの文とは異かたになれる所々も少からずおぼゆ此歌も其
 歌に入べきものなり。(新)これと次の歌とは一對の贈答にしてと

もにはじめ二句は弓をたとへにいへる也。此歌は神樂歌の、弓と
 いへばしなきものを梓弓まゆみつき弓しなこそあるらし。と云
 歌を本歌にしてよめるなり。まづ本歌の意よりとくべし。おしこ
 めて弓といへば名にしなくはなきものをこまかにわけていふ時
 は梓弓まゆみつき弓しなくこそあるらしといふ意也。たとへ歌
 なるべし。これをとりて今の歌の意は夫婦といへばひとほりの
 やうなれども宮づかへにも出るほどの事にてしなくのうき事ど
 もをしのびつゝ年を経てわがうるはしく中よくせしやうに君も又
 のちの夫にうるはしくせよといへる也。さてわが年頃うるはしく
 して何事もしのび過しよしをのべて女の心みじかくこと男にあ
 はんとちぎれるをふかく恨むる意見たり。上句はしなくのう
 き事ありつる年をへてといふ意を本歌の詞によりて弓のしなく
 をとり出てあづさ弓まゆみつき弓としをへてといへる也。さる
 はことやうなるいひさまに似たれど本歌たとへ歌なればやがてた
 とへに用ひたるなり。されば返歌も初二句は弓をたとへにいへり
 てらしあはせて見るべし。かくときてこそ弓の名を三つまでかさ
 ねいへるこももきこえ此歌に女のいたくはちやくみてふかくし
 たへるにもかなふべけれ。此上句を昔よりときえたる人なし。古
 註には弓はひくものなれば君に心のひくといはんとて弓といへる
 也といひ、臆断には弓は男の手にとるものなれば女にたとへたる
 也といひ、古意には弓をならし神をむかへまつりてちかひをなし
 事といはれたるなどみなかなはず。さやうならんにはひくとる
 ならずなどいふべきことなるにさはなくして弓の名を三つまでな
 らべいへるは何のためとせん、いといとおろかなる説どもなり
 けり。師は此歌の初二句いかなる意にかさらにきこえずといはれ

き。さて又三代實錄三十三の卷に下符相模國令探三逆櫻弓百枚云云信濃國梓弓二百枚但馬國櫻弓百枚備中國柘弓百枚(数字三代實錄とあれども弓を百枚とはいふべくもおぼえずこは誤字にて故なるべければ改つ)といふ事見えたり昔は國々よりしなくの弓を奉ることなりき。

○といひていなんとしければ、女 梓弓ひけどひかぬど昔より心は君によりしものぞ。【舊註】(愚)歌の心はそなたよりは心のひきしひかすも我心ははじめより、君にのみ二心なかりし物なといへり。弓はひけばひくかたへもとすまがよる物なればよりにし物なとよめり。(關)業平の心は女の方へ引やらんひかざるやらん知す我は昔よりそなたへよるとよめる也。弓はひけば本末身の方へよるものなれば調のえんによめる也。引歌古今第十二戀の歌にはるみちのつらさが「梓弓ひけばもと末我方によるこそまされ戀のこゝろは。【新註】(勢)練後撰戀三み人しらす第三句ひきみひかなみと有。是は右の歌に弓とたとへられければそれをかけて君が心はわれにひきませよひかすもあれわが心は昔より君によりしものなとなり。弓は引時に本末のわが方によるものなれば調の縁によるといふたよりあるなり。萬葉「梓弓末のたづきはしらねどし心は君によりしものを。」梓弓ひけば本末我方によるこそまされこひのこゝろは。(古)三年までしもふつに音づれたまはればせんかたなくてかくこそあれ引ならしてちかひ誓はぬを云はともあれいかにも心は君にこそよりて有物なと也。△よりにしは弓の語もそを心のよりしにそへたり。△此歌は萬葉に梓弓ひきみゆるべみおしひ見てすてに心はよりにし物を。又梓弓末のたづきはしらねども心は君によりしものを。これらを少とりかへてもちぬし也。願註。古今にあづき弓ひけばもと末我かたによるこそま

されなどよめり。(新)さきの歌をうけてこなたにも昔よりともかくにも心は君によりしものを見すていなんとし給ふはうらめしといへる也。とにもかくにもと云意を弓にたとへてひけどひかねどと云也。よるも弓の縁なり。男の歌にしなくのうき事ありしよしを弓のうへにていへるからにかへしもげにさやうありし時ともかくにも心を君にまてはなれざりしと云事を又弓のうへにていへる也。諸註此歌の心調をときえず。古意はことにわろし。

○といひければ、男かへりにけり。女いとかなしくて、しりにたちておひゆけど、えおひつかて清水のある所にふしにけり。そこなりけるいはにおよひのちして書つけしる。【舊註】(愚)およびは小指也。指のちにて歌をかけり。これまでのことはおぼつかないけれども切におもふことのとへにいへるにや。【新註】(勢)後の男あれば歸るべきはことわりなり。日本紀に隨後とかきてしりにたちてとよめり。おひゆくはしたふ心の切なるなり。おひゆくに息もくるしければをりふししみづの有る所にて水をもむすばんとて立よりてやがてそこにうちふしてしぬるこゝろなるべし。およびは指なり。小指にあらす。和名集にいつの指の名皆何のおよびといへり。此指の血して歌を岩にききつけたるといふは雲山童子の四句の偶を羅刹にならひて血にて石に書付られける心にてけるにや。(古)此女もとより實こゝろ也ければいかでいひとやめばやと後にたちておひゆくにえおよばで息のたゆれば水のまんとて立よれるに即息されて其所に伏たる也。さてせんすべなければ指をくひて其血して石に歌を書たる也。事のきはめて切なる心さまをよく書とりつ、詞少なにかく書事は難し。△しりにたちては日

本紀に隨後の二字をよめり。△およびは和名抄の手足類に云揚(於保於)食指(於止位之)中指(於加乃)無名指(於々之)季指(於比)とて五指ながらおよびと云とみゆ。然ば必季指のみ云と思ふべからず。こゝはいづれの指にても有りぬべし。(新)しりにたちてはうしろにたちてといふ意也。日本書記に背揮とあるを見てしるべし。同書に隨後の二字をしりにたちてとよめるもおなじ。えおひつかてとはおひてとやめんとしつれど女のおひみは男にはおよばざれば也。清水のある所とは臆断におひゆくにいきもくるしければ水をむすばんとてたぢよれる也と云るがごとし。およびの血して岩に歌をききつくるはこゝろしぬべくおぼえてするわざ也。およびをくひてちをあやしたるなるべし。およびはたゞ指也。小指にはあらず。宇津保物語梅の花笠の巻に「ちりおつる花びらにつまもとよりちをさしあやしてかくかきつくとして歌ありさればおまひのせちなるをりにおよびのちしてものかくなら昔ありつるからに此段にもかやうにはつくりかきたるなり。たゞしつまもとよりちをさしあやすは針してなるべし。こゝなるは略きかける文にてそのよししられれどゆくりなく出ておひあつるなれば針をさすべきにあらじとおもひておよびをくひてちをあやしたるならんといへる也。

【新註】(勢)そこにて身をいたづらにしてしぬるなり。作りてかける事なるべければそのまにすべし。謙徳公の歌「哀ともいふべき人はおもほえて身のいたづらになりぬべきかな。これおなじ心なり。大和物語に云。大和國なりける人のむすめいとよきよらにて有けるを京よりきたりける男のかいまみてみけるにいとおかしげなりければぬすみて、きいだきて馬にうちのせてにげていにけり。いとあさましくおそろしう思ひけり。日くれて立田山にやどりぬ。草の中にあふりをとききてふせり。女おそろしと思ふことかきりなし。わびしと思ひて男のものいへどいらへもせてなきければなとこたがみそきゆふ付鳥かから衣立田の山におりはへてなく。女返し、立田川岩根をさして行水の行衛もしらぬわがごとや鳴」とよみてしにけり。いとあさましうてなんをとこいだきもちてなきなる。このたぐひも見るべし。しかるなきえはつるとはまことにしぬるにはあらず、思ひの限りなるをいふ、いたづらに成にけりといふも思ひのかなはぬ心といへるはいとむづかし。し水の有所にふすといひ指の血にて歌をかくみなしぬべきさま也(古)かれぬるはわかれぬるの上略也。萬葉にも是にも離の字を多く書り。清水のある所に臥たるより下のさまかく死ぬべきいきほひに書たり。其外はちかひにそむき男の盟言つるよりかく死におよべるてふ一のさま也。いたづらは死るをむなしくなると云に同じ。さるをこゝは死るにあらすてふ説はいと文を意得のさだ也上にそこにといひけん語をわすれけんかし。願註。ことわりをいへば男のわろければはた神言のちかひありしからはそれに背きたるかたにて女はかくなれりてふ意にて書しならん。(新)われはかくばかり思へどもかなたにはおもはてはなれぬる人をとやめえず

してわが身は今さえはつるやうすじやといふ意也。かるゝははなる意也。とゞめかねはとゞめえずと云意也。めるは俗語にやうすじやといふ意なり。さいへるはまだ消はてざるほどによめる歌なれば也。いたづらになるとはしめる事なり。△そこにといふ詞違本になきにしたがふ。

秋の野に笹分し朝の袖

○昔、男ありけり、あはじともいはずりける女のさすがなりけるがもとに、いひやりける。

秋の野に笹分し朝の袖よりも逢はでぬる夜ぞくひぢまさりける

色ごのみなる女、かへし

みるめなき我身を浦と知らねばやかれなであまの足たゆく来る

いにしへきみしよりもまさりてなむおほへける

昔男有けり、あはじともいはずりける女の、さすがなりけるがもとに、いひやりける。【舊註】(愚)此女は小野小町也。古今集に見えたり。あはじともいはずりける又さすがあふことははかる也。(直)あふまじきともいひはなたぬ也。さすがなりける、業平をうらむる心有がさすがきればなれたるやうには見えざるなり。【新註】(勢)あはじともいはずりけるがもとにまたあはねなり。返歌より見れば業平を恨てあはねなり。(古)ひたすら否とも諸ともいはぬのみならず、あはんさまして逢の故にさすがなりけるといへり。さすがは事二つかけたるにいふ語也。こは色好みなる女のするわざなる事下にいへり。(新)あひもせずあはじともいひはなたず人をなやまするはげにこのみのしわざ也けり。さすがなりけり云はつれなき中にさすがになさけありげに見ゆるをいへり。臆断にあはじともいはずりけるがもとにまたあはね也ととけるはいたくがへり。さすがといふはわろき事の中にてよき事のあるにつきていふ詞也。あはねがすなはちさすが也けるなり。たとへば歌よむ人の風流なりけるがといふがごとし。(秋の野に笹分し朝の袖よりあはてぬる夜ぞくひぢまさりける。【舊註】(愚)あさ、朝也。ひぢはぬるゝ也。此歌中將のよめる也。(直)秋の野も、舞も、あしたも露多きものなれどもたづねいきて

あはてぬる夜の袖はぬれまると也。(關)誰ともなし、古今にはこの歌小町が歌と有り。【新註】(勢)古今にはあはてこし夜ぞとあり、今の心もおなじ、秋の朝に露けき野へのさゝ原をわけしよりも猶人のもとへゆけどもえあはすして歸るさの袖はぬれまるとなり。(古)こは古今にはあはてこしと有を疑るとなほして用ぬたる也。露といはて露深く涙といはてなみだ多きまあるを曲とせり。且端書とあはてぬる夜といひしを合せて古今集よりも今一わたり堪がたき心をへたり。頭註。古今にてはゆけどえあはてかへりこし夜の思ひをいへる也今はたゞさまでは聞えず。(新)秋のあした野のさゝわくる袖はいたく露にぬるゝものなれどそれよりもつれなき人にあはてぬる夜は涙にぬれまるといへるなり。ひぢはぬるゝにおなじ。○色ごのみなる女返し。みるめなき我身をうらとしらねばやかれなであまの足たゆく。(舊註)(愚)小町が歌也。此我身は男の身なをいふ。女にあふ事もなき我身をうらめしと思はずしてかれなぞしげくゝるとよめる也。みるめといひうらといひあまといふはみな海邊の縁の詞也。あしたゆくはつよくあゆめばあしがたゆくなる故にうらといへり。是は男に我身をうらとおもへといへる歌也。【新註】(勢)家集には常にくれどえあはぬ女のうらむる人にとあり。こゝには二首ともに思しらすとて小町が歌なり。贈答にはあらず。みるめなきは見る事のなきを海松布のなきとそへたり。わが身をうらわはわが身とは業平の身なり、下のあまもおなじ浦に恨をかたり、うらとのみいひて恨になる、かやうのこと古今におほし、そなたの身をうらめしとすればにやとなり。かれなてはかれすしてなり。われをみるめなきはそなたの心からなるに

わが身をうらみすしてなどかれすあしたゆくかゝひくるぞとなり。後撰集に「なびれては行かたもなし涙川我のうらやかきりなるらん。」わたつみとたのめしこともあせぬれば我ぞ我分のうらは恨むる。菅家萬葉に「侘吾身之浦成成禮々哉戀數人之類波丹起。」後撰に「春の池の玉藻にあそぶには鳥の足のいとなき戀もする哉。」小大君集に「よひの夢の魂足たゆくありきてまたんとぶらひにこよ。」(古)海松のなき浦に見る目なき我身を戀しとおもふをそへてさて男をいたづらに見るめ別んと来る海人に例へたり。古今集にては女の我がたなどわるきまに聴てえあはぬを然とはしらすや男のかくまで来るがいとほしとよめり。蓋に小町の歌にてやさしきなり。伊勢の御の「夢あだに見ゆとはみえじ朝な」我面影にはづる身なれば」とよめるもすべて女のようぬふかきわざは同じ、さるを此文には中々に色ごのみなるてふ詞をくはへて意をいともかへたり。帯木の巻にわづかに響きくばかりいひよれどいきの下にひきこめてと書るも此文のこゝをとりて云に似たり、體に物はちして言すくなゝるがとりなせばあだめてふもこの女のさすがにて男をなやましむる類也。△古今集にては上のは業平朝臣次は小町のにてことゝなる歌をとりて是には贈答に用ゐたるを巧とすれば歌はおほくもかへすして詞をくはへていと異ごいるとなせるなど例のしわざ也。△足たゆきは足のつかれてなへゆるむ事を云故に古本に緩の字を書たり。頭註。或説に男の身を女のうらむる事あり故にあはすといへるはわろしさらば上みるめなきとおかみやはさては詞のとほらぬ也かつ浦みんとのみ人の云らんといへるはうらみの詞に浦をそへたれば詞とあへり、只うらとのみいふに怨みとては詞足すよりて古歌にはさ

やうにいひそへし例もなき也さてうきを浦にそへたるは後彌に流
ては行方もなしなみだ川我身のうらや限なるらん又わたつみとた
のめし事もあせぬれば我そわが身のうらはうらむる。これら皆身
のうきを浦にそへたり身のうきとは女はかほかちちのわろきとい
やしきをいへり。○こゝにとりておくりこたへにつくれりしを
心得ぬ人業平小町にあひしと思ひ又しかはあるまじければ古今の
作者のあやまりしにやなどは皆まどへる心よりいへる説にて云ふ
もたらす只此文をつくり事としは何のたかひもあらじ。後世
の人はいかゞ文かゝる事のおろかなりけん。(新)師説此歌初二句の
意むかしよりときえたる人なし。これは春かけてなげどもいまだ
雪はふりつくと云る類にて詞を下上打かへして心得べき格也。
我身のみるめなき浦としらればやと云事也、みるめなき浦とはあ
ひがたき身といふ事也。うらはた見るめによれる詞のみなりと
いはれき。此説にてよく聞えたり。一首の意はあひがたき我身と
しり給はればにや夜ごとにあしのためゆきに來り給ふと云る也。そ
れをみるめなき浦にあまのみるめをかりにくるにたとへたる
也。(按)古今集戀三に上のは業平朝臣、下のは小野小町の歌とし
てならびて入れり。古意にては此二つの歌をとりて贈答に巧み成
せりといへれど、さては古今集のまゝに「逢はて來し夜ぞ」とあ
るぞ「足たゆく來る」にうち合ひて開ゆべきにいひて「逢はてぬ
る夜ぞ」とはたゞしけむ(或ははしの間に合せたりともいふべけれど歌によ
いといふおかしきを按ふにこの段「色」のみなる女へし以下は
別條にてその上文脱なるにもあるべし。この物語もと巻物にて
年をへて斷卷も打交りたるべくなむ。(定本の一説はまが本にこの次に
んおほへり)(再按)古今集戀三に上のは業平朝臣、下のは小野小町

の歌として入れるを贈答に巧み成するものな事古意の説の如
くなるべく古今集の流行以後につくられし事疑ふべくもあらず、
蓋し後人追加するところのものなるべし。(平安の中葉以後文學上の巧
なるもの)○伊勢物語の本となれるものは業平の遺筆なりけむを
後人其遺筆に同類物語を巧み入れしと思はる。この段の如きこ
の後人の巧み入れしかとすべし。

もろこし舟

○むかし、男、五條わたりなりける女
を、え得ずなりにける事と、わびたり
ける人のくかへりごとにく
おもほえず袖に湊のさわぐ哉も
ろこし舟のよりしばかりに

○むかしとて五條わたりなりける女をえ得ずなりにける事とあ
ひたりける人の返事は。(舊註)愚えしは不得也。女のわが物
とならぬことないへり。人の返事は中將の女のかたへの返事に

よめる也、女の歌は見えず、もし文の返事に此歌をよめるにや(直)
五條わたりなりける女、二條后也。えしすなりにけるとは得ざる
也。わびたりける人、染殿の後也。業平のあらぬ思ひする事を不
便におもひ給へるそのかへり事に業平のよめる也。(爾)五條わ
りなりける女、二條の後也。佐たりける人、染殿の後也。業平の
あらぬ思ひする事を憐み給ひし其かたじけなき心ざしの御返事に業
平のよめる。御説には侘たる人、染殿后に非ず、道しるべせし人
也此義尤面白し。【新註】(勢)五條わたりなる女は二條后也。えし
すなりにけること、わびたりける女とはなかぢせし人なるべ
し。或説に染殿の後といへどたとひ折々通ひ參るを知らたまはぬ程
にはゆるしおき給ふともえしすなりにけるとわびて業平にのたま
ひつかはさるゝ迄は有るまじきにや。今の歌を新古今集によみ人
しらすとてのせられたる心を察するにふたつの心有るべし。業平
の人の方へわびていひつかはせる時返事に人のよめる歌と心得ら
れたるか又新勅撰等に此物語になり平の歌なるをよみ人しらすと
のせられたるも例あれば業平をあはれびてとぶらひける人の返事
に業平のよまれたりとは心得ながら思ふよし有て讀人知らずとの
せられたるか。是によりて歌にも心得やうかはるべし。上に女の
えうまじかりけるをとしをへてよばひわたりけるといひしは二條
后なるゆゑに今もえしすといへり。(古)こは彼西の對に住みつる
女のかくれたるをいふか。さてはその人をつひに得ざりしよと或
人の嘲りつるに男のこたへたる歌也。今本にわびたりけると有る
は字の落たるにてとわりのなきを強ひてことわらんとするはいか
にぞや。古本に懸字をわらふとよめるはわらひはづかしむる意也。
願註。染との、后二條后などの事と心得て云ふは例のひがごと

てあたらすてふとわりすてにいへり。(新)これはある人男のもと
に君は五條わたりなりける女をえ得ずなりに給ひける事かなとぶ
らひいへる也。事と云詞は歎息の意ふかくこもれり。とぶらふ事
をわびたりけると云は男の女を得ずしてわびなるをとぶらふ詞ゆ
ゑにそれをもわびたりけるとはいへる也。たとへば家の内なるも
の、死たる時はくやしうおほひなるものなれば人のとぶらひにく
るなくやみにくるといふが如し。古意にわらひたりけるとしてと
かれたるはさらになはす。師は歌によりておもふにたとぶらひた
りける人のなどあるべきにやといはれたれど本のまゝにてもきこ
えたり。
○おもほえず袖に湊のさわぐ哉もろこし舟のよりしばかりに
【舊註】(愚)袖にみなとのさわぐとは浪のふかき事をいふ。さわぐ
は浪によせたり。よりしばかりはよるほどいふ詞也。枕の下に
海人ぞざりするなどよめる歌もおなじ心也。みな涙を海にたとへ
ていへり。(直)戀路は及ばぬ事を思ならひなれ共染殿の後のいま
しめ給べきをわが心をおしはかりて憐み給ふと有がたきとよるこ
びの涙をながす也。よりししのし文字は休め詞也。過去のしにはあら
ず。惣じて湊はうみへ川の流るゝを云也。湊河などもよめり。
もろこし舟のよりしは御尋の事也。よりしのは休字也と有り。
御説には過去にしても苦しからずと被仰し也(新註)新古今
戀五よみ人しらす。業平の歌ならば有りつる事をかくまでわびて
人のとふにつけておほえず袖の上にもろこし船のよりしとき舟な
みのみなどさわぐ斗泪のさわぎておつるなるべし。唐土船とも
いへるは思ひよらずとぶらはるゝ心か。もし業平のわびていひ遣
せる時人のよめるならばわびたる人のうへをきいて覺えず我袖の

涙もみななどのごとくさわぐ事、たとへばもろこし船のふとよ
りきたるらんときに涙のさわぐほどなりとよめるか、或抄により
し斗のしもじをやすめ字といへり、心得がたき事なり。やすめ字は
ありてもなくとも所にもじのたらず或は字はあまれども休字を
そへたればしなよき時おくなり、此しもじはなくて詞のつゞかぬ
なり。今の事なればよる斗とこせいふべければふしんなき事なり。
一時一刻も過る書をばさりしといふべければふしんなき事なり。
新古今に「影なれてやどる月かな人しれすよな」さわぐ袖の
なとに。續古今體、定家「さもそはみなとは袖の上ならめ君ぞ
心のまづさわぐらん」定家「鳴く千鳥袖のみなとをこかしも
ろこし舟もよるのれざめに」(續古今體)「人しれぬ袖のみな
とのあだ波は名のみさわけどよる舟もなし」此歌に袖のみなとの
さわぐがなといへるを本歌にとれる歌どもはおして袖のみなと
いへる。筑前に袖のみなと有りといふは覺束なし、もしはもと
よりさいふ名所あれば今の歌をとりておのゝ、そこによみな
せるか。寛喜四年三月廿五日岩清水若宮歌合に河上藤、左、從三
位範宗「春くれば霞の衣たつ田川あらへどぬれぬ涙もかけたり」
右時、信實「下さわぐ高瀬の川の浪まより霞む袖のみなとなる
らん」列者定家卿の云、兩首ともよろし、右は下旬いさゝか可
然。又いさゝか日記に遠江の高師の浦にて「我爲や猶も高師の
浪ならん袖のみなとの波はやすまで」さきの信實の歌高瀬の川は
なかせのよど河内なれば是も河内にや、それに袖のみなとをよみ
合阿佛尼が高師の浦にて袖のみなとよまれたれば名所にあらず
る事なり。(古)しや笑はるゝにもよりの思ひのさそはれ出て我

またおもほえぬまで涙のおほきてふをもちのしの大船のよれる浪
の浪のさわぎにたとへたり。古本に浪波と書るは借字ながら浪を
云ひこめたるをせん料に浪の字を用ゐたらん。古本に外にもな
みだを浪波と書し所もあれば此訓さだかなるを今本に袖にみたと
と有るはあやまれり、そをだにあるを又袖の海に轉じて筑紫の一
つの名所とするは甚しき事也。元久などの頃にはしひたる事をい
ひて名所其外の事にも誤の多く出きたれり世の亂につきて人の心
もさこそありけり。(新)拾遺抄云おもほえずは思ひもかけず也。袖
に浪のさわぐとは浪のふかき事をいふ。さわぐは浪によせたり。
よりしばかりはよりしほど、云詞なり。よりしのは過去のしな
り。此上句はかのとぶらひし人の心のうれしさを感涙ふかき心也
といへるぞよろしかりける。古意の説はいとわろし。臆断にもく
だしくしるもろこし船の説い。これは唐船のよるは大津にて
ことに浪さわぐべければ泪のいみじきよしなへる也。(按)清水
濱臣書入本、陸房艶詞。或人こゝをすぐとて袖にみなとのさわぐ
かなもろこしぶれもよせつばかりにと何心なくながめてすさし
ば折からこゝにとまりて、此段後龍本になし。本文かこみて後。

水口に我や見ゆらむ

○むかし、男ありけり、女のもとに、
一夜いきてく又もいかずなりにければ、

女の母はらだちて、手あらふところ、
ぬきすを取りてなげすてければ、たらひ
の水に、なくかげの見えけるを、みづ
から、

我ばかり物思ふ人はく又もあらじと
思へば水の下にもくありけり
とよめりけるをくこざりける男、きよて
みなぐちにく我や見ゆらむく蛙さ
へ水の底にてもろごるゝになく。

○むかしとこありけり女のもとに一夜いきて又もいかずなりに
ければ女のおやはらだちて手あらふ所にぬきすをとりてなげすて
ければたらひの水になくかげのぬきけるをみづから。(舊註)「愚
實實とは鹽のうへにおほふ物也」なげをあみてしたり。手あら
ふ時の水をはかへちらまじがため也。(直)ぬきすとほたらひの上
に竹をみすやうにあみてへりをさしてそれなうち流して手水つが

水口に我や見ゆらむ

不物也。水をちらさじとの儀也。「新註」此詞つゞき心を付さ
れば心得かぬるなり。男一夜の後又もいかずなりぬれば女それよ
り物をおもひてある時手をあらふ所にてぬきすをたらひのかたは
らにおしやりたるにわががほのたらひの水にうつりて見えけるを
みづから見てよめると心得べし。女のと心によみ切やうにすべし
ぬきすは實實とかけり、竹をあみてへりなどを付てそれをたらひ
にわたしてその上にて手をあらふものなり、水の響をほどばしら
さじがためなり。萬葉四「いにしへの人のませるさびの酒やも
はばすべな實實たまはん」延喜式、主殿寮式云三年一請實實一枚。
うつばに白かれの御たらひぢんをまるにけつりたるぬきす白か
のはんさう白かれのすき箱などかけり。(古)此詞歌にむかへ見る
に彼女母のかたへに居て手洗ふ時に彼男のこねを母の腹だつを見
にてぬきすを母のなげやりたるなるべし。いとほらだつ時にて見
る物ふる、物にあたる也。(今本には、又もいかずなりぬれば女の手
をなげすてみづから、とあり、かくては説のおほなるものにてことわりなき事)△
實實は多く竹にてするをうつば物語に白かれの御鹽盆をまるにけ
つりたるぬきすしろかればはにさう白かれのすき箱ともいへり。
願註。老たる女の物づゝみなくなりてするわざなるべし此文には
さるさかなきわざをみかけり○萬葉にいにしへの人のませる黍
の酒やもはすべなぬきすたまはん。主殿式云三年一請實實一
枚。(新)これは親のゆるしてむすめにすませたる男の一夜きて又
もこねは女がたのいみじきはぢなれば老たる親のきふにはらだち
たる也。かよひそめて三夜はよがれせぬならひなるを一夜の後、
ぬはげにはらだつべき事也かし。手あらふ所にといへるは朝むす
めのおきて手あらふ所に親のきてよべも男の見えざりし事かくて

は入めも見ぐるし、かゝるあだ人にあひそめける事よと疑をさい
なみ男をうらみとかくいひはらだけるよしをいはずしておもは
せたる文也、心をいれて見るべし。たらひのうへなる貫をとり
てなげたるは今の世にもはらだつかりなげうちとするわざな
り。△おやはらだちて。とりてなげすければ。塗置二本により



てくはへつ。此段今の本は詞あまたおちたるものにて聞えず。は
にさふをもて水を手をそぎかくる時したにおきて水をうくる器
を盥といへり。さればうくる水をちらさじとぬきすをうへにおほ
へり。ぬきすとは竹をあみたるもの也。それをなげすつれば手あ
らひつる水のたらひにたまりてあるに影の見ゆる也。みづか
らとはかみに親のはらだつさまをいへればこれは疑のうたな
りこととわかるよし也。古意にはみづからと云語こゝに用な
しといはれたるはいかゞ此詞なくしてはとのはぬ文也。たら
ひの水になく影の、塗置二本にしたがふ。(按こゝの文に見
えたる「ぬきす」を始めて當時の調度を知るの料に供せむがた
めに茲に類聚名物考に載せたる古重伊勢物語の繪をかゝげた
り。(これは下巻分といへる人の筆) 尙「ぬきす」につきては後世
のふみながら安齋隨筆にも見えたり。同書卷十五云「拔簀と
云ふ物は小さき簾をたらひの上にはうらおはひて手水をかくる
なり。如新すればはんざうにて水をそぐ時水飛びちらすぬ
きすよりも下へ水ぬくるなり。古へのぬきすは如何あり
けむ、不知。近ごろ桃園院大嘗會の時用ひられし、拔簀を
見しに竹を丸く削り八十五本ならべて白き緒系四筋を以て五
所あみたり。竹の長さ一尺四寸五分ふとさ経り一分半なり。



拔簀
をて
堅く
お

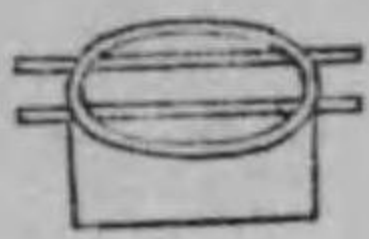
アミヤ
ウ知圖

このぬき簀を角のちひの上に打ちおほふなり古は角らたひの

角を手洗ふ人の方に向けて置くなり角にて装束の袖をおさへる爲
なり○拔簀のたてやう手洗ふ人の方をばたらひのふちにかけて一
方をばたらひの内へ落し入る是古風なり水の向ふへ流るゝ爲なり
今は角たらひの角を横にして簀も横にして兩端ともにたらひのふ
ちにかけて置くなり古風は用方を事とす、今風は見體に拘る故遠
ふなり又云ふ古へのたらひは曲にて角をつけたり。

角たらひ
曲物ニシテ遠ナリ也、白
木ヲ用フル事アリ、神事
ノ手洗水ハ白木ナルベシ

内マデスキトホス手ノサキ
ニヲ出ス口ニスル也サレバ
半挿ト云和名抄ニ見ユ



○我ばかり物思ふ人はまたもあらじと思へば水の下にもありけり
【舊註】(調)女の我影をみてのおもふは唯ひとりとおもふに水の
下にも又ありといふなり。【新註】(勢)わればかりは我ほどになり
影も顔にしたがひて物思ふさまに見ゆれば水の下にも我ごとく物
思ふ人の有りけるよとよめるなり。貫之集屏風の繪に女どもの河
のほとりにあそぶ。我身またあらじと思へど水底におぼつかなき
は影にやはあらぬ。古今集に「ふたつなき物と思ひしを水底に山端
ならで出る月かげ。拾遺に貫之「照月も影みなそこにやどりけり
にたるものなき戀もする哉」(古)こは貫之集に屏風の繪に女ども
川のわたりにあそぶとて、我身またあらじと思へど水底におぼつ
かなきは影にやはあらぬとあるをもて作りなしたるならん。古今
集にも一もとおもひし菊を大澤の池の底にも誰か植ゑけんなど
の體にてなまなくくむに感あり。(新)情のせむなる時はかく

おろかなる事を思ひもいひもするものにてあはれふかし。我はか
りは我ほどと云意と思へばのとは下の句のかしらにつけてよむべ
し。古今集ひとつとおもひしきくを大澤の池のそこにもたれか
うみけん。同集ふたつなきものと思ひしをみなそこに山のはなら
ていつる月かげ。

○とよめりけるを、とざりけるをと、進して水口に我やみゆら
ん簀さへ水のそにてもろと系はなく。【舊註】(愚)水くちは田
へ水をせき入る口也。我がげが水にうつりて見ゆれば蛙水そこに
てなくとよめり。女の歌も水のその影をいへれば男の返事にも
又やうをかへてよめる也。(直)かのとざりける男は業平也。水口
にかはづ一なげは徳の蛙が鳴也。なきやめば又徳がなきやむ也。
みな口の蛙がなげは徳の蛙が鳴くやうにわが思ひがそなたにある
によりてそなたのおもひがある也。わが思ひがそなたの思ひの始
になる也。【新註】(勢)女の歌に我ばかり物おもふ人の水の下にも
有けるよとみづからの影をよめるを男それは我やみゆるならん物
の心しらぬ蛙さへ水の下に有てはひとりはなかつもろとよめりなげ
ば君にのみもの思はせて我はおもはざらんやもろともにおもへば
同じやうには見ゆらむといふこゝるなり。(古)水底に泣影のある
はもと我影のうつりてもろともになくなるぞたとへば水口にひと
つの蛙が鳴ば底よりも聲あはする物なるが如しとおしつけてよめ
る也。水口とは田に水をせき入る所を云たゞまづなく蛙をいはん
料にのみいへり。諸聲はこゝは男のなくに女もともに聲あはする
也。(愚)彼とざりける男聞つけて註に今の本には立聞てと有さて
もよしといはれし女の手あらひけはひなどする時分に一夜来てこ
ぬ男のあらはに來て立きよなどすべからずこゝは古本にきよつけ

てとあるぞよき。(新)きいて塗木にしたがふ。此歌の意は心なきかばづさへ水のそこにてひとりはなかつもろ聲に鳴なり、ましてわが心はそなたにゆきて君とともになくなればその我影のたらひの水に見ゆるにぞあらんといへる也。そのたらひの水にといふ意を蛙の事にしてたたる歌ゆゑにみな口とはいへり。たらひの水はみな口の水のたまれるに似たればたとへていへるにもあるべし。古註又古意などにみな口の蛙のまづ鳴むるよしにとかれたるはわろし、さるこゝろにはあらず。

あふこかたみ

○昔、色好みなりける女、出ていにいけれ

ば、いふかひなくて男、

なごてかくあふこかたみと成りぬ

らむ水洩さじと結びし物を、

○むかし色好みなりける女、出ていにいければ、いふかひなくて男などてかくあふこかたみとなりぬらん水もらさじとむすびし物を〔舊註〕愚女は小野小町をいへりかたみは竹の籠也、それをあふ事のかたみにそへたり。水もらさじとは堅固に契をむすびたる心也。むすぶとは竹を籠にくむことをいふ也。水洩不_レ通と云からの

調も有物也。(直)あふこは逢期也。それをかこによせてよめり。なにとて逢事のかたくは成つらん、さしも水もらさじとこそ契しが籠に入たる水の跡なきことくなれると也。〔新註〕(愚)などてかくとは何とてかくなり。あふこかたみとは逢期のありかたきにてあはん期のたきとつゞけて云る心なり、期を籠にこそへたると云説は誤なり。かたみと云に答書をかけたなり。水もらさじとむすびし物とは桶などに汲水のもらぬことくながくありてあひみむとこそちぎりし物を籠にくみ入る水のおとなきが如くちぎりなむきていていにいけるよとなり。出ていぬるを水のりいいてゆく心によめるなり。後撰「うれしげに君がたのめしことのはは、かたみにくめる水にぞ有ける。」同「むすび置しかたみのことになかりせば何にしのぶのくさをつまし。」金葉「あふここのいまはかたみのめをあらみりてながれん名こそをしけれ。」(古)前なるは心みじかき女の出て去是は色好める女にて夫の見るめなくて心遅きをきらひて出たるを云か、夫のなまわるきうしるでを笑へとて作れるなるべし。さらすは色このみなるてふ詞をいたづらにおかんや、例の此文の意也。深く契むすびしをいかにかくあひがたきやうにはなりけんを籠もて詞をなしたり。さて女の心をよくはからぬおろか男を云なるべし。期とは字音なるを此時はやくかゝる俗言は有し也。(かけるふの日記にも此語見えた)△かたみは竹籠なる事神代紀にみゆ、さて籠もて水をくめるてふたとへ古き諺なりけり、後撰集にうれしげに君がたのめし言のはは、かたみにくめる水にぞ有ける此外にも多かり。頭註。あふこは物を荷ふ木也枋の字新撰字鏡に阿保古和名抄に阿布古布保は通音也、さて逢期にそへたる歌古今集にも見ゆ。(新)女の色このむこゝろより

も今日の今宵に似る時_レは_レなし

○昔、男女乎盗而往道爾水有所爾而夫將吞哉與問爾爾領拜計禮波結而爲吞

然將而往爾率爾墓將成 壯士本所江還爾彼水飲志所爾而

大原哉堰之志水尾結上而飽哉與問志人者筭等

○むかし春宮の女御の御方の花の賀にめしあげられたりけるに、近衛づかさなりける人。〔舊註〕(愚)女御は二條の后也。陽成天皇は貞觀十一年二月一日太子にたちたまふ、御とし二歳也。これより御母二條女御を東宮の女御と申侍る也。古今集第一文屋のやす秀が春の日の光にあたるとよめる歌の詞に二條のきさきの東宮のみやすん所ときこえける時とかけり。御やすん所は女御の御事也。(爾)春宮の母の女御なり。二條の后の御事也。勅物云貞觀十二年二月貞明親王爲皇太子子時高子爲女御依春宮母義也。去年十二月二十六日誕生高子廿七。花の賀別無調釋_レ紅葉賀、雪の賀など時節をさしていふ同事なり。賀は四十にみつる時はじめ

花の賀

○むかし、東宮の女御の御かたの、花の賀に、めしあげられたりけるに、近衛づ

かさなりける人、

花_レに飽_レぬ_レ歎_レきはいつもせしかど

とする也。いづれの時も十年一にみつべきの祝也、命なれば四十、寺にして壽命経講誦する也。山海の珍味を集めて酒宴ある也(闕)儀参、めしあづかると讀也。奉行などす也。業平は忠仁公染殿の后などへ家禮などの故に御賀の奉行をもせられたるか又御説に奉行すると見てはいかゞなり、唯今の席にめしくはへられたる也。【新註】(勢)春宮、女御は二條后なり、貞觀十一年貞明親王春宮に立せ給ふ二條后御腹なり八年に女御とならせ給へば春宮の女御とは申すなり。此賀はいづれのといひづれの御ためと知らず。一條藤原御説染殿后四十賀をいこの女御し給ふなりと有ていとこの女御は二條の后なり、されども其比染殿后四十にはすぎさせ給へば知がたし。花の時を花の賀といひ紅葉の比有を紅葉の賀と云り。めしあづけらるゝはめしくはへらるゝなり。白氏文集尙典會。詩序云。時秘書監、狄兼善、河南尹、盧貞、以三年未七十。雖與會而不列。(古)此後また春宮の御息所と申す時てふ事古今集にも見えなれどおぼつかなき事也。まづ東宮のみやす所とは皇太子の嬪妃を申也。さるを皇太子の母儀を申也と人々おもへり、其證ありや、かの弘徽殿の女御を一の皇子の女御東宮の女御右大臣の女御など、源氏の物語に書しは轉々して俗語のまゝに書し也。打まかせては六條の御息所と申す前坊の御妃なればこれにて東宮のみやす所と申すの本を知べし。然て源氏物語の頃となりてはすべての語轉々せし事みゆるを古今集又此文などにし、轉せし語を書べうもあらす。(今案などの語源此文の語などにして古用は)然は高子を御息所と書たるは清和のまだ東宮と聞ゆる御時に参りて御息所がねにておはしつらんを以て古今にはおしてし、書たらんと覺ゆ。(こは其語多ければ下の大原野の行宮の條に事のついでに委し)

高子のまだわかくておはするほどの事なれば誰人をはひまぬらせけん計り難し。近衛司てふを例の業平朝とす、時は暗に貞觀六年三月左近衛少將となりし比を思ひて書るか、貞觀三年大原野諸の條の歌に今も似たれど其はまだ少將ならぬ時なるにそこにも近衛司なりける翁と書たれば時代をわざとかへて書し例の事也。今本には東宮の女御の御方の花の賀にめしあづけられたりけると有(二條后近衛司なり)是を以て二條の后の事とする時はかの弘徽殿を東宮の女御と書たるにむかへて母儀の事とは云べし。然るを古本にたがひ他にも古き物にはかく書るを見ず、よりて思ふに例の好事の此條の時代にかなほを煩らひて上下の詞を去且文をも書かへけんし。東宮の女御てふ事はこの文の比には云べき事とおぼえぬ俗語なれば也。○召上られてを今年に召あづけられてと云もあしからず、白氏文集尙典會の詩後に云盧貞以三年未七十。雖與會而不列。と有に似たり、されどめしあづけられては似つがはし。頭註。貞觀元年に清和即位同年高子五節の舞妓なれば清和東宮のあひだはいまだ参らざるに似たり然ども此時のさまとかくにさだかならず又すべて忠仁公のさだにて侍れば必参らずとも見えす古今集に書るさまなど論有り。染どの、後の四十の御賀といふもしひたる説にて用なしかつ時世もかなはず(新)東宮の女御とは東宮の御母女御を申事なり、古意の説はひがごとなる事はやく師もいはれき、御かたとは女御がたの御人の賀のよしなり。花のころあるを花の賀といへり。さて東宮の女御近衛づかさなりける人などいへるは二條后業平朝臣の事をほめかしていへる意なり。△めしあづけられたりけるに。近衛づかさなりける人。眞本にしたがふ。

○花にあかぬなげきはいつもせしかどもけふのこよひにはる時はなし。【舊註】(愚)女御の御事をおもひなげきてよめる也。(直)うへには御賀の體をよめり底には花にあかぬとは二條の后の御事也。かゝる折にもまされぬ思ひの有と、ころをいへり。此花の賀はたが御賀と云事をしらす也。(闕)此御賀たれと云事しらす、もし染殿の后四十の御賀なるべきか、能く勤ともおくべき所也。御説、常のなげきにてはなし、嗟嘆也、感動也、かんせいのかを云也。【新註】(勢)此なげきは愁歎にはあらず、嗟歎讚歎など云なげきなり。愁歎にも稱歎にも共になげきをつけば長息をつつめて云詞なり。ともあれかくもあれをとまれかくまれといふたぐひなり。萬葉に「花咲て實はなられどもなげきにおもほゆるかも山吹の花」。此なげきといへるいまのなげきと同じく山吹の花をほむるとてなげき息をつくなり。此歌上はけふの賀をいひて下は春宮の女御の御事をむかしをほめかしていへるか、そのときはなげきもまた愁歎の意なり。眞名本一段△昔男、女乎、盜而往道、爾亦有所爾而夫將吞哉、爾爾計禮波結而爲吞然將而往爾爾無慕將成壯士本所方往、爾彼水飲志所爾而大原哉、誓之志水尾結上而飽哉、與同志人者何等波。(古)花を愛あかぬ歎息は常にすれど今日の御賀にめづる花ばかりは又なかりきと也。さて心裏には彼神代の事も思ひ出らんとて昔ありし密ことの心をふくめて作れるが如くこれみやす所をおもふさまになせざるべし、彼大原やてふとくらべてすがたのおとれるにて知べし。なげきは長息をつつめていふ語にて物をめてよるこよひ又悲しき愁ひにあまる時みな歎息ある事にてこは感受があまりのなげき也。(なげきていふ言はむかしはかゝる時にもいへるを後世の俗は云)頭註。神代の事(神代の時のいふ事とおもへり何事にもいへるを後世の俗は云)頭註。神代の事

もとよみしは古今にてはたゞ其先祖の神を云也此文には戀の心に思はせたる也たゞかくも作るはいひつたへし事のなきてはあらじ此文の如くまてはななくともさる事は侍けん。○後の集に此歌をも業平のとてとれるはいかにぞや此文の外になき物を。昔男女乎盜而云飽哉與同志人者争等云々(勢)の下の語(けたれば略す)この一條古本に有りて今本には落たり、されど他の條の今本に有て古本にもれたるも侍れば古本とて己が見しはいと全き本にはあらざるべけれど有かざりの事は古本ぞよき。歌の意は所はもとありしまゝにて人のみあらざるにければ人はいづらいかにと更に云てかなしむさま也。且争等波と有べきをばの字落たるなるべし、かの日本武尊のうすひの坂にて橘姫の沈みたまひし海のかたをかへり見たまひて吾妻者哉とのたまひ。古今集に寝ての朝開の霜のふりはも又草のはつかに見えし君はもなどのには同じ。更に思ひ出てかれはいかにと聞ひてなげく語也。さて此歌は六帖に大原やせが井の水を手にくみて鳥はななくともあそびてゆかん、てふ歌をとりかへて作れる條なるべし。(此歌六帖に安持卿とて日せり古歌ながら奈良の朝の歌にあらず)古本に誓之志水と有をもて見れば山水をせきとめたる井か又はせきてふ所の名にも侍らん。然ば誓の清水とも又誓之井ともいふを略してせが井ともいふならん。(新)なげきは長息をつつめたる詞にて歎息なり一首の意は花を見あかぬ歎息はいつもせしかどもけふこよひは御賀のわざのめてたくおもしろさもへば花にあかぬなげきの格別也といへるなり。さてしたにはかの女御をしたひまぬらすれどおよばぬ思ひの歎息をほめかしたるにもあるべし。(按)眞本の次に載せたる一段は此物語卷冊の紛れたるものにして元より取るべからずと雖かこみて参考に供せり。

あふ事は玉の緒ばかり

○むかし、男、くはつかなりける女のもの

とにく

あふ事は玉の緒ばかりくおもほえて

くつらき心のく長く見ゆらむ

○むかし男はつかなりける女のもの。【舊註】愚はつかに見たる也。【直】ほのかにあひたる女なるべし。又はわづか也。【新註】(勢)萬葉に小端をばつくとおもはつともよめり、ほのかにあへりし人なるべし。(古)こはたましくわづかに逢たる女を云也。はつかは萬葉に小端の字をばつかともはつともよみてわづかなる事也。(新)男はあひだもおかつたがく、あはまほしくおもひて戀わたれど女のいとまれにはつかにのみあふゆみにはつかなりける女とはいへり。かく見ざれば歌につらき心の長く見ゆらんといへるにかなはず諸註みなときえず。

○あふことは玉のをばかりおもほえてつらき心のながくみゆらん【舊註】(愚)たまのをはしはしといふ心也。あふ事のはつかなるをいふ。ながくみゆらんも玉のをにかかりたる詞也。玉のをといふはみじかき物なればかくよめり。これによりていのちをも玉のを

といふなり。(直)玉の緒ばかりはいさゝかばかり也。體にあふことは露ばかりにてつらき心はながしといへり【蓬事】玉のをばかり名のたつはよしの、河の瀬つせのこと【新註】(勢)新勅撰五よみ人しらす。新勅撰には「つらきこゝろのながくも有かな」とてよみ人しらすと載る。玉のをのみじかきに對してつらきこゝろのながくみゆらんとは讀り。(古)蓬見しはたましくわづかにおもはれて常につらき心は久しきよなどてかく有らんと也。こは上と下とに心のすじことなる事を云てらんと結むる助辭の例也。よておのづからいかでなぞてなぞうたがひとがむる意こもれり、よておもほえてとおさへてらんとは云り。萬葉に、さゆらくは玉の緒ばかり名のたつは富士の高根の鳴澤のこと。これをとりて古今に、あふ事は玉のをばかり名のたつはよしの、川の瀬つせのことあるなどをみて今をば作れる物也。玉にゆく緒は長きもあれどこは短きをとりて上て云のみ。頭註。後の集に此歌末を長くも有哉とて入れしはいかにぞやかくうたがひの言なくて下をらんとよめたる歌古今集には多きをあつめてみるに皆本文に云が如上下意をこととしてきててにをはなどの言を上におきたればおのづからいかでなぞてなぞやうの心こもれり故に下にてらんといひて知しめ侍る一つの例なるを後には知る人のなくておさへ字なくともはゆる事さまんいへど皆わらしたる古歌のさる類をあつめてみる時はひとりわかるものぞかし。(新)あふ事はたまの緒のやうにみじかくしていかなれば我につらき君がこゝろの長くみゆることならんと云意也。あふ事のみじかければそれに應じてつらき心もみじかくあるべきにとおろかなる事思ひいふがせちにものおもふなりのしわざ也。

よしや草葉のならむさが

○むかし、男、宮のうちにてあるごたち

の局の前をわたりけるに、何のあたにか

思ひけむ、くよしや草葉のくならむ

さがく見む、といひければ、男

罪もなき人をうけへば忘草くおのが

うへにぞ生ふといふなる

といふを、ねたう女もおもひけり。

○むかし皇宮の内にてあるごたちの局の前をわたりけるに、何のあたにか思ひけむ、よしや、草葉のならむさが見むといひければをとこ。【舊註】(愚)あたはかたき也。なにほどのとがにあたのやうに思らむと也。草葉にならんとは、人の死てほどふれば其うへに草が生ればくさ葉ならんといふ。さがは不祥也。のらふ詞也。(直)みやのうちに禁中にてのこと也。あるごたちのつぼねのまへ禁中殿候の女房たちのつぼね也。わたりける人。業平也。御つぼね

よしや草葉のならむさが

たちの前わたりを過る儀也。歌の意は業平のさかりなりとも秋の如くしほる、時あらん物をと云也。機萬葉第八に「忘行つらさはいかにいのちあらばよしや草葉ならんさがみむ」(石上乙丸)此歌の下句也。それを取ていへり。【新註】(勢)わたりけるとは業平なり。さがは日本紀に祥の字をよめりよきことにもあしきことにもしるしある心なり、春夏をへてしげしとみる草も秋になればあさましくかれ行くことを思ひて業平によそへいひ出してうらむる意なり。伊勢歌に、我ために何のあたとてはる風のをしむとしれる花にしも吹く。(古)宮の中云々は後宮の内の女房たちの曹司住してゐるをいふ其女房の契りつる男今はわすれて何ともおもはて前わたりするをうらみて云やう今はかくてもあらめよしやうらみじよちかひに背ける男なればつひに死て墓の上に草葉の生たらん世をこそ見めと呪ふ也。或説にならんさがてふはただ草葉のなりゆかん末を見て今さかりなるも秋來ておとろへ枯んだとへぞとおもひあやまれり。日本紀などには生田をなりいづるとよみ今もあづま人は草木のおふるをなるといへり是古言にてこゝも墓に草の生るをしらしめて古本に將生と書るを見るべし。樂天が詩に、古墳何世人不識、姓與名化作路傍土、年年生春草と云り。△さがは吉祥凶祥ありて、これは祥にて氣さし也性をさがと云はうまれつきにてくせ也。惡を云はわるくせなり。これ皆めぐらして同意となりてありさますがたなどにも云なせり、こゝはありさまの意故に古本に能の字を書り。(能は能)頭註。今本にくさ葉之をばにまがへてそれにつきてとくもあやまれる説也。(よ)ごだち。或人御達の説はわるし。古本に見達と書るをこだちとよむべき證なりといへるは宜し古言には男女ともに子と稱ふる事其一二をあげん

を采り食ふ、毒なし、草花譜に、單瓣者可食、千瓣者食之殺人
と云、本經逢原に、其花起層者有毒勿食と云は、花を食ふこと
を云、唐山にては花の開きかゝりな採、貯て食料とす、集解に黃
花菜と云是なり今清商も挑來る、金針菜と云、單葉の者と千葉の
者とは、其種自ら別なり、然るに時珍の説に、肥土所生則花厚色
深云々、瘠土所生、則花薄而色淡、開亦不久と云は、花の單重
は土地の肥瘠に因るとす、甚誤れり、一種ヒメグハシザウあり、
一名きすげ、はりますげ(和州)葉短小長一尺許り、三月花を開く
形小くして斑なく、金黄色なり、漢名金萱(改)又一種セントイ
グハシザウあり、一名セツテイグハ、日光キスグ、葉長大にして厚く硬
し、夏月花を開く、形キスグより大にして金黄色、これも金萱
(改)と云ふ又一種スジグハシザウと云あり、葉に白き縦條あり
琉名文萱花(中山傳)又一種ベニスグと云あり、葉細小にして花紅
色、集解に云ふ所の紅萱なり、又一種水中に生じ、小花を開き黄
色なる者あり、これを水スグと云、集解に引ところの水葱是なり
其他品類多し、倭訓葉前四「わすれぐさ、倭名抄に萱草をよめり
わする、草とよめるも同じ、忘憂の漢名に本づきる名成べし、
今音をもよべり、ひるなども呼り、おもふにもと、美艸を見て
うさを忘るゝ意にや、泛く指る詞なるべし、詩經の意も亦同じ、
一艸に限りたるは後世の事にや、藏玉集に葦とも見え、又紫苑を
もよみ、倭類は櫻をもよめりといへり、古き物語に、塚墓の上に
生る草の名也ともいへり、伊勢物語に、つみもなき人をうけへば
わすれぐさおのが上にぞ生といふなる、大和物語に、しのお草同
物のよしいへるは、伊勢物語に別物かわざとこしらへてまへてい
へるを、取あやまれる成べし、今關東にて忘草といふは、しのぶ

しづのをだまき

無條

○むかし、男、ものいひける女に年ごろ
ありてく

いにしへのしづのをだまき繰り返
しく昔をく今になすよしもがなく
といへりけれどくなにも思はずやあ
りけむく

○昔、男、物いひける女に、年ごろありていにしへのしづのを
だまき繰り返し昔を今になすよしもがなく(舊註)「愚古今集に
『いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりはありしも
のなり』しづのをだまきといふはげす女の草をうみてまきたるを
へそといふを、しづのをだまきともいふ。さていやしき、とつ
けてよめり、この草をばながくうみてくりおけるものなればくり
返しともいへり。又しづのをだまきをいやしきかたばかりによめ
る事もあり。此歌はむかし物いひける女にうみてやればむかしな
いまになさばやといへり。(闕)歌の心は明也。いにしへといひ昔

しづのをだまき

に似たる小鳳尾草也、續古今集に。忘るゝも忍ぶも同じふる黒の
軒端の草の名こそつらけれ、とあるは、大和物語に据て誤を傳ふ
るなり、攝州住吉の社に忘草の神供あり、御厨より獻す、秘して
人に傳へずといへり、新後撰集、墨江の朝みつしほに御蔵して戀
わすれ草つみて歸らん。(新)いにしへにうけひといふは人のうへ
をいのりてあしくもよくもなす事なるを中むかしにはあしくなす
かたにのみいへり。此歌の意はつみもなき人をいのりてあしくな
さんとすればかへりておのが身のうへにあしき事ありといへるに
て法華經の普門品に咒咀諸毒藥所欲害身者令彼觀音力運著於
木人といふこゝろばへなりわすれ草のおのうへにおふとは人
にわすらるゝをいふなり。おのがうへとはおのが身のうへの意也
古意の説はわるし。

○といふをあたう女も思ひけり。【舊註】「愚」これをかたはらにき
きてれたむ女ありと也。かくのろしくいひれたるそばにてき
く女のかたうどをしてれたましく思ふと也。【新註】「勢ゆふなく
ては人をもうらみぬことなれば女のならひにてれたむなるべし。
(古)こはもとよりさるよしありてかくもいひかはせしをしらむ
詞なるべしおほよそ人ならばかくはいはじやとはとて他の女の新
お也。(新)かみによしや草葉の云々といはれて男のれたく思ひて
つみもなき云々の歌よみけるをきして女もれたくおもひける也。
もてにをはは男にかけて見るべし。△れたう女も思ひけり。染
本にしたがふ。れたむ女もありけりといふ本につきてとける説
もはみなしひ言なり。

といふ同事也 今などかくよまんは宜からず、これはいにしへの
しづのをだまきといひてむかしを今にくり返したきといふ程に句
をへだて、心かはればくるしからず。【新註】「勢しづは日本紀萬
葉共に倭文と書り神代よりある布の名なる故に古歌にもいにしへ
のしづとよめり、舊事紀云復令倭文遺祖天羽種織神織文布云
云。萬葉第三赤への鹿鹿真間織子墓を見よまれたる長歌にも

『いにしへにありけん人のしづはたの帯解かへて』とあり同第一に
もいにしへのしづはた帯とよめり。古今には『いにしへのしづ
のをだまきいやしきもよきもさかりはありしものなり』また萬葉
に倭文帯とて類にもぬきにたちて奉る物によめり、是によりて延
喜式諸祭の註文にもあまた見えたり、賤がうめるをだまきとおも
ふはあやまりなり、なだ巻は麻環なり巻子のことなり、布おらんと
てはそれをくりかへせば下の句をいはんための序にいへり。むか
しものいひける女につかはせばあひみし時にいまをなさばやとな
り、いにしへとむかしとおなじことなれども古歌はそれをいたは
らぬゆゑに此いにしへはさきに云ごとくしづにつける詞なる故に
くるしからぬなり。もろこしにも卑賤を布衣といへば此國にも倭
文は民の着物にせし故に衣によりていやしき者をしづとはいへる
なるべし。(古)物いふとはあひたる女を云。こは古今集に『いに
しへのしづのかだ巻いやしきもよきもさかりは有てふ物を』とて
よきはもとより賤しきも一たび身の榮えはありしぞと考て昔をし
のぶ歌なるを今は端詞を作り歌をも少かへて中絶たる女に昔の如
く立かへりてあはれやと云歌とせり。倭文は皇朝の神代にはじま
りて文ある布也。萬葉に古へのしづ織いにしへのしづのをだまき
とよみていにしへてふ語は倭文に冠らしめたるのみなるを古今集

の歌の頃よりはかく下の句にかけてはたからせたるは後の體なるなり。なだ巻は其倭文を織料の巻子也。纏麻もて外を圓に内を空しく巻たる故に麻環と云なるべし。さておらんとて機に延かくるまでは巻子を幾度もくりかへしなどする故にさる詞のあるもて繰かへし昔を今にてふ序とせり。頭註。神代紀に倭文遠祖建羽楯云々古語拾遺云建羽楯命織文布と見えて倭文布は青と白の麻をおれば文の有けん釋日本紀に大藏の古布を證とせしが如し今云しま織の類とおぼし也。さて日本紀の歌に大君の御帶のしづはたとよみたればいにしへは貴人の御着料なる事しるしざるを或説に賤夫が着る物故にしづ布といひ又此しづ布を着る故に賤夫をしづと云など云はいとあやまれり賤は下の心にて別の事なり式の神供の料にもみゆ下賤のみ着し物ならば神に供すべきはされど歌には同辭別言にて心詞のおもしろくなるには倭文を賤に轉じいへるをば事の本を明らかにせずして歌を守りて古言をとんとする時はたがふ事多かるべしこは萬葉に多けれど摘て委しくがたし辭考にいへばこゝに略せり。(こゝいにしへの倭文のなだまき。或説にいにしへむかしはひとつ事なり。今はかくはまむべからずといへり古言學ばぬ人はすべてかやうの事を教へだちていへりいにしへとは過去し方を云なりむかしは古き世の事を今に對へてしる義なり此歌それをよくいひわかつたるものなり又倭文織は今の織機にもいひさまにも文なせしし織と云類のよしいはれたり大藏の古布いひなりし物ぞ其さましられれど憶ふに今の世に浮織と云物あり色を敷したに素きにもたて横又はたてさまのみにして絲すじを浮沈せし文布あり浮はしづむの反對なる言なればむかしは沈織といひしが今は浮織とよぶこはあとなし事ながら事のついで

に云のみ。(舊)ものいふとはあひたることをいふ。男といふもじいづれの本にもなきはおちたるなるべし。いにしへのしづのなだまきはくりかへしといはんための序也。昔あひける女に中絶て年へてのちこひしくおもひて又あはまはしきよしをいひやりたる歌なり。
○といへりけれどなにも思はずやありけむ。【舊註】(直)女はなにともし思はずや有けん也。伊勢がことば也。人の行へをしらねばかくつき侍るにや。【新註】(古)こは只女のつれなきを云のみか。(昔此詞をそなへしは歌の上にいしへのしづと有るを此男女のむかしはやくしかりしてふ心にたりなしてさて思は今にいしへのしづと有るはよろしくなりてあはれはやくいへど思もせぬをふくめていへるか)【新】中たえし男なれば今さらにあはまほしげにいふともたのむべきにあらねば、女の何ともおもはずやありけんと記者のいへるなり。(按)古今集の雜上、題しらす、讀人しらすの歌、古のしづの巻環いやしきもよきもさかりはありし物なり。てふにつき作爲したりといへる古意の説はいかゞ也。これまた古ありし歌なるべし。さればこの段塗本になしといへども眞定兩本によりて削らす。

こもりえにおもふ心

○むかし、男、津の國むばらの郡にすみける女にかよひける、このたびかへりなば、またはこじと思へるけしきを見て、女のうらみければ、男、

あしべより満ちくる潮のくいやまし
に君に心を思ひますかな
こもり江に思ふ心をかか
舟さす棹のさして知るべき

るなか人のことにては、よしやあしや

○むかし男津の國むばらの郡に住ける女にかよひける、このたびこもり江におもふ心

かへりなばまたはこじと思へるけしきを見て女のうらみければ男【舊註】(直)此郡蘆屋の里は業平領知にて京より折々かよひける也業平此たび京のぼりは又はとはれまじきけしきと思へる女をなぐさめて業平のよめる歌也。【新註】(勢)葦屋の里業平の領地なり後に見えたり和名集兎原郡に芦屋郷ありそこにてかよはれる女の有なるべし。京へ歸るをいくといふなり。此度業平の歸りては又はこじと女の思ひて憚たる氣しきをなぐさめてよめるなり。(古)和名抄攝津國の郡名に兎原とあり後にむばらと書るはあやまり也。頭註。かよひけるにて句なり古本往而と書しはいにとよむべし今本にはゆきてとあれどこは京よりこゝにかよひたる男とみゆれば京へ歸るをいぬると云べし。(新)かよひけるの下にかといふてにはをいれて見るべし。△すみける女に。塗本によりてくはへつ。かよひけるの下なる女といふもじ塗本になきぞよき。けしきを見て女のうらみければ。塗本にしたがふ。
○あしべより満ちくる潮のくいやましに君にこゝろを思ひます哉。【舊註】(愚)萬葉集、山口女王歌上句はおなじ、下句は「おもふか君かわすれかれつる」とあり。いやましはいよ／＼ます也。しほのさすが次第にふかくなる心也。(直)萬葉に蘆べよりみちくるしほのくいやましに思ふか君かわすれかれつるとよめり。是は下句ばかりをかへたり。蘆べのしほは上へは見えぬどもふかきもの也。上にはうすく君をおもふやうにみえてぞ有らめと底に深く君を思心有と也。【新註】(勢)萬葉第四に「あしべよりみちくる蘆のくいやましにおもふか君の忘れつる」。此歌の末をすこしかへたるなり。あしべより蘆のみちくるは漸く／＼にふかくなればたとふるなり所に似つつかはし。また萬葉に「十二」みなとわはみちくるしほの



いやましに戀はまされど忘れぬか
も。又長歌の略「ナミ」うみをなす長門
の浦に(安藤)朝なぎにみちくるしほの
夕なぎによりくる波のその鹽のいやま
す「」にそのなみのいやしく「」にわ
きも子にこひつゝくれば云云。菅家萬
葉に「あしまより満くるしほのいやま
しに思ひまさるもあがね君かな。」(古)
こは新撰萬葉に「声間よりみちくる沙
のいやましにおもひませどもあがね君
かな」てふを少かへて作れる也。さて
津のくにの海邊のしげき声べよりみち
くる沙は見えずしてまさりゆくにたと
へて目にこそ見えざらぬ我心にはいや
ましに君をおもひますものを立かへり
こざらめやといふ也。女のおもひなげ
くけしきを見とりて男のなぐさめて
める也。且今本にはわろき事おほし。
頭註。新萬の歌は萬葉にあしべよりみ
ちくる沙のいやましにおもふか君のわ
すれかぬつるてふをかつんかへたる
也然は此文にはいづれかとつるとも
しられど詞の近ければ新萬を引のみ
(新)あしは海べたに生るものなれば磯
にしほのみちくるを声べよりとは云な

り此よりはにと云におなじ。古今集の歌の詞書に山川より花のな
がれるをとおもふも山川にと云意なる事おのれはやくさき草にい
ひき。さて一首のこゝろは声べにみちくるしほの見るがうちにい
やましにますことと君に心をおもひますかなといへり。かなと歎
息したるはさて「」かくまでも思ひの深くなるものかなといひて
心かはりやすると女のうたがひうらむるはひが心えぞといさむる
意をこめたる也。さて声べといふを拾穂古意などに声べよりみ
ちくるしほは見えずしてまさりゆくにたとへて目にこそ見えざら
ぬわが心にはいやましに君をおもひますと云意也ととかれたる
はしほのいやましにと云詞にかなはぬ説也。そがうへによりをい
づくよりいづくにと云たぐひのよりと見られたるもあやまり也。
しほは沖よりこそみちくればいかでか声べよりみちくることのお
らんこのよりはにと云意に見されば聞えず、これは沖のしほはま
すも見えわが声の生たるほとりのうみべたにみちくるしほはい
やますがよく見ゆるにつきていへる也。(按)萬葉集山口女王贈大
伴宿禰家持歌「從藤邊滿來磯乃彌益荷念歎君之忘金鷄」後に新古
今集にも入れり。
○かへし。こもりえに思ふこゝろをいかでかは舟さす「」のさして
しるべき。【舊註】(愚)こもりえにおもふは心にこめておもふ也。
さしてしるべきはさしだめてしらばやといふ也。下の歌に「み
ちめかるかたはいづくぞさほさして我にをしへよ海士の釣ふれ」
さして詞これと同也。(直)こもりえは古江也。落葉もつれ草も
しげりてみえぬをいふなり。眞實のした心は何としてさしては知
べきぞ、さるとは淺く見えたるをあらはれさせてふかき心を見
やと也。(剛)こもりえと云は草など生しげり木かげなどのたれ葉

にうづもれなどして、そことのみえず、深き江也。あしべのしほ
のごとくふかきとは承れ共こもりえはしられぬものなれば御心は
しりがたし。されば小舟に棹のさして知べきと云り。さりとは
あさく見えたり、哀深き心のみやと云也。【新註】(勢)續後撰戀
一よの人知らず。こもり江とは草などの生て見えぬを云なり、下
に思ふこもりえはさもこあらめとこもり江の深きあさくのみえぬ
如くさしだめてしからむとはいかゞしらんと云こもりえをこもり
江と云縁に舟さす棹のさしてとはそへたり。(古)こもり江とはお
くれる歌の音邊云々てふなうけたる詞にて繁き声にこもれる
云、さて其音間さす舟のみえぬをもたとへて心のうちにこもれる
事いかでさしてしらるべきやといふ也。頭註。ある説に此歌を
草おひしげり又は木葉などにうづもれたるを云と侍るはこりにか
なはずいかで詞書とおくる歌とを忘れけん。△こもり江は萬葉に
三津の崎波をかしこみこもり江のと有は舟人の風浪を避べき島か
げの入江などのこもりかなるをいひてこもりとは異也。今は同集に
絶沼の從下はこひん云々又ゆくへなみこもれる小沼の下思になど
の草陰りて見えぬをいふ也。されどこは津の國の事にて且おくれ
る歌をうけたれば声にこもれる江をいふのみ。(新)君が心のうち
にこめたるおもひはいかでか推量してしらるべきと云意を江とい
ふ縁に舟さすをさしてとはいへるなり。さしては推はかりて
と云意也。こもりえは萬葉集の歌にみつの崎浪をかしこみこもり
江のとよめるやうに山陰にこもりたる江なるべし。古意にこもり
沼とおなじ意にて声にこもれるならんといはれたるはいかゞ沼は
ちひさきが野などにもあればこもり沼は草生しげりてこもれる沼
なるべく江はみきはに声のしげりたればとてさいふべしやは。

○るなか人のことにはよしやあしや。【舊註】(愚)つづくにむぼらのこぼりの女なればぬなか人といふ、それがよめる歌にてはよしとやいはんあしとやいはんと也。【新註】(勢)和名集云楊氏漢語抄云田舎兒(和名并奏)いなか人のいへるにはくるしからずと思へど世上の評判を待意なるべし。(古)末の巻のおなけ免原の郡声屋の郷なる女「わたづみのかざしにさすといはふ藻も君がためにはをしまざりけり」てふ所に田舎人のうたにはあまれりやたらすやと書たるもおなじく難なしてふ意なるを猶人のさだめ待やうに書る也これも一の文のさまぞ。頭註。土佐日記におぼつかないけふは子の日か蟹ならば海松をだにひかまし物をといへる海にて子日の歌にてはいかぢあらんと書るに意相似たり。(新)此歌どもぬなか人のことばにしてはよしと記者のおもへるよしなるをまことにのみづからよめる歌なればよしとさだめてはいひがたくてやとうたがひあしやといふ詞をそへたるなり、むかしより此意を見しりてとける人なし。(按)田舎人云々の評語は記者自からいへるものと説一應聞えたれどこの處諸本の間とりんなるを思ふになほ後人の評註なるべし。而して田舎人といへるは津の國にすめる女なればいへるにて末の巻同じく免原郡あしやのさとの女わたづみの云々の歌のところにも田舎人の歌には云々とあるに同じ。

いへばえに

○むかし、男思へつれなかりける人のもと

いへばえにいはねばく胸のさはが
れてく心くひとつに歎くころかな

思ひくいていへるなるべし。

○むかし男つれなかりける人のもとに、いへばえにいはねば胸のさはがれて、心ひとつにねげくころかな。【舊註】(愚)いへばえに、いはんとすればえいはずと也。いはれば又胸中にさはぐ也。(調)詞書を心におきて此歌をばみるべし、いはんとすればえもいはれず又はねばわねにみちてさわぐやうなり。さるほどに心ひとつになげくとなり。心ひとつにはよく心を付べし。三界唯心外無別法心佛及衆生などの心にや。【新註】(勢)いへばえには古註に、ひえずといへる然るべきか萬葉に不知と書てしらにとせり。續日本紀にもおなじくしらにとあればなり。またはいへばえいはねこゝろといへりいへばえもいはれずいはればわねにさはがれてふたつのあひだのあらそひてつれに心ひとつに歎くとなり。六帖いへばえにいはねばくるし世の中かなげきてのみもつくすべきかな。同。いへばえにふかくかなしきふえたけのよこみやたれととふ人もがな。源氏須磨に中納言の君いへばえに悲しう思へるさまを入しれずあはれとおぼす。(古)君の心づようなびかぬにつけて我

は物おもひなげく心のほどはいひもえられずはたいはであれば胸のうち堪がたうせんすべなくてたゞ心一つになげきつゝなるを思ひかりたとへたるなり。六帖にいへばえにいはねば苦しよの中をなげきてのみもつくすべきかなてふもて作れる條か。(新)えには不得也萬葉に不知をしらにといへるにおなじく不知にといふはぬの通音也いはんとすればいひえずの意なり。一首の意は人のつれなきをふかくうらむるには言のはおぼればいはんとすればいひえずうらみはらだつてもそのよしをいへばはるけてむねのしづまる事らあらんにいへればむねのさわぐなり。かく人にいはず心ひとつになげく比かなと歎息したる也。△むねの塗本にしたがふ。むねに。とある本はわろし。

○おもひくいていへるなるべし。【舊註】(愚)おもなくては面目なけれどもといふ心也。つれなき人をしひてしたへばおもなくていへるなり。(直)此つれなき人に何とよみてやるともなびくべきにあらずとおもへどもしひてよみてやる也。【新註】(勢)日本紀に安措をおもなしとよめり。萬葉一、よひにあひてあしたおもなみかくれにかけながきいもがいはりせりけん。是等は常に面目なしと云詞なり。いまこゝにいへる源氏物語紅葉實に源内侍が老ての好色を云におもなきのさまやと見たまふもにけれども書き。また玉がすらすこしひかりみせむとやあまりこゝろにくしわたらひたまふへば火をかへげてすこしよすおもなの人やとすこしわらひたまふと書などおなじ心におもつよきこゝろなりたびつれなきめにもこりす此歌よみて遺すを云なり自記の詞にや。(古)いとつれなきはさばれともあらずまげつる恥をすて、猶かくよみてやれるならん。△面なきとは顔強にむかふ評也。是に本末の用ぬざ

玉の緒を泡緒によりて

あまり萬葉に暮にあひて朝面無み隠にか云云。又よひにあひて朝面蓋隠野の云云(此二箇今本の訓はあやまれり面蓋も右に依におもなるとよみて且おもなるとは面はあする事と相照してしるる也)これらは面弱くはづるをいふのみにて本也。源氏物語たりに源内侍が古がたう色めくをおもなきのさまやと見たまふも隠れと書るは面はぢすべきをも猶恥ぬをよそよりいふ事としたる也。この文にも源氏にももちぬたる如く面はぢすべきを猶恥すしてよみてやるてふ意と見ゆ。(新)いへばえにといふせちなる意の歌よみておくるは一とほりの事にはあらじ思ひくいていへるなるべしと男の心のうちをおしかりて記者のいへる也。△おもひくいて塗本にしたがふ他本にはおもなくてとあれどこゝにかなはず。ひく、ななくにうつしあやまれる成べしかなのかたちよく似たり。(按)思ひくいて云々の評語は記者の自記にあらじ、前段田舎人の云々の註を合せ見るべし。

玉の緒を泡緒によりて

○むかし、男、心にもあらで、たえにける女のもとに、

玉の緒を泡緒によりて結べればくた
えての後もく逢はむとぞ思ふ。

○むかし男心にもあらでたえにける女のもとに。玉の緒を池はさ
 によりてむすべれば絶ての後もあはんとぞ思ふ。【舊註】(愚)あは
 なとはあはせてよれるいと也。かくよりあはせたるいととはたえ
 れどおのれとより合てもとのごとくなるやうにたえたる申なりと
 も又だちかへりあはんとよめる也。(直)玉の緒はいのちの事をい
 へども是はたゞ緒とはいはんため也。あはなとはあはせたる緒也。
 かつ糸はむすばる。堅く合せてよりたるは引はなせ共やがて、
 もとのごとくよれあうてたえはつる事なし。そのごとくたえて後
 も又あはんとよめり。【新註】(勢)あはなをふるくあはせたる緒と
 いへるは誤りなり。此歌は萬葉四に玉の緒を沫緒によりてむすべ
 らばありての後もあはざらめやも。此歌を少かへたり彼集に沫緒
 と書り後も水のあはによせてよめり。昔之春くればたきのしらい
 といかなれやむすべどもなほあはとみゆらん。萬葉集上水あはに
 むすべらばなればかざすひかげにゆるぶばかりを。心からは
 絶すきはる事など有てたえにしなるなればむかしむすひしちぎ
 りのまゝに後もあはんとぞおもふとよめり。(古)こは相思(ども
 爲方なき故有て絶たるなるべし。歌は萬葉に玉の緒を沫緒により
 てむすべらば絶て後にもあはざらめやも。てふを少かへて作れる
 條也。萬葉にては玉の緒は數の糸してよれる糸をもて沫て不結び
 かつにむすべる也。其緒のごとく共に心の糸をより交しおかば今
 こそあれ在歴て後にも必あひてんとなぐさめてよめり。此文にと
 りたるも上の句は同じく意にたとへたり下を絶て後にもとかへた
 るはおほく糸をよりてむすべらば絶たるがごとくみゆるも猶
 残るすじ有て切はてぬに譬へたり端に心にもあらで絶たるてふ即
 たえたりとみゆるも共に心の切ぬを此句に交へて意得さするもの

也。萬葉の歌のうへに今一すじの巧みをそへたる例の記者のしわ
 ざ也。頭註。在て後ありつゝもなど古歌に云は皆ながら在事也
 或説に片糸はむすばるれどより糸は引はなては本の如くよれあ
 ひて絶はつる事なきをいふ也といへるはいかにぞやたえて後とい
 ひ端にも絶たる申なる事みえたるを右の如くはよりめをゆるむ
 るのみにて絶ると云物にあらす此歌はし書とてらし見るにこそ意
 はきこゆれば作りかへたる物なれば塞によくとのひたるにあ
 らす。△沫緒は緒の結び形の名也。此緒をばよりたる糸もてむす
 ぶが故に歌によりてむすべるとはよめり、此わかちをば意得ぬ人
 あはせ糸もて結ぶ故にあは緒と云名は有と思へるはあやまり也。
 本より合せ糸を用うれど沫緒といふはむすびかつたの名のみなり。
 いかゞなれば和名抄に結葉形如沫緒此間有之和名加久の阿和
 とあるは此唐くた物のたの彼あわ緒と云むすび緒に似たればい
 ふ、すなはち阿和の假字もいにしへにたがはす古史萬葉等に水の
 沫とわあ緒の事をばあわと書き合はあはすと書くいにしへあわと
 あはすとをひとつにいひし事なしこれを思ひ分べし。又こは
 淡しきむすび物にてとけやすき物とおもふもあやまり也。あはし
 きとあわと假字異なれば也。又後世あはび結びといふ名は此あわ
 緒の名をあやまれるにやあらん、さて其あはびむすびてふ如くい
 にしへ玉の緒の端をも結びつらんとおほゆればとなへも假字もあ
 やまりたれどいにしへの遺りけんかし、頭註。和名抄の比まては
 假字もいにしへを傳へてさだかなるを其少し後よりやゝ亂たる也
 江次第に同じ結葉をかく繩と書し繩はなはの借字にてこの菓子
 かなにあらず。○貫之集に春くれば瀧のしらいといかなれやむす
 べども猶あわにみゆらんこれは歌の巧みにかゝはりて淡味の假

少しかへて入れたり、かく古歌を今様に巧みなせるはこの記者の
 常也。

谷せばみ

○むかし、男、わすれぬるなめりとくニ
 ひごとしける女のもとニ

谷せばみ峯まではへる玉かづらノ如ク絶
 えむと人をわが思はなくニ

女かへし

いつはりと思ふものから今更に
 誰がまことをか我はたのまむ。

字のことなるをば忘れしにやたゞ沫と云て消やすき心を添しとも
 みゆ清少納言がうは氷あはにむすべる紐なればとよみしは氷の淡
 しとはつゞかすしてこほりのむすべる水とへだてつゞくと見は
 難ながらん萬葉に數首あれど皆沫と書て事の正しきぞかし。○萬
 葉に玉のを、かつ糸によりて緒をよみみだるゝ時に懸ざらめや
 もとあるは緒の切て玉の亂るゝをいはん料にまうけて片緒といひ
 たり玉をもつた糸の緒してぬく物と思ふべからず同集に寄糸とて
 河内女の手染の糸をくりかへした糸となれとたんと思へやと
 いへることさとりなし也。(新)心のかはれるにはあれでゆゑあ
 りてたえたるなり。△男といふもじ塗真二本によりてくはへつ。
 あわをばあわといふむすびの名也。のちにあはびむすびあはぢむ
 すびなどいふは此あはむすびをよこなまれるなるべし。此歌の上
 の句玉の緒をよりてあわ緒にむすべればといふ意に見るべし。さ
 て一首の意は玉の緒をよくよりとのへてあわといふむすびに結
 びかつためしやうのなかなればゆゑありて絶ぬれどかくていたづら
 にはなりはてじ又もとのごとくあはんと思ふといへるなり、さる
 はよくよりとのへぬ玉の緒は絶ぬればはふらしすて、あらたな
 るよきをにかふれどよくよりとのへてあわむすびに結びかつため
 たる玉の緒はなほざりならねばたえたるをつぎとのふるものな
 ればたとへていへる也。臆断は此歌のこゝろをさらにときえず。
 拾遺抄の説のあしきはさる事なれどそれわろしとて古意におほく
 の糸をよりてむすべる緒は絶たるごとく見ゆるも猶のこるすぢあ
 りてきればてぬにたとへたりといはれたるもなほわろし。さては
 絶るといふものにはあらざる也。萬葉集卷四紀女耶贈大伴宿禰家
 持歌「五緒平沫緒二摺而結有者在手後二毛不相在目八方」これを

○むかし男忘れぬるなめりと、とみごとしける女のもとに。【舊註】
 (愚)忘れぬるかと同おこせたる女の返事によりてやる也。(關)

て御忘れも有たるよとうたがひ恨みてとへる心なり。【新註】(勢)とひごとしけるとはたとへばうらなひなどのやうにとひこゝろみる意也。(古)あはてふる比の事也。なんめりはなるめりを音便にていふ。(新)男の久しくおとづれぬ頃かくおとづれしたまはぬはわすれたまひしさうなる女のいひおこせたるにこたへたる也。○答せばあままでへる玉かづらたえんと人を我思はなくは。【舊註】(愚)谷よりみれまではへるかづらはたえぬたとへなり。萬葉十四歌「たにせばみれにおいたる玉かづらたえんこのころ我おもはなくに」(直)萬葉に「谷せばみ嶺においたる玉かづらたえんの心われは思はず」といふたをすみしかへたり。谷ひろくはよそへはひまとはりても行べきがせはきほどにみれまでおふる也。たまたままじきといふ心をよめり。【新註】(勢)是は萬葉集第十四東歌に「谷せばみ峯にはひたる玉かづら絶んの心わがもはなくに」此歌を少かへたり。右の段と此段は作りてましへたるか。谷せばみはひろくは外へもはふべきかづらなれどもせはければたゞひとすぢにみれまでもはふをひとすぢにおもふ心のたゆまじきたとへにいへるなり。また萬葉に。十三たにせはみ峯へにはへる玉かづらはへてしあらば年にこそとも。詩周南云葛之覃兮施于中谷維葉萋萋。女蘿本細草抽葢信不切豈高出嶺上假樹入雲中。(古)せはき谷にみちて終に嶺まではひのほれる葛はひげどえたゆる世有まじきをたとへていかにも人に絶まじきをしひていへるもの也。こは萬葉に谷せばみ峯にはひたる玉かづらたえんの心我もはなくに。てふを少かへて又谷せばみ峯へにはへる玉葛はへてしあらば年にこそとも。てふをも兼てふくみたり。端に男のひさしくこのを忘れぬるなんめりと書るをよく合せて見るべし。

(參)御本(舊本)四の句絶んと人をとあり、此歌の次に女かへしつはりとおもふものから今さらにながまことをかわればたのまんと、時本(新本)校合に定本かへし有いつはりとおもふものから云云家本(本)此段歌なくてきみによりの段(コノ次ノ次ノ)【新】此歌の心は谷がせはきに峯まではひのほれる玉かづらの長くつゞきたるやうに行末ながくかよはんとこそおもへ申たえんと人をおもはぬにわすれぬるなめりとおひごとしたまふはいかごとらみたる意也。おもはなくには思はぬにと云意にていひさしたる詞なりそのいひさしてのこれる意は上にいへるがごとし、諸註みなおろそかにして下の句の意をときえず。さて萬葉集第十四卷なる谷せばみ峰にはひたる玉かづらたえんのころわがもはなくに。といふ歌をすこしかへてつくれるなり此事はいづれの註にもいへり。△人を。塗本にしたがふ。(按)萬葉集卷十四末勸園相聞往來歌「多爾世婆美彌年爾波比多流多麻可豆夏多武能巳許呂和我母波奈久爾」の改作諸註にいへるが如し。又、女かへし以下塗本にあれどなきぞよろしき。いつはりと云々の歌は古今集卷十四戀及拾遺集卷十四戀、いづれも「讀人しらす」と入れり。

我ならで下紐とくな

○むかし、男、いろごのみなる女にあへりけり、うしろめたくや思ひけむ、

我ならで下紐とくな^人あさがほの夕影^{夕影}くまたぬ花^{くまたぬ花}にはありとも

かへしく

二人して結びしく紐をひとりして

逢^逢ひ見るまでは解かじとぞ思ふ。

○むかし男いろごのみなる女にあへりけり。うしろめたくや思ひけん。【舊註】(愚)色ごのみ女なれば心もとなくおもふをうしろめたきといふ也。【新註】(勢)うしろめたきは心もとなき也。うち捨遣に心めたしともいへり。いろごのみなればうたがふなり。女郎花うしろめたくもみゆる哉かと山にしたてりと思へば。(古)我うしろのえ見られぬよりおこりて何事にもしりめつかはれてうたがはしきをうしろめたしと云。(新)うしろめたしはこゝろもとなしと云意也。色好む女にてこゝろあだくしければ心もとなきや思ひけんかゝる歌をよみてやれりと記者のいへるこゝろなり。○我ならで下紐とくなあさがほの夕影またぬ花にはありとも。【舊註】(愚)あさがほは女にたとふるなり。夕かげまたぬ、はかなき花にはありとも我ならで又こと人に下ひもとくなといへり。花のひらくるをば、ひもとくといへばあさがほにそへてよめるなり。(調)夕かげまたぬとは女のあだなるを云ふ。我ならで人にちぎるな、夕かげまたぬして、かはるやうには有ともと云り「朝がほの

我ならで下紐とくな

昨日の色は瘦るとも人の心をかたのまむ。(勢)新勸撰三なりひら。下紐とくなとは花の紐花のしたひらなどともよむ故に云り。夕かげまたぬ花にはありともとは權の名も人にちかく花の色もうるはしければ女によそへまたあたにうつりやすきによそへていかにあななきこゝろなりとも人にはしたひもとなきなり。興義抄云喜撰式に混本歌安倍清行朝臣うたに。朝がほの夕かげまたぬ散やすきはなの世ぞかし。六帖ふして思ひおきてながむる春雨に花のした紐いかにとくらん。(古)毛詩などに露花を女にたとへしはほむる也こゝはうつろひやすきをいふ清輔朝臣の書きたる混本歌とてあさがほの夕影またぬ散やすき花の世ぞかしてふに詞は似たり。此歌安倍の清行朝臣のよめるといふが正しくばこれを取て作れるなるべし。花の紐とくといへるは六帖にふしておもひおきてながむる春雨に花の下紐いかにとくらん。(新)此歌の意はあさがほの花の夕かげまたぬやうにやはりやすくあたる心なりとも我ならでこと男にて下紐とくなと女をいさめたる也。さて安倍清行朝臣のよめる混本歌に、あさがほの夕かげまたぬすぢりやすき花の世ぞかし。六帖にふしておもひおきてながむる春雨に花のしたひもいかにとくらん、これらの歌によりて夕かげまたぬ又は下紐とくなどいへるなるべし。○かへし。二人してむすびしひもをひとりしてあひみるまではとかじとぞ思ふ。【舊註】(愚)男女ふたりしてむすびしひもなれば君にあひ見ざらんあひだはひとりしてはとくまじきと領狀したる歌也。(直)女の陣法してよめる也。そなたまりいふに及ばずふたりして互に契しをひとりしてはとくまじき今は他にうつるまじきと云心也。萬の歌は僅に此歌はいやくや。【新註】(勢)是は萬葉に

「ふたりしてむすびし紐をひとりして我はときみじたゞに逢まで
は。」此歌を下の句をすこし作りかへたり。(古)こは萬葉に二人し
て結びしひもを一人して我はとき見じたゞにあふまでは。てふな
かつんかへて返しとせり。たゞこと歌也。(新)歌の意はかくれ
たる事なし。萬葉集なるふたりして結びし紐をひとりして我はと
き見じたゞにあふまではと云歌をつくりかへたる也。(按)萬葉集
卷十二古今相聞往來歌、正述心緒歌百十首の内、「二爲而結之紐乎
一爲自吾者解不見直相及者」この歌の改作語註にいへが如し。

君により思ひならひぬ

○むかし紀の有常ものへいきて久しう
かへらざりけるに、よみてやりける

君により思ひならひぬ世の中の人

はこれをや戀といふらむ

かへし

習はねば世の人ごとに何をかも戀

またなり。清濁の例、有常が姉がりなど間にて、を隔すし
ては濁る誰のかりと云類はすみてかりとよむは常の事也。さて人
の許をかりと云ふ語いかなる義にやこゝろえす新井白石の云へら
く御國の古言の中には三韓の方言も聞れる歟、都をこほると云を
こゝにはこほりと云この類猶有べしと憶ふにさる事あるべくおぼ
ゆ語を釋く人こゝに意すべき事なり。

○君により思ひならひぬ世の中の人これをやこひといふらん。(舊
註)(愚)ありつれがおそくかへるをまちかかれたるよしを戀の心
よせてよめる也。(直)君を待によつて今日はじめ思ひならひぬ
世の中の人がかやなるをや戀といふらんと也。(新註)(勢)續古今戀
一よみ人しらす。きみか待わぶるによりてこひと云事をけふはじ
めておもひならひたり。世の中の人がかのやうのことをやこひとい
ふらんとなり。(古)こは業平朝臣のよめらん意用ぬによみうつし
てさるゝのみならん男のかへりて戀てふ物はまだしらすざりし
さまにとりなしたるがなかしき也。萬葉にいける世に戀とふ物を
あひみれば戀の中にも我ぞ苦しき。てふをやいひかへけん。頭註。
うたのとりなしは朝臣めきたれどしらべのいとわろきによりてあ
らぬ事あらは也の中にて絹をそむれどとかくに京の色には似ぬが
如し。(新)此歌は君こひしきにはじめておもひならひぬ世の中の
人はかやうの事をや戀といふらんと云意也。
○かへし、ならばねば世の人ごとに何をかもこひとはいふと
ひし我しも。(舊註)(愚)よの人のこと草に戀といふはなに事をい
ふぞと我もならば人にとひしとよめる也。し文字は助詞也
(直)われも戀といふ事をならばねば世の人ごとに何を戀といふぞ
と問來れると也。詞半別なれども心はお同やうなる心也。君を思

とはいふと問ひし我しも

○むかし紀の有常ものへいきてひさしうかへらざりけるによみて
やりける。(舊註)(直)業平有常がもとへ行けるにありつれよそへ
行ておそくかへる也。(新註)(勢)がりは許の字なり、ありつれが
もとへと云こゝろ也、いもかりゆくといふもこれなり。萬葉に妹
許、妻許、吾許、にとよめり。よみてやりけるは有常がやどより
さきへやるべし。後よみてやるなど註にいへどおそくきけるによ
みてやりけると云はまてど歸らぬ故に待わびてよびにつかはすな
るべくや、これらはいかでもありなんや。(古)こは古本も今本も
昔の下に男をおとせりなくては理りも例もたがへり。さて今本の
詞は昔此男有常が許にいきたるに有常は方々ありきて遅く家に
歸りたればてふまては聞えて下は待わびてありきてある所へよ
みてやりけるといふ意にや詞釋かならぬ也。こも字のみだれしな
るべし古本には有常の許へ訪ひし事をいはれば理りあきらけし。
物に行とは事を略きていづこにもそれと名をあげていふ事也。
物よりことに物してなど云もみな同じくはぶける言也。(新)した
しき友なる有常のものへいきて久しうかへらればこひしきにいひ
やりたる也、ものへいきてとはそのいきし所にはよなきをりに
云る也。△此所。塗本にかくあるぞよき真本今のかな本ともにお
だやかならず。(按)定真本「むかし紀有常がりいきたるにありき
ておそくきけるによみてやりける」とあり。臆断、古意はこれよ
りて説けり。因にこれに紀有常がりといへるがりにつきて上田執
成のいたく「紀有常がり。許の字がりとよむ事妹がりなど云例あ

ふゆゑにわれも戀をしると云儀也。(調)われも戀といふことをし
らざれば世の人ごとに何を戀といふぞととひ來れる我なるに我ゆ
ゑに業平の戀といふ事をはじめしてしりたるとあり、こひをしらす
りし我しも業平の戀の師になりたるは不審なると有常がよめる
也。宗祇説にはこひと云事を問來ざる我しも業平をおもふ故にこ
ひをしらすよしなりとあり。(新註)(勢)我もこひといふことをな
らはねば世間の人ごとにとひつるわれしもけふは君がための戀の
師となりぬるといふこゝろを末にいひのこしたる歌なり。(古)我
しも戀てふ事は何を云にやと人ごとに問つるを此たび君にひさし
くあはておもひ知つると也これらは噂ふべく記者の作りたる也。
(新)この歌第二句はかけ歌の世の中の人云々といへるをうけた
るにて世の人ごとに戀々といふは何をいふ事ぞとまだならばは
人にとひし我しも君の戀の師となりけると云意也。臆断古意な
どに此第二句を世間の人ごとにとひし意にとかれたるはたがへり
いって人ごとにとふべき。

源の至

無塗

○むかし、西院の帝と申す帝おはしま
しけり。その帝の皇女に、たかい子と申
すいまそがりけり。その皇女うせ給ひて、

御はふりの夜、其宮の隣なりける男、御はふりく見むとて女車にあひのりて、出たりけり。いと久しうくゐて出奉らず。うちなきてくやみぬべかりける間に、天の下の色ごのみ、源の至といふ人、是も物見るにこのく車を女車くと見てくよりきて、とかくなまめくあひだに、かの至、螢をとりて、車にいれたりけるを、車なりける人、この螢のともす火にや見ゆらむとおもひて、けちなむとす。さてのれる男のよめる。

出ていなば限りなるべしともし

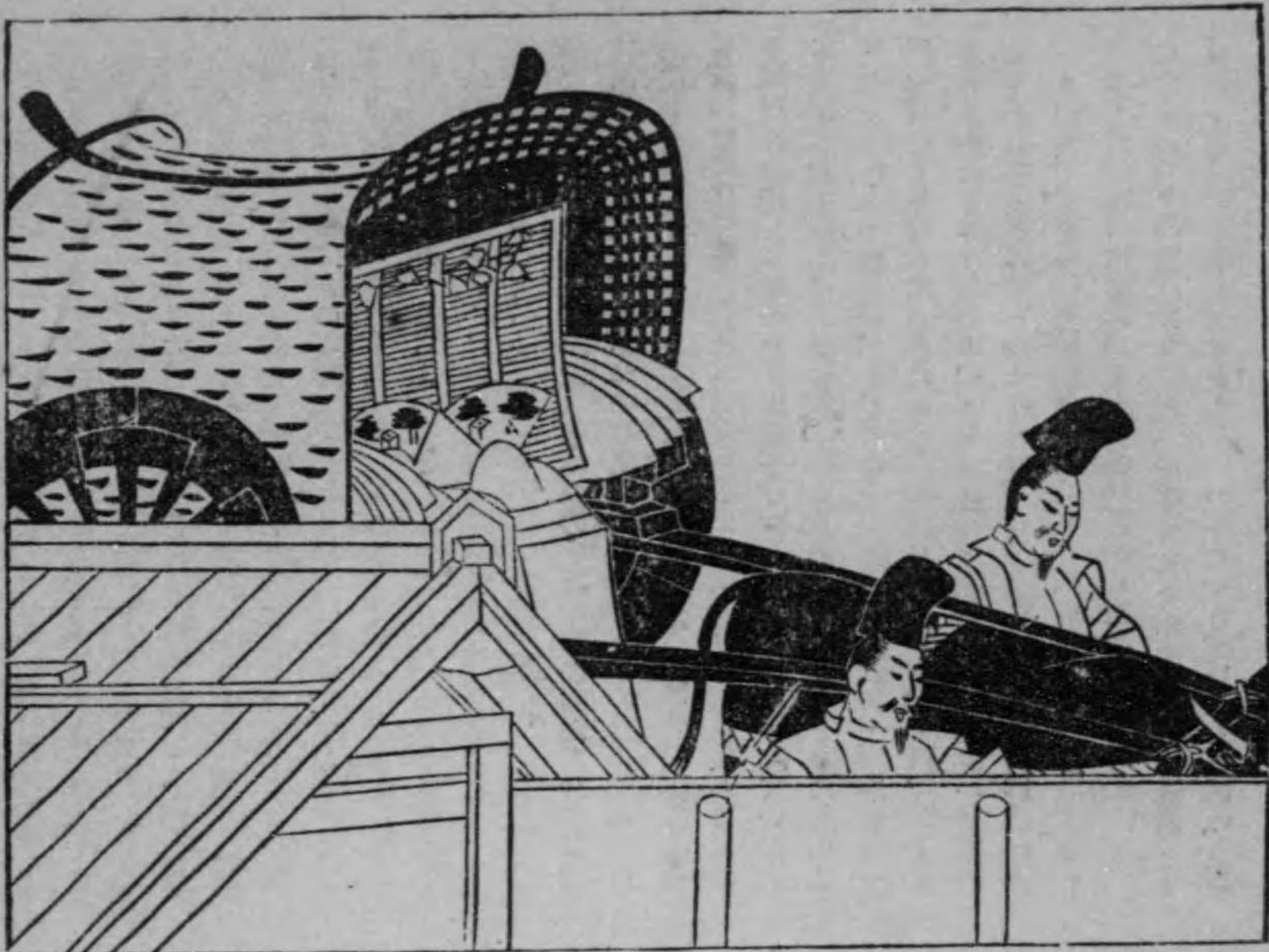
けち年経ぬるかと啼く聲をきけかの至かへし
いと哀なくぞ聞ゆるくともし火のく消るものとも我はくしらすなく
天の下の色ごのみの歌にては、なほぞありける。

至は順がおほぢなり、みこのほいなし

○むかし西院の帝と申す帝おはしましけり。【舊註】愚淳和天皇をば遺詔によりて大原野に御骨をなまめたてまつりて西院の帝と申也。(直淳和天皇の御事也。依御遺勅御骨を西山に奉納が故に號西院御門【新註】(勢淳和天皇諱大伴桓武天皇第三皇子也御位の後西院におはしましける故に西院帝と云西院は四條の北大宮の東なり。または淳和院と云本は橘大后の家なり。(古淳和天皇西院におはしましければさいぬのみかども申すこれを淳和院ともいひたり。

○その帝の皇女にたかい子と申すいまそがけり。【舊註】(愚崇子内親王は淳和天皇の御女、母正四位上橘清野が女也。承和十五年五月十五日にかくれ給へり、いまそがけりとはおはしましけりといふ詞をむかしはやうにいへる也。(關)たかい、勸崇崇子内親王母橘舟子四位上清野の女、承和十五年五月十五日薨す。【新註】(勢崇子内親王母橘船子正四位上清野女承和十五年五月十五日薨十九歳今年六月に嘉祥と改元ありければ嘉祥元年なり。(古崇子内親王はその帝の皇女御母は橘氏也。このみ子は承和十五年五月十五日にみまかりたまへり。(源日本後)【新】いまそがけりはおはしましけりといふにおなじ意なり。△御子に。眞本によりてにのてにをはなくはへつ。
○その皇女を給ひておはんはふりの夜その宮の隣なりける男御はふり見んとて女車にあひのりて出たりけり。【舊註】直御葬禮の儀也。葬此字はふりとよむ。崇子内親王の宮の隣也。男業平也。【新註】(勢)宮の隣なりける男は業平。御はふりみんとはあはれにも思ひ又其院の作法に嚴法事等をみむとて女とあひのりていづるなり。毛詩云有女同車。(古)葬見る事は唐にもやまとも昔より有こにも令に其式備はりてみゆ。親王におはせど御物は一に准ふと集解にせるれば方相こそなからめ、鉦鼓、大角、小角其外さまんの事有ゆべし。頭註。此御葬に、王臣を監護につかはされし事續日本後紀にみゆ。(新)御葬見るとは御葬送のさほうを見る也女車にあひのるはしひて見に出る也。(按)女車の體を示さむが爲に文永加茂榮繪卷物所較の圖を、く。
○いと久しうて出て奉らず、うちなきてやみぬべかりける間に。【新註】(勢)うちなきてと云よりみればはふりみにも哀れと思

ふころみえたりやみぬべかりけりとは御はふりをみすしてやみて歸らんと思ふまになり。(古)輻車を挽て將て出るがいとおそきを待わびつ、慰息ていまは見すてかへらんと爲るあひだに也。頭註。嗚呼と長息するをなげきとつめて云を又略してなきてともいへり。こは屈して長息する也悲歎とおもへるはわろし(新)古意に輻車を挽て將て出るがいとおそきを待わびつ、歎息して今は見すてかへらんとするあひだに也といはれたるぞよき。臆斷の説はわるし。△出て出たてまつらす。うちなげきて。みな眞本にしたがふ。
○天の下の色ごのみ、源の至といふ人、これも物見るに、此直を女車と見て、よりきて、とかくなまめくあひだに。【舊註】(愚)源至は嵯峨天皇の御孫楊院大納言定の子也。從四位下左京大夫なり順がおほちとみえたり。(愚)いたるが中將のあひのれる車を女ばかりのりたると思てちかづきよりなまめきけしやうするなり。【新註】(勢)嵯峨天皇。定。源。順。文徳實錄三代實錄等に見えたる人なり系圖下に註す。なまめくはたはるゝ意なり下にもあり。源氏繪本に木枯の女をいへる所に、今一聲聞はやすべき人の有る時に手なごひたまひそなどいたくあされかれば女はいたう聲つくるひて、木枯に吹あはすめる笛の音を引とむべきことのはぞなき。となまめきはすにくくなるをもしらで。(古)今本は女車と見てとあれど既に相乗てといへるをてらして女一人のとあるぞよき。(新)天の下とは天下事一のと云意也。ものみるにははじめに御はふり見んとてとあればこはおほらかにいへる也。とかくなまめくとはとにかくにつけてなまめけるさましてけさうする也。



○この至をとりて車にいれたりけるを車なりける人この要のともす火にや見ゆらんとおもひて、けちなんとす。さて乘れる男のよめる。【舊註】(愚)女のかほをみむとてほたるを車のうちへ入たる也。色このみの人なればかゝる用に於てほたるを紗のふくろなどにあつめてもちたりけん、源氏の螢の巻に玉かつらの事をいへる同心なり。車なりける人とは女をいふ、このほたるの光にやみゆらんとてほたるをとりかくしたるをともしけちなんといへり、さて男その心を歌によめるなり。(圖)五月の比なればほたるを紗の袋などへ入てもてるにや、車なる人女と見ればほたるし、業平なるべし、ほたるを打はらひてのれる男のよめるは業平也。源氏ほたるの巻に玉かつらの君を兵部卿の宮に見せ奉らんとて源氏のほたるをうすものにつゞみて、みすのうちにいだされたること此段に相似たり、此物語を見て書出せるにや。【新註】(勢)車なりける人はをんななり。業平のこゝろに相乗たる人のかほのほたるのともす火にやみえんと用意してほたるをうちほらひて火をとまさせじとて此歌をよめるなり。源氏螢巻に玉かつらのきみを兵部卿の宮にみせ奉らんとて源氏ほたるをうすものにつゞみてみすの内にいだされたること此段に似たり。(古)車の内にはともし火をおくべからずまいて忍びたる出たちなれば此螢を燈火の如くよそに見むいて螢の火をけちなんといふ也。螢をほらひやらんでふをけちなんといへるは上にもし火といへるよりうつれる語のみ。△今本にはほたるのともす火にやみゆらんと有はわるかりき。古本の字さだかなるをいかぞやしかよまんに詞のこゝろもさては明らかならず又こゝには上をうけてけちなんと有こそ文なれ。今本にはこゝにも燈けちなんと書つたなし。(新)さてとかくするあ

ひだにまぎらばしてふと螢を車にいれたる也。師はこの文かくてはなまめくはいたるにはあらでこと人と聞えていかゞとくなくまめきつゝ螢をとりてなどこそあるべけれといはれたり。げにすこしいかゞにきこゆる書さまなれどかくてもありぬべし。△真本に女ひとりの車と見てとあるはわろく螢をとりて車に云云とあるはよし。車なりける人は女也。見ゆらんとおもふもけちなんとするもみなその女なり。△この螢のともし火にや似んと思ひてと真本にあるを古意はさらにもいはす師もよしといはれたれどさては文つたなくなれり、かの螢のしりのひかるをほたるのともす火とたとへていへるぞおかしき、かくてこそとりかくすをけちなんといへるにもよくかなひぬれ、から歌にも螢火といへるをや。△と思ひて云々けちなんとす。みな真本にしたがふ。臆断の本によるとてはさてをうつしあやまれるなるべし。

○いでいなばかぎりなるべしともしけち年へぬるかと鳴く聲をきけ。【舊註】(愚)いでいなばかぎりなるべしとて、この螢とびていになび二たび歸りくまじき也。たゞともしたる光をつゞみもちて年をふるかとなく聲をきかんとよめり、ほたるは夏ばかり見えてとしをふる事もなく又なく聲もせぬ蟲なればかくいへり、誠に深切なる思ならばとしつきをかきぬともいふ、こがれまさり又なくれにもたてぬべきをたゞ一旦のひかりばかりはたのみがたきよし至にのみてやれる歌の心なり。(直)今崇子内親王を葬たてまつる、鳥邊野へ出給はゞこれに限にてましますべし。ともしけちとは如煙盡燈滅の經文の心也。いのちの消るをいへり。年へぬるかとはこの宮は年をへ給へる事にもあらず、まだわかくして此世をさり給ふ事世間の無情にはかゝるものなりとみな人の泣き

なげくこゝろをきけと也。【新註】(勢)出でいなばとはほたるを玉しぬによせてこれがいでいなばかぎりなるべしといふ心なり。それに野邊に送り奉らばと云意こもれり。ともしけちは經に如煙盡燈滅と云はほたるの火のともしけちなんといへることくいまのみこのかくれ給へるをほたるの火のともしけちなんに似たるにたとへて老たる人の死するはいかゞせん此宮せめて年をだにあまたへさせ給へるかばわづかにはたちにはたせ給はでうせさせたまへる事とて別れ奉る人のなくをきけといたるにきかするなり。としへぬるかとなき聲をきけ。一本にはとしへなぬかとありけるよしにて典義抄はそれに付て註せられたり。蜻蛉日記に五月にもなりぬ十日目にしうちの御くすりのことありての、しるほどなく廿五日のほどにかくれさせたまひぬ。(古)こは葬車を挽出てゆなば是ぞ皇女の此世の限りなるべし身の火盡て終りたまふも歸へたまふものかかく弱くおはするを人々の哭音をきけとなまめく至に示すなり。さて螢を燈火といふよりして如煙盡燈滅とてふ佛の入滅の語にとりなして燈盡といひ且ひさしう待わびてなげくを年歴ぬるか泣にそへたるなど例の記者の歌にてかされ、むつかしくうるさし。頭註。今本にかぎりなるべき又なるべしと有もわろし古本に可爲と書たればこゝはなるべしといひ切べし又三の句古本に燈盡とありこも古本ぞもわりある也。○朝臣の歌のしらべの體に高くてこゝろあまれると此記者の歌しらへだみてたけひく心むつかしきと甚なる事なるをこの記者はかくさまさまの心をいひてむつかしきか餘情ありとおぼえけるにや文はえもいはずあるを歌のかゝることぞあやしけれ。(新)此歌御子の御車を挽出ゆかばかぎりの御門出なるべしとおもへば經に如煙盡燈滅とあるが

ごとくあはれなり、此宮年をまた経させ給へるかははたちにも
たりたまはてうせ給へる事とみな人のかなしみなくなきけ女車の
かたはらによりてすきわざするはをりにあはずいたるになしへた
る意也。年へぬるかば経ぬるかばの意也。ともしつきとは御葬に
松としたる火などあまたみゆれば思ひよりていへるよしなるべ
し。臆断にいよいよなばとは聲をたましひによせてこれが出てい
なばと云意也ととけるはれいのしひ言也。又古意に久しう待わび
てなげくを年経ぬるかば泣にそへたりととれたるもわろし。△
ともしつき。真本にしたがふ。

○かの至返し。いとあはれなくぞとゆるともし火の消る物とも
我はしらすな。【舊註】「愚」なくこゑをきけと歌をいとあはれなく
いへると也。たとひなくこゑをきかずともつひにきゆまじき上
思の色はみゆべしといふ心也。われらはしらすなはわれはしらす
なむといふ詞也。直上に鳴聲をきけとよめるをうけて誠にあはれ
に泣くこゑをき、待るよといひて乍去更に眞實に寂滅とは思は
ず一切衆生は法界の五大をかりにむすびてきたれり。法界の五大
はきゆる物とはわれは思はずと也。是も是非眞滅の文なり。此心
をよく思ふべし。【新註】「勢」鳴聲をきけと云をうけてげにもいと
あはれになくぞきこゆる但しともしけちとのたまへど眞如の隨緣
せる四大假合の火こそきえうするともゆれ眞如の性に歸すればう
することなしよりて消るものとも我はしり待らずとほたるにつけ
て是非眞滅のこゑを云り王充論衡曰人之死也猶火之滅火滅
而燭不照人死而智不慧是は外道の斷常二見の中の斷見也凡人は
死して氣に歸るといふは斷見なり人畜常に定ると云は常見なりこ
れみな邪見なり。今いたるはたはむれに讀は信するにたらずまた

折もあしけれど猶王先にはまされるか。ある人申けるはほたるを
ともしけつとてなく聲をきけといひそれをかけてなくぞきこゆる
とよめるはおよその蟲みななく物なればうたのならひに御別をか
なしみて人のなくをもほたるの上よりいへばこれほたるのなくと
云證歌なりとある先達の秘藏の口傳にのたまへりと語りき。(新)
かけ歌になく聲をきけといへるをうけてげにいとあはれになくぞ
きこゆるさてともしつきとのたまへど法華經に我雖説涅槃是
則非眞滅とあるごとく常住不滅なりとおもへばきゆるものとも
我はしらすなど云意也。ともし火の。真本にしたがふ。△かのい
たるかへし。此詞真本にあるぞよき。

○天の下の色このみの歌にてはなほぞありける。【舊註】「愚」あめ
のしたの色このみには猶この人こそあれといひたるをいふなり。
(直)なほはなほうとよむべし。眞の字也。ありのまゝすぐによめ
るなり。定家卿自筆の本には猶の字也。是も吉し。【新註】「勢」上
にもあめのしたの色このみとあれば其頃天下第一の好色人とさだ
めけるなるべし。なほぞありけるはほたるをとりにて車にいれしす
きものにあはせてはこゑも詞もいへればすなはなりと云か。
また源氏花宴になほあらしにといへるを彼抄に萬葉の歌を引て云
なほあらしにとのなくさにいふことをきしるらくはすくなかり
けり。此なほあらし黙然不有と書きいまの萬葉にはもたあらし
と點せり源氏抄に引けるは古點か此なほにて業平の歌につけて色
めきたる返事もすべきに只きゆるものともしらすと云るはもたせ
るなりといへるにや。またほむるこゑもまたおとすこゑも
も兩方にみゆ。又いたるが心きゆるものと思はぬ故に我本性にま
かせてかくはするぞと云かかへりて好色のしはざか。(古)古本に

あかぬわかれ

直ぞありけると書によるにこの直はたゞてふ意にて此こたへはい
る好みのさまに似ず凡に世をさとれる人の歌のさまにぞあると云
也。天が下の色このみなるが却てかくよめるをあやしとせる文也。
直をたゞと意得るは上になほ人と云はたゞ人の意。蜻蛉源氏など
の物語になほあらずといふもたゞもあらずてふ意なる類也。
(新)天下第一の色このみなればおかしき歌なるべきにさる人の
歌にしてなほしくおかしからずぞありけるといへる也。
○至は順がおほ歩なり。みこのほいなし。【新註】「勢」順は永親
のころまで在世なれば此物語天曆のころよりはるかに後に出来た
る證なり此所のみならば是斗は後の人の書加たるにやともいふべ
きをかゝる事あまたなればたすくべからず。み子のほいなしは此
至がしわざ内親王の御ために本意ならずといふなり。内親王とい
たるが父定頼とはいとこなれば至もなげくべき人なり誠にほいな
らぬ事なり。嵯峨天皇源定(正三位) 至(從四位右) 舉(左馬允正) 順(從五
位上) (古)今本に至は順が祖父なりみ子の本意にしてふ詞あり既に
いへる如くうら書を後に表に書つられたるが中にもこはいとく
後の人の書加へしもの也し故に古本にはなし。凡の書にその證と
するはちかき世又は今ある人を引ものならぬを此文に順をしもい
かてあげむ。○み子の本意なしとは至が父定頼はこの内親王のい
とこなれば至のかゝるべからぬ事と後の人の思へる也。されどこ
は皆たはむれに書たればさる説いふべき物ならず此物がたりの意
をしらて書るうら書のみ。(新)至は順が云々の文真本になきぞよ
き後の人のかきそへおけるをあまりて本文にはかきつづけたる
也拾穂抄の本にも一字さげて本文とは異にかけるはさる本のあり
しにこそ。さるを臆断に本文としてとけるはいかにぞや。

あかぬわかれ

○むかし、若き男、けしうはあらぬ女を
思ひけり。さかしらくするおやありてく
思ひもぞつくとして、この女を、ほかへお
ひやらむとす。さこそいへ、まだおひ
やらず、人の子なれば、心のいきほひ
なくて、えとゞめず、女もくいやしけれ
ば、すまふちからなし。さるあひだにく
思ひはいやまさりにまさる。俄に、親、
この女をおひうつ、男血の泪をながせど
もとゞむるよしなし、あていでいぬ。
女かへる人につけて、

いづこまで送りはしつと人とはゞ
あかぬわかれの涙川まで

男なくくよめる

厭いとひては誰か別わかのかたからむありあり
しにまざる今日けふは悲かなしも

とよみてくたえいりければ、親あわてに
けりこころなほざりに思おもひてこそいひしかく
いとかくしもおもあらじと思おもふにくまこと
にたえいりたれば、願ねがなどたてけりく
けふの入相いりあひばかりにたえいりて、又の日
のいぬの時ばかりになむ、からふじてい
きいでたりける。昔のわか人は、さるす

ける物思おもひをなむしける。今の翁おきなまさに
しなむやは。

○むかしわかき男けしちはあらぬ女を思ひけり。【舊註】(愚けし
うは下習也。しなはいやしけれどかたち心ばえけすしうはあらぬ
といへり。(直)源氏にてもすみてけしうとよめり。こゝにては下
すしからぬ女といふ義なり。【新註】(勢)けしうあらぬ女とは宇治
拾遺にさばかり大きにおほする殿の御手に大きなかなまりかな
とみゆるけしうはあらぬほどなるべし、とあるを思ふに惟しうに
て似つかすあやしうはあらぬほどの女なり。(古)こはいにしへの
民月のさまにて侍り此の女は其の月の殿なるにかほかちのよく
怪しうはあらぬをその戸主の男子が思へる也。昔の御代の判さだにて
良と、賤と、奸いひは禁いひによりて母のおもへらく、我子此女にふか
くなりなばすべなるべし、とて早くよりふかりけるをばしら
てさかしらに女を外へ追むとする也。正憲云以上の註は次の「さ
かしらするおやありて云々」の條までをすべたるものなればその
心して見るべし。尙この頭註に云、古本に追捨とあるはおひす
てんとすともむべし今本に従ひてしばらくおひやらんとよむの
み下これにならへ〇戸令の意凡一月の内に入多く住り其戸主或は
親族は良民とてよろしきものと其戸に仕はるゝ奴婢をば賤とい
ひて昔より其戸につき來れるもの也又家人と云は奴の中よりえら
みあげて戸内の事をとらしむれば少よろしけれどそも猶やつこ
の類也〇萬葉に上總國の季てふ所の玉名てふ少女は身いやしめて
ひたすら麻衣をのみ着てあれど錦あやにつゝまるゝいはひむすめ

よりもことに光出たりとよめるが如くなるべしこれらあやしもの
のにてあやしうはあらぬ也。とこれ又次條までかゝれる註也。△
けしうはあらぬのけは萬葉に殊異等の字をもちめてあやしくこと
なるをいふ故に右本に怪しうとも書り。さて賤は穢に似て常人の
さまにことなればあやしの賤といふ、然ればけしうはあらぬとは
常人の權なるをいふをこゝはいやしきがあやしう見えぬほどなれ
ば常人に勝れし也。新けしうはあらぬのけは異にてもとの意はあ
やしからぬをいへりさてうつりてはわろくもなしといふ意につか
へり。すぐれてよきをいふ詞にはあらす藤木卷に中のしなのけし
うはあらぬ。同卷に見なるもまに心もけしうはあらす待りしか
といへるなどみなわろくもなしと云意に見て聞えたり臆断に似つ
かすあやしうあらぬ意也とけるはこゝにかなはず古意にはこゝ
は常人にすぐれしをいふとされたるもわろし此女の事いやしけ
ればといひ親のほかおひやらんとするをも思ふに此男の家にめ
しつかふ女なるべし。臆断にはおやの娘なるよしにいへれどさて
は此女といふにもいやしければとあるにもかなはずさるいやしき
女なれどわろくもあらぬをけしうはあらぬといへる也。

なるべし、若は二字引合て賢良の人めくか。第十六には情逆とも
情在とも書りこれは義訓なり。思ひもぞつくとてはかう業平のた
びくかよひきてほめかさればむすめの思ひつきやせんとおも
ふなり。萬葉三「たゞに居てさかしらするは酒のみてふひなきする
に猶かつけり。同十六「大君のつかはさるゝにさかしらにゆき
しあらをほおきにそでふる。古今「さかしらに夏は人まね籠のは
のさやぐ霜夜を我ひとりぬる。萬葉十四「上野のさの舟はしと
りはなし親はさくれどわはさるかへ。(古)さかしらは萬葉に情
逆情出など書しは義訓也。賢良とある賢は正訓良は假字のみ。
さかしらは愚ものゝさがしぶりするを俗に穢がしこするてふ意に
同じ。△母の字はいづこにてもは、とよむべし茲も父の行ふべき
事ならで母のとりあつかはんもの也。頭註。萬葉に酒をほむる歌あ
な見にくさかしらなすと酒のまぬ人をよく見れば穢にかも似るこ
れを以て古本には書たり。〇いにしへの賤は良民の家々に在來る
もの也さて今の法にて良賤ともに人の數にしたがひて田を給ふに
其田も戸主の得物となる故に其家の賤を追はなつ事大かたにては
せぬ事也。新續日本紀に案令條「良賤通婚明立禁制而天下士女
及冠蓋子弟等或貪艷色而奸婢或挾淫奔而通奴途使民族之
胤没爲賤隷一公民之徒變作奴婢一と見えたりいにしへは民族の
胤をを正しくせんために良賤通婚を禁制せられてみだりがはしき
事きこゆればかくぞおほせられける。賤とは人の家につかはるゝ
奴婢を云り。さる世のならひなれば家にめしつかふ女にわかき男
のものいふを親のしかせさせじとするはことわりなる事なりか
し。さかしらするとはかしこたてすると云意なり。萬葉集の歌にあ
な見にくさかしらするは酒のみてふひなきするになほしかすけり

とあり。みなしこだてをにくみていふ心ばへ也。こしもふかくおもひかはしたる中をさげんとする親のしわざをにくみていへる也。さるは一の巻にいへるがごとく物語はものあはれしりて情のふかきをよしとしあらぬをあしとたてたるものなればなり思ひもぞつくとは、かくておぼえ思ひつきてはなれがたくやならんと末をあふくおもへる也。もぞといふてにははみなさやうの意也。しのぶる事のよわりもぞすると云歌など考へあはすべし。○まこそいへ、またおひやらす。人の子なれば、心のいきほひなくてえとゞめず、女もいやしければすまふちからなし。さるあひ左に思ひはいやまきりにまざる。【舊註】(愚)人の子はわかき男の事也。おやまかせなれば心いきほひなしといへり。(直)人の子なれば、業平をいふ、さる人の子なれば崇敬したる也。といむるいきほひなし。追やらんとするを、おしてとゞめんとせざる也。女もいやしければ、年のわかきをいふ。朝廷莫如爵、郷黨莫如齒(闕)女もいやしければ、前にげすしうはあらぬとてきていやしきとてきて首尾不相應、爰は女のわかきをいふなり。朝廷莫如爵、郷黨莫如齒の心也。すまふ方なし。いまだわかればおひ出すをいなど恨みぬ也。としの行ばおやともあらそふ力もあるべき物をと也。【新註】(勢)上のごとく外へおひやらむとすとといへどもだおひやらていへにあるなり。かみに若き男といひて今人の子なればと云は元服のほどなるべければ心もつよくさかりならぬ故に儀勢をなしてもえとめぬなり。かみにけしうはあらぬ女といひて今いやしとは年のわかきを云なり孟子曰朝廷莫如爵郷黨莫如齒。古今集に忠孝長歌に身はいやししくてとしたかきことくるしきとよめりみはいやしきに對すれば年の老たるをたふとすと云

なりいままこの意なり。すまふは權の字、業の字を遊仙窟によめり。まさりにまさるは業平のおもひなり。(古)まこそいへまたおひやらすとはいとこゝろして寄る物也。いにしへは其戸口の多きほど戸ぬしの得つく事なれば容易は追失ふべからず。しかいふに恐れて心と離れんをも待べし又さるあひだにいやまきりに増るをいはん料ともなれりさてなん此文の詞はかくぞ有ける。人の上に男もとかぬは初めにわかき男とありて母と賤女の外は他なれば上にゆづれり。まだ戸主ならでわかきほどの子なれば母にすまふ勢ひなき也。男のまだいきほひなきに對して女もといへり。さて此女其家に仕ふる賤の女なれば、出まじきとすまふべきからなき也。上に惟しうはあらぬといひこゝに賤しとけるにてことの様あきらかなり。すまふを古本に撰力と書しはすまひをとる人はたがひに倒されじと相すまへるゆゑにすまひといふなれば追ふを出まじきとすまはんも語の同じければ也。上にまた追捨すふより後に有けん事共をば此詞の中にこめて書り。さて次に切になれる心はいはん料にかく書り。頭註。今本に人の子なればまだ心いきほひなかりければといむるいきほひなしとありこは委しきに過て此文に似ず。おもふにまた心いきほひなかりければの詞は後の人のかたへに書たるが本文と成しならん。○此母を女の母といひ男を業平也と云などいとも、誣言也此文の條々に必業平ならぬいやしき人のさまを書るもいと多きを皆業平とおぼえて本文をかたへにしてわたくしせし説多し。(新)まこそいへは、條言にさうこそいへと云意也。まだおひやらすは親のしほしことこのやうを見てるさまなり。人の子といへるは親の家的事とりてあるよしをしらせたる文也。さるからに婢をおひやるも親の心のまゝにす

る事にてともかくも口いれがたくえといめぬ也。それを心のいきほひなくとはいへり。雜令に凡家長在而子孫弟姪等不得以奴婢雜畜田宅及餘財物私自買舉及賣とあるこれ也。女もいやしければとは家につかはるゝ婢なるよしなりさるを捨離斷斷などに郷黨莫如齒といふ孟子の語をひきいて、年のわかきを云也。とけるはいみじきしひこと也。むかしよりわかき事をいやしといへるとなし斷斷にさる例なりとていだせる古今集の長歌の身はいやしくて年たかきといへるも官位のひききをいやしといへるにてわかき事にはあらざるをや。すまふはまけじとあらそふ意にてこゝは家を出じとするちからのなきをいへり。さるあひだとはまだおひやらすしはし事のやうを親の見てるあひだ也。かく人のせいすればあやにくに思ひのいやまざるは戀のならひになん。△心のいきほひなくてえといめず。塗本にしたがふ。○俄は親この女をおひうつ、男血のなみをながせども、とゞむるよしなしていへぬ。【舊註】(愚)逐の字也、ほかへおひやる也、大和物語にいみじうなげばちの涙といふものはあるものになんとかけり、ぬていていぬとは母が女をつれていぬる也。(闕)おひうつは逐の字也。儒書史、漢にも逐の字おひうつとよめり。ふかくものをおもへば涙血におつる也。大和物語に僧正遍昭はつせにてもとのつまにあひし時出て物をいはんとおもへどもくしいしばりて有しに養に血の涙がつきたるといふ事あり其心也。ぬていていぬてよそへやる也。又御説血の涙時鳥のにもなくとおなじ色のとにてはなし。【新註】(勢)逐やらんといひてきておきてこゝろみけれどなほやまぬ故にこゝろにしておひうちて女をへだて、いさむるなり文選に逐の字をおひうつとよめり。韓非子云楚人下和抱

其璞而哭於楚山之下三日三夜泣盡繼之以血。易云泣血漣如。大和物語に夜ひとよなきあかしてあしたにみればみのもなにもなみだのかかりたる所はちの涙にてなん有ける。いみじうなげばちのなみだといふ物はある物になん有けるとぞいひける。ぬては此親むすめをひきぬておしやるなり。(古)右のごとくいよ、おもひてあるあひだにゆるやかにだにいひもせてにはかにおひやるには寔に男のたまぎゆべき也。是を漸々に催し書たる文の巧みをおもへ。△遂にとは上の詞共に始終せる文也、さて將て出んとするとは人してひきぬて出さる今はの時をいふ。血の涙は涙盡きて血をたるといへり悲しみを極めたるさまなり。(新)つひにおひやらんとする親の心とはかかれてしられしかどもけふの事とはおもひもかけぬにはかにおひうつにはいと心まどひのするよし也。ちの涙はかなしきのみみじきには涙にちの出るよし也。ぬて出ていぬとは親めしつかふ人にいひつけてその人の女をつれて出ていく也。次の文にかへる人につけてとあるにてさることししられたり。○かへる人はついで。【新註】(新)ぬて出ていにし人のかへるにつけて男のもとへ女の歌をおくる也。○塗本にかくあるによる今のかな本になきはおちたる也眞本にはあれど返の下に人といふもじをおとせり。○いづこまで送りはしつと人とはあかぬ別れの涙川まで【新註】(古)かくしたひ行くはては何處までてふ限はしらすたゝ雨とふる涙は河となりてえわたるまじうならん所をかぎりぞと人間ばこたへんとひとりこつ也。○右は今本に出てゆかば誰か別れのかたからん云々と有て次の女いていけばてふより下の歌かけて昔な

し。且右の歌も六帖にいとひては何か別れの云々とあり續後撰集にも同じくいとひてはとあれば此古本に合せて見るに今本に出るゆけばと有は誤にてさればよことわりも聞え侍らざる也依て想ふに今本はあやまりも落文もあるなりけり其よしは古本に厭而者誰別之難云々。女出而往者迹付而、何所至而云々。かくあり。頭註「後人はいとひてはの詞を出てゆけばとなほしてより次の詞も歌もふつにこゝろうべきやうもなければ一向にむつかしとおもひて皆書もらしたる物なるべし後の人のさかしらする事すべての書に多し。一本に右の出而往者の四字落たれば又の一本以て傍に書そへたりけるを後の人あやまりて右の四字を厭而者てふ歌の右へよせて書し又の上の女の追出されし詞をおもひて此歌の始終を見せしは出てゆけばとふより處ありと思ひて厭ひてはの詞を棄て其座へ傍に書たる出てゆけばをすゑたる者なりけり。此事極めて疑なれば今そのごとく書つられたり。(新)いづこまでおくりしぞと思ふ人のとひたまはなみだ川のほとりまでおくりてかへりまぬりぬとこたへよといへる歌也涙川といふ川のそこにあるにはあらねどあかぬ別の涙を川のやうにながしてわがなげきをよしなひしらせたる意也さるは人をおくるには川のほとりまでいたる事こゝにもからにも例ある事なれば也古今集に山崎にて別をしみける所にてといへるは山崎川のほとり也又李陵が蘇武をわがるとおくれる詩に攜手上河梁といへるなどを見てしるべし。○此歌塗本にこゝにあるに從ふ、今のかな本にはもらせり、眞本にはあれどいとひてはの歌の次にせりさてはわるし。○男なくくよめる。いとひてはたれか別のかたからむ有しにまざるゆふはかなしも。【舊註】愚いてゆくにわづらひなくばたれ

かわけんことのかたがるべき、ほかへいなぬほどはあはれどもなをざりにかなしかりしをいぬる目になればありし思は敷にもあらぬとよめる也。(直)業平此女をおひいださばわれも又この世に跡をとめまじきほどに吾もわかるべければかたからずと也。まればありしにまさるけふはかなしもとよめり。(調)出でいなば女をよそへやるなり、されば女のよそへゆくも子細なし、我もこの世にあとをよまじき程に前のかたきといふ事も有まじき也。さればありしに増りてけふはかなしき也。【新註】續後撰戀業平朝臣六帖には初の五もじいとひてもと有り。作者業平なり。續後撰に載たるも六帖に同じ。君はいていなばたれか別のかたからむ我も世に有へんこと有まじければとも別べしききふは猶ざりともとのむかた有しを有しにまさりてかなしきはけふ也とよめり、二三句心あまれるにや眞名本女返附付而。何所至而逐者志津流與人問者不飽別之涙河至而。(古)既にある床ばなれぬたる妻の別れすら物あはれなるは別てふもの、ならひなるをこはさるあひだにいやまさりつゝ思ふふ俄にしもわかるればかなしきはまりぬとおもふよりも又まさりてかなしと也。頭註。此歌六帖業平としたるはいかなる時によみけんこれにとりてかく端書したる時いとこやうに書かへけんは例のわざ也但六帖の業平てふも後人の加へたる事はしるべきか此朝臣の歌ならん。(よ)いとひては誰か別れのかたからん。或人云眞淵此歌末のみをときて本の句をことわらずと云て猶解わづらひて聞ゆある人の註に我も世にあり經ん事有まじければ共に別るべしと云は世をいとひての事とすれば歌のこゝろたがふべしこは古本に厭の字を書たるはいとふとも飽とも足とも註する字なれば世をいとひ身をいとふと末

にては同義となれど其語の本は異なり世をも身をもいとふはおのが憂からいたむと云義なるを轉じては身にも世にもあきはてたる物にきこゆるなりさて歌の意は今に厭たくいとふばかりの中ならば此別れも難からじなこはおもひはなれぬ心よりかたけて思ひたりしよりも今日のわかれは悲しきと云にはあらぬ六帖にいとひてもと載しはいととき得がたくおぼゆ今本の出でいなば何とも解えられず註にいはれし誤なるべし。(新)おくれる人のかへりきて女の歌をかたるをききてかなしきたへがたくなくくよめる也。此歌はたがひにいとひてはたれか別のかたからんわかれやすかるべし。かく思ひかはしていとほの中はわかれのかたければさきに親のおひやらんとしてもまだおひやらすありし時にまさりてけふはかなしもといへる意也。此もはなげきの心をそへたり。さて拾遺断などはいでいなばとある本につきていへればその解第二の句にかなはず古意の説はたいとひてはといふ本によられながらその意をときえられず師は此歌眞名本に初句いとひてはとあるも聞えずといはれたれど上に釋したることきこえたる事なるをや。△いとひては塗眞二本にしたがふ。今のかな本にいでいなばとあるは更に聞えずこれはさきの段なる出でいなば限りなるべしと云歌のはじめを見まがへてふとかきあまやりたるものなるべし六帖續後撰にいりたるはいとひてもとありればはなにもにあやまりたる也。

の事にてあらむにはなにしにかやうにはせむとおやの心に思へるなり云々。(直)たえ入りけり、業平聞絶したる也。(調)われは随分に我人の爲をもしりてこそか様には云ひつれ實儀に如此くあれば迷惑したる也。【新註】(勢)業平のたえいれるなりおやは女の親なり。此意親も心のそこには業平をきらふにあらすあたにてたむことをうたがひてこゝろみてかくまでおもはれんとはしらざりしとなり。(古)意明らかなり右のいとひてはては一首にて絶いらんは少しあかぬこゝろす女の出でゆく跡の男の從て行ながら又歌よみて絶入たると有がよからずや。△なほざりにてふ語は直進の意也。いかにそなれば直は凡人をなほ人てふ直の如く常體の事をいふ也。すきみをざりといふはすを略きみをりに通はせて云也。然ればその物にふかくおもひも入す打ある心さまなほざりといふ也。(新)なほざりはひととほりと云意也。男のいのちたえいりければ親あわてきわぎて一とほりにおもひてこそいさめいひしか。いとかうはあらじなげくさまするにやとうたがひ思ふにまことにたえいりたればまどひて神佛にやわんなどたて、此人たすけ給へといひるなり。△たえいりければ。知本にしたがふ。なほざりに思ひて。塗眞二本にしたがふ。猶思ひてとある本はわろし。まことにたえいりたれば塗本にしたがふ。やわんなど。これも塗本によりてなど云もじなくはへつ。

○とよみてたえいりければ、親あわてにけり。なほざりに思ひてこそいひしか、いとかくしめあらじと思ふは、まことにたえいりたればまどひて願などたてけり。【舊註】(愚)なほおもひてこそ云々猶おもひてこそ此女にあはせじとはせしにかやうにしぬるほど

○けふの入相ばかりにたえいりて又の日のいぬの時ばかりにぬんからうじていまいたりける。わかしの若人はさるすける物おもひをなんしける。今のおきなまきにしなむやは。【舊註】(愚)今のおきな云々今の世の人は物思ひをして身をうしなふほどの事はせぬ也。わかき人をも心おとなしきをばおとなといふなり。(直)わ

か人に對して背世世のすゑの人を思ふことふかいらぬよし也。關むかしのわか人と云に對して書り。末世には人を思ふもふかいらぬよし也。作者の筆法妙也。【新註】勢昔のわかうどと云にむかへていまの翁と云りいまの人なり末の人はひとをおもふことも深からぬを云りこひは人の心づからにてをしふることをまたす。いまもむかしの心とおもふだにかへればましてよろづの道をしへをまぢしひてまなぶや。【古】此昔の云々より記者の詞也。翁てふほどにて戀すべきにはあらねど弱人といへる事に對へてつよくいふ也。さる事文のいきほひぞかし。△まさにてふ語のおき所いとおもしろし。△時は云々の詞古本に有きせるより所をおもひえずもし絶入りし日の永きほどをおもはするや猶かんがふべし。【新】からうじては俗語にやう／＼としてと云意也。わかき人はものをふかく思ひします心のあだ／＼しきものなれどむかしは人の情ふかりしかばさるすけるもの思ひをなんしける。今の世は人の情あさければ年たてもをふかくおもしむべき人もまさになやんやはしはせじと記者のいへる也。かく情のふかきをほむるぞこのものがたりのたてたるおもふきなりける。△しなんやは。塗本にしたがふ。

うへのきぬ

○むかし、女はらからふたり有りけり。

一人はいやしき男のまづしきくひとりは

る草木ぞわかれざりける。

むさし野の心なるべし。

○むかし、女は二人有りけり一人はいやしき男のまづしき。むとりはあてなる男の徳ある、もたりけり。【舊註】(愚)あひにあふたるしなをあてなるといふ。いやしからぬ心也。すなはち中將の事也。(直)女はらからふたり、兄弟有し女也。いやしき男、誰共なし、種姓もいたらずまた賤官の人なるべし。あてなる男業平也。此女は姉にや。【新註】(勢)古註有常がむすめ。古今詞書にめのなとうとをもちて侍りける人にうへのきぬをおくるとてよみてやりけると有は此をんなは業平の妻の妹なり。いやしき男と云はなりひらに對してなり。種姓凡卑の人にはあらず下官なり。かみにひとりはいやしき男のまづしきを持ぬといはぬはこのもたりけるをわたりけり。【新】まづしきの下にをもちと云もじをいれて見るべし。もつと云詞をとくあるかたにひとつにいへる意の文法也。あてなるは上品なる心。とくととは、田畑金銀のたぐひをいふ意にてとくあるは、富たる也。△あてなる男のとくあるもちたりけり。塗本にしたがふ。とくあると云詞なき本はおとせる也。かみにまづしきといひてそれに対することばなくてはとのほぬ文也。○いやしき男もたる、しはすのつごもりに袍を洗ひて、手づからはりけり。こゝろざしはいたしけれども、さるいやしきわざもなちはざりければ、袍の膚をはりやりてけり。せんかたもぬくてた

あてなる男の徳ある、もたりけり。いやしき男もたるく、しはすのつごもりに、うへのきぬを洗ひて、手づから張りけり。こゝろざしはいたしけれども、さるいやしき業も習はざりければ、うへのきぬの肩を、張りやりてけり。くせむかたもなくて、たゞ泣きになきけり。これをかかあてなる男きよて、いと心ぐるしかりければ、いとさよらなるろうさうのうへのきぬを、たゞかた時に見いでよやると

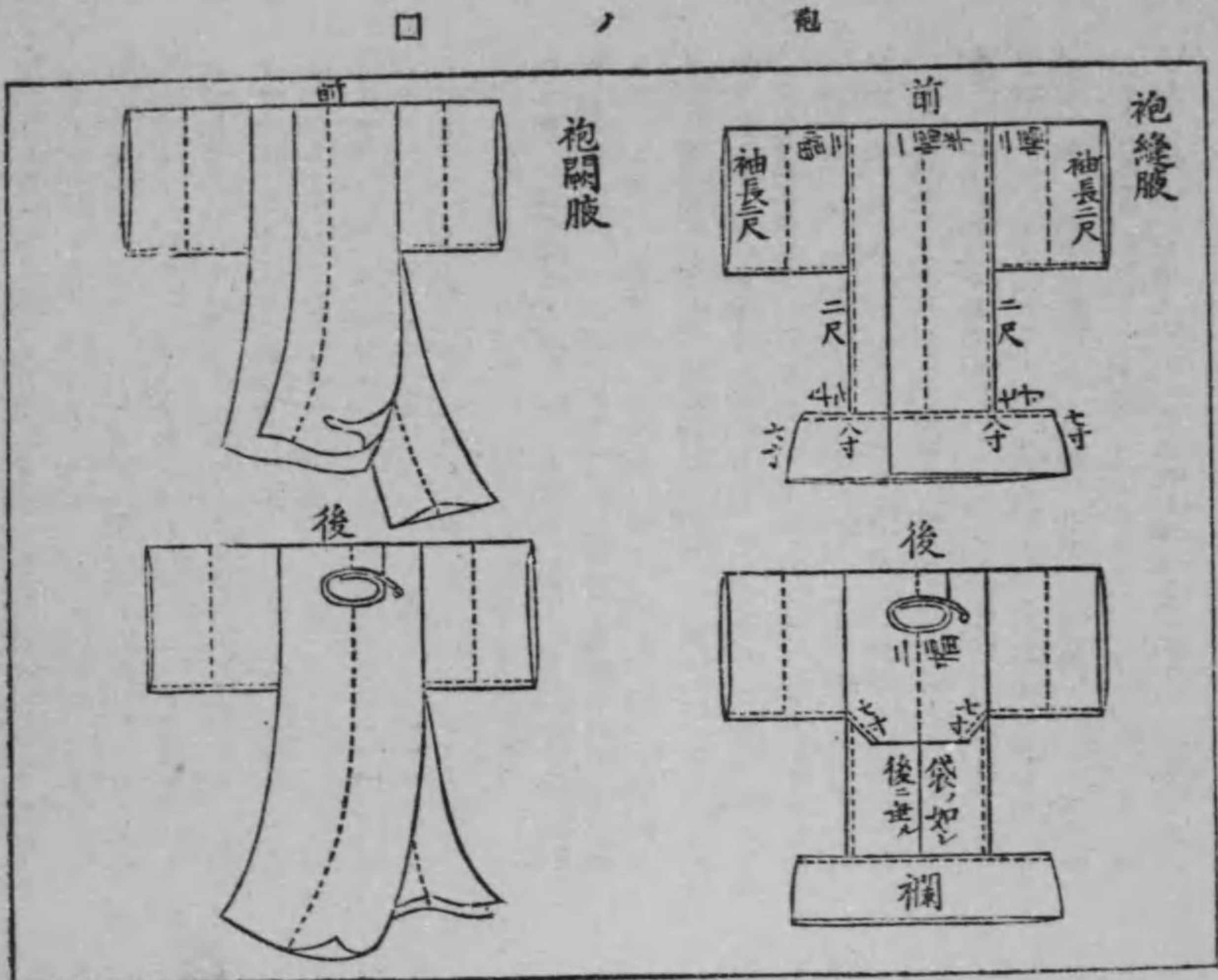
紫の色こきときはめもはるに野な

だぬきはぬきけり。【舊註】(愚)うへのきぬかたを、六位のうなはるとして肩をやぶりたる也。(直)女は三従として若年にてはおやに隨ひ中年にては夫にしがひ、老年にしては子にしがふ。然ば男にしたがふならひなればか様のいやしき事をもするなるべし。毛詩服澣澣之衣といへり。澣澣の字はあらひす／＼とよむ。【新註】(勢)いやしき男もたるは、いやしき男持たる女なりといはざれどもそのこゝろなり。うへのきぬは和名集云楊氏漢語抄云袍(和名字一各朝服)著欄之袷衣也。こゝろざしをいたしけれどもは大事と思て心にはいれたれどなり。破の字繁の字日本紀にやるとよめりやぶるといふことばの中略なり。かはりもなきうへのきぬをあすは春といふけふはりやりたらむをんなのこゝろおもひやるべし。【古】きぬの染はりなど昔は其家々にてさるべき従者などにせきする事なるをこは貧くて妻のみづからはれるなりもとよりよろしき人なればさるわざなれされ共こゝろざしはよく至りてしけるがあやまちせる也。年極る日をしもいふは明の元日の料なれば更にせんすべもなく切なるをいはんため也。△上にゆづりてこゝろにはたゞきぬの袂と有ぞよき今本に又うへのきぬと有はつたなし。又袂を張やりたると有も似つかはし△やりてはやぶりの略也。△袍は和名抄に袍(倭服)一名朝服著欄之袷衣。しはすは年はつるてふ語を上下略してすとつを通はして云也。と荷田大人の教へられしは古意なりけり(古本に澣澣と書たるはのかり字なるを此此文字)【新】はすのつごもりにといへるは元日はことだてはそんにきすべき袍のきたなげなるをつらしと思ひてあらひてはる意也。うへのきぬは和名抄に袍一名朝服著欄之袷衣也とあり。手づからといへるは

まづしくてつがふ人もなきよし也。こゝろざしはいたしてとかくしけれどともいやく生たぬ女にてかゝるいやしきわざをならはざりければるにあやまちて袍のかたをやぶれるなりやはやぶると云におなじ。△真本にきぬのたもとあるはわろきを古意はそれによりて今のかな本のかたとあるをいかにぞやといはれたるはひがごと也。萬葉集の歌に、ことしゆくにひききもりがあさ衣かたのまよひはたれかとり見ん。とあるごとくあらひてはるばかりふるき衣はかたのあたりうすくなりてやぶれやすきものなればうへのきぬのかたとあるぞよき。まづしき人のあすのれうにたゞひとつある袍をあらひはりてぬひたてんとするにやぶりてもちひがたくなりたらんはげにせんかたなくかなしかるべし。

(按) 袍、倭名類聚抄十二、袍。楊氏漢語抄云、袍(漢交反、和名字信)著、襦之給衣也。箋註倭名類聚抄四、爾雅、袍、無衣毛傳、說文同、玉藻云、縗爲、縗、縗爲、縗、釋名、袍、丈夫著、下至、跗者也、袍、袍也、任幼植深衣釋例云、喪大記、袍必有表、謂之、一、注、袍、表衣、必有、以、表、之、乃、成、稱、也、蓋、袍、爲、深、衣、之、制、特、燕、居、便、服、耳、故、云、表、衣、若、無、衣、以、表、之、則、不、成、稱、據、漢書輿服志云、或曰、周公抱、成、王、燕、居、故、施、袍、是、袍、爲、古、人、燕、居、之、服、自、漢、以、後、始、以、綺、紗、袍、身、紗、袍、爲、朝、服、矣、按、衣、有、縗、始、於、後、魏、時、漢、語、抄、以、著、縗、給、衣、釋、名、蓋、依、唐、制、非、古、義、也、延喜式十四、裁縫功程(略)中、袍、(童子及女袍、)長功日大牛人、中功日一人、短功日二人、(略)布袍、長功日三領、中功日二領、短功日一領、延喜式十四、年中御服、春季、正月料(二月三)袍十領(白綾六領、淺紫四領、十一月)料絹十五疋四丈八尺、(別一疋二丈)絲二兩二錢、(別五)延喜式四十一、凡衣袖口、無間、高下、同作、一尺二寸已下、其腋潤者一尺四寸其表衣長、綾著、地、宇津保物語吹上下「御供の人、例のうへのきぬ櫻の下襲など著たり」同、嵯峨院「なほしさうぞくは姫きせたれど、うへのきぬはなし」そのつくりさま縫腋、開腋の二種あり、縫腋は腋を縫へるものをいひ、開腋は腋を縫はざるものをいふ。服色は入室令の定むる所紫、緋、綠、縗の四種あり位階の高下に隨て各々淺深あり。次に縫腋、開腋二種の圖を示す。

○これをかゝる男きよていと心苦しかりければいとよらなる縁衫の袍をたゞかた時に見いてしやるとて、「舊註」愚きよりは清也。あたらしきをいふ。(直)心苦しかりければ、我女の縁なれば業平心ぐるしき也。あたらしく結構なるにや。ろうさう、六位の袍なり、みどりの衣也、縁衫と書也。「新註」勢、ろうさうは縁衫なり六位の袍なり顯昭は古今の詞書を賞していまの此段をば人わろく書るやうに思はれたり。(古)片時としもいふは彼しはすの晦日の事にて今は明日の料なればいとそぐべきをいふ物も設て有ける富人をもおほせたり。ろうさうは縁衫をなだらかにいへる也。さてこの本もとうさうと書し意を得て六位と古本に書たらんよりて猶ろうさうとはよむ也。且次の歌の意をしらしめん料に六位と書たる也けり。頭註。此書様にては本は假名にて有りしを其後に字をそへたる事しらる。かた、たゞにてはよみ難き所侍るを心すべし。(新)心ぐるしは氣の毒におもふ意也。ろうさうは縁衫をなだらかに云る也。これは六位の袍也。たゞかた時に見出るといへるはせんかたもなくてなきなるよしをきけばすこしもはやくりてなげかせじとするわざにてあはれしる人の心ばへをかける文也。△たゞかた時に。塗真二本にしたがふ。(按)



うへのきぬ

ろうさうのうへのきぬ。「合義解」(略)六、六位深緑衣、七位淺緑衣、八位深紫衣、初位淺紫衣。(略)「合義解」二十九、大同元年十月七日格云、太政官符、應改七位初位當色事、右被、右大臣宣、備、奉、勅、今開漢家之制、略異、此間、縁、之、淺、不、著、當、色、知、而、不、改、服、制、無、節、蕃、客、朝、覲、如、見、之、何、宜、七、位、者、同、著、深、緑、初、位、者、共、服、深、緑、自、今、以、後、立、爲、恒、例、延喜式四十一、凡六位七位朝服、同著、深、緑、八位初位、共服、深、紫、扶桑略記二十五、天曆九年乙卯正月四日、皇帝奉、爲、母、儀、故、太、皇、后、后、供、養、御、筆、法、花、經、(略)中、第五卷講說之朝、上從、親、王、公、卿、下、至、朱、紫、綠、彩、或、棹、綾、羅、絹、紗、之、服、或、資、金、銀、珠、玉、之、寶、源氏物語乙女、御、め、の、と、參、り、て、(略)中、い、て、や、う、か、り、け、る、世、が、な、殿、の、お、ぼ、し、の、給、と、は、さ、ら、に、も、聞、え、す、大、納、言、殿、に、も、い、か、に、き、か、せ、給、は、ん、め、て、た、く、共、物、の、始、の、六、位、す、ぐ、せ、よ、と、つ、ぶ、や、く、も、ほ、の、き、ゆ、た、ゞ、此、屏、風、の、う、し、ろ、に、た、づ、れ、き、て、な、げ、く、な、り、け、り、お、と、こ、君、(略)夕、我、を、ば、位、な、し、と、て、は、し、た、な、む、る、な、り、け、り、と、お、ぼ、す、に、世、中、う、ら、め、し、け、れ、ば、哀、も、す、こ、し、さ、む、る、こ、し、ち、し、て、め、さ、ま、し、か、れ、き、た、ま、へ、紅、の、涙、に、ふ、か、き、袖、の、色、を、あ、さ、み、ど、り、と、や、い、ひ、し、ほ、る、べ、き、は、づ、か、し、の、給、(略)下、「枕草子十一」雪こそいとめてたけれ、忘れめやなどひとりこちて、しのびたる事はさらなり、いとさあらぬところも、なほしなどは更にもいはず、かり衣、うへのきぬ、藏人のあないるなどの、いとひやくかにぬれたらんは、いみじうおかしがるべし、ろうさうなりとも、雪にだにぬれば、にくかるまじ、むかしの人にはよるなど人のもとに

たゞあを色をきて、雨にぬれてもしぼりなどしけるとか、今はひるだにきざめり、只ろうさうをのみこそうちかづきたれ、雅亮「裝束抄二」はうこのこと、さしぬき、むらさきの織物、つれのことなり、かやうのものをうちのくら人きるに、うへのきぬのろうさうなる、うるはしきことなり。「六條修理大夫集」ある六位の、二の御許に、うちの殿上をまうしけるが、年比に成にけれど、ゆるされざりけるに、ろうさうをもとめ給と聞て、この六位ろうさうを奉るとて、雲の上をよそにのみ開身しあればみどりの袖も何にかはせん、おこなひするほど也、この返事せよとの給ひしかば、よそにのみおほはざらん雲の上をつねはみどりの袖ぞかさねん、西三條「裝束抄」深緑、六位(○中)淺緑、初位の著する色なり(○中)今も五位緋、六位緑也、此外の品なくなれり、零落の儀也。「裝束雜事抄」臣下袍事、六位袍(○中)平編を附に染たる也、蓋二色なり(○中)。

○紫の色とき時はめもはるに野なる草木ぞ別れざりけり。【舊註】(愚)此歌古今の十七、業平朝臣の歌、詞にいはいはめのおととをして侍ける人にうへのきぬをおくるとてよみてやりけるとあり。むらさきの色こきはゆかりと云儀也。めもはるは目もはるか也。其人ひとりのゆかりにめもはるにみゆる野邊の草木までも思わかずあはれとおもふよし也。(直)此紫をば女にたとふ、業平の女に寵愛のふかき時は其ゆかりまでもわけられずあはれに思ふ也。野なる草木とはそのゆかりをいふ、めもはるには目もはるかなり。

【新註】(勢)古今雜上業平朝臣。六帖には野なる草木もあはれなりけりと有り。(古)こは古今集に「妻のおととを侍り侍りける人にうへの衣をおくるとてよみてやりける」業平朝臣。と編書して

歌は右にたがはず。これは中將の妻の妹を妻として在ける男も共に紫着るべき人にてむらさきの袍をおくる故に紫のとよみて下は其紫草のおふる同じ野の草木をあげて皆ながらうつくしまるゝにたとへたるのみ也。然るを此文には六位の人の貧しきまをいひかつ縁彩のうへのきぬとも書て侍るは歌の紫を我妻のゆかりにのみたとへ野なる草木は縁着る其六位の人をたとへたる也。か古歌を全く出しても端の詞にて異ならしめ且あるがうへに心をふくむるもこのつれのわざ也。頭註。或人間野なる草木を縁とのみせんいかゞと答時につけては花も紅葉もあれど物は一方に用る時とこまかに云時と侍りこは草木の専らなるをいふ方にてみどり一かたにいふのみ○本集にては心ことば例のみやびかなるをこの文にかくとりかへてはわろくなりぬされどこはしか心をかふるを巧とせる文なれば只興にそなるのみさる意を得ぬ人本の歌のわろくなるをいと人わろき心などを忘てよさまにとかんとする故に文の意にも詞にもたがふ也あしきを明らかにして後かへりて本集のよきをしり此かへたるがわろきをもしらば歌よみ文かく人あきらかにしてよきにしがふべくこそあれ。△めもはるには土佐日記に松原目もはるゝと書るも同じく其紫を本としてそれが遠近なるおほくの草木もといふ也。(新)此歌の意は拾遺抄云紫を女にたとへたり寵のふかき時はそのゆかりまでもあはれに思ふ也。野なる草木とは紫のゆかりと見ればいづれもむつまじきと也。めもはるは目も遙なる也。又云妻を大切に思ふゆゑにそのゆかりまであはれと思ふなればこゝろぐるしき事を聞過しがたさに此袍をまぬらすと也といへり。此説にて聞えたり古意に野なる草木とはみどりの袍をきる六位の人をたとへたりといはれたるは

わろし。

後に歌人の註脚也思ひまがふべからず。

誰が通路

○むさし野の心なるべし。【舊註】(愚)これは古今の同巻によみ人しらすの歌に「むらさきのひととゆゑにむさしの草はみながらあはれとぞみる」とある、これを本歌にして、中將のよめと物語の作者の釋したる詞也。紫のゆかりといふ事は此歌よりいひ來れることなり。【新註】(勢)是は古今にむらさきの一本故にむさしの草はみながらあはれとぞみる。此歌の意にてよまれたるなるべしと云作者の註なり紫の色こき時とは本歌によりて我思ふ人の色のさかりにたとへたり。めもはるにはめもはるかになり、古今にも難波のあしめもはるにとあり。土佐日記には松原めもはるはるなりとかけり。野なる草木をおしなべてむつまじく思ふごとく我妻のゆかりといへばみなよそならず思ふといふ意なり。本歌と同じやうの意なり。頭註云むらさきの色こきときはふかきゆかりといふ心なり。(古)こは古今集にむらさきのひととゆゑにむさしの草はみながらあはれとぞみるといふあり、たとへいへる意をたしかにしらすとてむさし野の歌のこゝろぞと記者の釋したる也。(彦)意は諸註にいへるが如きも、諸註、これを記者の文とせるは非也。これは次の段「ものうたがはしさによめるなるべし」と同じく、

○昔、男色ごのみとしるく女をあひいへりけり。されどにくくはたあらざりけり。しばくいきけれど、猶いとうしろめたく、さりとして行かではた、えあるまじかりける中なりければ二日三日ばかり、さはる事ありて、えいかでかなむ

出てこし跡だにいまだかはらじを
たが通路と今はなるらむ

ものうたがはしきによめるなるべし。

○むかし、黒色ごのみとしるく、女をあひいへりけり。されど
なくはたあざりけり。【舊註】(愚)小野小町が事をいへり。さ
れどはたにくいはあざりけり、はたは將の字也。又といふ心な
り。さりといひてはたえあるまじかりけり、いかではあざりな
り。なほはたえあざりける中なりければ、いかではたえあざ
る中といふ心也。上の詞を返にいふ也。【新註】(勢)しるくとは
しりつゝの意なり。にくむといふに輕重あり仇かたきをにくむと
物をきらふとなり。まはきはしくおもはぬなり。後夏蟲のし
るくまどふおもひをばこりぬかなしと誰かみざらん。(古)相い
ふとは相つたらふと云に同じくあひてふ語心すべし。(新)しる
くとは色好みとしらばはじめよりあひしらであるべきことなる
を色ごのみにてこゝろあだなる女としりつゝなじみになれる意な
り。後撰集の歌に夏蟲のしるくまどふ思ひをばこりぬかなしと
たれか見ざらん。されど云云とは色好みなるは心あだしくあ
しけれど又にくむ所もありと云意也。はたは亦の意にて又
といふよりはつひざますこしかりし。△あひしれり。塗本にし
たがふ。

○しはく、いさけれど、猶いとろめたく、さりて、いか
てはた、えあるまじかりける中なりければ二日三日ばかり、さば
る事ありてえいかてかくなん。【舊註】(直)しはくいさけれど、
歌々いさける也、只細々なり。いとろめたくさりて、うし
ろめたく有とてそのまゝゆかずしてもぬられぬ也。いかではたえ
ぬ中もと云意に解れたるはひがごと也。こゝろもとなきにしば
くいくにさはる事ありて二日三日ばかりいさかぬほどはいと
く心にかゝれば使さして歌をおりていかにいふぞとこゝろむる
也。△さりてと云よりしも皆塗本はしたがふ。眞本も大かた同
じ今のかな本は衍文ありてさらに聞えぬ事也。さるを契沖法師の
眞名本をも見ながらそれによらずしてきこえぬ文をたすけてと
くいへるはいかなるひがごとぞや。

○出てこし跡だにいまはかほらじを誰かよひざと今はなるらん。
【舊註】(愚)色ごのみとしりてよめる歌也。(直)此色ごのみの女
が出てこし跡より誰人のかよひちと今は成らんと也。(闕)心は
明し、我おもふ人の頼みがたきといふ心なり、色ごのみの女なれ
ば我いてこし跡より誰人のかよひと今はなるらんとなり。【新
註】(勢)新古今戀五葉平朝臣。新古今今にはいにて、いにしと有り、
出てこしあとは我歸るさのあしあとなり。(古)はやう變る事
のたとへにはふめる跡も消ぬまにとも消もまだあたゝかうなるに
なども常にいへり。(新)そなたの家より出てかへりこし我足あと
だにいま消すあらんを君が心はかりてこと男をかよはしたま
ふべければたがよひちと今はなるらんと云意也。(按)新古今集
戀五、願しらす業平朝臣、いにていにし跡だに未だ變らぬに誰
が通路と今はなるらん、この物語の歌を少しかへて入れたり。

○もの羅はしきによめるなるべし。【舊註】(直)女の心うたがは
しければ也(闕)是筆者の詞なり。【新註】(勢)是も作者の詞也。
(古)猶伏によめるなるべし。此物うたがはしきにとは今本のまゝ
に書り。さては上にうしろめたしといへるに全く同じ意に侍り此
文歌の左に書る詞は巧なるぞ多きをおもへば右と同じさまには有

しでの田長

有まじかりけり、上にいふごとく行すしてあられぬ也。猶はたえ
あざりける、行通ふとても打たのむべきやうにもなければ二三
日ほど世中のさばりありていかす歌をよみて也。【新註】(勢)しは
くいさかよひながらもとより彼女色ごのみとしればおぼつか
きなり。さりてとはかみのうしろめたくをうけたり。此みつの
はたはかしましきやうなれどもわざとくいへり唐の文法などに
かゝること多しと見えたり。えあざりけるとはかみのいかでは
たえあるまじかりけりといふにつきていへばなほはたいかてえあ
らざりけるなりと云意なり。(古)さてうしろめたけれど猶さだか
ならればえゆかてあらぬは世のつれ何事にも侍る事なり。△中な
りければを句とすべし後の物がたりにおほきいひなし也。はた
不語は將の字を書てはた何々せんとすといふに意かよへり。萬葉
にみよしの、山下風のさむけきにはたやこよひも我ひとりれんと
あるはまさに今夜も獨寝をせんするてふ意なるをおもふべし今の
もまさにゆかじとする事はえせられぬ中もてふ意也。(新)にくか
らぬゆふにしはくいさく也。まれにかよはばなきほどにこゝろ心や
あらんとうたがふ事もある習也。しはくいさけれどやはりこゝ
ろもとなきはいとたのみがたくみゆる女にぞありける。なほはや
はりと云意。うしろめたきは心もとなき也。さりてと云云とはしは
くいさくも心もとなき見ゆる女なれば中たえていくまじき事な
れどもにくからぬ所の心につきておぼゆればさありていかに
又あるまじかりける中なりければ絶すかよひけるにと云意也。け
ればの下に絶すかよひけるにと云詞をいれて見るべし。いひのこ
したる文也。はたはかみにとけるがごとくこゝろも亦と云意也。
古意にはまさると云意としてまきにかじとすることはえせられ

べからず猶伏は猶豫と書に異ならず然ればたゆたひによめるなる
べしとよまんか。さる時はもとよりうしろめたかりしにしばし事
有てゆかれば今はさこそあだし心にやなりはてつらん猶心見てこ
そゆかめてふ意より歌をしがよみてやりてたゆたひためらふ意な
らんとおぼしき也。猶豫は萬葉にたゆたひとよめり。(新)記者の
詞にて出てこしといふ歌をよみておくれるは女の心いとくあだ
に見ゆればふつか三日のほどにもいかやならんともうたがはし
きによみておくれるよしを釋したる也。古意にかみにうしろめた
しといひ又ものうたがはしきにといひてはおなじ意の詞かきなり
てわろきやうにはいはれたるは中々にわろしく同じ意の詞を重
ていふが此物語のふり也。(按)一本「物語はしきによめるなり」
れ又後人の註脚也語註これを記者の文とみたるはいまだし。

しでの田長

○昔、賀陽のみこと申す皇子おはしま
しけり。そのみこ女をおぼしめして、い
とかしこく、めぐみつかひ給ひけり。い
となまめきてありけるを、わかき人はゆ
るさざりけり。我のみと思ひけるを、

又人きよつけて、文やるとて、ほととぎすのかたをかきて、

杜鵑ながなく里のあまたあればな

ほうとまれぬ思ふ物から、

といへり。この女けしきをとりて、

名のみたつしでの田長は今朝ぞ

なく庵あまたと疎まれぬれば

時は五月になむありける、男かへし

いほり多きしでの田長は猶ぐたの

むく我住む里に聲し絶えずくば

○むかし賀陽の皇子と申す皇子おはしましけり。〔舊註〕(愚)賀陽親王は桓武第七の母夫人多治比氏二品治部卿まてなり給ふ、貞觀十三年十月八日薨年七十八。かしこく、榮花物語に、むかしかやのみ子といひし人こそさいくはかしこかりけれとかけり。〔圖〕勸

ざとつけて書るなるべしまた人きよつけてふみやるとはまたあ
る人のふみやるなり。(古)こは一人の女に三人通ふ也。はじめの
親王のさまと末の人の事は明らかし申なる一人の様は語をはぶき
しかば定かに聞えがたきに似たれば今本にはなまめきての下に有
けるをてふ詞をそへて女のなまめく事とせしにや此詞古本になし
有てはいよこことわりなきを好事の例のわざならん故に古本に依
ておもふにこの中の男は他人のかよふををしらで我のみと思ふ故に
艶を含みて心に入て通ふを云ならん。さて最てふ語の上に詞を略
けるはこの上下とおなじく書ては文つたなくとての事か又脱文あ
るにやとおほゆ、されど態の意はしるけれど右のごとくいふ
也。△又人聞つけてとはこのひとりは今初めて聞つけたる也(新)
女をおほしめすは何とおほしめさぬうらにて女にみ心をとめめ
たまふをいへり。かしこくはよくと云意也。つかうはつかひを
音便にいへる也。女に御心とめめたまひてよくめくみつかひたま
ふゆゑによき女にあまたまぬりさむらふ意をこめてかける文な
り。△たまひけり。塗本にしたがふ。よき女にあまたまむらふ中
にすぐれてなまめきてありける一人の女を若き女のこはゆるさず
してとかくいひよりかたらひけると云意也。さていとなまめきて
ありとはことごとく艶なるよしなり、さるか臆断に廿八段の
とかくなまめくとおなじ意にとけるはたがへり又古意に此なまめ
きてあるを男なりといはれたるも誤りなり。△いと。塗本二本に
したがふ。わかき人はゆるさざりけり。塗本によりてくはへつ。
いとなまめきたる女にかよふ若き男の我ひとりと思ひけるをはや
うものいひける男のありてその男が我のみと思ひなる男の事をき
よつけてうらみの文やる也。これは一人の女に二人の男ものいふ

物云賀陽親王桓武第七、母夫人多治比氏三品治部卿、貞觀十三年
十月八日薨、七十八、榮花物語に、むかしかやのみこといひし人
こそ細工はかしこかりけれと書り。〔新註〕(勢)賀陽親王、桓武天皇
第七皇子母夫人多治比氏二品治部卿貞觀十三年十月八日薨七十八
歳。或抄に三品治部卿とあるはあやまれり齋衛二年正月二品とな
りたまへり。文徳實錄第七云齋衛二年春正月壬午朔戊子加三品賀
陽親王二品。同第十云天安二年八月己丑朔丙申勅賜二品親王帶
劍。榮花物語に昔かやのみこといひし人こそ細工はかしこけれ。
〔古〕賀陽親王は桓武天皇の皇子にて齋衛二年に三品より二品した
まへり文徳實錄にみゆ。

○その皇子、女をおほしめして、いとかしこく、めくみつかひ給
ひけり。いとなまめきてありけるをわかき人はゆるさざりけり。
我のみと思ひけるを、また人きよつけて、文やるとて。〔舊註〕
(愚)中将なまめきより此女に物いひける也。(直)業平賀陽親王
のおほしめす女になまめく也。業平の吾のみと思ひたるにかやの
御子の御寵愛とき、付る也。〔圖〕御説、女をおほしめす戀路には
あらず。女をめぐみ給ふ御憐愍なり。人なまめきて、業平也。又
人きよつけて文やる郭公のかたをかきて。又かよふ人ありと中将
きよつけた事也。〔新註〕(勢)日本紀に愛の字をめぐむとよめり。
人は業平なり、なまめくはさきにもとくなまめくあひだにとい
へるに同じ。また人のなまめくと云にはあらで萬葉に人なふりと
いひ常に人たのめなど云人にてをんなの業平になまめきかゝるを
いふにや。我のみとおもひけるとは業平の心にこの人にいひわた
るは賀陽親王の始よりおほしめすをおきて其外には我のみと思は
るゝなり。此みつのけるかと云詞もかみのほたと云詞のごとくわ

なり。古意の説はわるし。

○ほととぎすのかたをかきて。〔舊註〕(直)繪にかきたるなり〔圖〕
繪にかきたるにや。〔新註〕(勢)これは業平の下の歌にあはせて歌
かく下繪あるは別にほととぎすを書てふみにそへてやるなり。
是までの詞きゝわきがたし、ことにまた人きよつけてふみやると
いひてほととぎすのかたをかきてと云はつつかぬやうにきこゆるな
り。〔古〕ほととぎす繪がきて其かたへに歌も書てやりしならん。
(新)文やるとて子規のかたをつくりて文にそへたる也。さるは女
をほととぎすによそへたる歌文の中にかきてあるゆゑ也。古今集
に小町が姉のやけたるちの業に文をさして人のもとおくりたる
もその文の中に時過てかれゆく小野のあさちには今はおもひぞた
えずもえけると云歌あれば也。それとおなじ心ばへにて昔の風流
のわざ也。△かたをつくりて。塗本にしたがふ。

○杜鵑ながなく里のあまたあればなほちとまれぬ思ふ物から。〔舊
註〕(愚)此歌古今第三讀人しらすの歌なり。ながなくは汝が鳴也。
ほととぎすなんちが鳴里があまた有程にうとまむと思へ共猶思は
るゝと云り。〔新註〕(勢)今古夏題しらす讀人しらすの歌なり。な
がなくは汝がなくなり萬葉に汝をなとのみもよめり。下の句は打
かへして思ふ物から猶うとまれぬと心得べし女の我にのみはちぎ
らで他人にこゝるをかよはすをほととぎすのまぢわぶる人のやど
にのみはなでこなたかなたの里にとびわたるによそへて思へど
もなほうとまるゝと云り。うとまれぬにうらむる意有。古今「か
つみれどうとくもあるかな月かげのいたらぬ里もあらじと思へ
ば。同「思へどもなほうとまれぬ春がすみかゝらぬ山のあらじと

おもへば。(古)こは古今集の夏の歌にてたゞ郭公のうへのみなるをこもにかく端書をつくりて人々に心かよはする女にたとへたり、末の句はおもひしたはれながらまたく疎まるゝとよめり。新撰萬葉にうとみつゝとむむる人のなればや山ほととぎすうか

れてはなく。古今集に戀にも難にも此心の歌あり。(新)此歌はほととぎすよ汝がなく里のあまたあればなつかしうおもふものから願うとまれぬと云意也。五四と句を次第して見る意也。なほ汝なりなほうとまれぬはやはりうとまるゝと云意也。○といへり、この女、けしきをとて。【舊註】(愚)氣色をとては中將のきげんをとてよめるなり。(直)我をうたがふと業平のけしきをとる也。【新註】(勢)けしきをとるとはこゝろをとるなり源氏春風に其夜は内にもわたらせたまふべけれどとけざりし御けしきとりに夜ふけぬれどまかせてたまひぬ。金葉「ぬす人といふもことわりさよなかに人のこゝろをとりにきたれば。(古)しかいひたるに今は女のあらがひがたくあらはれつと思へばけしきのおとりてかくまわれるかへししたりといふ也。(新)男のけしきを女の

とる也。俗語に機嫌をとると云におなじ源氏物語にあまたみえたりと申すと云詞もよき人にも申すにはそのけしきをとてり申意也。松風巻にその夜は内にもわたらせたまふべれどとけざりし御けしきとりに夜ふけぬれどまかせて給ひぬと見えたる御けしきとりもこゝとおなじ。古意に女のけしきの劣たるよしにとかれたるはわろし。○名のみたつしての田長は今朝ぞなく麻あまたと誦せぬぬれは。【舊註】(愚)してのたをさは郭公の異名也。といふ事此歌に見えたり。今古歌「いくばくの田をつくれればかほととぎすしてのたをさは

よぶとよめるもかりくなくをよぶといへるなり。成都記云杜宇亦曰杜王自天而降稱望帝好稼穡至今蜀人將農者必先祀杜王。格物論曰杜鵑三四月間夜鳴遠旦田家俟其鳴興農事。萬葉第十四東歌に「しなのなるすかのあら野にほととぎす鳴聲きけば時すぎにけり。此時過にけりは時はきにけりといふこゝろなり。同集に時のゆければ都となりぬとよめるも時のいたれば都となると云こゝろなり。郭公の鳴て農業をほげむべき時のきたるといふこゝろをよめりとみゆ。彼是を思ひあはするにかゝるこゝろにて異名にはつけ侍けるなるべし。名のみたつとは郭公のあまたの里になくよしの名の立なり。けさぞ鳴くはいまぞなくと云意なりよそにかよひてはなかつたがはるゝわびしさに鳴とよめり。菅家萬葉に「うとみつゝとむむる里のなればや山ほととぎす浮れてぞなく。いほりとはしての田長と云に付てなり塵の字なり塵の字にあらず。山田もるあきのかりは秋の田のかりほのいほなどもみなこの字なり。しかればこなたかなたの田家にいたりてうながしよぶこゝろにていほりあまたといへるなるべし。(古)かたんにうとまるとせんすべなくて今はれをのみなき侍るさはいへどそは名のみなるを猶ことを残してよみたり。かくあらがはず弱れるかへしにて先にはほりなりしが俄に劣りたるけしきを知るべし古本に劣の字あるも證也。(直)今本はいほりあまたとあり右一首に付てはさも有るべけれど古本に爾と有るからは入々此時うとみ出たるを云也さればいよけしき劣るべし。けしきを執てふ詞は源氏物語にも金葉集にもあれどそれをもつてこゝを思ふはあやまり也古本に劣と有て假字おとる也けしきをとるとはかなたがへり。(新)しての田長とは子規の一名なりと古きもの

あさな／＼よぶ」此歌は時鳥ならで別にしてのたをさとてあるやう聞え侍り。いほりあまたはさきの歌のながなくさとのあまたあればといへるに付けてよめり。名にたつもながなくさとのあまたあるといふ名にたてるなり。いくばくの田をつくれればかといふ歌につきて又いほりあまたといへるにや。(直)してのたをさは郭公の別名也。古今に「いくばくの田をつくれればかほととぎすしてのたをさをあさな／＼よぶ」此歌は時鳥ならで別にしてのたをさとてあるやうに聞え侍ると譯聞のあそばせり。此歌にて別とは決せざる也。郭公の啼きとがあまたある名にたつ程にそのゆゑに我は今なくといへり。けさぞ鳴は今ぞなくと云儀也。(爾)「早苗とるおりにしもなく時鳥しての田長とむべもいひけり」【新註】(勢)しての田長はほととぎすの別名なり。古今に敏行「いくばくの田を作ればか時鳥しての田長をあさな／＼よぶ」顯昭云しての田をさとては郭公の一名なりと古き物にしるせり。ほととぎすはしての山よりきたりて農をすゝむる故にしての田長と云り其詞に云過時不熟となくがほととぎすときこゆるなりと申す。時過はみのらしと鳴と云々。但しての田長をあさな／＼よぶとは四出の田長とは別の物ときこゆ、いかでかおのが名をよぶべきと云々。今云ほととぎすを冥途の鳥なりと云こと十王經に見えたれど彼經信をとるにたらざる物なり、されども古より相傳てしかよみきたれり。拾遺にうみ奉りたる御子のなくなりてまたのとし郭公をききて、伊勢、しての山さえてやきつるほととぎすこひしき人のうへかたらなん。敏行の歌に「しての田長をよぶと云は別に「しての田長ありてそれをほととぎすのよぶにはあらず」しての山よりきて農をすゝめてなくをよぶと云り。萬葉かりの歌にいく世をへてかおのが名を

にしるせり。ほととぎすはしての山より來りて農をすゝむる故にしての田長といへりと顯昭のいはれたるぞ此歌にはよくかなひたる。名のみたつとは子規はあまたの里を鳴わたると云は名のみたもたるにてまこととはさにあらずあまたの人にうとまれぬればそれかなしきに今ぞなくといへる也。したの意は又こと人にもいふやうにたまへどさやうの身の上ならず君のうとまれしかなしさにこそなけといへる也。あまたの人にうとまれぬればといひて君にうとまれしかなしきになくこゝろをば歌のおもてにはいはずしておもはせたるなり。さてまたいほりあまたとは田長といふにつけて田のほとりにさる人のいほりおほかるを詞の縁にいへるのみなり、さればこゝろはあまたの人にといふにぞありける。△あまたに。塗真二本にしたがふ。(按)比古婆衣卷五云、ほととぎすの一名をしてのたをさと云ふ由は、籠策師の和歌童蒙抄、清輔朝臣の袋草紙、仲實朝臣の續語抄などを始、はやくものに見えてかくなきを然名づけたる義は顯昭法橋の袖中抄に、古今集(保元)に藤原敏行朝臣の「いくばくの田をつくれればかほととぎすしてのたをさをあさな／＼よぶ」とある歌を擧てしてのたをさととはしづのたをさとといふなり、ほととぎすは勸農の鳥とて過時不熟となくといへり、時すぎは實のらじと云ふ義なり。それがほととぎす／＼となくとは聞ゆといへり云々(但し過時不熟となく云々の説は、顯説なり、ことし、さて此引文に云々とも、ものせ)籠馬樂歌に云、妹か門夫な門行過かれてやわが行かひち笠の雨もつや降らむしてたをさ雨やどり笠やどり、どりしてまからむしてたをさ云々、伊勢歌集云、しての山こえて來つらむほととぎす戀しき人のうへかたらなむ、とよめり(此歌古今集に載られて、二)さればしての山より來る事はむか

里に聲たえずはやはりたのみにすべしと云意也。こゝかしこに鳴
わたる事を田長といふにつけかけ歌の詞によりていほりおほきと
はいへる也。詞のおもてにかゝづらはす意を思ふべし。此たぐひ
歌にはおほくある事也。さて田長はといふてにははもとあるべき
所のやうに聞ゆれどもかけ歌にはといへるをうけてそのまゝには
といへるおもしろき也。はの下にうとましければとも云詞をい
れて見るべし。いひのこしたるてにをは也。(按)時はさつきに
なん有ける 例の註文の挿入也。

われさへもなく

○むかし、男ありけり。あがたへ行く人
に馬のはなむけせむとて、よびたりけ
るに、うとき人にしあらざりければ、
家とうじに盃さゝせて、女のさうぞく
かづく、あるじの男、歌よみて、裳の腰
にゆひつけさす。

又一部をさせる所も侍り。且ぬなかと田居の方の意なるを田を
略きていふと聞ゆ然ればあがたとぬなかはこまかにいふ時は別な
れどすべては同じことにもなれり。馬のはなむけは旅行人の馬の
頭をかたへ引むかはするよきのわかれの宴なれば云のみ。(頭
註)班田の事戸令を見るべし○又郡の内に庄といふ事後にあり是
をもあがたといふ事侍るを轉じて云也。(新)あがたへゆくとは任
國にゆく事也。土佐日記にある人あがたの任とけ五とせばはと
あるも土佐の國の守にてありしほどをいへり。馬のはなむけとは
もと別路に馬をとりて馬のはなをそなたへむけて旅だちゆく人
をしばし見おくるより出たる詞なるべし。さてうつりては饒する
事を云り古意に旅だつ人の馬のはなをあなたへむくる事にとかれ
たるはたがへり。△男ありけり。知本によりてくはふ。よびたり
けるに。これも。

○うちと盛人はしあらざりければ、歌とうじは、さかづきさゝせて
女のさうぞくかづく。あるじのせとと歌よみて裳のこしにゆひつ
けさす。(舊註)直業平は有常がむこなれば、うときひとにもあ
らずといふ。家とうじわが妻をいふ也。女のさうぞく、裝束、裳か
らぎぬのやうのものなり。あるじの男、業平なり。出す裝束に此
歌をそへてやス也。(愚)ものこしに、裳の脇に歌をよみて結付也
〔新註〕(勢)遊仙宮云娘千既是主人。女少府須作主人公。これ妻
を家とうじと云論語曰邦君之妻君稱曰夫人。夫人自稱曰小童遊
仙宮妾の字をわらははとよめるは娘がみづから云詞、家とうじとは
これらのこゝろなるべし。女のさうぞくは裳からぎぬなるべし。
もにつきてよむ歌なればもにゆひつくるなりまたも腰に付るは
いはふ意も有日本紀第九神功皇后記云千時適當皇后之開胎則

出てゆく君が爲にとくぬぎつれ
はく我さへもなくなりぬべき哉。

此歌は、あるが中におもしろければ、
心とぐめてよまずば腹にあぢはひて、
こきあぢはひなかるべし。

○むかし男ありけり。あがたへ行く人に、むまのはなむけせんとて
よびたりけるは。(舊註)愚あがたは無なりの中をいふなり(直)
の中へくだる人也。紀有常が事也。〔新註〕(勢)我國にて無と云は
田舎なり古今に文屋康秀が参河様となりて小町がもとへあがた見
にはえいてたじやといひ送りけるも田舎を見には思ひたつまじ
きやとなり。下の詞をみるに有常なるべし嘉祥三年五月近江權大
掾仁壽二年但馬介齊衡元年正月讃岐介これらの時。天安元年五
月伊勢權守二年二月肥後權守。説文曰饒送去也除け以酒食送
也。(古)京よりぬなへ任などに行人に別れの宴せんとてよびて
親族なれば妻などまで別れの盃さしかはす也。あがたは班田の意
也いにしへは諸國へ班田使をつかはされて六年に一度國ごとの田
地を改めて人ごとに頒ちたまへり故にあがたてふ名はあり。さて
御使は國府にとまりて其事定めたまへば國府を指て無ともいひ

取石種(種)而新之日事竟(事)遂日産(産)於(於)建土(建土)。萬葉第十九藤原清行を
遣唐使としたまふ時の孝謙天皇御製。よつの舟はや歸りことしら
かつき我ものこしにしてつゝまたん。(古)家とうじは家戸主也。
これをいにしへは月母とも書て戸は一つの戸也。じは主の略にて
宮主をみやじと云が如し一月の内をつかさどるは婦なる故に後世
は妻を家ぬしてふも此意也。然ればいへとしなるをとうじといふ
は物となふるには語のみじかきを延べ長きは約めていふ例常にお
ほし。さうぞくなどと書たるは裝束の外にもおくり物有をしら
せたり裳のこしは所謂ひきこしなるべし。古本にゆひ付指と書る
指は借字にて歌は紙に書て其組に入して結付爲せしむるといふな
らん。(備註)和名抄に戸自は老女の稱と云は中比のさだ也萬葉に
坂上の耶女のむすめにおくる歌に我子のとじとよみたるは其むす
め坂上の大耶女一戸の室と成てあるをいへり然れば老少によら
ず家主とあるをいふ也さて老女をいふ事となれるはいにしへ
は老後となるまでも其家をゆづりてべちにこもりたる事なし故に
老女ある家は老女を必戸主と稱すれば也そのとじの戸は清むべき
をにこるは家よりつゞくる時の音便のみ也○又いにしへは戸主
とのみいひしを後に又家の語を上におきていふ也たとへば紅い
葉なるを其後に韓國より來るが殊也とてからくれなぬといへるた
ぐひにて皆後世のいひなしなるを其まゝに雅言にも用うる事とな
りぬ。○裳から衣をおくれる意也されば妻にかはりて男のよめり
是をもておもひ見るに後には男より男へも女の裝束かづくるを例
のやうになれるは中比よりの事なるべしさて草木の枝にさし
ておくるてふ事あれば是もさる事と思ふべけれど上にゆひ付と
いひて又さすと云べからず。(新)したしき人なれば妻まで饒羅に

出して蓋さしする也いへとうじは家戸主を音便にとうじといへるにて俗に女亭主と云に同じ。かづけんとす、はかづかせんとする意にておくること也。さすは妻にゆひつけさする也。さかけるはあるじの男が妻にかはりてよめる歌なるよしをしらせたる也。

(按)裳「倭名類聚抄」裳、裙裳、裙名云、上曰裙、(同字亦作裙)下曰裳、(山名毛)白氏文集云、青羅裙裳、(此同)「箋註倭名類聚抄」原書云、裙下裳也、聯、接群幅也、與、此所引不同、按下曰裳、見詩綠衣及東方未明傳、皆上曰衣之對也、上曰裙之訓、未、知所出、此恐釋名云、裙下裳也之誤、又按、說文云、常繞領也、又載、常字、云、常或从衣、方音云、繞、繞謂之常、廣雅云繞領、繞常也、然則常或云繞領、或云繞可、知圍、繞領、披之、是可、以充、皇國婦人所著裳也、說文又云、常下常也、釋名、上曰衣下曰裳、裳、障也、以自障蔽也、儀禮士冠禮、禮記深衣所云裳、及皇國禮服之裳、亦是、然則婦人之裙、不、得、謂、裳也、是裙在上、裳在下、故訓、常爲下裙、釋名云、裙下裳也者亦誤、源君所引義或出、他書、誤、出典、亦、未、可、知、也、伊呂波字類抄裳、(毛)裙、(同字)「倭訓栞」三、裳は古事記に裳裳とも見ゆ、下の衣なるをていふにや、靈異記に裙もよめり、檀日本後紀に、自、今後女所服裳、夏は表紗、冬は中裙、不、論、貴賤、一切禁斷と見えたり、唐衣の下、袴の上にする也、白羅裳、地撰裳、下撰裳等あり、古事記傳七、御裳(○中)母とは、羅衣の切まりたる名にやあらん、(羅衣、羅乃羅なればなり、(裳)裳も羅衣なり、(下)下)「女房裝束抄」裳のこしなる、長さ一丈おほし、ひきこし、うきをわり物もんちいさきあらに、くわん、小こしおもひくのをり物、大やうは、からぎめの袖より出したる物をする也、いづれにもいと

にて、をきもの有、色ゆるさる人、りうもんのきめをさる時、おほし、ひきこしは、うきをわり物、うらはひとへもんのたやあや、もんちいさかるべし、夏はすましうきをわりもの、うらは、それもひとへもんのうすもの、冬は大こし、ひきこしのうらはやうしばかり、ひきこしのながさ、六尺五寸、おほしひきのながさ、二尺五寸、小こし、四尺三寸、ながさはこはんとはるべし、冬はいづれも、おめらかすべし、夏はひねりかさめべし、ひとへ裳は、大こしの廣さ四寸五分、小こしの廣さ二寸五分、いづれも、うはさしのひしくみあり、「裝束要領抄後附」女官、裳、小腰左右ヲ脇ノ下ヨリ前ヘマハシテ、本ノ帯ノ結目ノ上ニ、諸鉤ニ結テ下リタルヲ取合テ、平緒チカヘスヤウニカヘスベシ、下帯ニカヘシテスルガヨキナリ、下リハ諸鉤ニ大方腰ノ長サニヨルベシト云リ

「近代女房裝束抄」



裳。女御。院中

地こめ 花飾附
懸帶 長尺許 同書
引腰 長一丈許 同書
裏 幅上四寸餘下七寸許

私云、裳者禮服云、撰是也、訓義解ニハ、ヒラミ、又シビラト訓ズ。

○出てゆく君がためにとぬきつれば我さへもなくなりぬべきかな
【舊註】(愚)我さへもなくとは出てゆく人に心をたぐへやるほどに都にのこりとまりながらなきごとくなりたる也。古今歌「雲井にもかよふ心のおくれればわかると人に見ゆばかりなり」此歌の心になへるなり。もといふ詞は裳にそへたる也。(直)出て行く人のために衣をぬぎつれば我さへ裳がなくならずと云。もは裳の字也。裳の字をばわざはひとよめり。衣裳のもなくと云をもつて福なくと云心よめり。人によき事をあたふれば吾にもよき事有り。陰徳陽報のことわり也。萬葉集に安けくあらんこともなくもあらんを世中のこゝのもなくに裳の字をかきり。【新註】(變)六帖には第二の句きみをいふと第五の句なりけるかなと有裳の字をもとよめり裳はわざはひなればそれを裳にませて君のたためとてぬきつれば我さへもなくならず女のいふ意なりゆくもとまるも平安ならんことをいふなり人によきことをあたふれば我にもよきことあれば陰徳陽報のことわりなり。歌しらぬ人にきかせては我にもなくならず人にもあらんといはんか歌はそれまではなく只我さへもなくといはんためなりこのもなくと云調萬葉第五山上憶良長歌に玉きはるうちのかぎりはたひらけくやすくもあらんを事

われさへもなく

もなく我さへもなくあらんを云々第十五長歌にいまだにも我さへもなくゆかんとゆきのあまのほつてのうらへをかたやきて云々同巻に族にてももなくはやことわざも子がむすびしひもなれにけるかも。(古)君がこゝを去につけて裝束脱てまゐらすはもとよりにてしたふにつけては我さへもこゝになく成てしたひ行べきこゝちすといふを本にて又我さへなくゆきなど古よりいふまゝに此人の爲とて、すれば我さへなく我無事なくあらんと祝ふ意をかけたなり。我さへなく萬葉に玉きはる内のかぎりはたひらけく安けくあらんを事もなく我さへなくあらんを又今だにも我さへなくゆかんと又我さへなくはや來と我妹子がゆひてし紐はなれにけるかも是族ゆく人はいはひていへる語也。恙なくゆきかへりれと今も云めり。(新)裳なくに我さへなくかけたる歌也。裳とはわざはひなどすべてよからぬ事をいふ君がために裳をぬげば裳のなくなるといふが詞のおもてにて君が旅路のことなきをいふれば我もことなくもなくなりぬべし、さて、うれしき事と云意也。かなはさて、と云詞にあたる又ことなくともなくと同じやうにいへる例は萬葉の長歌に玉きはるうちのかぎりはたひらけくやすくもあらんをこゝもなくもあらんを云々。

○此歌はあるが中におもしろければ心とめてよまらずは腹にあぶりはひてござあちはひなかるべし。(新) (知本に於てあり今の知本は知本におよばず) 此又塗本にはなし、それによりてはぶきつ、後の人のおのが思へる事をかたへに書いれおきたるがまされて本文にはなりしなり。此物語にすべて歌を評したる記者の詞は大かたはその歌のわるきよしにいへる也今みればよくもあらざりけり。さる歌のきたなげさよなどいへる類也。又わるからぬよしにいふとて

かなが人のことばにてはよしやあしやあまれりやたらすやなどいへり心してかきたるものとぞおもはるゝ此歌も記者のよみつらんをみづからあるが中におもしろければといふべきは古意にたはふれてかける也といはれたるもわろし。(古此歌にも云く機重もふては思のよく意得たからんふかく心のうちにおもひとく時はふかきあはらんとてふ意にいひたり。こゝは例の載れていへる物にてかく書るはかへりてよろしからぬ歌と知べし。さて今本には影の詞にあらはれて下(按)このところたるを其まゝにいひとすとす。故に成説どもはあやまりぬ。)

飛ぶ螢雲の上まで

○昔、宮づかへしける男、すゞろなるけがらひにあひて、家にこもりゐたりけり。時はみな月のつごもりなり。夕暮に風すゞしく吹き、螢など飛びちがふを、まばりふせりて、

とぶ螢雲の上までいぬべくば秋風

吹くと雁につげこせ。

○昔、宮仕しける男すゞろなるけがらひにあひて、家にこもりゐたりけり。時はみな月のつごもりなり。夕暮に風涼しく吹き、螢などちがふをまばりふせりて。【舊註】(愚)つれなくともり喪籠せるなり。よひはあそびをりて。うれへの中にあそぶべきにあらず。よひのほどすゞむを云べし。(直)業平の仁心なり。一目もみぬ者なれども年ころなれたる恩愛のごとく思にこもりける也。時はみな月、六月下旬の比なれば、よひは納涼する也。夜ふけてやすすゞしき。六月つごもりなればはや秋風もおとづれわたるなり。(剛)けふは其ま、けがらひにこもる也。一目もみぬ人なれども思にこもる、是業平の心なり。六月下旬の比なり。よひはあそびをり常の遊覽にては有まじあつき程に納涼する也。六月晦日なればかたへすすゞしき風のふく時分はたるのたかくとびあがるを見る面白き詞なり、何とやらん風情がおもしろき詞也。(勢)一目もみぬ人なれどもいみにこもるは業平の心なり。あそびをりてはつれの遊興にはあるべからず。其事本紀曰饒速日尊既神殞去坐高皇産靈尊以爲哀泣。即使速瀛命將上於天上。處其神屏骸。日七夜七以爲遊樂。泣哀歎於天上。矣古事記云天若日子死云云乃於其處作喪屋云云日八夜八夜以遊也。これらはよろづのしはざなうちやめたるをあそぶといへるや、いまま此意なるべし。古今「夏と秋とゆきかふ空のかよひちはかたへすすゞしき風やふくらん。螢火亂飛秋已近。」(古)いとおもしろく書たり。まだ見ぬ人の思にこもれる意をよきほどに書なし且夏の末の風のさまつゞ身にしむやうも其をこのかくてをる味はひあり。六月を

みな月といふ事は神鳴月の上下略にて十月は雷の鳴ぬ月なる故に神無月と云にむかへていふと東まる大人のいはれし寔によき考へ也。六月はことさら雷の鳴月なれば也。いとま有てなるをも遊ぶと云也。葬禮の事のみ執て常は公事なきを遊部と云ふが如し。雷を専ら神とのみいひなれたり雷丘をかみを霹靂をかみとけ雷鳴陣をかみなりのちんなどの如し。○水無月と書てひでりする月の謂と思ふは俗意なり。(よ)いとあつきころほひに夕は遊びをり契沖云古事記云天若日子の死りに父妻子等泣かなしびつゝ喪家を造りて日八日夜八夜以遊也と云に同じくよろづの所業を打やめて遊ぶなりといはれしは遊ぶてふ語をよくとかれたり遊遊とつゞけ遊は遊也と云義にてこゝに遊ぶと云に能かなへり物がたりに絲竹もてする事を遊ぶといひ蹴鞠を亂れてあそぶといへりすべて公事をやめてなす事を皆遊ぶといへり。(新)つれなくともりをりけり、つれなくはなすわざなくさびしきころ也こもるはいみにこもる也△をりけり眞本にしたがふ。あそぶとは管絃歌舞のたぐひをいふ事也。よひは云云とはよひのほどはひつきのまへにて笛ふき琴ひきなどしてあそびをるをいへり、むかしは人のしにけるをりはかならずしかする事にぞありけるさるは棺の前にておもしろき事すれば死たる人のめててまた此世にかへりやくるとてかなしみのあまりになすわざなるべし。古事記に天若日子の死たまふ所に日八日夜八夜以遊也、とあるを初め日本書紀には尤恭天皇の登天武天皇の巻などに天皇崩坐し處に歌舞奏樂の事見えたり又繼體天皇の巻に是歲毛野野臣被召到三千對馬逢疾而死送葬河而入近江其妻歌曰比羅智歌喻輔吏輔積能明樓阿府美能野能能俊伊香伊輔能明樓と見えたりはかゝる時はなべてあそびせし

飛ぶ螢雲の上まで

事しられたり。たゞし中むかしは比はみ國のいにしへのわざのやうやうにすたれたるもあれどかく此物語にけるをみればその頃までもさる事ありしなりけり。臆断にはよろづのしわざをうちやめたるをあそぶといふかといひ古意にはいとまありてなるをも遊ぶと云也といはれたる皆此所に叶はぬ説也。さる心ならんにはよひはと限りてはいふまじき也。こゝは夜更てこそなすわざをやめて眠あるやうに見ゆれ。(按)本文塗本に依る。と合説せり。○とぶはたる螢の上までいぬべくは秋かせふくとかかりにつげこせ【舊註】(愚)後撰集第五秋部、業平朝臣歌と見えたり。つげこせはつげおこせと云ふ詞也。すてに秋風こそふけと雁につげおこせよとなり。(直)後撰集には秋部に入り、雁を本にしたるにや。是は夏の歌也。宵のほどは暑氣はなはだしきやうなるが秋ふかく身にしむる風の吹て仲秋八月の天のやうにおぼゆるに折ふし螢が高くとび行なる。蘆葦水暗螢知夜、楊柳風高雁送秋と云る詩の心也。此歌の心はとくゞ雁をも催したてよといふ心也。關、蘆葦水暗螢知夜、楊柳風高雁送秋、夕殿螢飛思消然、孤燈排盡未罷眠などの體なり。雁をもよほしたてよといふこゝろなり。【新註】(勢)後撰集業平朝臣。此歌後撰集には秋部上に入り。つげこせはつげよとれがふこゝろなり。古事記には八千矛神の御歌にうれたくもなくなる鳥かこの鳥もうちやめこせれとよませたまへるはなきやみれとのたまふなり。萬葉に乞の字をこそとよめるもれがふ詞なり。せとせと五音通すればこせこそ同じ詞なり。萬葉に歸雁の歌に十九「春まけてかく歸るとも秋風にもみぢの山をこえこさらめや。又「秋風にさそはれたる雁かれ」とも、秋風にはつかりかれぞきこゆなる」ともよみて秋風にさそはれて来る物な

るに夜ふけて涼しきはや秋風の吹たちたるこゝちすれば雁に
げこせとほたるにあつらふるなり。もし魂は冥漢に歸する物なれ
ばほたるのたかくとびあがるにつけて魂にひとたび歸りこよとつ
げよと云こゝろを雁は春かへりて秋はまたくる物なればよそへ
て雁につげこせとよめるにや。此男みふせりてと云にはこの意も
あらむやうにおほゆるにや。(古)こは後撰集秋の部に題しらす業
平朝臣とて有を用ぬたり夜更風すしく明螢の飛あがるに雁のこ
ん事をしと思ふべきころほひ也。すこし身にしむ秋風のさま此男
の今によくおもひよりて取つ。つげこせは萬葉に告乞と書つてつげ
こせともつげこそともよみてこせは願ふ意也。是によるに告よか
しといふのみ也。(昔て來らせといふまで思) (前註今本に行螢とある
はとらず古本にとぶ螢とあり後撰にもとぶ螢とあれば也)古本傳
越と有、越は借字也傳は螢にことつたへよてふ意を得て書たれど
古言の例告乞也。(新)つげこせは臆断につげよとれがふ意也。萬
葉に乞の字をこそとよめるもれがふ詞なり、せとそと五音通ずれ
ばこせこそ同じ詞也といへるがごとし。又秋風にさそはれたる雁
がれとも秋風にはつ雁がれぞ聞ゆなるともよみて秋風にさそはれ
てくるものなるに夜ふけてすしくさのほや秋風の明たちたるこゝ
ちすれば雁につげこせとほたるにあつらふる也。もし魂は冥漢に
歸するものなれば螢の高くとびあがるにつけて魂にひとたび歸り
ことつげよと云心を雁は春歸りて秋は又來るものなればよそへ
て雁につげこせよとよめるにや此男みふせりてと云には此意もあ
らんやうにおほゆるにやといへり、これも臆断の説也。雲のうへ
までいぬべくはといへるを思ふにげに雁によそへてなきことには
へりこといふ意ある歌なるべし。△とぶ螢真本にしたがふ。

夏の日ぐらし

○昔、男ありけり。人のむすめのかしづ
く、いかでこの男に物いはむと思ひけ
り。こゝろ弱くいひいでむことやかた
かりけむ、物やみになりて死ぬべき時に
かくこそ思ひしかと、いひけるを親と
つつけて、なくくつげたりければ、
男まどひきたるほどに死にければ、家
にこもりて、つれづれとながめて

くれがたき夏の日ぐらし眺むれば
そのことよなくものぞかなしき。

○昔男有りけり人のむすめのかしづく、いかでこの男に物いはんと思ひけり、心弱くいひいでん事かなくやありけん。【舊註】(直)

女を慈愛していつきかしく也。崇敬してたつとむを陽仰といふ
其と同じ心也。此女あはれ業平に物いはんと思へ共打出ていふも
おもはゆかりければ只心にしめてばかりにて打過ぎたる也。【新
註】(勢)册の字をかしくくとよめりまた太子大傳など云傳をもか
しくくとよむなり親の寵愛する女のと云心なり。いひ出すことの
かたくや有けんなり後拾遺にしらなみのうちいでんことぞつしま
しきおもひよるべの汀ならねば。(古)かしくくはいつきかしくく
といひて齋は凶を忌て吉を用ぬ仕ふるをいひかしくくは大切にあら
がめがしこまりて仕ふるを云故にいつきむすめともかく女の傳く
ともいへり神につかふるも其意同じければ古本に詞と書り凡是等
の語ひとの國にては忌齋視など事につきて字を分れどこゝには語
も同じく物に従ひて心得わくるぞおほき恐畏懼などもそれが如
し字を守りてこの古言をおもふはあたらず古言を守りて字は假
なる物とおもひ知べき也。(新)かしくく人のむすめの云云といふ
事をあとさきにいひて詞のあやなしたる也かしくくはいつきか
しくくとよむつげいひて大切にす意也。竹取物語に几帳のうち
よりもいださずいつきかしくきやしなふと云事見えたりいかで云
云は俗言にていはゞどうぞしてこの男にあはんと思へどむすめ心
にはづかしくていひいでがたくやありけんと思ふ也。さてこゝろ
のうちにおもひのむすほほれてわづらへる也。

し。なくくつげたりければ、女の親、業平がたへあはれ御出有
りて御覽じて給へれと云ふにや。しほどひきたりけれど。業平のこ
ざるさきに待わびてしにけり。(剛)やがて業平のまどひきたれど
もはやなくなるなり。かくいひ出んもいかゞとくぬくとおも
ふ程にやまひづくなり。かくこそおもひしか、此むすめのめのと
なやうのものにざんげするなるべし、それを女のおや聞つけて、
業平へ御出ありて、御覽じて給はれと云ふ。【新註】(勢)乳母など
にいひけるなるべし萬葉第十六に戀夫君歌一首短歌。左耳通良
布君之三言等玉梓乃使毛不來者憶病吾身一曾千盤破神示毛莫負卜
部座龜毛莫燒曾戀之久爾痛吾身曾伊知白苦身示深保里村肝乃心碎
而將死命示波可示成奴今更君可吾乎喚足千根乃母之御事歎百不足
八十乃爾爾夕占爾毛卜爾毛曾問應死吾之故。反歌。卜部乎毛八十
乃爾毛占離問君乎相見多時不知毛。或本反歌曰。吾命者情雲不有
散追良布君爾依而會長欲爲右傳云時有娘于姓車持氏也其夫久
經三年序不作往來于時娘子係戀傷心沉臥病痛瘦羸日異
忽臨泉路於是遣使喚其夫君來而乃歎歎流涕口號斯歌登
時漸沒也このたぐひなり。(古)女にたぐひにはぬをしらるこれ
又はとよむべき他なしが事父のとらんやは今本におやと有
はわるきを知れ。(新)ものやみになりてとは何やまひともなくわ
づらふをいへり。さてかくこそ思ひしかといふは下さまの人にむ
かひていふ詞つきなればめしつかふ女などにかたりしならんそれ
を親のきつつけたる也。聞つけてといへるに心をつくべしきつて
と云とは異也。なくくつぐるはむすめのさる心ありきともしら
でかく今はの時になれるくやしきもそひていとかなしく思ひつ
つぐる也。まどひくるとは娘のいきたえぬうちにあはんとてい

そきて足をそらにまどふ意也。

○事がたき夏の日ぐらしながむれはそのごとなく物ぞかなしき
【舊註】(直)いみにもる體也。上の歌はよるのうた此歌はひるの體をよめる。下の句そのことなく物ぞかなしきの詞面白し、吾か思ふゆゑになくなるといふ人の思にこもれるがあひそうたる事もなし何事を名残にせんともなくさるかなしきはその事となく物かなしき也。(闕)此歌は此夜よみたるとは見えす前後はしらす、いみにもりてひるつきたなどよみたる歌なるべし。日ぐらし、すみて讀なり。蟬の日ぐらしなくなどはにこりてよむ也。此歌其ことなくといへる尤おもしろし。此女なれなし見たることはなけれども我をおもふゆゑになくなるといふ人のいみにこもればなを名残にせんともあらず、そのことなく物かなしきとたゞ世間の無常によみたる心詞餘情がぎりなきなり。【新註】(勢)續新古今業平朝臣。此をんなになれたることはなけれども我をおもふ故になくなりてそのいみにこもればなになりせんとせんともあらずつくんとこもりなればそのことなく物かなしきとたゞ世間の無常をよめり。是はここのこもりぬるうち別時の歌なるを次にこゝに書るにや。(古)おりたちて悲しとならねどさすかにながめせらるゝ此こもり居のさまをよみたり上のは夜これは晝の意也、よりておもへばかの起もせず寝もせざるをあかしてはてふ歌のこゝろ詞を右の二首にわたして此うたかば記者のよみたりとも見ゆながめといふもいふが如くうれひある時の事也。(頭註)上のは只初秋のさまをよめる古歌を端をかへて用いたればそれにつきて記者の作れる也。(新)暮がたきとは日長きにつれんくなれば也。そがむるはもの思ひなるさまなり一首の意はあひ見し女のわかれ

ならればその事かと思ひ出てかなしむふしはなけれど我ゆゑに死したることのいとほしさを長き日ぐらし思ひつゞけてものがなしといへる意也。拾穂臈断などに世間の無常をよめりともけるはその事となくと云詞をこゝろえあやまりたるものなるべし。さて此歌はとぶ登の歌よみし夜の事にはあらずその比こもりをりて夕ぐれなどよめるなるべしかみにつこもりとあるは下句の事にて晦日にはあらざれば此歌よめるもみな月のうち也。

めかるともおもほへなくに

○昔、男いとうるはしき友ありけり。

かたときさらず、あひ思ひけるを、
人國へいきけるを、いとあはれと思ひて
わかれにけり。月日へて、おこせたる
文にあさまじう、えたいめんせで、月日
へにける事、忘れやし給ひにけむと、い
たく思ひわびてなむ侍る。世の中の人の

心はめかるれば、忘れぬべき物にこそあ

めれといへりければ、くよみてやる。

めかるともおもほへなくに忘らるゝ

時しなれば面影に立つ。

○むかし男いとうるはしき友ありけり。かた時さらず、あひ思ひけるを、人の國へいきけるを、いとあはれと思ひて、別けり。月日へて、おこせたるふみにあさまじう、えたいめんせで月日へにける事忘れやしたまひけんといたくおもひわびてなんはへる。【舊註】(愚)まことの友だちをいへり。これも女をいへるにや(直)業平の友也。まことに朋友の交は親子よりもつまじきものなり。かた時さらず。片時もさざる中也。大切なる友也、人の國へいきけるを。任におもむくとて國をあづかりてその任をうけて、一任四ヶ年也、五ヶ年也。左様の時の事なるべし。たゞ隨意に人の國へ下るにはあるべからず。月日へておこせたるふみ。夷中よりおこせたる文なり。毛詩の一日不見如三秋等といへり。これより以下の詞文の言の葉なり。【新註】(勢)あさまじと云よりふみはことばなり月日へにけることよと心によの字をくはへてよみて下は別によみ出すやうに心得べし。(古)日本紀に善友をうるはしき友ともよめり。(こをなひらの友也)古本には片時より別れにけりまでの詞はなく得不去路に往にけりといふはしむる説也)の使任などにて行を云べし。されど今の本のさまもこはあしから

めかるともおもほへなくに

ればあげつ。是にはいと云べき事あり下に論ふべし。あさまじは憎まし也人をほめをぞむにも我身のいひがひなきをぞむにも昔いへり、翻てふ草はさまのなぞまじげなればあさまじと云ふが如くあとなを音を通はしていふなり、古本に淺猿と書たるは訓をかりたるのみ。(舊註)今本によればあさまじくふより下は友の方よりの文の詞也。○あさまじしてふ語後世は淺き心てふことと思へり。さてはかなはぬ事多し身をぞまじきてふ言はなればあさまじさをにころべきを後にはあさまじ事とのみ思ふ故にすみていひなれたり。まことしくよまん人はさを濁れかしされど聞なれぬ人の聞にくしと思ふをいとほしとてかくても有なん本の濁るをしりてしばらくすみてとなふるたぐひのなきにも侍られば也。(新)うるはしき友は善友也思ひけるをのほがと云意也。ひとの國へとは都を出て他國へいきたる也いとあはれとは俗語にあのこりおほいことかなといふ意也。あさまじうより下は友だちのおこせたる文の詞也。あさまじうは俗語にけしからずと云意也。月日へにける事はことかなと云意也。思ひわびてとは思ふにせんかたなきをいふ。侍るにこゝにては居ますと云意也。○世の中の人の心は、めかるれば忘れぬべき物にこそあめれと、いへりければよみてやる。【舊註】(愚)目かれとはひさしく對面せぬ事也。(直)細く見えしたがれば忘れ忘るるもの也。(闕)あさまじく對面せめてめかるればなど文の言葉なるべし。【新註】(勢)めかるは目離と書めをはなすなり。(古)今の本には「よみてやる」と侍り古本になし後に書加へたる物とみゆ其の由次にいふ。(按)古意の本文「忘れぬべき物にこそありけれと云ひ遣りたりければ」とあり、上文はこの下の細註也。(新)めかるは目離にてあひ見ぬ事

也。
 ○めかるともおもほえなくに忘らるゝ時しなげればおもかげな
 つ。【舊註】(愚)わするゝ時なく面影にたちそへば今しめかれぬ心
 ちするなり。(直)こなたは目かるともおぼえず忘るゝ時しなげれ
 ばつれにおもかげのはなるゝ事なしと也。【新註】(勢)六帖におも
 かげの題に業平と入り歌の意あきらかなり。(古)目かるとおも
 おもひわするゝ世のならひなどいひおこせ給へど我は常に忘れま
 めらするひまもなきまゝに面かげにつとそひて見まぬれ侍る也
 されば目かるとおもはすといへり。(直)今本によれば右は大
 かつ今本につきていへり。然るにこの詞どもの様みな一人の男の
 文と見んも嫌ひなし。遺有と二所までそれも事によりてはおこせ
 たりともよめどこは上に昔男とていひくだしたればみなやりた
 りけりともむかた語の勢ひありて聞ゆ。依て思ふに世の中てふよ
 りは昔の男のやりたる歌なるべし故に古本のむねを左に擧ぐ。昔
 男最華美友在計利得不去路爾住計利除精火屋而遺有文爾淺操得右
 得不對面月日之經廢留事忘爲將給發痛念俺乍侍世間之人心波目
 難者可所忘物爾社在禮登言遺有計禮者。目難所思鳴爾所忘時者無
 者而影爾立。かくする時は贈答のうた也。ふかくふるき書見ん人
 正したまへ。(直)後少の人も考へずて心のまかせて書もらし又そへなどせ
 そへたる事。(新)此歌の意我はめかるとおぼえぬにいかでかくはの
 たまふぞさてめかるともおぼえぬといふはこなたにはわすらるゝ
 時しなげればつれに面影にたつゆふ也、といへるなり。第二句い
 ひのこしてふくめたる意かみにいへるがごとし。おもほえなくに
 はおぼえぬにと云意もおぼえずと言ふにはあらす古意の説たがへ
 り。

大幣

○むかし、男、ねむごろに、いかでむかしと思
 ふ女ありけり。されどこの男を、あだな
 りときよて、女カヨリつれなさのみまさりつゝ
 いへる

大幣おほなひの引く手ひきてあまたにきこゆればきこゆれば

思へどおもへどえこそ頼まざりけれ。

かへし男

大幣と名にこそたてれ流れても遂
 によるせはありてふ物を。

○むかし男ねむごろにいかでと思ふ女ありけり。されどこの男を
 あだなりときよてつれなさのみまさりつゝいへる。【舊註】(愚)れ
 んころにいかで、あはややおもふ心なり。(直)是女たれもな

し。此女業平をあだなる人と思ふ也。【新註】(勢)いかでとはいか
 にしてかあはんとおもふなり。(古)こは古今集にある女の業平朝
 臣を所さだめずありきすと思ひてよみてつはしけるると此二首
 有を今は端書をかへて一條とせるのみ。さて此物がたりにては男
 いかで違見てしがなとれもころに戀る也。あだとは他の字を昔よ
 り訓て他人に心のうつろふを略してあだ也とのみいへり。そ
 れを轉じて櫻花白露などに云も散きえなどしてあだしさまに變る
 意のみ。(新)いかでと思ふはどふぞしてあはばやと思ふなり。
 ○大幣の引手あまたにきこゆれば思へどえこそ頼まざりけれ。【舊
 註】(愚)古今集第四卷人不知の歌也。大ぬきははらへするるときお
 のゝなづるものなればひきてあまたといへり。男の心おほき事
 をたとへてよめり。(直)大幣は被する具也。あれこれの手をふる
 物也。其ごとくそなたはあれしが引手おほき程にたのまれずと
 也。大ぬきはたゞ幣帛也。【新註】(勢)古今集戀四云、ある女の業
 平朝臣をとろさだめず、ありきすとおもひつつかはしける。よ
 み人しらす。六帖には腰の句とまらねばとあり。典義抄も同じ顯
 昭云おほぬきははらへするに陰陽師のもちたるくしにさしたるして
 なりはらへはてぬればこれを各ひきよせつゝなづる物なれば人の
 もとごとによれどもとまらですぐればひく手あまたに止られば
 とよめるなり。古今「我をのみ思ふといはひあるべきをいでや心
 はおほぬきにして。六帖、みな月のなごしの山によぶこ鳥おほぬき
 にのみ聲のきこゆる。」(古)被の大ぬきは人あまたあつまりて手
 ふれ引物なるにかの男はおもふかつたおほくてかへひかると
 になとへたり。(直)古事記仲哀天皇の條に國乃大奴佐以て被せ
 しめ天武紀に諸國の國遣を召て幣を頒給ふを大幣とするされし

は公のぬき故に大ぬきと云り此歌によめるは大の語の意こと也。
 (新)大ぬきは藤原に顯昭の説とてはらへするに陰陽師のもちたる
 串にさしたるしてなりはらへはてぬればこれをおのゝひきよせ
 つゝなづるもの也といへるがごとし。さて一首の意は大ぬきのひ
 く手あまたなるがごとくあまた所にかよふ君ときこゆればれんこ
 ろにのたまふをばあきからず思へどえたのみにし侍らず、それゆ
 ゑにつれなくいらへ申す也といへるなり。△きこゆれば。塗本に
 したがふ。なりぬればとある本はわるし。
 ○返し男、大幣と名にこそたてれ流れても遂によるせはありてふ
 物を。【舊註】(愚)古今の第四卷にあり、業平の歌也。はらへしは
 て、後大ぬきをば川へながす物なればかくよめり。ありてふ物は
 ありといふ物の心也。あまたのかよひ所はありとも切におもふ
 人のかたにつひにとまるといふ心也。(直)大ぬきはあれこれの手
 をかくる物にてあれども被してながせばよるせあり、つひのよる
 せはそなたをこそといへるなり。【新註】(勢)同上返し業平朝臣。
 顯昭云かくとまる所なきやうなれども川にながれる時はながれ
 とまるところなくやはある。あまたのところへかよへども終には
 君がもとにこそとまれとよめる也。萬葉十一「川上にあらふ若な
 のながれきていもがあたりのせにこそよらめ。」六帖「わたつ
 みの沖のしほせに流れても人のよるせは有てふ物を。」按するに大
 和物語にかくて住すなりて後中將のもとよりきぬをなんしにおこ
 せたりける。それにあらひなどする人なくていとわびしくなん有
 なほかならずしてたまへとなむ有ければ内侍御心もであることに
 こそあなれ。萬葉内侍大臣良相女道母「大ぬきになりぬる人のかな
 しきはよるせともなくあまそ流るゝ。」となんいひやりたりける

中將「なむるともなにとか見えむ手にとりて引けん人ぞぬさと知らん。」となんいひける、かれば今この贈答はもし染殿内侍とまみかせるにてつひにふる瀬とはいひながら絶て後きぬをしにやりける時内侍今の返歌をふみて大ぬさになりぬる人とはよまれけるにや中將の返歌も今の贈答をおもへりとみゆ。(古)引きた多き名こそた、め今ながらへて見え終のよるべとはそこをこそと思ふなと波の流れゆけどよりとまる所あるにたとへたり元眞集に(朱雀院の御詠)大ぬさをばらへするとも此河の神はしららんふかき心を。能宣集に(六月にはら)みそぎする河の瀬せに引綱を大ぬさ也と人やみるらんこれにてめさ引有さまもしるべし。(新)歌のおもては大ぬさはひく手あまた也と名にこそたてれ川にながれてつひにふるせのありといふものをひく手あまたなりとていふべき事ならずと云意をふくめていひのこしたる也。又たとへたるしたの意はあまた所にかよふと名にこそたてれ見給へまゆく末につひにふる所はあるものをいひたまふはこゝろえずといへるなり。そのよる所は君也といはておもはせたる歌也。さてながれてもといへるはつれのどもとは異にてはかるくそへたるにてながれてと云意也。したの意は行末にと云にあたるにてもしるべし。これにならひて桐葉の巻に鈴蟲の聲のかぎりをつくしても長き夜あかすふる涙かなといへり。これもつくしてといふ意也。(按)この段の贈答古今集戀四、ある女の業平朝臣をとこ定めずありきすと思ひてよみてつかはしける、大幣の引手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ。かへし、大幣と名にこそたてれ流れても終にふるせはありてふものを」とありこの調書とこの物語はしの調とを較べ見るにこの物語の方歌とのうち合ひよろしく真

にせまりて見ゆるが上に調がらも古しといふべくなむ。

人またむ里

○むかし、男、ありけり、馬のはなむけせむとて、人をまちけるに、こざりければ、

今ぞくしる苦しき物とく人、またむ里をばくかれずくとふべかりけり。

○むかし、男ありけり。馬のはなむけせんとて、人を待けるに、こざりければ。【舊註】(直)旅(行人に馬のはなむけせんとすればおそくるを待也。【新註】(勢)古今に紀とさだがあはのすけにまかりける時に馬のはなむけせんとてけふといひおくりける時に爰かしこにまかりありきて夜ふくるまで見えこざりければつかはしけると有。大和物語云ひとの園の守の下りける馬のはなむけを堤の中納言して云たまひけるに暮るまでこざりければいひやりける。別るべきこともある物をひねしに待とてさへもなげきつる哉。

○今ぞしる苦しき物と人またむ里をばくかれずとふべかりけり。【舊

註】(愚)此歌古今集第十八にあり。紀の俊真阿波介にまかりける時に馬のはなむけせむとてけふといひおくりける時こ、かしこにまかりありきて夜ふくるまで見えこざりければつかはしける業平朝臣歌也。又わかすはかれずとあり。(直)人を待はくるしき物也。人に待るゝといはゞ萬事をさしおきて行べき事にて有よと我心に領解する也。此句法おも白し。【新註】(勢)古今集下、業平人を待はくるしき物なりけりと今ぞしるといふこゝろにて第二句より下へ歸るなり、よみて二句の下も句絶なり。人待わぶるにより人またん里をばかれずとふべき物なりと我心に領解したる意なり。人またんは人のまたんにても人をまたんにてもたがふべからず。惣じて世のことをいへり、これ身をつみて人のいたさをしると云想の意也、さきの歌に君によりおもひならひぬとよめるに意同じ、約束してこぬ人をばさしもうらみはらだすして人またん里をばめかれずとふべき物なりと思ひしると云る溫和なる心なり、かゝる心ありてぞ歌といふものはよまれ侍るべき。(古)人を待わぶる我心をおして我を待ん里をば政す間はんと餘意をもてよめる案に業平朝臣の歌也、古今集雜下に「紀の利貞が阿波の介にまかりける時に、馬のはなむけせんとてけふといひおくりける時にこ、かしこありきて夜更るまで見えこざりければつかはしけると有り、端の調少かはれるのみ也、かく異ならぬは稀なり。(圓註)大和物語にひとの園の守の下りけるに馬のはなむけを堤の中納言人して云つかはしけるにくるゝまでこざりければ云やりける「わがるべき事もある物をひねしに待とてさへもなげきけるかな」と有りければまどひきにけりと云る似たる事也。(新)こぬ人まつくるしさに人のうへをも思ひやれる歌也。此歌一二の句くるしきものと

ねよげに見ゆる若草

今ぞしると云べきをさては五七のことばにかなはぬゆゑにあとさきにいへる也。一首の意はこぬ人またてくるしきものといまぞしる此くるしさに思へば人またつらん里をばたえずとふべき事也といへるなりかれずは不離也。(按)古今集雜下、紀利貞が阿波介にまかりける時に、馬のはなむけせむと今日といひおくりける時にこ、かしこにまかりありきて夜ふくるまで見えこざりければつかはしける、業平朝臣」とあり、これ眞實の傳なりけむをこの物語にては情話にふさはしくも「人をまちけるに、こざりければ」とかきつけたり。もと同じき材料もその目的の異なる處によりてとりくになれるものなり。

ねよげに見ゆる若草

○むかし、男、いもうとの、いとをかしげなるが琴ひきけるを見をりて

うらわかみねよげにみゆる若草を人の結ばむ事をしぞく思ふ。

かへしぐ

宮の御かたに参りて御繪など御覽する傍に「御繪どものあまた
ちりたるをみたまへば、なかしげなる女繪どもの、戀する男の住
居などがきまぜ、由里のなかしき家ゆなど、こゝろくによの有
様かきたるを、よそへらるゝ事多くて、御目とまり給へば、すこ
し聞え給て、かしこへ奉らむとおほす。在五が物語をかきていも
うとに琴敷へたる所の、人のむすばむといひたるを見て、いか
おほすらむ。すこし近く参りより給て、古の人もさるべきほどは
へだてなくこそならはして侍けれ、いとくしくしうのみもてな
させ給こそと、忍て聞え給へば、いかなる繪にかとおほすに、お
し巻きよせて、お前にさしいれ給へるを、うつぶして御覽する、
御ぐしのうちなびきて、こぼれ出たるかたをばいかり、ほのかに
みだてまつり給が、あがすめでたく、すこしものへだてたる人
と、思ひ聞えましかばとおほすにしのびがたくて「若草のねみん
ものとは思はれどむすばれたる心こそすれ」お前なりつる人
とはこの宮をばことにはち聞えて、ものうしろにかくれたり。
ことしもこそあれ、うたてあやしとおほせば、ものもの給はず、
ことわりにて「うらなくものをといひたる姫君も、ざれていく、
おぼさる。」狭衣巻一の上「この繪どもを見給へば、在五中将の日
記をいとめてたう書きたるなりけりと見るに、あいなう一つ心な
る心地して目とまる所々多かるに、得忍び給はて、「こはいか
御覽する」とてさしよせ給ふまゝに、「よしさらば昔の跡を尋ね見
よわれのみ迷ふ戀の路かは」これらは皆この段によりて筆をたて
たり。

あだくらべ

○昔、男、ありけりくうらむる人をくうら
みて、

鳥の子を十づゝ十はかさぬとも

いかゞたのまむ人の心を

といへりければ、

朝露はくさえ残りてもありぬべし

誰かこのくよを頼みはつべき

また、男、

吹く風にくごぞの櫻はちらずくと

あな頼みがたく人の心は、

又女、かへし、

ゆく水に數かくよりもはかなきは

思はぬ人を思ふなりけり。

又男、

ゆく水と過る齡とちる花といづ

れ待ててふことを聞くらむ

あだくらべかたみにしける男女の、

しのびありきしける事をいふなるべ

し。

○むかし男ありけり。ちらむる人をうらみて。「舊註」(愚)うらむ
る女をうらみ返す也。(直)人のかたより業平をうらむるを其人を
うらみ返す也。是より四五首はあるまじき事をつられてよみ侍る
也。是又和歌の道也。「新註」(勢)うらむまじきにうらむる人をこ

あだくらべ

なたよりまたうらむる也。(古)互に怨むる也。(新)女のあだなりと
うらむるをこそ、そあだなれと男もまたうらみていひやるなり。
○鳥の子を十づゝ十はかさぬともいかにたのまん人のこころを。
【舊註】(愚)鳥の子はとりのこゝろ也、日本紀第一に鳥の卵といふ
べき所に鳥の子といへるなり。十づゝ十は百の數也、本文に百卵
をかきぬるといふはあやうきたとへにいへり。こゝには又あるま
じき事にいへり。おもはぬ人をおもふといふ事のあるまじき事
におもふといふ事はなほあるまじきと云心なり。我をおもはぬと
らむる人によみてやれり。おもはぬはそなたにおもはぬゆゑとい
へるなり。(直)卵を一かきぬるとするともすべりてなりがたし。
百の卵は何か、されらるべき、只あるまじき事をいふなり。世間
のあぶなきことを累卵と云ふ。文選註に、唐に晉の國あり、此國
の君を平公といふ時に九層の臺をつくる、臣下の荷息がこれをい
さめんとて臣はよく基子を十二かされて其上に卵を九つかさぬ
事をすると云ふ。平公のいはく、それはあやうき事也。荷息、
はく、是は危からず、公の九層臺をつくりて百姓をわづらはす是
は故事機縁のかたにはあらず成まじき事を云也。たとひ有まじき
事はありとも思はぬ人を思ふといふ事はあるまじきと也。【新註】
(勢)とりの子は鳥の卵なり鳥のたまごはひとつかきぬらんにすべ
りてなりがたしいはんや百のかひこはいかてかさぬべき、なれど
も猶それをもかさぬべくとも我おもはぬ人をいかに思はんとす
ともおもふ事なる物かはさるをおもふ人なればこそおもふ我心
もしらでうらむるがうらめしきとなり(按)こゝ、解は下句思はぬ人を



鳥の子かきぬと云事本文あり。説苑云晋靈公造九層臺費用千金謂左右曰敢有諫者斬荷息聞之上書求見靈公張弩持矢見之曰臣不致諫也臣能累十二博葉加九雞子其上公曰爲寡人作之荷息正顏色一定志意以葉子覆下加九雞子其上左右懼荷息靈公氣息不續公曰危哉荷息曰此殆不危復有危於此者公曰願見之荷息曰九層臺三年不成男不耕女不織國用空虛國謀謀將與兵社稷亡滅君欲何望靈公曰寡人之過也至此即壞九層臺也。あやうきことを累卵と云はこの故なりいまはこれを本としてあるまじきことに云なせり。六帖「鳥の子をとをづ」とをほかきぬとも人の心をいかたのまん。これは紀友則がめをなれける時人の心をいかたのまんと云末ひとつにもとを十付たるそのひとつなり然らば此友則が歌をもて作れる事にや蜻蛉日記に三月つごもりかたにかりの子のみゆるを是十づかきぬるわざをいかにせんとしてまきぐりにすゞしの糸をなからむすびてひとつ結てはゆひ／＼して引たてたればいとよりかさなりたり。なほ有よりはとて九條殿女御殿御方に奉る卵の花にぞ付たるなに事もなく只例の御文にてはしに

此十かさなりたるはかうてもはべりぬかりけりとのみきこえたる御かへり。敢しらす思ふ心にくらぶればとを重ぬともものやほみる。とあれば御返り「思ふ程しらはかひやあらざらむかへすもも敷をこそみめ」續千載集雜體の中に誦語にかりの子を人のおこせて侍りければよみ侍りける和泉式部「いづついつくつかされて頼ましかりのこの世のひとのこゝろを。」(古)は六帖に「鳥の子を十づはかさきぬとも思はぬ人を何かおはん」と友則のよみたるを少しかへて用ぬたり卵を百もかさぬる事は成がたき極みながらもしほかさぬるわざの有もしつべし我を思はぬ人を戀るは何のたのめもかひもなければおはしたのめじと也。鶏子をかきぬるとへは迦羅國に有しをとれるにや。蜻蛉日記に糸もて鳥の子を十かされたる事あり右の歌を思へるがさらでも謠にいふ事ありてせしか。又六帖に同じ友則女をばなれてよめるとて瀧つせに浮草の根はとめつとも人の心をいかたのまん。(新)十づは百也。あだなる人の心のたのめがたきは鶏子を百かきぬあげんにもまさりたり。たとへば鶏子は百までかされあぐる術ありともいかに人の心をたのみにすべきあだにいはる人の心をとりとめん事はその術もちからもおよぼしと云意也。△いかにたのまん人のこゝろを塗本にしたかふ。

べし、いもせの中などはたのみはつまじきと也。(蘭)電光朝露はあだなるものに云り。露はあさばかりおきて日かげに消て残らぬ物也。しぜんあさ露は消え残りてもありぬべし。誰か此世を頼まんと云ゆ。あだなる此世を頼むべきに非ずとよめり。大方の世を云やうなれど奥は男の心あだなるをうらみていへるなり。【新註】(勢)此世とはおのがよゝなどいへる世にて男女の中の世なり。きえのこゝろまじき朝露は猶のこりても有ぬべしたれかあだなる世の人の心を後までかはらであらんとたのみはつべきとなり。續拾遺に是を哀傷に入られたるは歌のおもてをとりて本意をばさしおくなり。(古)はかなき朝の露の夕かけて消せぬもあらば有なんをあだ人をばいかに頼みはつべきと也。此世をたのむとはすべて男女のそれ／＼に夫婦と成て経るをいへればこゝは夫婦の間の世をたのますと云也。此朝露はてふ歌は續拾遺集に哀傷の部にとられしは六帖などの歌なるを用ぬられしなるべし。然ればもとは世のはかなきをよみたる歌なるをいひの如く詞をかへなどしてこゝのあだくらべとはせしならん。(新)戀の歌に世とあるは男女の中を云事にて此世をとはこの男女の中を云とおなじ一首の意は朝露は晝の日影のこらすきゆるものなれどそれは千よろづのうちひとつは消のこりてもありぬべし世間のあだなる男の心を千萬にひとつもかはらぬといふはなし。君も今こそいかにたのまんなどい言よくのたまへどほどなくかはるべければたのみにしたりとも未とげぬ事と打なげきたるなり。たれかと世間の女の事にいひなしてまこととはわが身のうへをいへる也。臆断古意とも此歌の意をときえず。

○またをこと「吹風にこぞのさくらば散ずともあなたのみがた人

へる也。清少納言の枕草子にちこのめのとのたゞあからさまにと
ていぬるを云云とくこといひやりたるにこよひはえまぬるまじと
てかへしおこせたるはすまじきのみならずにくきわりなし女な
どむかふる男ましていかならんとあるをみれば女も男にむかへら
れてしのびありきする事もあるべし師は男女のしのびありきしけ
るの詞此條にかなはずといはれたれどさやうにはあらず。(按)こ
ゝは列舉したる歌に對する後人の註脚なり、作者の筆にはあらず
尙この段贈答のついでにつきて、上田秋成の説あり次にかゝぐべ
し。此贈答のついでにづれの本も前後わきなくみだりて見ゆ。今
試みに改む。鳥の子を十づゝ十は累ねともおもはぬ人をおもふも
のかは、といへりければ女、行水に敷かくよりもはかなきは思は
ぬ人をおもふなりけり。返し男(今本に又男と有よし)吹風に去
年の櫻は散ずともあなたのみがた人のこゝろは。又女かへし。朝
露はさえのこりても有ぬべし誰かこの世をたのみはつべき。あだ
くらべかたみにしける男女のしのび歩きしける事なるべし。憶ふ
に此夜いきてあひしかどかかれて女のこと人に心かよはずと聞つる
事のあれば歸ておもはぬ人を思ふ物かはと怨みて聞えしかば女
もいとさかしき人にて此男のあまたに忍びありきすときとてあれ
ば男のいひおこせし詞をたゞにおのが詞として、されば我は思
はぬ人を我ばかりおもふなりけりと打つけにいひかへしつれば、
男いと悪くなりて、さいふ人の心こそたのみがたれといひてや
れば女いよもさかしだちて其は人の心のみかは、かくて在經る世
をだにたのみはつべからぬを、まして人の心をやなど情を餘して
こたへしものとおぼゆ。さるをかく編次の亂りしをいかにと尋る
に今の本に「ゆく水と過るよはひと散花といづれ侍てふ事を聞ら

んといふ歌を何ごころしてか後の人の裏書せしを又の人のよくも
おもはで、すゝるわざして本文に書入しならんを又後になまわろ
き人の行水てふ詞にかゝりてかれや是とさかしらしてあとさき入
亂せし物とおぼゆ。過る船と散花てふ歌は古本に載ざるも、う
ら書なる事もしるく、且歌の意もおのが船の老おとろへゆくをな
げくにて男女のあだくらべには假げなきものなり。さて古本にも
ついでと同じきは後の人今の本に據りて書改めしなるべし。この
條いかにたすけて、ときなすとも今のついでのままにてはことわ
り爲すべからず。さてあだくらべとはかたみにほり心あるをいひ
きそふとのみにはあらで累卵畫水落華朝露のあだ物もて云きそい
しを云かともおぼゆ。

前栽の菊

原人の家

原人の家

○むかし、男、人のせむざいに菊うゑけ
るに、

移し植ゑば秋なき時や咲かざくら

むく花こそ散くらめ根さへ枯れぬ

や。



前栽の菊

○むかし、男、人の前栽は菊うゑけるに。ち
つしう系は秋なき時やさかざらん花こそち
らめ根さへ枯れぬや。(舊註)〔愚〕古今集第
五の歌也。うみしうみはとはうゑるとうゑ
るならばと云詞也。秋なきとしのこととはし
らす、根だにかれずば秋はかならずさくべ
きとよめる也。(直)前栽に菊うゑける人誰
共なし。うみしうへはとは重詞也。うみお
くならばといふ心也。春秋はきはまる限
なし、此花をうゑおこならば秋のなからん
ことはしらす、さかめと云事は有べからず
花こそ散るとも根のかるゝ事はあるまじき
也。千秋萬歳たるべしといへり。人の花な
どうみたらん時は此心をもてよむべし。(新
註)〔勢〕せんざいは前栽と書、まへのかた
に草木などをうゑる故に此名あり後園にむ
かへる名なり、朝詠集に前栽を秋の題に入
れられたるは多分秋の草花をうゑるにより
てなるべし。古今集には「人の前栽に菊に
むすびつけて植ける歌」と有り。大和物語
には在中將にささいの宮より菊めしければ
奉りけるついでにとかいつけて奉りけりと
有り。是につきて、朝詠集に菅三品前栽詩
多見三栽花悦目備一先時豫養待開遊自
吾閑寂家僮倦一春樹春栽秋草秋これによら

ば春こそきくはうへきに古今に秋都に入たるはおぼつかなきやうなれど春うへるは大かたのことにてときにのみみてまたうへる又つれのことなり、後撰集に八月中の十日ばかりに女郎花ほりにふぢはらのもるたを野べにいだしてと有るも前裁にうへむ料なりうへはの三文字は常のやすめたる詞なり、すこし用有てうへたるうへはと云意なり、植たるうへは秋なきときのあらばさかざらんや、秋なき時あるまじければ咲ざるとしあるまじ花こそはかざりありて散もせめれさへかれめや根はかれまじればいくひさしく咲のべしといはへる意なり、このよみやう業平とみゆるものなり、人のほな植たらん時歌よまば此こゝるなるべきなり、菊は散の物といへることあれど、離騷云朝飲木蘭之墜露、夕餐秋菊之落英、といひ現に散もするなり歌にもおほくはちらぬ物によみたれど此歌はちるとよめり日本後紀柏原帝の御歌にも此ころの時雨の雨に菊の花散そしのべきあたらしの香をとあればちるとよむ事難なし、たとひちらぬものなりとも花といふからはなだかちるともよまざらん、(古)古今集に人のせんさいに菊にむすびつけてうへける歌とあり、是を少しかへたれど猶こゝなる意もなし、一度こゝにうつし裁ては世に秋のこざらん時はしらす秋のこゝ世しなければ年ごとに花ちり枝は枯るとも根こゝめには失に物故萬代に絶せじと也、萬葉にわさもこが宿の橋いとちかく植てしからにならずはやまじ此意をとりて巧みをそへ業平朝臣はよまれしにや、うつし植ばとはいにしへは草木を花のさかりに外より引植る事多ければこれ今花の時にうへるならん六帖に無霜舞けふひきて雲井にうつす菊の花あまつ星とやあすよりは見ん、源氏手習にうつし裁ておもひみだれぬをみなへし浮世をそむく草のいほりにともふ

めり。さて今本にうへしうへばとあれどこはうつしうへばをあやまれる事古本に遺植者と書業平家集にもうつしうへばとあるにて知べし。古今の今本にうへしうへはと有もつをへに誤り植のかなはうへなるなもうへとあやまりなどせし物也さて其うへしうへはとあやまりたるを見てある人は植し上はの意也などいへれど皆例をいにしへの假字をもちうへがへわたくし事なればいふに足らず、(顯註)業平家集とて今あるは後にとりあつめて書たる物とみゆれどそのとり書る人うつしうへはとあるを見てかきたるなればいよゝ定か也。○花こそちらぬを菊は萎みかたれて散物ならずなど論ふはわるし。萬葉に詠花とて見わたせば向野邊のなでしこの落まくなし雨なふりこそ。後撰集に夏色といへばこきもうすきもたのまれすやまとなでしこちる世なきやは此なでしこも散みだれざる物也。離騷に朝飲木蘭之墜露、夕餐秋菊之落英、など云花といへば皆散といふぞことせばからぬいにしへの心なる。(新)せんさいとは家のまへなる庭にあまた草木うへたる所をいへり。一首の意よく植にうへば秋なき時やさかざらん秋のなき時はなれば年々にかならずさくべし花こそちらぬ根ともにかれめや根はかれじといへる也。根さへはれともにと云意也。さて此歌の初の五も昔よりときえたる人なし拾遺抄にうへんとうへんならばととけるはたいたづらにかされていへる詞と心えたるにやあらんおろそか也。離騷には植たる上はと云意にときたりこれは俗語のふりなり。古意にはうつしうへばのかきあやまりならんといはれたれど此歌うへしうへばならでばかなはず、そのよしは奥にいふべし。眞名本又業平朝臣の家集にうつし植はとあるぞかき誤まりにはありける。師は古今集遺鏡にうして植てさへおいたならば

とて、きじをなむやりける。

と云意にとかれたり。さてはうへと云詞ひとつあまりていかが高尙が思ひえたるは同じ事をかされていふはみなその意をふかくいはんとてのしわざにて懸々てぬれくといふ詞もふかくこひいたくぬるゝ意也。此植し植ばもしはやすめ詞にてうへ植ばといふ事なればよくうへる意にぞありけるよく植ば根はかれじといへるなり。かへれば此五もじは歌のむれとある所なるをうつしうへばとかへてよからんや。按初五もじにつきてはなほ古意の説よろし。おのれが見し古今集古寫本寂蕪自筆本、頼阿自筆本爲氏自筆本其他多くは今本の如くなれるもこれ轉寫の誤にして、宮内省藏二條爲親自筆本の如きはうつしうへばと明記しありてこれを古意の説に合せ考ふるにたがふべくもあらず、新釋ぞ誤れりといふべし。

かざり 粽

○むかし、男、ありけり。人のもとよりかざりちまきをおこせたりけるかへしに、

我は野に出てかるくぞわびしき

かざり 粽

○むかし男有けり。人のもとよりかざりちまきをおこせたりけるかへしに。(舊註)五月五日のちまきを五色のいにてゆひたるをいふ。拾遺集第十八の詞にも、ちひさきかざりちまきと見えたり。(直)ちまきを糸にて巻たるを云ふ。拾遺集のことばなどに有事也。折ふし五月五日にや。(圓)ちまきを糸などにて巻たるを云ふ。拾遺の辭などに有事也。天福の本にはかざりちまきと有り(新註)勢)かざりちまきはいろくの糸してまきたる粽なり拾遺集賀歌にも五月五日ちひさきかざりちまきを山すげのこにいれたためまきの朝臣の疑にこゝろさすとて春宮大夫有總母、心ざし深きみぎはにかるこもは千年のさつきいつか忘れん。續齊諧記云風原以五月五日一投泪羅而死楚人哀之每至於此日以竹筒貯米投水祭之漢建武中長沙歐同白日忽見一人自稱三閭大夫謂曰聞君常被祭甚善但常年所遺苦蛟龍所竊今若有事可予以植樹葉一塞其上以五色絲縛之此二物蛟龍所憚同依其言世人五月五日作粽並帶五色絲及棗葉皆泪羅之遺風也云云。ちまきといふなはいとをいとおほくまくものなれば千羅の意なり。(古)かざりちまきをかく書たるは粽とは五色の糸して巻し巻をいふならん且燕尾とは蔣の葉してつゝめるはさるかたちなれば也。拾遺集に五月五日ちひさきかざりちまきを山すげのこに入て爲まきの朝臣のむすめにこゝろさすとて東宮大夫爲總母、こゝろさし深きみぎはにかるこもはちとせのさ月いつか忘れん。續齊諧記云風原以五月五日一投泪羅而死云云(中略)皆泪羅遺風也。(よ)かざりちまき。或人こは眞こも刈君は沼にぞと有つてんを後

る境多きにいかに鳥のなぐらんと、めおもふ心はまだ夜ふ
かきにいへるま首尾相懸じて言語道断の歌也。詮は更たる夜
も語多きにいまだふけぬやうにおもひたるなるべし。餘情限なき
歌也。【新註】勢、續後撰集一葉平朝臣とあり。度々あひみたるに
有るをことにあひかたきにあひて鳥の音きいたらん思ひやりてみ
るべし。遊仙窟始知難逢難見可貴可憐病鶴半夜驚人薄羅
狂鷄三更唱曉。伊勢集批把左大臣あふことあけぬよながら明
ぬれば我こそ歸れこゝろやはゆく。拾遺集忠見「いづかたに鳴て
ゆくらんほととぎすよどのわたりのまた夜深きに。是等の句はい
まの歌より出たるか。(古)逢かたきにあひたるは歌に切なる心を
そふる詞也。いとめづらしくあひていまだ夜更すとおもひたる
ほどに鳥の鳴たらんはいかにかかは鳴ぞとまで思ふべき也。い
てかくは鳥の鳴らんとおもへるは古意也。人しれずおもふ心はと
理り盡せしは少し後の歌のさまなりいには月やあらぬ春や昔
の云云。夏の夜はまだよひながら明ぬるを云云まだきになきてせ
なをやりつるなどやうに其まだき也。とおもふまにこそよみ侍
れ此記者の比にはかくことわりに通ゆくめり遊仙窟に始知難逢
難見可貴可憐病鶴半夜驚人爲勢狂鷄三更唱曉はし書よ
りのさまをおもふに此句々によりて作れる條ならん。(願註)歌に理
りを盡さすとぞにはあらず其ことわりは理りとして時に不意に思
ふ心をよむ時はことわりの上をよむにはいとかなげなれどめ
らして見れば理りはある也わざとことわるとおのづから理有との
違ひにして後世わざとことわるはいやしげにこそ侍れ〇此歌をい
とくよるしと云説侍り切なる心なくはあられどかの理りつくせ
しは古歌に侍らず葉平朝臣のはいと異也記者の歌と見ゆ。(新)あ

ゆきやらの夢路

〇むかし、男、つれなかりける女にいひ
やりける、

はあまつ空なる露やおくらむ。

〇むかし男つれなかりける女にいひやりける。ゆきやらの夢路を
たどるたもとには天つ空なる露やおくらん。(舊註)(愚)後撰集の
第五にあり。たどるなまどふとかかり。露は空よりふるものなり

草池におく露なればあまつ空なきといへる也。(直)つれなかりけ
る女、誰共なし、葉平いひよれどもつれなく侍る也。たどる定家
卿自筆天福年中の本には夢ぢなたのむとあり。されどもたどるの
かたよし。心は夢にあはむと思へば夢にもあはずしてたどる程に
露おく也。此歌の露はつれの天津空なる露にては有べからず。思
ひの露こそおくらんと也。露やおくらんといふなとがめて見るべ
し。後撰集にはあまつ空なきと有也。然れ共こゝには空なるのか
た尤也。【新註】勢、後撰集題しらす讀人しらすにて夢路をたどる
をゆめ路にまどふ、露やおくらんを露や置きそふと有り。或る註に
後撰にあまつ空なるをあまつそらなきと在と云ど今流布する本に
はあまつそらなると有り。歌の意はあひおもふ人こそたましひの
かよひて夢にもみゆれつれなれば夢路をさへえゆきやらすまど
ひてさむるたもとぬれたるはあまつそらこそ行衛もしらすはて
もなま物なればいたづらにそてにかよひて露やおきたらんと
みだのおほかるを露にいひなせるなり。古今貫之「夢路にも露や
置らん夜もすがらかよへるそでのひちてかかぬ。同。おもひや
るさかひはるかになりやすまどふ夢路に逢人のなき。」(古)こは
古今集に夕ざれば雲の旗手に物ぞおもふ天つ空なる人を戀とて夢
路にも露やおくらんよもすがらかよへる袖のひちてかかぬ。も
ろこしも夢に見しかば近かりきおもはぬ中ぞはるけかりける。思
ひやる境はるかに成やすまどふ夢路にあふ人のなき。是等の意
調もてかくはよめるなるべし。すべての心は相想へば夢の玉しひ
も行あふといへるに我はおもはぬ人を戀つゝ見る夢なれば夜すが
ら其人のもとへ行とは見れどえゆきとてかかてさめたる後に秋の涙
にぬれたるをみて行方も知ぬ夢路をたどり行袖にはそこはかと

思はずはありもすらめど

〇むかし、男、おもひかけたる女の、え得
まじうなりての世に、

思はずはありもすらめど

思はずはありもすらめど。言の葉
のく折ふしごとくに頼まるゝかな。

わび人のおち穂をひろひて命をつぐことのあれは也。毛詩に彼有遺秉此有遺穗。伊寧婦之利。とあるこれ也。又延喜式の雜式に凡百姓被履刈稻之日不得率人拾穂とあるを此歌にあはせ見ればこのいにしへにも世にわび人のひろはんためにとて田に落穂をのこしておくならはしのありし也けり。

花 橋

○むかし、男ありけり、宮づかへいそがしくて、心もまめならざりければ、家とうじくまめに思はむといふ人につきて、人の國へいにけり。この、男、宇佐の使にて、いきけるに、ある國のしぞうの官人のめにてなむあるときよて、女あるじにかはらけとらせよ、さらすばのまじといひければ、かはらけとらせて出し



ども家とうじはさのみおほかるべきにあらざればなり。日本紀に不忠誠をまめならすとよめり朝家の奉公いそがしくてまめやかに女を思はざりけるころのことなり。(古)是は奉公に勤むはしくて家に在事も少くもとより妻をねもころにもえおほはざりしかばかくなめげにしてあらんよりは我こそよくて相住んといふ人に従ひて任の國へ行ける也。(よ)家とうじ允恭紀に願乞戸母。註に戸母此云三親自と見えて本語は明らかなり、戸は家、母は女あるじの義にて、入妻の稱、ちかき世の語にいはらごと云は家主といふ義にて、よく聞えたり。さるを此文源氏物たり等にいへとうじと稱へるは語の重なるのみかは刀自の音のまゝにとなへ説れる此比の俗語なり今をいへとうじとよむべしそれだに重語なるや。(新)これは女をおろそかに思ふにはあらねども宮づかへいそがはしくおのが家にめとあひともいぬてねんころにいひなどするやうの事えぬはもとよりにて心のいとまなくまめやかに心づくるやうのことまなきかいへり。もてにをはを心とめて見るべし。臆斷古意とも心もといへる意

たりけるに、さかななりける、たちばなをとりて、便のよめる

さつきまつはな橋の香をかげばむ

かしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ思ひ出て尼になりて、

山には入りにける。

○むかし男ありけり。宮づかへいそがしくて、心もまめならざりければ、家とうじ、まめに思はんといふ人につきて人の國へいにけり。(舊註)愚此男宮づかへいとまなくて女のあいしらひまめくしからざりけるに此女たのもしげなくおもひて、ほかのくにへいにける也。(直)宮づかへいそがしく、禁中奉公のみにして家おするも稀なるを云也。心もまめならざりける、業平の家をへりみる事なき也。家とうじ、前にもあり、我妻の事を云ふ。まめに思はんといふ人につきて。ひとりすみのやうにてあらんよりは、よく思はんといふ人につけてと謀の云事について人のくにへいにけり。(綱)宮づかへいそがしく、朝家奉公のみにして家におする事なきを云ふ。心もまめならざりけるとは業平の家をかへりみる事なき也。好色のことにもとりあはぬ程の奉公にや(新註)此段作り物語なるべし、其故は業平の好色はさる事なれ

ことにつきて、ひとの國なりける人につかはれて「古」もと見し人の前に出で来て、物くはせなどしけり。長き髪を、きぬの袋にいれて、遠山摺のながき襖をぞ著たりける。夜さりニナリナリこのありつる人ヲ給へと、あるじにいひければアソビおこせたりけり。男、我をば知らずやとて、

いにしへの句有はいづらハ櫻花ハちれるがニともなりにけるかな

といふを女いとほづかしの思ひて、いらへもせであたるを男などいらへもせぬといへば女涙のこぼる男に、目も見えず、

物もいはれず古といふ。又男、是やこの我にあふみをのがれつ年月ふれど思まさり顔なる

といひて衣ぬぎてとらせけれど、すてにげにけり。いづちいぬらむとも知らず。

○昔、女をぬすみてゆく道に、水のまむと問ふに、うなづきければ、坏なんども具せざりければ、手にむすびてくわす、ゐてのぼりにければ、もとのところにかへりゆくに、かの水のみしところにて、

大原やせがゐの水を結びつゝあ

くやととひし人はいづくに

といひてきにけり。あはれニく

○むかし、男、女おきふしものいふをいかゞおぼえけむおとこ、

こゝろをぞわがなきものに思ひぬるかツ見る人や戀しかるべ

き。

○むかし男の年ごろおとづれざりける女心かしくやあらざりけむ、はかぬ人の言につきて人の國なりける人につかはれて、もととし人の前に出でて物くはせなどしけり。【舊註】(愚)もとみし人とは申將をいふ。食物のはいせむをしけり也。歌の意はにほひはいづらは句はいづくへ何となりたるぞいき見れば花をこきすてたることくになりたると此女の心かしくこもなき事をあざけりいふ詞也。さて女はづかしくおもひていらへもせのなり。(直)業平のかたへおとづれざる女なり。心かしくや。なだちのよこまなる物はいひなすにつきてよそへ行くなり。業平わが身はおとるへてむかしの句はいづくへ行くらん、花などをこきちらしたる

いにしへの句はいづら

やうになるとおぼゆる也。こけるからもこきちらしがるなり。(愚)ものくはせなどしけり。きうじしたるにや。【新註】(愚)或抄に、男、我をばしらすやとてといひて歌にかゝりたるに心得て此歌はみづからの上を云るを女のきくおひたるやうにあれど、然るべからぬにや、もしみづからの事をいはいまのこけるからとは云べし、いにしへのにほひとは云べからずまた下の句の詞にも女のきくおへるよしを云べしといともかしこけれど下行平のけふばかりとぞとよまれたるを帝のきくおはせたまへるよし書るを思ふべし。心かしくやあらざりけんといひ、人につかはれてといひ、ありつる人たまへといひ、きぬぬぎてとらせければ、など書るは上に祇承の官人の女となれるよりはもとより種姓などもひきかりけるなるべし。然は久しくあひ見ぬまに我をば見わすれたりやなりひらなるはと云て歌は女のむかしうるはしかりけるをほめていまやつれたるをあはれなるべし、さればこそつきにといふをいとはづかしく思ひてとは書たれ。(按)この男語體の註は上文の女あるにいはれはおこせたりけり、男我をばしらすやとて、いにしへの句はいづくへ何となりたるぞといふまでをすてて説けり、女の古意もかりし。(古)年來なるまで男の音信をせて有ける女あり、其女心賢くはおもひ過して時を待べき物をよからぬ人の言につきて國人のつかはしめとなりたり、其昔の男事有て其國にいたりて宿れる家にしもあれば女は思ひもよらず食物持て出たる也。其夜かの女を來させて男故の我をばしらすやとてよみたり。昔ありし艶色もいづくにかうせにけんたゞ櫻の花をこきおろして枝のかざり立らんをみるがごとく瘦れたりといふ也。こはひとつに悪むにはあはれとおもふ心をかねたるならん。こけるが如も今本にはこけるがことと書あやまれるならん幹といはても枝の意は有ぞかし。

つくもがみ

○むかし、世心ある嫗、いかでこゝろな
 さけあらむ男に、あひ見てしがなと思へ
 ど、いひいでむたよりなければ子三人を
 よびて、まことならぬ夢語をす。二人の
 子はなさけなくいらへてやみぬ。三郎な
 りける子なむよき御男ぞ出でこむとあ
 はするにこの嫗けしきいとよし。くこと
 人はいとなさけなし、いかで、この在五
 中將に、あはせてしがなと思ふ心あり
 狩しありきける道に、いき合にけり。馬
 の口をとりて、かうくなむと思ふとい

ひければ、あはれがりて、いきて寝にけり。さて後、男見えざりければ、嫗、男の家にいきて、かいまみけるを、男、ほのかに見て、

百年にひとせたらぬつくも髪、我を

こふらしおもかげに見ゆ

といひて、馬に鞍おかせ、出たつけしき

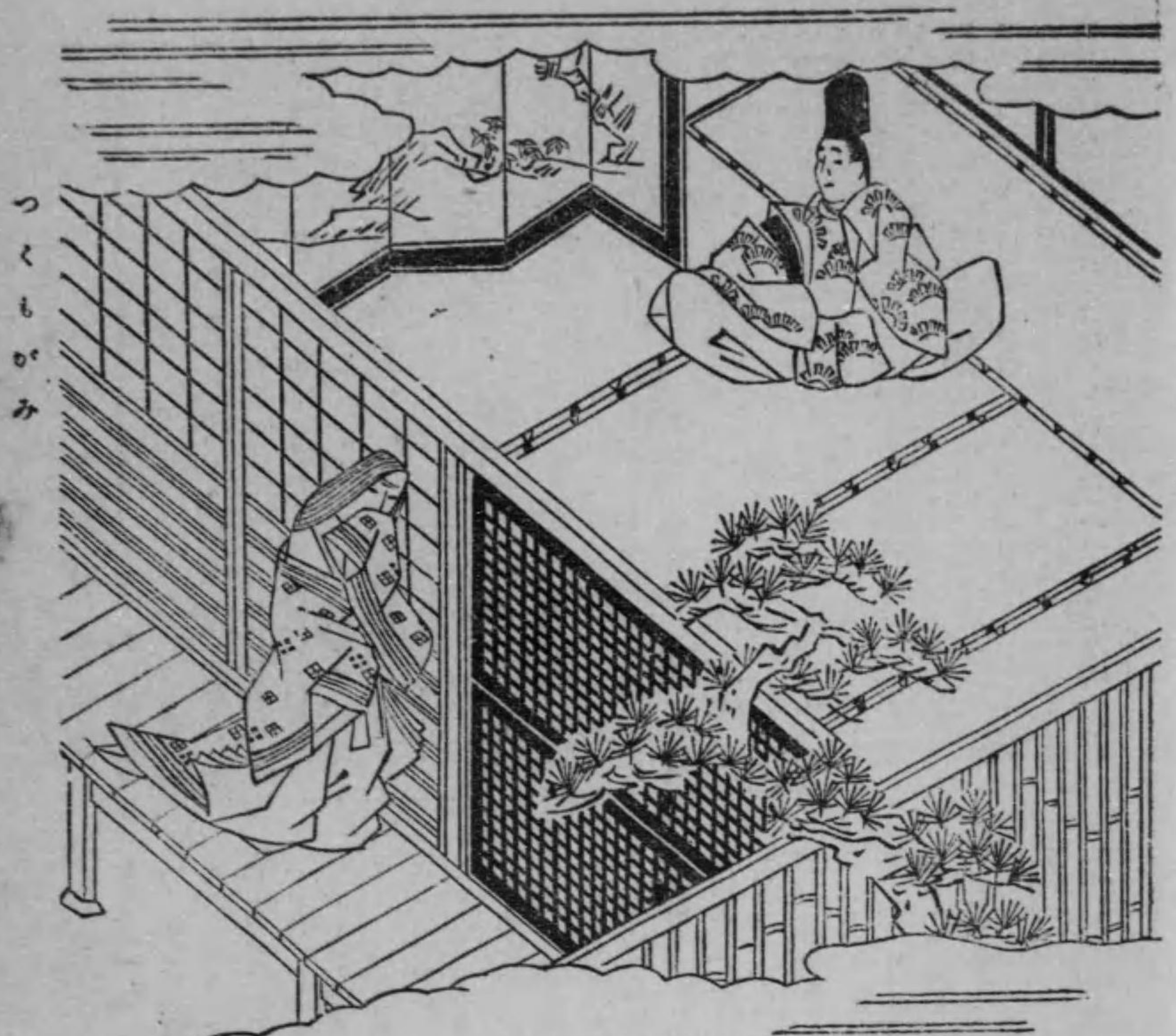
を見て、むばらからたちとも知らず、

はしりまどひて、家に来てうち臥せり。

男、この嫗のせしやうに、くのびてた

てりて見れば、嫗うちなげきてぬとて、

さむしろに衣かたしき今宵もや



つくもがみ

戀しき人にあはでわ
 が寝む

とよみけるを、男あはれと

思ひて、その夜は、寝にけり。

世の中の例として、

思ひ思はぬ人あるをこの

人はそのけちめ見せぬ心

なむありける。

○むかし世心ある嫗いかで心なさけあらん男に、あひ見てしがなとおもへど、いひいでんたよりなければ、子三人をよびてまことならぬ夢がたりをす。「舊註」(愚)むかし世心つける女。色この心の心つけるをいふ也。(直)世界へこゝろおほきやうなる女なり。まことならぬ夢がたり。見ぬ夢を見たりの心歎。色々しき心のおとなしくはなき好

やうのこゝろなり。(古)こればかりはことよく書たり光源氏のきみの女をみすてぬさまに書たるもこれらにやよりけん。けぢめとは荷田在満云別目の略也とげにも源氏物語に松と竹とのけぢめといへるも必わがちめならてはかなはず此古本に穴目と書たるは借字なりけり。(長のけちと云は穴目などなればそれさまにかけず)さればけぢめのちほは清てよむべし。(ある説に結目也と云ははす)(新)これもよみてうたひけるを男のたちきよめてあはれと思ひてうちにいりてれたる也。例はならひといふがごとし、思ひおもはぬとはたとへばうつくしくわがき女をばせちにおもひかたのわろく老たるなどをはさらにおもはぬやうの事也。此人は云云ものあはれしりてなまけふかき人なればわろき女をも思ひすてす、心のうちには思ひおもはぬあるべけれど、そのわがちか見せぬ心ばへありといふ意也。いとよき人がら也けり。源氏君もさやうの御心ばへなるやうに物語にけるはこゝをまればたると、さきにもたび／＼いへることくかうやうの心ばへ見えたる所ぞ此物語のむねにはありける。△こゝの文すべて塗本によれり。他本に思ふなばおもひ思はぬをば思はぬとあるはいとく／＼しきかきやうにて此物語の文のさまにあらず。(按)世の中の例として思ひおもはぬ人あるを此人はそのけぢめ見せぬ心なんありける。在五中將に對する記者の評言也。源氏物語源氏君に對する記者の評言またかくのごときものあり。さて「さむしろに衣かたしき云々の歌は古今集四題不知よりとりて下句をかへたるがごとく、また「この在五中將」と書出せる、此書の業平ならぬ記者の筆なるを思はしむ。或は在五中將の語は源氏の加註。或は五中將とも思へど誤記には非ず。

玉すだれ

○むかし、男、みそかに女をかたらふわ
 ざもせざりければ、いづくなりけむくあ
 やしさによめる、

ふく風にわが身をなさば玉簾ひま
 もとめつゝいらましもものを

とり留めぬ風にはありとも玉簾誰
 がゆるさばか隙もとむべき。

○昔、男、みそかに女をかたらふわざもせざりければいづくなりけんあやしさによめる。「舊註」(愚)ひそかにあひかたらふわざもせれば、いづくにあるもしらす、あやしさに心を見むとて、歌をよみて女のつたへやりたる也。「新註」(勢)みそかにつたらふわざもせのはなんの常にすむ所いづくにありけんもしらてあやしみて

よみてやるなり。(古)こはもといひかはせし女の宮の内などにあるが其在どころもいひしらせぬは且女の心をもあやしむ也。(新)これはたつき宮づかへする女の男をこゝろ見んとて名をかくして文おこせたるに男はいひよりてあひみんと思へど女はしばしこゝろみんとて密々にかつらふわざをさへせざりければさきに文おこせしは宮づかへする女房とはしらるれど名をかくせるゆゑにいづくの女房よりなりけんしられればことさまあやしさに歌よみてやるなり。さるは文のつかひはする人あらめど女のかたより口がためしていづこともいはずにこそ。さて昔男女の文おくるはけさう心ありての事なれども今の世のさまとはことにして花紅葉につけてあはれな歌どもかきておくりてその返事のやうを見こゝろむる事どもありき。されば文おこせたりとてたのむべきにあらずこゝもそれ也。此段はいたうことすくなにはぶきてかける文なれば上のくだりにいへるやうに心をやりて見ざればときえがたし。ふるき註どもわろしそのよしつき／＼にあきらめいふべし。臆断に云みそかにあたらふわざもせれば女の常にすむ所いづくにありけんもしらてあやしみてよみてやるなりといへり。これは大かた本文のまゝにいひてさらにとける所なくいつたなし。古意に云こはもといひかはし、女の宮の内などにあるが其あり所もいひしらせれば其女の心をもあやしむ也といはれたり。もし此説のごとくならいづくなるらんとあへべき也。けんといへるにかなはず師のいはれたるはけんと云詞いかにいづくなるらんとなどあへべきにや、もし又けんをたすけていはば物語の地の詞としていづくにての事なりけんといはれしといはれたり。けんをいかにいはれしは古意の説によられたるゆゑ也。又地の詞としてといはれ

しもしかい。いづくなりけんあやしさにとつてきて男のおもふ意をいへる詞なるをや。
 ○ふく風は我身をなさば玉すだれひまもとめつゝいらましもものを「舊註」(直)風はいづくにもすきひまあれば吹く、物也、吾身を吹風になさばひま求て入て見む物をと云り。(圓)我身を風になさばや也、風はいづくにもひまある所なるとめ入るものなればかくれがひ云也、風に身をなさばもとめ入て見んものなと也、なさはのばの字に切なる心有り。「新註」(勢)新千載戀二葉平朝臣、我身の風になさる、物ならばなさはや風はいづくにもひまあるところにいるものなれば玉すだれのひまをもとめても入てみんものなとなり。文選曹子建七哀詩云願爲西南風長送入君懷(風賦十一)いきのをに我は思へど人めおほかこそ吹風のあらばしばし／＼逢へきものな。同玉すだれのこすのすげきにいりかよひきれたらちれの母かといれば風とまうさん。同じもがれる床のあたりは岩くゞる水にもかもいりてれまくも。(古)意は明らかかり、されど玉簾ひまもとめつゝなど云は宮中にてよろしき女なることを思はせたる成べし。右の詞を照してしかおほゆる也。或説に身を風になさばや也ばに切なる心有りといふはわるし、是は風になさば入ましとつゞけて一首に切なる心は侍り。ばやのてにをばにはあらず。萬葉に旋頭歌「いきの緒に我は思へど人めおほか不來吹風にあらばしばし／＼逢べき物を。又玉すだれの小簾のすげきに入かよひこれたらちれの母がとさば風と申さん。」又「妹がぬる床のあたりに岩くゞる水にもかも入てれなまし。」(新)此歌の意はわが身をわたちの見えぬ吹風になさば房々の玉すだれのひまもとめつゝいらましもを風ならば人めをばはかる事もなくいりてうかゞひて文

おこせしはいづくのたれとしるべきを風に身をなすことかなはねばしるべきやうなしとなげきたる也。さて萬葉集の旋頭歌に「いきのをにわれは思へど人めおほみこそ吹風にあらばしほくあふべきものを」。玉だれのをすのすけきにいりかよひこねたらねの母がとはさば風とまなさん」とあるをとりてよめる也。△いらましものを塗真二本にしたがふ。(按)新千載戀二、女のひそかに語らふわざもせざりければよめる、業平朝臣、吹く風にわが身をなせば玉麗ひまるとめつゝいづるべきものを。○かへし。とりとめぬ風はありとも玉麗たがゆるさばか難もとむべき。【善註】(直)ひまるとめつゝ入べきといふをおさへていへり。風は手にはさらにとられぬ物也、とりとめぬ風なり共玉麗のひまを、こなたがゆるしてもとめさせむにこそ入べけれと云へり。【新註】(勢)たとひ手にとりとめられぬ風に身をなすとも玉すだれのひまをたがゆるさばか入べき我ゆるされば障もとむともえいらじとなり。則詠集風詩漢主手中吹不駐。(古)ゆるして尋させずは風もえこそと也。此かへしのかまのつれなきをおもふにも更に心かはれるが又宮中にまぬりたればはかりて絶しこゝろともすべし。(新)一首の意たとへかたちの見えぬ風になりたまふとも玉すだれのうちへはたれもゆるさればひまるとめていづるやうの事はえしたまはじ、ならぬ事也といへる也。とりとめぬは手にとりとめぬといふ事にてかたちの見えぬをいふ。さてかくゆるさぬよしのいらへするはさるやうこそありけり。

在原なりける男

○昔、帝の時めきつかはせ給ふ女の、色ゆるされたるありけり。大みやす所とていますがりける、御いとこなりけり。殿上にさぶらひける、在原なりける男の、まだいと若かりけるを、この女あひ知りたりけり。男、女がたゆるされたりければ、女のある所にいきて、むかひをりければ、女、いとかたはなり、身もほろびなむ、かくなせそといひければ、思ふには忍ぶる事ぞ負けにける逢ふにしかへばくさもあらばあれ

といひて、くさうしにおり給へば、いとゞさうしには、人の見るをうしのばで、のぼりあければ、この女、思ひわびて、里へゆく。くされば、なにのよき事とおもひて、いきかよひければ、皆人きよてわらひけり。つとめて、とのもづかさの見るに、皆は、とりて奥になげ入れて、のぼりぬ。かくかたはにしつゝありわたるに、身もいたづらになりぬべければ、くつひにほろびぬべしとて、この男、いかにせむ、わががかる心やめ給へと、佛神にも申しけれど、いやまさりに

のみおぼえつゝ、なほわりなく戀しうのみおぼえければ、陰陽師、神巫よびて、戀せじといふ、祓の具してなむくいきける。はらへけるまゝに、いとどかなしき事敷まさりて、ありしよりけに、戀しくのみおぼえければ、戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかなといひてなむいにける。この帝は、御顔かたちよくおはしまして曉には佛の御名を御心にいれて、御聲はいとたふとくて申し給ふをきよて、女

はいたう泣きけり。かゝる君につかうまつらで、すぐせつたなくなしき事、この男にほだされてとてなむ泣きける。かゝるほどに帝きこしめしつけて、この男をば流しつかはしてければ、かの女をばいとこの御息所、まかでさせて、殿の倉にこめて、しをり給ひければ、倉にこもりて、泣くく、

蟹の刈藻に住む虫の、我からとねをこそなかめ世をば恨みじ

となきをれば、この男くひとの國より、夜毎に来つ、笛をいとおもしろくふ

染殿の后なり。五條のささきとも。

〇むかしみかどの時めきつかはせたまふ女の、色ゆるされたる有りけり。大みやす所とていまずがりける御いとこなりけり。【舊註】(愚)此女は典侍藤原直子といふ人也、染殿の後の御いとこ成けり。御門の御氣色よくて色ゆるされたり、女房の衣にあやおり物などをさるは禁色をゆるさるゝといふ也。(直)おほやけおほして清和天皇、此みつど御寵愛有て召し仕ふ女也。色ゆるされたる、禁色をゆるさるゝ也、三位に叙せらるゝ也、二條后也。おほみやす所、染殿后也、いまずかりける、おほします也、ましますといふもおなじ。(調)色ゆるされたる、禁色をゆるさるゝ也、禁色の宣旨といふ事有り、女も色ゆるされたるは綾織物をさるなり、禁秘抄に云、聽色は大臣の女、貳は大臣の孫也。【新註】(勢)おほやけはみかどなり大家の心にて小家に對することばなり。老子經曰道大。天大地大。王亦大。城中有四大。而王居一。莊子云莫神於天。莫富於地。莫大於帝王。此おほやけは清和天皇なりおほしては寵愛なり。色ゆるされたるは禁色、ゆるさるゝなり禁色の宣旨あり女も色ゆるされたるは綾織物をさるなり。禁秘抄云聽色大臣女或大臣孫なり。大御息所は染殿后なり、いまずかりけるはおほします也。(二)これは聽色の本文むかしおほやけおほは(古)時めきつかはせたまふとは御寵の盛なるを云今本に「かう給ふと有はわろし、古はつかはせとよみたる事古本に分瀬と書たるにてしるべし。色ゆるされたるは禁色とて染色と織物と二つなるをそれゆるされて着るを云ふ。延喜式に「正凡諸禁色者總羅下衣、不聽服

在原なりける男

きて、聲はいとをかしうて、歌をぞあはれにうたひける。かゝればこの女、倉にこもりながら、それにぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける。

くさりともくと思ふらむこそ悲しけれ有にもあらぬ身をば知らずて

と思ひをり。男は、女しあはねば、かくしありきつ、うたふ。

徒にゆきてはきぬる物故にく見まくほしさにいざなはれつ

水尾の御時なるべし。大御息所とは、

用と有は色也、又同式に(左右京)有者禁色者邪(調)とあるは文織物也。されば此二つをゆるさるゝをいふ事あきらけし。此大御息所はまづは清和の御母后明子にていと高子(後二)の御事と見ゆ。(舊註)後世人古書をよむにやもすれば仕はせ給ふをつかふ給ふ、よみ給ふをよう給ふなどやうに云はしひて古めかんとておしはかりにいへるもの也たまはりをたうび、物のたまふを物のたうびなど云は音便なるをすべてさる事と思ひあやまれるにや〇後世或装束の抄に禁色とは深紅深紫の事とのみ有るはわろし深紅深紫の外にも青色きくぢん赤色(白ツル)は上の御料の色なればゆるしなくては著す凡禁色物は用うるに大中小の儀式により又其人に給ひ交祖の際にもよる品々也式などを見てあきらむべし後世書る物にてたがふ事多し。(新)時めきつかはせ給ふ女とは女の時めくやうにつかはせ給ふ意にて御寵愛の盛なる也。いろゆるさるとは禁色の衣をゆるされてさるをいへり、さるは御寵のいみじきをいふよし也、禁色は延喜式に見えて染色に何くれと禁あるはもとよりの事にて綾錦綺のたぐひも制禁にしてみだりにさる事をゆるされぬをすべて禁色といふよし也。大みやす所云御子をうみたまひてはみなみやす所と申例なるにこれは天子の御母君ゆゑに大御やす所とは申なるべし。さて此段はけるけりけれと云詞をことさらに「かきかき」かきかきひて文のあやとなしたる也。心をつくべし。△みかどの。塗本にしたがふ。時めきつかはせ給ふ。塗本二本にしたがふ。御いとこ。塗本二本によりて御といふもじをくはへつ。〇殿上にさぶらひける在原なりける男の、またいと若かりけるをこの女あ知りたりけり。【舊註】(愚)この中将女中へゆるされて

ほど知べし。其書「住吉のあきみつ磯にみそぎしてこひ忘れ草つみてかへらん。」六帖「つらき人忘れなんとてはふればみそぎかひなく戀こそまされ」新撰古今「戀せじとせしみそぎこそうけずとも逢瀬はゆるせものみづかき。」こひせじのみそぎは神もうけずとや人をわするもつみふかしてと。(古)はらへのわざ爲るにつけて猶悲しさのまれば神はうけ給はずといへり。此うた古今集に逢の人戀る篇に入て讀人しらぬ歌なり。宋を「神はうけずぞ成にけらしも」と有を「なりにけるかな」とかへてこゝには用ぬたり。みたらし川とはいづこにても社ちかくて祓へなごする河をいへり。ある物に(歌)「春日野の松し枯すばみたらしの河の流は絶じとぞおもふ」ともあれば也。(新註)これらは古今集に入たる中にも古歌にてこゝによろしき歌也か有まゝにいひてしかも感情の有るは少き也。○みそぎは身洗にて水もて身を洗ひ清むるをいひ祓禊は身につける穢をはらひて除くを云て二つのわざなればその意同じければ後にはかよはしていふ也。此二つの事古事記に伊邪那岐命原にて身そぎし給ふ所に見ゆ後世是を御そぎと書はわろし身そぎのいひ也。(新)一首の意戀をせぬやうにとみたらし川にせしみを神はうけずもなりにけるかなありしよりまきてこひしきはさてせんかたもなき事となげきたる也。

○といひてなむまにける。【新註】(古)こはかの男、祓所の河邊より家に歸りいぬるをいへり。(新)きにけるはかへりきにけるといふ意なり。○きにける。塗本にしたがふ。

○此帝は御かほかちよくおはしめて、曉には佛の御名を御心にいれて、御髪はいとたふとて、申し給ふをきいて、女はいたり泣きけり。【舊註】(愚)清和の御門の御事也。三代實錄に風姿甚

美端嚴如神と見えたり、かたちきらくしてましましける御門也。又三寶に歸依し給ふ事もよの御門にすぐれ給へり。のちにはまたご山みづのたと云所にて修行せさせ給へり、さて水尾の御門とも申なり。(直)このみづと、清和天皇の御事也。三代實錄云、清和天皇鷹犬之遊、獵之娛未嘗留意、風姿甚端嚴如神性。定家卿の本にこれを注す。ほとけの御名を御心に入て、佛法に歸し給ふ事誠に殊勝也。女はいたり泣きけり。二條の后みづからなげきたまふ也。(聞)二條の後の自嘆歎する也。【新註】(勢)三代實錄第三十八云天皇鷹犬之遊、獵之娛未嘗留意、云々。(古)こはおほよそ清和釋教鷹犬之遊、獵之娛未嘗留意、云々。(古)こはおほよそ清和天皇に換てかきたてまつれり。(新)曉のおこなひとて佛名をとなふるこゝありそれ也。みづの御心にいれてたふとき御聲にて佛名を申たまふは女心にはいと心づきに思ふべし。昔も今も女は佛の道にこゝろのすゝむものなればなり。此みづかどいへるは清和天皇になぞらへたる也。△御かほかち。塗本によりて御の字をくはへつ。曉には。これも同本によりてくはふ。

○かゝる君につからまつらですくせつたなくかなしき事此男には左されてとてなん泣きける。【舊註】(愚)宿世はさきのよのちぎりつたなき也。(直)宿世つたなき也。ほだし、賜此字也、物につながれたる心也。世のうきめ見えぬ山路へいんには思ふ人こそほだしなりけれ。(聞)かゝる君につからまつるべきをすくせつたなき宿世拙也。男にほだされて。よしなき業平におもひなかけられたとがちなるを女のなげくと也。【新註】(勢)すくせは宿世と書て先世なり先世のつたなき因縁ありてかゝることにつながるゝと身をかへりみてなげきたまふなり。ほだされてとは馬のたは

しよりおこれる詞なり。和名集云釋名云絆牛也物使「牛行不待得」自縱也和名保太之。伊勢集「水くさのかよふばかりを過世にて雲のはるかにはてれとやきく。」大和物語「行末のすくせもしらで昔なもちきりしことはおもほゆやきみ。」古今集。ものべのよきな「世のうきめ見えぬ山路へいらむにはおもふ人こそほだし成けれ」同集「哀れてふ事こそうたて世の中を思ひはなれぬほだしなりけれ。(古)すくせは前世の果を云佛敎の語也、是もいとふるき世にはいはず。○被絆男につながれてといふ意也。萬葉に馬にこそふもだしかくも牛にこそはな繩かくも云云。古今集に世のうきめ見えぬ山路へいらんにはおもふ人こそほだしなりけれ。(新)女はいたり泣きけりと一とほりにいひをはりて次にそのなくゆゑをなくはしくいへるにてひとつとつ文法なり。すくせは宿世の字音にて前世と云におなじ前世のつたなき因縁によりてかゝるめてなき君につからまつらさやうの事いぐる也、悲しき事よとまづ打なげきたる也。さて宿縁とはいひながら此男にほだされてとおもひてくちをしがり泣こゝる也。ほだされてとはひきとめられて行べき所へえ行ぬやうの意也。古今集の歌に世のうきめ見えぬ山路へいらんには思ふ人こそほだしなりけれといへるにてしるべし。此詞はもと馬のほだしより起れり。和名抄調度部鞍馬具に絆釋名云絆(保太之)牛也使「牛行不待得」自縱也とあるこれなり此ほだしはふもたしのふもをつめてほといへる也。萬葉集の歌に馬にこそふもたしかくも牛にこそはなははくれといへり。

○かゝるほどに帯せこしめしつけて、此男をばながしつかはしてければ、かの女をばいとこの御息所まかてさせて殿のくらにこめて、しをりたまひければ、倉にこもりてなく。【舊註】(愚)業平中

將流罪の事國史に見えず、御門のいさゝか御けしきあしかりけるをことしくいひなしたり。或説に東山に籠り居けるをかくいふといへり。染殿の後の御在所をまかてさせてこの女を押こめておかれたるを倉にこめてといへり。くらは物をこめおく所也。しなるとは人をいたましむる事いふ也。(直)そめどのさきさきなり。まかてさせてはまかり出させて也、禁中を出させ給ふ也、くらにこもりて、ぬりこめなどのうちにおく也。しなる、せつかんする也。(聞)いとこのみやす所、染殿の后也。女をばまかてさせて、此まかてさせ給ふとあるを一説に前に女おもひわびて里へ行くとあり、長良の細と見えたり、業平のさればなにのよき事とおもひて又里へ行とあれば此所は長良の細の亭よりまかて給ふなるべしと有り。私曰されども此御門はかほかちよくおはしまし佛の御名を御心に入て御こゑはたうとて申給をきいて女はいたり泣きけりとあれば禁中へ歸り参らせられての事と見るべき歎業平を流させさて此女をもまかてさせ給とあれば旁々知此なるべき歎い。くらにこめてはぬりこめなどの事なるべし。しなるは責勸也。【新註】(勢)流罪のこと國史に見えざれば作りて書るか、古註東山に隱居するをいふといへり、下に人の國より夜ごにきつゝ笛を吹とあればさもあるべきか、三代實錄をみるに貞觀四年より七年まで官位昇進など次第にみえたり。八九十の三年しるせることなし、其間に籠居せらるゝ程のことありけるにや。しなるは風の草木を吹し折と云も揉でいたましむるをいへば今もいたむる意也。萬葉第十九に梅の花雪にしなれてと云に之乎禮氏と書き菅家萬葉に康秀歌に秋の草木のしなればといふに芝折禮者とか、せたまへり、泪に袖をしぼるといふは假名もたがひ心もこと

なるを後の歌には此しをる心をしほると書て補をしほるといふにまがへたり。(古)先に終に亡びぬべしと云是也。前に身もいたづらに成ぬべしと云是也。さてかの五條の皇太夫人のおはする室をも去して具具公の倉にこめてなやませこらしむると云ならん、いまはたゞ倉にこめてと有るを古本に殿倉とあり。(新註)倉はぬりこもなまき殿の倉に有るにぞ御父のかたへ歸してはしり給ふ事なりけし。○殿とは原ら大政大臣を云事ながら高子の御父長良公も後に實たる文政に類とは異なるならん又物語などには俗の言のまゝにたゞの大政をも殿といへる事源氏の物語にもあり。○しほりは古事記にやしをりの酒風を叫かえの聲にしをれて新風にもなべて草木の芝折るればと書たればしをりのかな也然しはしりと云時はほを添るべき通の例也されどほをト唱ふ。○しほりければは落葉物語に(おちるは半添なればくらしからず云々)○しほりければは落葉物語に(おちるは半添なればくらしからず云々)このきたのかたにこめて物なくはせそしほりころしてよと父中納言おいはけて物のおぼえぬまゝにのたまへば云々次にくるゝ戸の扉二間あるへやの酔酒いをなごまきなくしたる室のたゞ一ひらぐゝのもとに打して云云是にて意得べし木の枝などをしをりたわめるがごとくして人をこらしむを云ふ也。

(一)殿の倉にこめてしほり給ふければ。此しほりは例のしをりの假字なるを古本に保と書るに付翁のかくいはれたれど古本の書ざま假字は法例なく眞字も所々しよみうまじきが見えたるをこゝのみ扶けていはれしはいふべし。(新)ながしつはすは近流にて都ちかき越前國なるべし。かの女をばいとこなる大御息所のよきにはからんとて禁中をまかりいでさせて御里の殿の倉にこめてしをり給ふ也。しをりはいためくるしませる事也。おちくば物語にこの北のかたにこめてものなくはせそしをりころしてよといへるおなじこゝる也。△かの女をば塗本にしたがふ。みやす所の下に女をばとある本はわろし。殿のくら塗本二本にしたがふ。

○髪の前髪にすむ虫のわれからとぬをこそぬかめ世をばらみじ【舊註】(愚)此歌古今第十五典侍藤原直子朝臣の歌也。(直)吾かられを鳴て世をばらみまじきと也。歌よまんものは此歌の心をむねにもつべき也。只人は我からと思ふ心あれば恨を人にはかけぬ也。誠に吾からといひて人をも世をもうらみざる所和歌の至極也。歌は世をなすめ身をさむる中だち民をみち引く教誡のはしたり。此歌を返々わすれず人は思ふべきことにぞ侍る。(新註)(勢)古今戀五題しらすにて作者は典侍藤原直子朝臣とあれば似つきたるをかけるにや入常にこのころにならば世をもうらむべからず心詞相かなひてやさしき歌なり。(古)意はあきらかにてきこそなげき給ひけんとおはれにおもひやらるゝ也。こは古今集に(典侍直子)有るをこゝにかりたり。女の歌にて哀なるこゝろふかく聞ゆるをよくもこゝにとり用ぬたるかな。(新)一二の句は序にてかくからきめ見るもわがあしきゆゑと音をなくべし世の人をばうらみじと云意也。あはれなる歌也。こは古今集に見えて典侍藤原直子朝臣の歌なるをこゝの女の歌にかり用ひたるなり。

○となきをれば、此男の國より、夜ごとをきつゝ、笛をいとおもしめ吹て、髪はいとをかして、歌をぞあはれにらたひける【舊註】(愚)人の國より夜ごとをきつゝ。ながされたる所よりくるをいふ、誠にながされたらばたやすくその國をはなるべからず、是にてつくり事とはしるべし。(直)業平左運の事はさだめらるれども未都に有し也。其所さだまるより人の國とは云也。をかして。業平音曲の風流なるを云ふ。哀れにうたひける。鄴曲すぐれたるにや、只詠吟面白也。あなる。それにぞあるなるときしし也。(闕)此段前に流しつがはすとある首尾にかく書也。遠國にはゆか

て近國と聞えたり、又業平いづくの國へ流罪ともなければ京のたはらにも忍びて有かおもてむきは流罪の身なるによりて人の國よりかよふと云なるべし、作物語の體也。業平下ける分に用るは王道を重す儀也、勅撰の詞書などに下りたるよし也。六帖云いへばえにふかくかなしき竹の夜こみや誰と問人もなし【新註】(勢)笛を吹てうたふはそれとしられんとなるべし。六帖云いへばえにふかくかなしき竹のよこみやたれととふ人もなし。(古)女のもし聞もぞするやと笛を吹き又次にあるいたづらに行ては歸つてふ歌をうたふ也けり。他國とはいへど近流なれば夜べこに来る也。されど流罪は其配る所の制有て私に行べからぬ法なるをこは物語なれば筆にまかせたるか又この中に朱雀村上などの御時と成て物の制もあらず成ぬれば其時の筆故に時にまかせて書るに侍るべし。(直)文徳清和の御時は猶令法行はれたれば戲にてもかくは書くべからぬ事也業平あづまへくだれるほどにて有りなどいふ説はいふにたらず。(新)人の國より云云ながされたる國よりしほりびてきつゝ、笛吹うたふ也。これはもし女のきしる事もやと心いれて笛ふき聲つくろひて歌うたふよし也。此うたへるはいたづらに行てはきぬるの歌也。此歌をこゝにはもらしておくに出したるゆゑは此歌をきいて女さりともの歌よめるに家の女の歌は心に思ひをりてうたはれば男はしらす猶あはれやすとてかくしありきつゝ、其後も此歌をうたへることなして女に歌次には出せる也。かくおくに出して見る人のこゝへもかよはしてこゝろうるやうにけるはさらに／＼およばぬ筆のたくみにぞありける。さて流罪の人の夜ごとに京にのぼる事はたえてあるまじきことなれどつくり物語ゆゑにたゞあはれにおかしきいふとてなり

古意に他國とはいへど近流なれば夜べこに来る也されど流罪は其配る所の制ありてわたくしに他へゆくべからぬよしをいひて朱雀村上などの御時となりては物の制もあらずなりぬれば其時の筆ゆゑに時にまかせてかけるにもあるべしとやうにとかれたるはさらうけられず、流罪はちかき越前の國なり配る所の制なくとも夜ごとに京に来るべき道のほどならず、又朱雀村上の御時なりとて流罪の人のわたくしに都にのぼるやうの事はありし、みないはれぬ事也。延喜式刑部省の所に越前(去京三百)安藝等國(四百九)爲一近流と見えれば越前よりちかき配所はなし。△聲はいとおかしうて歌をぞ。塗本によりていと、聲をなど云詞をくはへつ。

○かゝれば、この女倉にこもりながら、それぞあなるとはきけど、あひ見るべきにもあらでなん有ける。(新)笛の音うたう聲をその人なりとはきしれどくらにこめられれば出てあはれず歌よめるなり。△女の下のはもじ塗本によりてはぶき、あなるとの下のはもじ同本によりてくはへつ。

○さりとともと思ふらんとそかなしけれあるにもあらぬ身をばしほずて。【舊註】(愚)女のくらにこもりてよめるなり。(直)業平のわれにもしやあふ事にぞとおもうてするらん、吾身は此世に有かひもあらぬ體なる物をと也。【新註】(勢)新勅撰戀四よみ人しらす存にもあらぬ身にてあるをもしらてさりととも猶あはんとおもふらんが悲しきことよめるなり、あはれなる歌なり。(古)意明らか也是は記者の歌と見えたり。さりとともとは古本の字の如く然は有と雖の略なり事出来ての上とはいへども猶いかに達よしもがたと男の思ふらんがかなしきと女のよめる也。有にもあらぬとは我はもとの如くて在なばかゝる憂め見つゝこもりぬともしらててふ也。